

平成16年度

# 研究 紀要

## Vol.34

### ◎ 研究チーム等の研究

- 1 教育調査チーム
- 2 学校評価研究チーム
- 3 カリキュラム研究チーム
- 4 情報化推進研究チーム
- 5 eラーニング試行プロジェクトチーム
- 6 教育相談チーム

### ◎ 指導主事の個人研究

- 1 小学校算数科
- 2 中学校英語科
- 3 高等学校芸術科（美術）

### ◎ 長期研究員の研究

- 1 小学校国語科
- 2 小学校社会科
- 3 中学校社会科
- 4 中学校数学科
- 5 小学校社会科
- 6 小学校学級活動
- 7 中学校社会科

福島県教育センター

## はじめに

小・中学校の学習指導要領が全面実施されて3年目、高等学校では2年目を迎えた平成16年度。15年12月の学習指導要領の一部改訂では、標準授業時数も最低基準とされ、総合的な学習の時間の全体計画作成を明示するなど質的な充実を求めています。そして、年度内には学校週5日制や総合的な学習の時間さらには生活科の見直しの方向性が示されるなど教育改革の真っ直中にあります。また、児童生徒の凶悪犯罪や学校への不法侵入者による事件、教職員の不祥事、指導力不足教員の問題、読解力や数学的応用力の低下が明確になったOECD生徒の学習到達度調査2003年調査（PIISA）結果やテレビ・ビデオの時間が長く宿題時間が最短との実態が明らかになった国際数学・理科教育動向調査の2003年調査（TIMSS2003調査）結果などから分かる児童生徒の学力低下傾向の実態等々、社会の教育への関心は高く、社会存立の基盤とも言える学校教育への期待がますます高まっています。

これら今日的な教育課題の解決を図り、基礎学力を基盤とした生きる力を身に付けた児童生徒の育成を図るためには、各学校が自校の児童生徒の実態を的確にとらえ、柔軟な発想のもと明確なビジョンをもって保護者や地域社会と手を携えて学校経営や学習指導に取り組んでいかなければなりません。

教育センターではこのような教育の現状と課題を、県内全域調査により基礎データを収集していち早くとらえ、教育改善につながる基礎的・実践的な研究を各学校と連携しながら行い、改善の方向を提案、提供しています。

- 教育調査チーム 「教育課程（届）調査」  
『『ふくしまの学習意識』に関する調査<第2年次>』
  - 学校評価研究チーム 「学校の自己評価と外部評価」
  - カリキュラム研究チーム 「子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発」
  - 情報化推進研究チーム 「学習におけるIT活用とその支援の在り方の研究開発」
- これらの調査・研究の成果は報告書や研究集録として各学校や教育機関にお送りしました。  
さらに調査・研究チーム以外のプロジェクトチームやチームにおいても、研究に取り組んできました。
- eラーニング試行プロジェクトチーム 「eラーニングによる教員研修の試み」
  - 教育相談チーム 「生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究<第2年次>-学級（ホームルーム）活動を中心に-

これらの調査・研究の成果は今後の教育センターの講座に反映してだけでなく、平成17年度には教育センターの中にカリキュラムセンターの機能を立ち上げて、開かれた教育センターとして各学校等との関わりをより密接なものにしていきたいと考えています。具体的には、依頼いただければ各学校や教育委員会、研究会や研修会に説明やコンサルタントに伺い、ともに改善の方向を探っていきたいと考えています。また、教育センター内に開設するカリキュラムセンター相談室では先生方と直接、授業のことや生徒指導のことなどをお話ししたり、電話やeメール、FAXでの相談も行いたいと思っています。

教育センターでは、指導主事、長期研究員の個人研究も推進しています。理論研究を基盤に据えて、学習指導や教育相談について、各学校において日々の教育活動に直接役立つ実践研究を行ってきました。

この「研究紀要第34集」は、こうしたチームや個人の調査・研究の成果をまとめたものです。紙面の限りもあり、十分に意を尽くせない面もありますが、各学校がそれぞれの教育課題の把握や解決、教育実践の充実を図る上で役立てていただければ幸甚に思います。

おわりに、調査・研究のご協力を賜りました調査協力校や研究協力校、研究協力員の皆様、並びに関係機関の方々に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成17年3月

福島県教育センター所長 青木 崇郎



# 《 総 目 次 》

## ◎研究チーム等の研究

### 1 教育調査チーム

教育課程（届）調査（研究紀第163号 分類基準J01-01）…………… 1

公立小・中学校，県立高等学校の教育課程（届）には，小学校では日課表や単位時間の工夫に，中学校では選択教科の時数や教科数の工夫に，高等学校では教育課程の類型の設定や選択教科・科目の数の工夫に学校の自主性・自律性が見られた。

「ふくしまの学習意識」に関する調査＜第2年次＞（研究紀第164号 分類基準J01-01）…………… 9

県内小中学校各21校及び県立学校20校の調査協力を得て，生活状況・学習に関する意識・保護者の子ども観・保護者の教育行政等に対する要望の4観点の調査内容から，平成16年度の本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識を把握した。

### 2 学校評価研究チーム（研究紀第165号 分類基準E01-05）

学校の自己評価と外部評価……………17

学校評価は、『学校経営・運営ビジョン』を起点とする学校の自己評価とそれに関する広報活動についての組織的な取組である。自己評価は，学校が主体的に行う調査に基づいて行われる。有識者からなる外部評価員と学校評議員による外部評価においては，学校の自己評価が評価される。

### 3 カリキュラム研究チーム（研究紀第166号 分類基準F02-01）

子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発……………29

各学校の情報を児童生徒や保護者等に提供していく中で，特に重要な学校教育目標の達成のための行動プランであるシラバスの研究を行うとともに，「子どもの学びを支援するシラバスの作成に向けて」を編集し，小・中・高等学校に配布した。また，シラバス作成・活用を通じた，「子どもの学びの自立」や「授業改善」，「学力向上」に資するための学校支援を行った。

### 4 情報化推進研究チーム（研究紀第167号 分類基準Z01-02）

学習におけるIT活用とその支援の在り方の研究開発……………45

本チームがこれまで取り組んできた教育情報データベースや授業実践モデル等の教育用コンテンツを拡充し，ポータルサイトとして整備した。さらに，学習におけるIT活用とその支援の在り方をテーマに関係機関との連携を図りながら実践研究し，支援体制のモデルを構築した。

### 5 eラーニング試行プロジェクトチーム（研究紀第168号 分類基準Z01-02）

eラーニングによる教員研修の試み……………59

教員研修におけるeラーニングの可能性や課題を検討するためのプロジェクトチームを立ち上げ，研修試行を行った。その内容は，既存のネットワーク技術を用いた「事前研修」「意見交換」「情報交換」等である。試行結果から，成果と課題，導入モデルを提示した。

6 教育相談チーム（研究紀第169号 分類基準F09-01）

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究<第2年次>

—学級（ホームルーム）活動を中心に— ……………67

本研究は、「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発を学級（ホームルーム）活動を中心に進め、県内各学校に提示するものである。プログラム（小学校中学年，中学校第2学年，高等学校第2学年）を研究協力員と共同開発し，教育センターWebページに掲載し普及に努めた。

◎指導主事の個人研究

1 小学校算数科（研究紀第170号 分類基準G03-02）

子どもたちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」を実施するための研究<1年次(H15)基礎研究・2年次(H16)実践研究> ……………82

県内全小学校で実施した教研式標準学力検査（NRT）の協力校の結果を経年比較して，つまりきの傾向を学力到達度ごとに分析し，授業改善の在り方を考察した。さらに，その結果を基に「百分率とグラフ」の単元で，「確かな学力」に向けた授業を検証した。

2 中学校英語科（研究紀第171号 分類基準G09-02）

リスニング力の向上を目指した速聴学習の実践的研究

—学習者の語彙サイズとの関連を通して— ……………86

視聴音読学習に速聴を加えることで，リスニングにどのような効果があるのかを，学習者の語彙サイズに着目して実践研究を行った。

3 高等学校芸術科（美術）（研究紀第172号 分類基準G05-09）

映像メディア表現における3DCG作品の制作に関わる研究と先進校での実践例について ……90

美術系の制作に関わる研究である。中学校・高校でコンピューターを使用した3DCG作品を制作させるために，押さえておくべき基本的事項についての研究である。内容は，学習指導要領での位置付け，3DCGの概念，制作の流れ，先進校での指導事例等で，この分野の持つ美術教育における可能性を探った。

◎長期研究員の研究

1 小学校国語科（研究紀第173号 分類基準G01-02）

論理的思考力と表現力を高める指導

—メタ認知能力を高め，意欲的に学ぶ児童を育てる国語科の指導— ……………96

6年児童を対象に，メタ認知能力を「もう一人の自分」と定義し，児童自身の学習を見つめさせることで学習意欲の向上を試みた。同時に表現力と論理的思考力の育成に向けて，吟味読みやスキル学習を主な手立てとして用いながら説明文の読みや書きの学習を行い，その有効性を検証した。

2 小学校社会科（研究紀第174号 分類基準G02-02）

問題解決学習において自己評価能力を高める学習指導の工夫

—小学校社会科における単元シラバスの活用を通して— ……………98

問題解決学習において、主体的な学びを支援する「単元シラバス」を活用すれば、児童の自己評価能力を高めることができるか、さらに、自己評価能力が高まれば、学びの質を高める「学び方」が身に付き、概念的な思考力や価値的な思考力が向上するのか、実践的研究を行った。

3 中学校社会科 (研究紀第175号 分類基準G02-03)

中学校社会科歴史的分野において、思考力・表現力を育てる授業の工夫

— 日常の授業に討論を取り入れた学習指導を通して — ……………100  
歴史学習における思考力の概念規定、討論の有効性、討論を日常の授業で行うための指導の工夫などを研究した。そして、それらの研究や生徒の実態調査をもとに、現任教において検証授業を行い、1時間の授業の中に討論活動を無理なく位置付ける方策と効果を、実践的に検証した。

4 中学校数学科 (研究紀第176号 分類基準G03-03)

学習に対して自立し、確かな学力を身に付けた生徒を育てる数学科指導の在り方

— 学校、家庭の相互理解の深化と、少人数学習の改善を通して — ……………102  
中学校数学科において、『学校評価システム』を活用した、継続的な情報の受信・発信により、「保護者との協働体制、信頼関係の確立」を目指しながら、少人数学習を効果的に行うための指導法の工夫によって、生徒の学習に対する自立と確かな学力の向上を目指した。

5 小学校社会科 (研究紀第177号 分類基準G02-02)

小学校社会科指導で活用できる「県内地域」の教材化に関する研究

— 単元を通して活用できる副読本の作成 — ……………104  
「わたしたちの県」(小3・4)、「わたしたちの国土と環境」(小5)の学習の中で、指導者と児童がともに活用できる資料を作成した。自県学習で、「福島県」をそのまま扱える単元教材として、教科書型副読本、副読本資料教師用解説書、単元ワークテスト、写真資料等を作成した。

6 小学校学級活動 (研究紀第178号 分類基準G11-03)

集団の一員としての自覚を深めるための教育相談的手法の効果的な活用の在り方

— 「心をつなぐ集団活動」を通して — ……………106  
5学年3学級を対象に、児童一人一人が集団の一員としての自覚を深めるための、教育相談的手法の活用の在り方を探った。学級満足度尺度「Q-U」等を用いて実態を把握し、「心をつなぐ集団活動」を通して、集団の実態に応じた効果的な教育相談的手法の活用の在り方について実践研究を行った。

7 中学校社会科 (研究紀第179号 分類基準G02-03)

作業的・体験的な学習を通して、地理的な見方・考え方を育てる学習指導の在り方

— 身近な地域の調査において — ……………108  
中学校社会科の「身近な地域の調査」において、小名浜地区を地域素材とし、地理的な見方・考え方の基礎を育てる研究を行った。徐々に学習の視野を広げる「地図づくり」、「新旧地形図の比較」や「地域調査」などの作業的・体験的な学習を単元に取り入れ、その有効性を検証した。



教育調査チーム

## 教育課程（届）調査

「ふくしまの学習意識」に関する調査〈第2年次〉



## 教育課程（届）調査

### 《目次》

I 調査の目的	1
II 調査の概要	1
1 調査期間	1
2 調査方法	1
3 調査対象	1
4 調査内容	1
5 調査結果と考察	1
III 調査のまとめ	8

## 「ふくしまの学習意識」に関する調査＜第2年次＞

### 《目次》

I 調査の趣旨	9
II 調査の概要	9
1 調査内容	9
2 調査方法	9
3 調査の実際	9
4 調査結果	9
III 調査のまとめと考察	14
1 平成16年度の中学2年生の平日と休日の生活時間帯の平均的な姿	14
2 平成16年度のまとめと考察	14

# 教育課程（届）調査

教育調査チーム

## I 調査の目的

1998年9月「今後の地方教育行政の在り方」の「教育委員会と学校の関係の見直しと学校裁量権の拡大」の中で「学校管理規則を見直し、許可・承認・届け出・報告事項について学校の自主的判断にまかせ、学校の裁量を拡大する方向で見直しに努めること」が答申され、「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律（一括法）」が出され、承認申請であった教育課程が届けになり、学校の自主性・自律性が尊重されるようになった。

平成16年度の小学校、中学校、高等学校の教育課程（届）に学校の自主性・自律性がどのように見られるのか、また教育課程に見られる現状と課題を明らかにしたいと考え、次の調査目的を設定した。

「教育課程（届）の内容を調査することにより、学校の自主性・自律性の現状と課題を把握し、工夫された事例を紹介するとともに、カリキュラムセンター開設に向けて条件整備を図る。」

## II 調査の概要

### 1 調査期間

- ・教育課程収集期間 平成16年6月17日(木)～平成16年7月5日(月)
- ・調査期間 平成16年7月6日(火)～平成16年11月29日(月)

### 2 調査方法 調査項目に基づく読み取り調査

### 3 調査対象 876 件

- ・公立小学校教育課程 538 校分
- ・公立中学校教育課程 240 校分
- ・県立高等学校（分校・定時制・単位制等含む）  
教育課程 98 校分

### 4 調査内容

- (1) 教育目標、編成の方針
- (2) 年間授業時数(小・中学校)、週当たりの授業時数(高等学校)、日課表、1単位時間、学期の工夫
- (3) 年間行事予定の工夫
- (4) クラブ活動(小学校)、創意の時間の工夫

- (5) 選択教科の工夫（中学校）、選択履修の工夫（高等学校）
- (6) 各教科等の年間指導計画の工夫（小・中学校）、各教科・科目及び単位数の工夫（高等学校）、各教科・科目の学習指導の工夫（高等学校）
- (7) 総合的な学習の時間の工夫

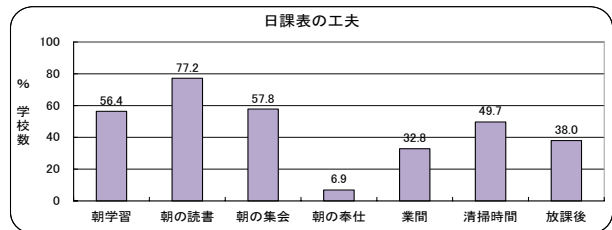
## 5 調査結果と考察

### (1) 小学校の教育課程（届）に見られる自主性・自律性

#### ① 日課表の工夫

学習指導要領総則第4の4には、「各学校においては、・・・創意工夫を生かした時間割を弾力的に編成することに配慮するものとする。」とある。

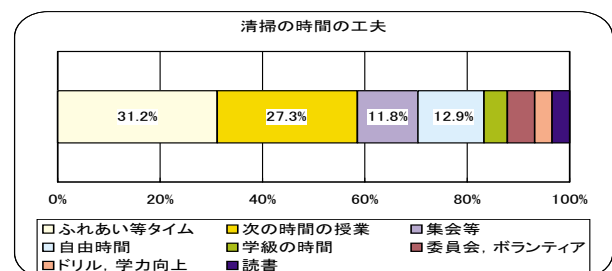
<日課表の工夫>



日課表については朝、業間、清掃、放課後の時間の様々な利用など、各学校で創意工夫している。朝の時間の活用として、294校（56.4%）が「ドリル等の朝の学習」、402校（77.2%）が「読書」に充てている。

このことは、「平成14年度公立小・中学校における教育課程の編成状況等の調査結果」による、「始業前等の学習を実施している学校」平均73.0%とほぼ同様の学校の割合となっている。各学校が読書指導や学力向上のために日課表を工夫して時間を充てているのが分かる。

<清掃の時間の活用>



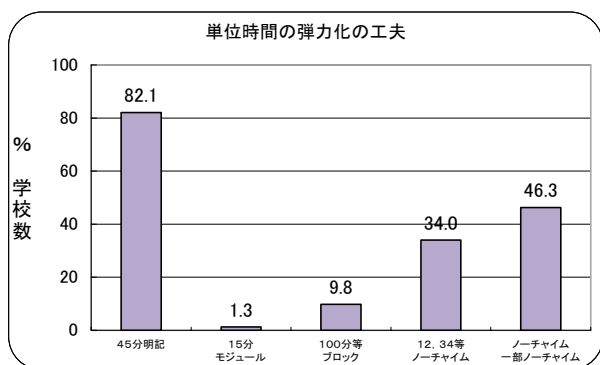
朝、業間、清掃、放課後の時間の活用の内容をみると、「集会、朝の会」「ふれあい等タイム」「自主活動、児童活動」「委員会活動、ボランティア活動」「読書、ドリル、学力向上、個別指導」「運動、体力づくり」「学級の時間、教育相談」「自由時間」に大別される。

週5日制のゆとりのない週時程の中で、「集会、朝の会、ふれあい等タイム」「委員会活動、ボランティア活動」の時間を確保するために創意工夫している学校の様子を読み取れる。また、このような工夫を盛り込んだ日課表から児童の1日を想像してみると、忙しく生活する児童の様子が推測される。

## ② 1単位時間の工夫

学習指導要領総則第4の3において、「各教科等の1単位時間は各学校において定めるものとする。」とある。

＜単位時間の弾力化の工夫＞



「1単位時間は45分」と明記している学校は440校(82.1%)ではあるが、弾力的に運用できるように1校時と2校時の間、3校時と4校時の間をノーチャイムにしている学校が177校(34.0%)、100分等のブロック制にしている学校が51校(9.8%)ある。また、「1単位時間15分のモジュール」と明記するなど弾力的に活用できるようにしている学校が7校(1.3%)ある。

このことは、「平成14年度公立小・中学校における教育課程の編成状況等の調査結果」による、「授業の1単位時間の弾力的な運用の実施状況」の「1年24.6%、2年24.8%、3年28.7%、4年31.4%、5年31.8%、6年32.0%」と見比べると、簡単には比較はできないが、本調査における本県小学校における1単位時間の弾力的な運用はわりと行われてい

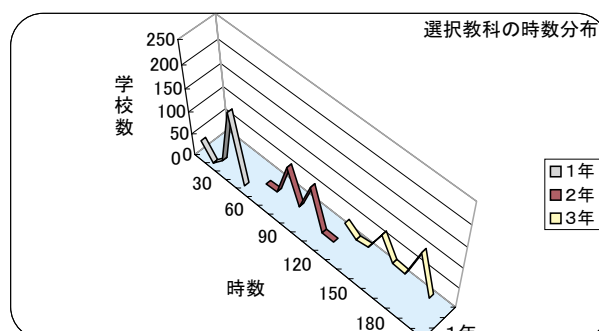
ると言えるのではないだろうか。1単位時間の弾力的な活用において、学校の自主性・自律性を発揮しているように思える。

## (2) 中学校の教育課程(届)に見られる自主性・自律性

### ① 選択教科の授業時数設定の工夫

学習指導要領総則第3の1で「各学校においては、選択教科の授業時数及び内容を適切に定め、選択教科の指導計画を作成するものとする。」とある。

＜選択教科の時数分布＞



選択教科の時数の平均は、1年で23.4時間、2年で74.7時間、3年で147.3時間であり、上限時数に近い時数が設定されている。1年で選択教科を設定している学校は200校(83.7%)である。

選択教科との関連で、特別活動(学級活動)の平均時数については、1年で35.6時間、2年と3年で35.8時間と標準時数の35時間に近い時数になっている。総合的な学習の時間の平均時数については、1年で76.4時間、2年で79.7時間、3年で86.5時間であり、下限時数に近い時数を設定している。

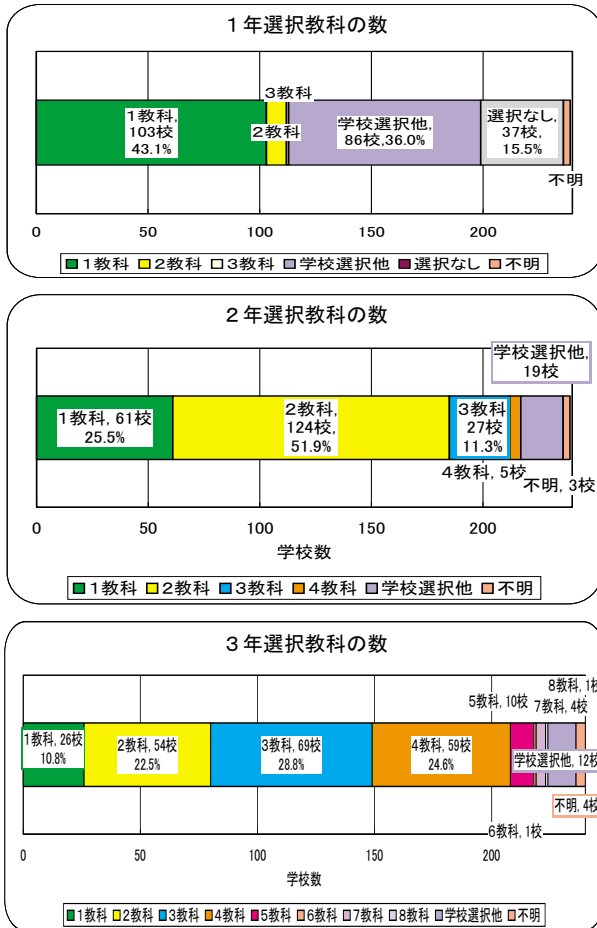
選択教科の時数分布では、1年の上限30時間の学校は158校(66.7%)で一番多い。2年では上限85時間の学校は84校(35.4%)、次いで70時間が81校(34.2%)で2つの山がある。3年では、上限の165時間が92校(38.7%)と一番多く、次いで140時間の57校(23.9%)、下限105時間の25校(10.5%)と3つの山がある。また、選択教科については、全学年とも上限を超えた時数を設定している学校がある。

選択教科に重きを置こうとする各学校の経営の方針が選択教科の授業時数に反映されていることが分かり、このことに各学校の自主性・自律性の表れを感じる。

## ② 選択教科の数の工夫

学習指導要領総則第3の3で「生徒に履修させる選択教科の数は、第2学年において1以上、第3学年においては2以上とし・・・」とある。

＜学年別選択教科の数＞



選択教科の数では、1年で「1教科選択」させる学校が103校（43.1%）と一番多く、次いで「学校選択他」の学校が86校（36.0%）である。

2年では、「2教科選択」させる学校が124校（51.9%）で一番多く、次いで「1教科選択」の61校（25.5%）である。

3年では、「3教科選択」が69校（28.8%）と一番多く、次いで「4教科選択」の59校（24.6%）、「2教科選択」の54校（22.5%）であり、多様な教科数が計画されている。

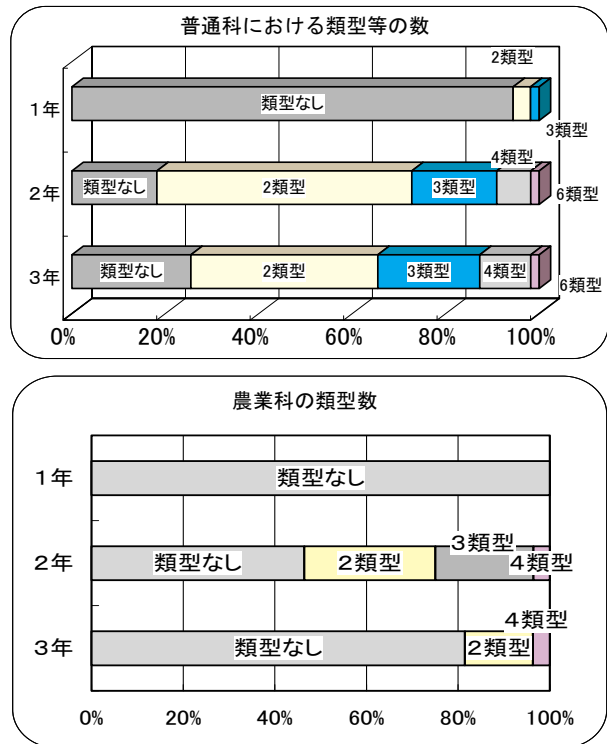
学習指導要領で示されている教科数は十分に満たされている学校が多いと言える。

## (3) 高等学校の教育課程(届)に見られる自主性・自律性

### ① 教育課程の類型の設定の工夫

学習指導要領総則第6款の1「教育課程の編成に当たっては、生徒の特性、進路等に応じた適切な各教科・科目の履修ができるようにし、このため、多様な各教科・科目を設け生徒が自由に選択履修することができるよう配慮するものとする。」とある。

＜類型の数＞



普通科において、1年では類型を設定していない学校がほとんどである。2年では2類型、3類型、4類型、6類型を設定している学校が45校（81.8%）である。3年では2類型、3類型、4類型、6類型を設定している学校が41校（74.5%）と2年より少ないが、3類型や4類型を設定する学校の割合が高くなっている。

類型の名称も系や型、コース等と様々である。

2年、3年では、多様な進路への対応や多様な進学に配慮した類型がされていることが分かる。

専門学科と職業学科における類型の数は少ない。理数科においては、2年、3年と類型を設ける学校が増えている。また、農業科の2年生は2類型、3類型、4類型と類型を設定している学科数が多い。

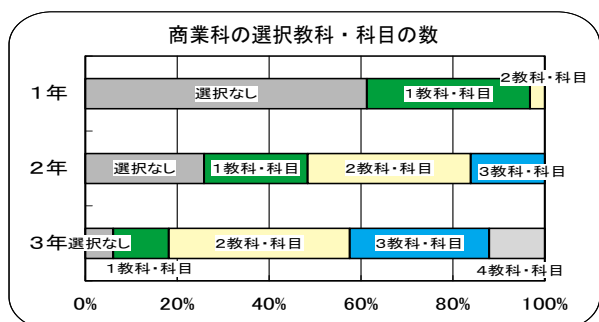
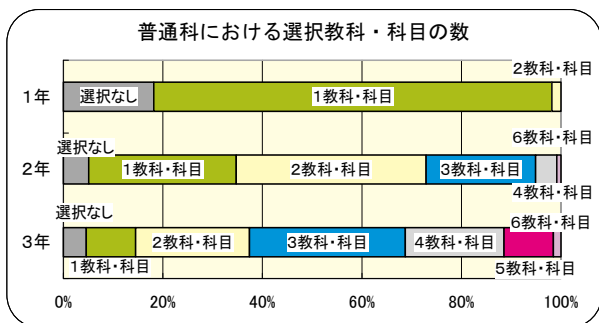
定時制高校における教育課程の類型は少ない。

### ② 選択教科・科目の数の工夫

学習指導要領総則第6款の1「・・・また、教育課程の類型を設け、そのいずれの類型を選択して履

修させる場合においても、その類型において履修させることになっている各教科・科目以外の各教科・科目を履修させたり、生徒が自由に選択履修することのできる各教科・科目をもうけたりするものとする。」とある。

＜選択教科・科目の数＞



普通科における選択教科・科目は学年が進むほど、選択なしの割合が減り、選択教科・科目数が多くなり、多様な進路に対応している。

理数科における選択教科・科目は全学年で設定されており、学年が進むほど選択教科・科目数が多くなり、進路に合わせた科目選択を可能にしている。

職業教育を主とする学科における選択教科・科目は、工業科を除いて、学年が進むほど選択教科・科目なしが減っている。全科で学年が進むほど選択教科・科目数が増えている。

工業科のある学校では学校設定科目を多数設定し、全科で共通の総合選択科目を設定するなど、選択履修の方法をさらに工夫している。

定時制においては、2年で選択教科・科目が多いが、他学年では少ない。

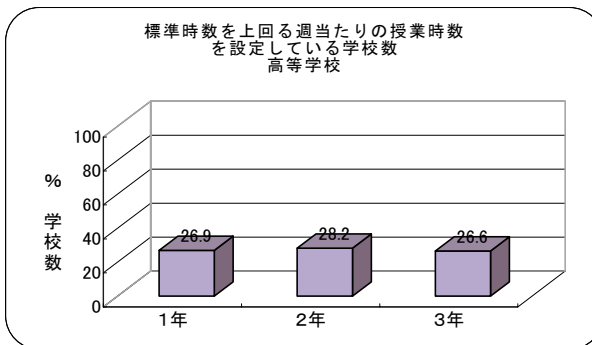
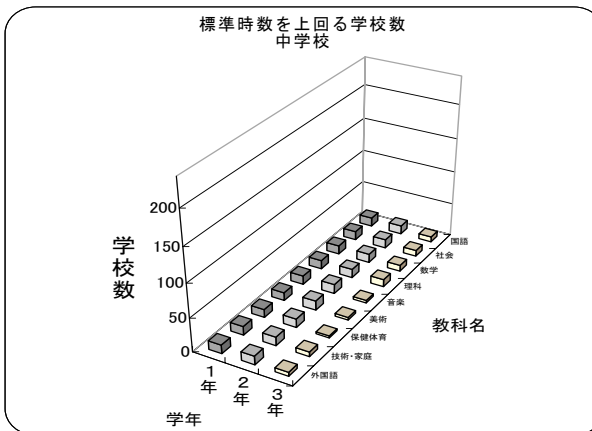
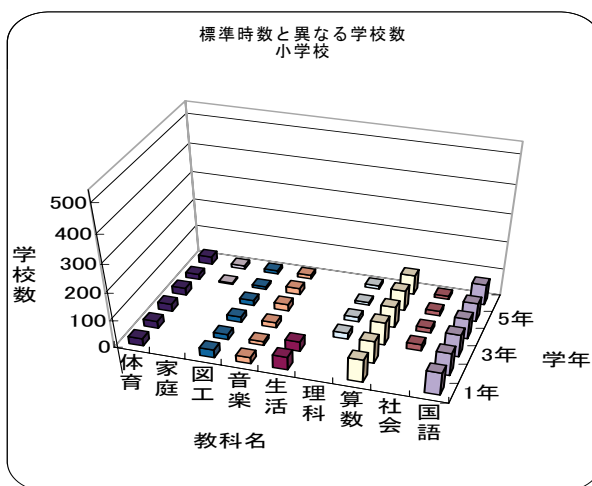
全学科において、2・3年生での選択教科・科目を多くして、生徒の個性や能力を伸ばさせるように配慮するとともに多様な進路の実現を目指そうとしているところに学校の自主性・自律性を感じる。

(4) 教育課程（届）の現状と課題

① 年間授業時数、週当たりの授業時数

小（中）学校学習指導要領解説総則編第1章4の(3)のエで「教育課程を適切に実施するために必要な指導時間の確保」と「指導内容の確実な定着を図るために必要のある場合には、各教科等の年間授業時数の標準を上回る適切な指導時間を確保するように配慮すること」と一部補訂された。

＜標準時数と異なる又は上回る学校数＞



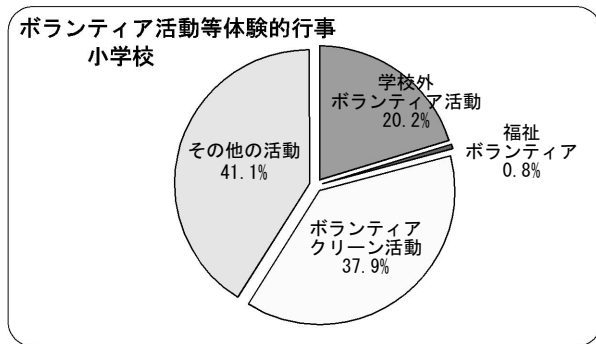
小学校においては多くの学校で、中学校においてはほとんどの学校で標準授業時数どおりの時数を配当している。高等学校においては、全日制の総合学

科を除く学校の約4分の1の学校で標準時数を上回る計画を立てている。小学校、中学校においては、年間授業時数の設定の段階で学力向上に特に力を入れる教科について上回る時数を計画することも考えられるのではないだろうか。また、高等学校においても時数を見直してもよいのではないだろうか。

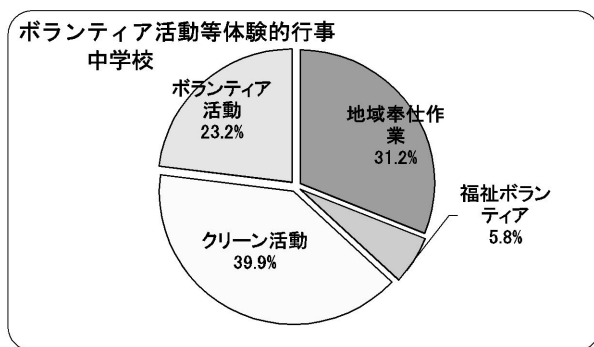
## ② 行事に見られるボランティア活動等の体験的な活動

学校教育法第18条の2に「教育活動を行うに当たり、児童の体験的な学習活動特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする。」(第40条準用規定)(第51条準用規定)が明示されている。

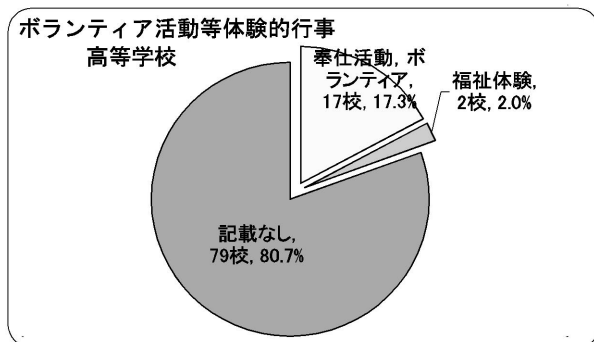
＜ボランティア活動等体験的な行事＞



↑ 不明8校



↑ 56.6%の中学校 ↓ 学校要覧の調査による



小学校において、ボランティア活動等体験的な活動は不明以外の530校全校で計画されている。しかし、社会奉仕体験活動とはっきりわかる活動は21.0%である。

中学校において、ボランティア等体験的な活動は133校(56.6%)で計画されている。そのうち、社会奉仕体験活動とわかる活動は地域奉仕作業と福祉ボランティアを合わせた37.0%である。

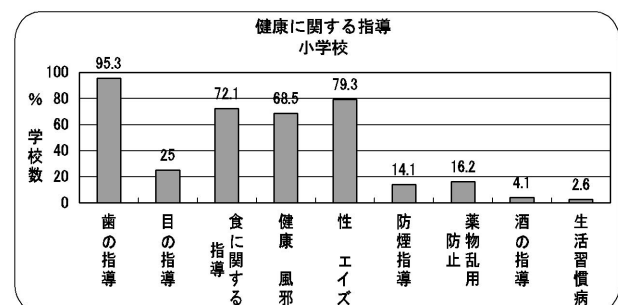
高等学校において、ボランティア等体験的な活動は19校(19.3%)で計画されている。学校行事で社会奉仕体験活動を計画している学校は少ない。

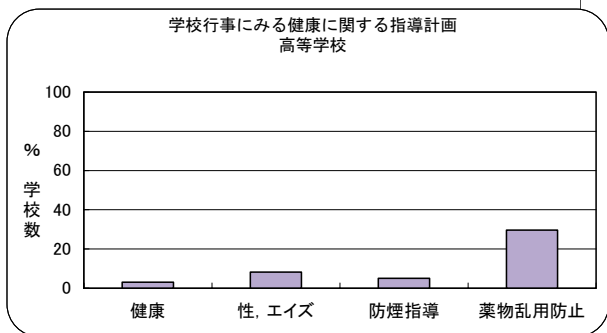
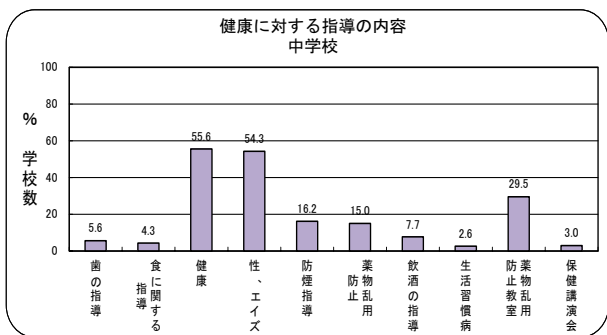
学習指導要領において、「自然体験やボランティア活動」について具体的にしているのは、総則第3(中学校第4)の6「総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たって配慮する事項」の「自然体験やボランティア活動などの社会体験・・・を積極的に取り入れること」、高等学校では第4款の6(2)「自然体験やボランティア活動、就業体験などの社会体験・・・体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること」である。社会奉仕体験活動については、学校行事のほかに総合的な学習の時間の「環境」や「福祉」の学習活動の中でも計画されている。

## ③ 心身の健康に関する教育

学習指導要領改訂の基本方針「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」の学習指導要領解説の例示の中に、「心身の健康に関する教育の充実」とある。高等学校では、学習指導要領総則第1款の3「特に、体力の向上及び心身の健康の保持増進に関する指導については「体育」及び「保健」の時間はもとより、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めることとする。・・・」とある。

＜特別活動における健康に関する指導＞





小学校では学級活動において、「性に関する指導」(79.3%)の計画等幅広い健康に関する指導が、養護教諭や栄養職員等とのTTも考慮して、計画されている。子どもの実態をとらえ現状の改善を図りたいという学級担任や養護教諭、栄養職員の願いが感じられるように思える。

中学校でも、「性に関する指導」(8.2%)等の健康に関する指導が、養護教諭や栄養職員等とのTTも考慮して、計画されている。高等学校の年間行事には、「薬物乱用防止に関する指導」(29.6%)、「性に関する指導」(8.2%)等が計画されている。

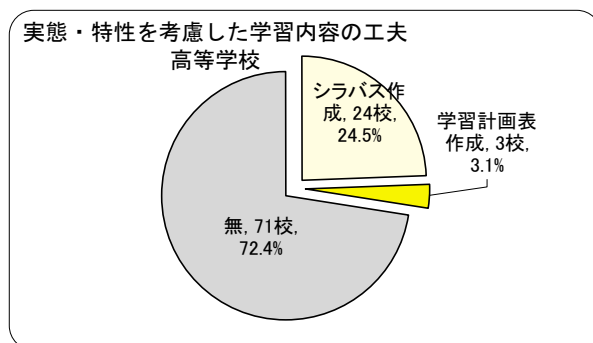
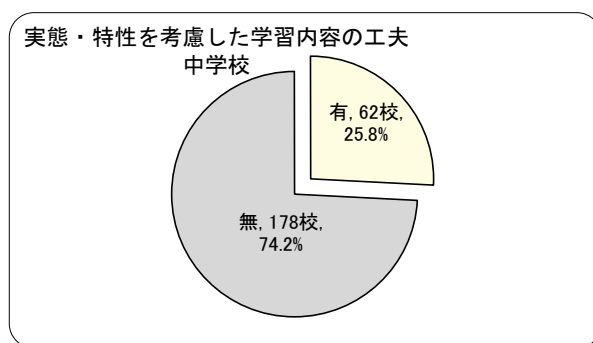
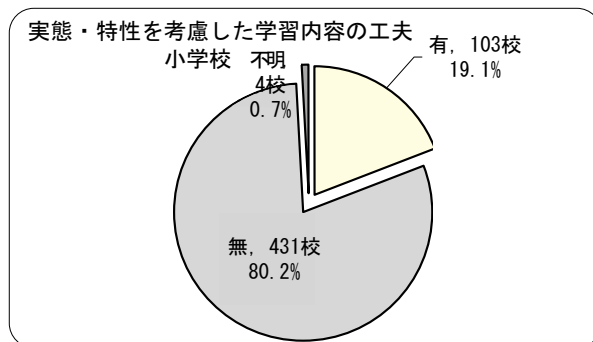
「性に関する指導」については、中学校と高等学校での計画状況を小学校での計画状況と比較して考えると、思春期や第二次性徴期、青年期にある生徒の指導を行う中学校・高等学校にとって高い割合と言えるだろうか。性に関する指導や薬物乱用防止の指導等を保健体育の保健の授業のみにゆだねることなく、積極的に健康に関する指導を位置付けている学校の事例が参考になる。

#### ④ 基礎・基本の定着を図り、個性を生かす教育

改訂の基本方針「基礎・基本の定着と個性を生かす教育」については、学習指導要領総則第5(中学校第6, 高等学校第6款の1)「指導計画作成等に当たって配慮すべき事項」にある。「実態・特性を

考慮した学習内容」の明記の状況を各教科の年間指導計画に見られる工夫の一つとしてとらえた。

＜実態・特性を考慮した学習内容の工夫＞



小学校の各教科等の年間指導計画に見られる工夫としては、「課題選択への配慮」が一番多い163校(30.3%)、次いで「繰り返し指導」が153校(28.4%)、「教師の協力的な指導」が143校(26.6%)、「実態・特性を把握した学習内容の明記」が103校(19.1%)、「補充的な学習や発展的な学習」が42校(7.8%)、「習熟の程度に応じた指導」が28校(5.2%)であり、どの項目も工夫の割合が少ない。

中学校の各教科等の年間指導計画に見られる工夫としては、「実態・特性を考慮した学習内容」が一番多い62校(25.8%)、「教師の協力的な指導」が61校(25.4%)、「補充的な学習や発展的な学習」が59

校（24.6%）、「習熟の程度に応じた指導」が37校（15.4%）であり、どの項目も記載の割合が少ない。

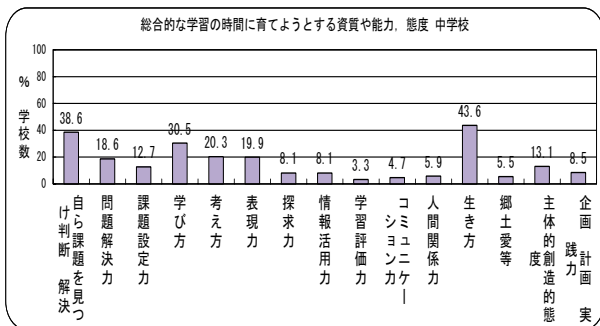
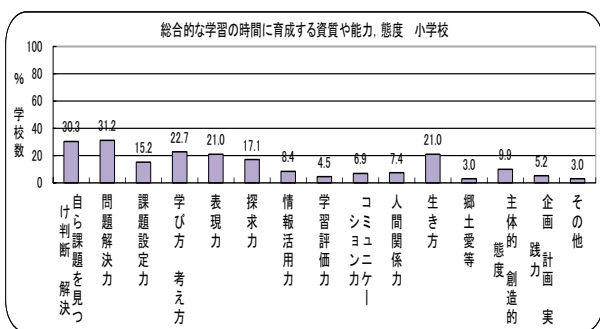
高等学校の各校で「学習指導年間指導計画」を作成し、授業で活用していると思われるが、シラバスや学習計画表が添付されており、「実態・特性を考慮した学習内容の明記」のある学校は27校（27.6%）である。添付されていたシラバスや学習計画表には、評価規準が明らかにされていたり、学習指導法が記載されていたりして、指導に役立つだろうと感じられる計画がある。また、教育課程編成の方針の中に学習指導に関する記載のある学校は37校（37.8%）であり、習熟の程度に応じた指導、教師の協力的な指導、グループ別学習の記載が多い。（25校は教育課程編成の方針が添付されていないため、不明である。）

年間指導計画に習熟度別指導の単元を明示したり、発展的な学習を明らかにしたり、評価規準や達成基準を示したりしておくこと、指導者が授業で指導と評価の拠り所として活用できる。このような年間指導計画を作成することが大切ではないだろうか。

### ⑤ 総合的な学習の時間の目標

学習指導要領総則第3の3「各学校においては、趣旨及びねらいを踏まえ、総合的な学習の時間の目標・内容を定め」とある。

<総合的な学習の時間で育てようとする資質や能力、態度>



小学校で教育課程編成の方針に総合的な学習の時間についての明記がある学校は、431校（80.1%）である。総合的な学習の時間の目標を明らかにしている学校は375校（69.7%）である。

中学校で教育課程編成の方針に総合的な学習の時間についての明記がある学校は、223校（92.9%）である。総合的な学習の時間の目標を明らかにしている学校は188校（78.3%）であり、目標を記載していない学校がある。

高等学校で教育課程編成の方針の中に総合的な学習の時間に関する明記をしている学校は56校（57.1%）である。

小学校の「育てようとする資質や能力、態度」を類型分けした結果では、「問題解決力」、「自ら課題を見つけ判断し解決する力」、「学び方や考え方」、「生き方」、「表現力」など、総合的な学習の時間のねらいと同じような資質や能力、態度をあげている学校が多い。中学校の類型分けした結果でも、「生き方」「自ら課題を見つけ判断、解決する力」「学び方」など、学習指導要領で示す総合的な学習の時間のねらいと同じような資質、能力、態度をあげている学校が多い。

学習指導要領に明示されているねらいを学校としてどう理解し、生徒や地域・学校の実態からどうとらえて、自校の目標や「育てようとする資質や能力、態度」にするかが重要なことと思われる。

### ⑥ 総合的な学習の時間の学習活動

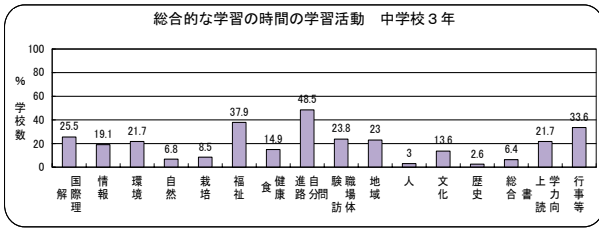
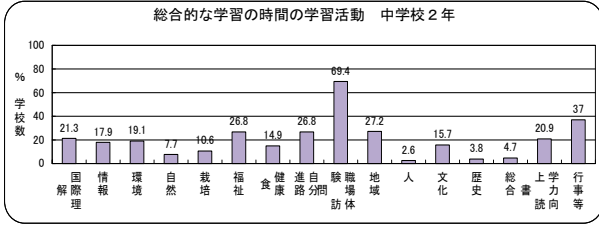
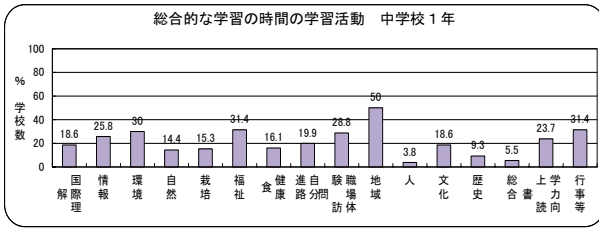
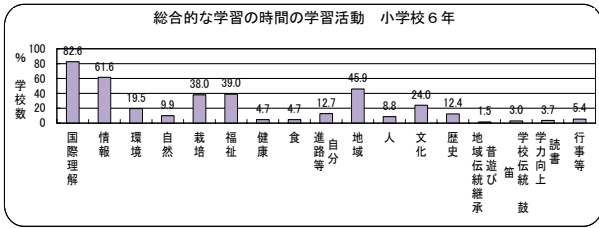
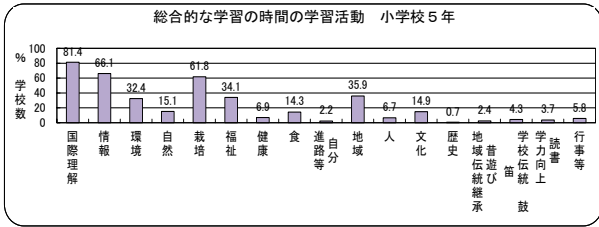
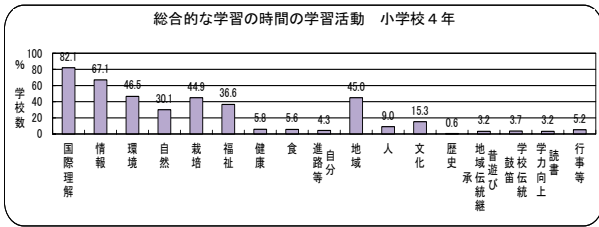
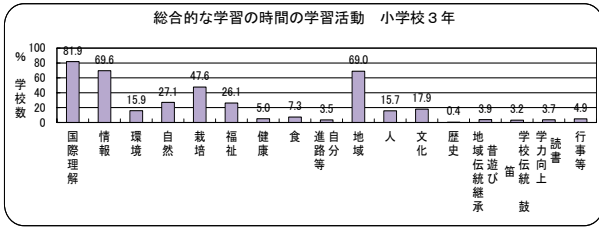
学習指導要領総則第3の4（中学校第4の3、高等学校4款の4）に「各学校においては、・・・目標及び内容、育てようとする資質や能力及び態度、学習活動・・・示す総合的な学習の時間の全体計画作成するものとする。」とある。

小学校3年から中学校3年までの全体計画や年間指導計画に明記されている学習内容を種類別に分類し、県内全体の学習内容の傾向をとらえた。

- ・「国際理解教育」、「情報」等横断的・総合的な課題
- ・「自然」、「栽培」、「自分・進路」等「児童の興味関心に基づく課題」
- ・「地域」、「人」、「職場体験、訪問」等「地域や学校の特色に応じた課題」



・「読書，学力向上」，「行事等」の「教科等関連」  
 <総合的な学習の時間の学習活動の分類>



小学校では，全学年をとおして「国際理解」と「情報」が多い。数では多くないものの，どの学年

にも「地域伝統継承 昔遊び」「学校伝統 鼓笛」「学力向上 読書」「行事等」がある。学年別に見ると，「国際理解」と「情報」を除いて，3年では「地域」が飛び抜けて多い。4年では「環境」「栽培」「地域」「福祉」「自然」が同じ程度の多さである。5年では「栽培」が圧倒的に多く，他学年と比較して「食」が多い。6年では「地域」「福祉」「栽培」が同じ程度に多く，他学年と比較して「歴史」「自分，進路等」が多い。

中学校では，全学年をとおして共通して目立って多く計画されている学習活動はない。2年の「職場体験，訪問」，3年の「自分，進路等」，1年の「地域」の学習活動が多く学校の計画されている。学年別に見ると，1年では「地域」が飛び抜けて多くの学校で計画されている。小学校での学習活動との関連を考慮していることによると思われる。2年では「職場体験，訪問」を計画している学校が多い。3年では「自分，進路」の学習活動で「学校説明会」や「先輩の話を聞く会」を計画している学校が多い。各学校の学習活動の内容に同じような傾向が現れているのは，教科等との学習相互の関連や発達段階を考慮した結果と思われる。

### Ⅲ 調査のまとめ

教育課程は学校教育の目的や目標を達成すること，つまり教育目標の達成を目指して編成する。各学校が自校の重点目標や努力目標を明らかにし，全職員がそれぞれの分担に応じて創意工夫を加えて編成しなければならないものである。教育目標の達成を目指し重点目標や努力目標を明らかにするとは，学校のビジョンが明らかになるということであり，全職員がそれぞれの分担に応じて創意工夫を加えて編成するとは，ビジョンを教科等の全体計画や年間指導計画に反映させていくように各教師が創意工夫を生かして編成していくことと考える。そして，保護者や地域住民等に対して，ビジョンや行事予定，各教科等の全体計画や年間指導計画等を公表し，連携や協力を求めながら教育課程を実施し，評価，改善していかなければならない。

このようにして教育課程が具現化し，学校の自主性・自律性が発揮されるのであろう。

# 「ふくしまの学習意識」に関する調査<第2年次>

教育調査チーム

## I 調査の趣旨

本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識について、経年で（少なくとも5年間）現状調査を行うことによって、本県の課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料を得ることを目的として、調査を進めた。今年度の調査は、その第2年次にあたる。

## II 調査の概要

### 1 調査内容

- (1) 生活状況の観点から、①生活時間帯②基本的な生活習慣③余暇利用④家族との関わりの4項目
- (2) 学習に関する意識の観点から、①教科学習②学習時間③家庭学習の現状④自己向上の願い⑤コンピュータの利用⑥将来の目標の6項目
- (3) 保護者の子ども観の観点から、①生活時間帯②余暇利用③子どもへの関わり④家庭学習の様子⑤希望する進路⑥子どもの学習への期待の6項目
- (4) 保護者の教育行政に対する要望の観点から、①学習環境②人間性・社会性の育成③学校・家庭・地域の連携④教育行政等に要望することの4項目  
上記4観点20項目の調査内容から、本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識、保護者の子ども観、保護者の教育行政等に対する要望を把握する。

### 2 調査方法

調査方法は、経年調査をふまえてアンケートによる回答で行った。

生活・学習状況に関する調査対象者の生活圏（従来の教育事務所単位）毎の意識を反映させるために、地域性等の社会的条件を考慮して、昨年度抽出した小中学校各21校及び県立学校20校に調査の協力を得た。調査対象と標本数は、小学校第3学年児童・保護者1,202件、小学校第6学年児童・保護者1,180件（質問項目数計80）、中学校第2学年生徒・保護者1,148件（質問項目数計80）、県立学校第2学年生徒・保護者1,328件（質問項目数計85）であった。

## 3 調査の実際

- ◇4月 「ふくしまの学習意識」調査計画作成
- ◇5月 各関係機関への調査内容の説明及び協力依頼
- ◇6月 調査要項等の発送
- ◇7月 調査協力校でのアンケート実施（7月12日～7月20日）とアンケート用紙の回収
- ◇8～11月上旬 調査標本数4,858件（小3…1,202件、小6…1,180件、中2…1,148件、高2…1,328件）、質問項目毎（小学生、中学生80、高校生85）の集計
- ◇11～1月中旬 調査分析会議による調査分析
- ◇2月10日 福島県教育研究発表大会において調査結果報告
- ◇3月 調査結果報告書の送付及び研究紀要へのまとめ

## 4 調査結果

質問項目毎の調査結果については、紙面の都合上、全て掲載することができないため、「子どもの学習に関する意識調査結果」のデータのみ掲載する。なお、福島県教育センターWebサイトに詳しい調査結果を公開したので、詳細についてはご覧いただきたい。（<http://www.center.fks.ed.jp/>）

### (1) 子どもの学習に関する意識調査結果

#### ① 教科学習

##### ア. 得意教科(複数回答)

	国語	算・数	社会	理科	英語	体育	家・技	音楽	図・美	芸術・書道	情報	農業	工業	商業	水産	ない	総合的学習	その他
小3	16.6	22.6	10.5	19.3		64.6	0.5	23.8	33.9							1.3	10.8	1.2
小6	23.9	34.2	30.3	21.0		52.0	16.4	27.3	35.6							1.5	13.4	1.2
中2	16.7	28.0	28.4	32.2	19.7	34.5	14.8	23.0	18.8							7.0	9.1	0.5
高2	23.7	30.0	19.6	19.7	19.1	22.1	7.8	14.3	9.5	5.4	5.6	1.1	4.7	9.3	0.2	9.8	3.2	0.9

##### イ. 苦手教科(複数回答)

	国語	算・数	社会	理科	英語	体育	家・技	音楽	図・美	芸術・書道	情報	農業	工業	商業	水産	ない	総合的学習	その他
小3	52.7	34.1	29.1	20.8		9.3	0.3	18.6	8.2							9.8	4.3	1.5
小6	35.3	43.1	30.8	32.0		16.8	16.8	27.3	13.6							5.1	7.6	2.0
中2	30.3	43.4	35.0	24.2	51.9	16.4	17.6	18.8	13.8							1.4	2.1	3.0
高2	24.2	45.2	31.0	31.3	48.0	13.4	5.9	4.2	5.6	2.3	7.5	0.3	3.3	3.8	0.5	1.1	1.8	1.4

ウ. 得意になりたい教科(複数回答)

	国語	算数	社会	理科	英語	体育	家庭・音楽	図・美	情報	農業	工業	商業	水産	その他				
小3	48.8	39.6	21.3	20.8	20.0	1.7	19.8	11.3						3.2	6.2	1.5		
小6	35.8	46.6	34.1	23.3	24.1	13.2	21.5	15.3						2.9	6.1	1.2		
中2	32.1	45.3	32.9	27.0	55.4	13.2	10.6	11.0						3.1	1.7	1.6		
高2	23.0	43.7	20.5	24.2	55.6	7.7	3.8	4.7	4.5	1.7	14.5	1.1	5.4	8.3	0.5	3.8	1.2	1.5

エ. 学習してよかったと感じる時(複数回答)

	成績を向上させた時	難しい問題を最後まで	自分の考えをみんなの前で発表	学習内容を理解した時	友達と協力して、学習成果向上	目標を決めて努力	自分を必要としてくれると感じた時	努力を認めてもらった時	その他
小3	55.9	46.6	17.8	14.1	12.3	15.1	5.3	55.7	1.5
小6	67.3	56.9	15.9	22.0	18.0	20.5	7.5	37.3	1.2
中2	72.8	46.2	5.4	23.3	13.6	17.9	7.1	29.4	5.6
高2	76.8	41.0	2.7	25.2	11.6	16.3	6.3	23.8	5.4

オ. しっかり学習しようとする気持ち

	いつも持っている	時々持つことがある	前は持っていたが今はない	持っていない	その他	不明
小3	43.6	49.3	1.0	4.5	0.5	1.2
小6	45.4	50.8	2.0	0.7	0.3	0.7
中2	28.6	60.3	3.8	5.9	0.7	0.7
高2	26.5	59.3	3.2	8.3	1.4	1.4

② 家庭学習の現状

ア. 家庭での平日の学習時間

	全くしない	30分以下	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	4時間以上	その他	不明
小3	1.5	51.9	40.4	4.2	0.2		1.5	0.3
小6	1.2	24.7	53.4	15.4	2.9		1.7	0.7
中2	7.7	20.6	40.2	25.1	3.8		2.1	0.5
高2	30.3	29.7	20.8	11.1	4.2	1.1	1.8	1.1

イ. 家庭での休日の学習時間

	全くしない	30分以下	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	4時間くらい	5時間以上	その他	不明
小3	7.2	47.8	36.9	5.0	0.5	0.2		2.2	0.3
小6	5.3	30.2	39.7	16.9	4.2	1.0		2.0	0.7
中2	8.5	15.5	30.1	26.7	12.7	4.5		1.4	0.5
高2	32.5	21.2	15.4	10.5	8.1	6.0	2.7	2.1	1.4

ウ. 家庭学習の内容(複数回答)

	宿題	予習	復習	自主学習	その他
小3	96.0	3.5	13.5	38.1	6.0
小6	90.7	9.5	15.4	57.3	2.7
中2	64.6	15.5	36.1	57.3	4.0
高2	47.6	20.2	31.9	32.7	9.6

エ. 宿題が出た場合の取り組み

	短時間に集中、正確に	じっくり時間をかけて、正確に	正確に分らないが、短い時間	時間のことは考えない	その他	不明
小3	27.1	18.6	14.5	37.6	1.0	1.2
小6	33.2	22.9	14.2	26.9	0.5	2.2
中2	36.6	18.3	17.9	24.4	1.7	1.0
高2	29.2	15.8	21.2	29.1	3.0	1.7

オ. 家庭学習の取り組み(複数回答)

	自分から進んで	時間を決めて集中して	時間を決めませんが、だらだら	宿題を仕方なく	家族に言われて仕方なく	その他
小3	40.1	16.8	21.1	37.4	35.6	0.8
小6	45.9	29.7	26.9	22.5	16.3	1.7
中2	36.2	28.9	33.1	24.7	14.5	3.7
高2	29.7	18.5	35.8	30.0	7.2	6.9

カ. 家庭学習で大切にしていること(複数回答)

	知識・理解力の定着	表現力の育成	論理的思考力の向上	教師の評価を重視した学習	その他
小3	77.5	20.0	26.8	19.6	3.5
小6	58.8	23.1	40.0	36.4	1.5
中2	58.0	36.4	18.8	30.0	5.6
高2	52.1	25.0	17.8	34.9	8.0

③ 自己向上の願い

ア. 学習する目的意識(複数回答)

	学習することが楽しい	親や先生に褒められたりしたい	テストで良い点数をとりたい	通学や部活の成績を良くしたい	希望する高校や大学に入りたい	将来社会や人の役に立ちたい	将来の職業に就きたい	自分の人生を豊かにしたい	その他
小3	21.5	24.3	58.2	36.4	15.6	13.0	13.3	17.6	4.2
小6	13.4	8.3	57.1	48.6	36.6	22.5	30.2	28.8	0.5
中2	3.3	4.4	53.8	42.5	64.3	20.0	39.9	23.0	3.0
高2	6.6	2.4	45.8	39.0	33.9	18.8	57.1	30.0	2.7

イ. 現在の学習時間の満足度

	十分満足	ほぼ満足	普通	やや不満	不満	その他	不明
小3	13.5	12.1	58.6	7.0	5.7	1.0	2.2
小6	15.8	17.5	49.5	10.2	4.4	0.3	2.4
中2	7.5	9.2	47.9	17.6	15.7	1.2	0.9
高2	5.9	3.2	42.6	15.5	28.2	3.2	1.5

ウ. 平日に家庭で学習したい時間

	30分以下	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	4時間以上	その他	不明
小3	35.6	52.2	7.0	0.7	1.2	1.5	1.8
小6	18.0	48.0	23.9	4.9	1.0	2.0	2.2
中2	11.3	28.9	36.2	15.5	3.1	3.8	1.0
高2	16.9	29.4	25.3	15.1	5.4	5.7	2.3

エ. 休日に家庭で学習したい時間

	30分以下	1時間くらい	2時間くらい	3時間くらい	4時間くらい	5時間以上	その他	不明
小3	37.1	41.9	13.0	2.8	0.5	0.8	1.7	2.2
小6	20.7	35.1	27.8	8.3	3.4	0.8	1.7	2.2
中2	9.9	16.4	23.2	27.9	12.4	6.4	2.8	1.0
高2	13.6	18.4	20.6	16.6	10.1	13.0	5.4	2.4

オ. 学校の授業に対する意識(複数回答)

	よく分かりやすい	考えを発表したり楽しい	教室外の体験学習が楽しい	教えてくれるので楽しい	分からないので楽しくない	その他
小3	19.8	30.9	65.7	23.8	13.0	1.5
小6	32.4	25.3	59.2	28.3	14.7	2.0
中2	27.2	11.5	47.7	25.4	26.3	6.6
高2	26.4	4.7	27.7	23.8	38.7	9.8

カ. 授業内容が分からない時の対応(複数回答)

	先生に聞く	友達に聞く	自宅で家族に教えてもらう	自分で調べる	そのまましておく	その他
小3	47.9	36.1	52.4	5.3	9.8	1.7
小6	36.6	61.7	51.5	10.7	6.1	1.5
中2	43.7	63.2	26.3	12.2	11.8	4.4
高2	45.0	73.8	4.5	12.8	16.6	2.4

キ. 自分の学習の仕方に対する満足度

	十分満足	ほぼ満足	普通	やや不満	不満	その他	不明
小3	12.6	19.8	50.2	10.1	4.3	0.7	2.2
小6	12.7	21.9	45.9	12.2	5.1	0.3	1.9
中2	5.7	13.2	39.5	25.4	14.6	0.9	0.5
高2	4.8	7.1	37.8	23.2	23.3	1.2	2.6

ク. 学習をできるようにするための意識

	学校の授業を大切に	家庭学習を大切に	塾に行って学習	その他	不明
小3	80.4	13.3	4.2	0.5	1.7
小6	73.1	19.7	4.1	1.0	2.2
中2	63.4	27.5	6.4	2.1	0.5
高2	69.7	23.8	1.5	2.1	2.9

④ コンピュータの利用

ア. 自宅に自分が使用できるコンピュータの有無

	ある	ない	不明
小3	45.4	52.6	2.0
小6	54.6	43.6	1.9
中2	56.3	42.7	1.0
高2	61.6	36.3	2.1

イ. 自宅でのコンピュータの利用(複数回答)

	調べ学習にインターネット	文字入力や自由研究等に	学習ソフトで学習に	メール	その他
小3	19.0	10.3	20.1	1.8	52.4
小6	54.3	20.5	13.0	6.5	32.6
中2	54.5	13.6	6.8	20.4	29.1
高2	48.2	16.9	6.4	11.0	32.3

ウ. 自分が使用する携帯電話の有無

	持っている	持っていない	その他	不明
小3	2.3	94.5	0.5	2.7
小6	4.9	91.5	1.2	2.4
中2	21.6	74.7	1.7	1.9
高2	91.9	5.4	0.2	2.6

⑤ 将来の目標

ア. 将来の目標(複数回答)

	こんな大人になりたい	こんな仕事をしたい	こんな学校に進学したい	決まっていない	その他
小3	22.8	52.6	9.7	35.6	1.8
小6	28.1	60.5	25.6	22.9	2.7
中2	22.5	61.7	39.7	21.4	1.4
高2	26.2	62.7	27.3	22.7	1.2

イ. 希望する職業

	医師・弁護士・研究員等	先生・講師・デザイナー	警察官・消防士	理髪師・美容師	医師・看護師・薬剤師	官公庁事務員・接客係	ネット・ケータイ関係	プログラマー・デザイナー	マスコミ関係	通関士	職員の仕事	理容師・美容師	農林業関係	その他	不明
小3	8.0	20.5	8.7	0.7	4.7	0.8	5.2	1.3	1.7	6.2	8.5	0.3	0.8	23.8	9.0
小6	10.5	22.2	4.6	1.9	2.9	2.2	2.9	2.4	1.5	6.3	8.5	0.8	0.7	26.4	6.3
中2	8.0	24.2	5.4	1.7	3.1	2.6	3.0	1.6	1.0	8.5	8.0	3.3	1.7	24.0	3.7
高2	10.8	21.7	2.7	10.1	8.6	5.3	2.4	1.8	0.3	7.2	7.8	1.1	1.2	13.0	6.0

ウ. 進学目標

	高校まで	専門学校まで	短期大学まで	四年制大学まで	大学院まで	その他	不明
小3	32.6			53.9		8.2	5.3
小6	33.9			56.6		6.4	3.1
中2	26.0	25.6	11.8	22.0	8.4	4.4	1.9
高2		34.0	6.9	28.3	5.6	18.4	6.8

(2) クロス集計結果

平成16年度のふくしまの学習意識調査結果の中の「児童生徒と保護者の学習に関する意識」「児童生徒

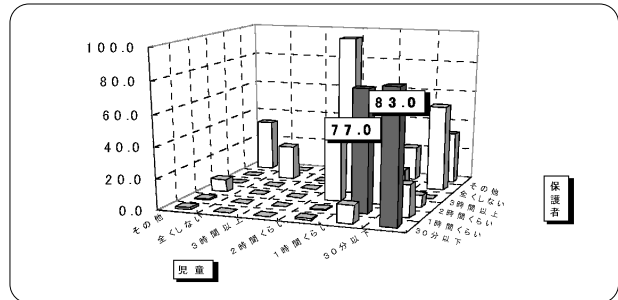
自身の学習に関する意識」について、児童生徒とその保護者、児童生徒自身の質問項目間で、相関関係をみるためにそれぞれクロス集計を行った。Excelアンケート太閤ver3.0を利用し、クロス集計を行った質問項目でクロスデータ値が70%以上の相関関係があるものを取り上げて示す。

① 児童生徒と保護者の学習に関する意識

ア. 平日の学習時間

<クロス集計結果・小学校3年生の表とグラフの例(数値は%)>

	30分以下	1時間未満	2時間未満	3時間以上	全くない	その他
平日児童の学習時間	83.0	11.5	1.0	0.0	0.0	1.3
1時間未満	20.6	77.0	0.4	0.0	0.0	0.8
2時間未満	8.0	44.0	40.0	0.0	0.0	8.0
3時間以上	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
全くない	55.6	11.1	0.0	0.0	22.2	0.0
その他	33.3	22.2	11.1	0.0	0.0	33.3



小学3年生の「1時間くらいまで」の学習時間については、児童と保護者の意識に77.0%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「1時間くらいまで」の学習時間については、児童と保護者の意識に71.9%以上の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

イ. 休日の学習時間

小学3年生の「1時間くらいまで」と「3時間くらい」の学習時間については、児童と保護者の意識に82.9%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「1時間くらいまで」の学習時間については、児童と保護者の意識に75.2%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

ウ. 家庭学習の内容

小学3年生と小学6年生、中学2年生の「宿題」

と「自主学習」については、児童生徒と保護者の意識にそれぞれ84.7%以上、85.5%以上、75.7%以上の相関関係がみられる。高校2年生の「宿題」については、生徒と保護者の意識に70.9%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

#### エ. 家庭学習で大切にしていること

小学3年生と小学6年生、中学2年生の「読み・書き・計算等の知識理解を重視した学習」については、児童生徒と保護者の意識にそれぞれ93.8%、93.9%、75.4%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

#### オ. 進学希望先

中学2年生と高校2年生の「四年制大学まで」については、生徒と保護者の意識にそれぞれ77.8%、80.9%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、「四年制大学」への進学についての児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が大きくなる傾向がある。

#### カ. 学習する目的意識

小学3年生の「学習する楽しさを知るため」と「就きたい職業に役立てるため」、「自分自身の人生を豊かにするため」については、児童と保護者の意識に72.6%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「自分自身の人生を豊かにするため」については、児童と保護者の意識に73.5%の相関関係がみられる。高校2年生の「将来就きたい職業に役立てるため」については、生徒と保護者の意識に75.2%の相関関係がみられる。

#### キ. 宿題をする時の姿

小学3年生と小学6年生、中学2年生の「短い時間に集中して正確に行う姿」については、児童生徒と保護者の意識にそれぞれ79.1%、77.6%、74.8%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

#### ク. 家庭学習への取り組み

小学3年生の「集中して効果的に取り組む姿」については、児童と保護者の意識に75.2%の相関関係がみられる。小学6年生の「計画的・自主的に取り組む姿」については、児童と保護者の意識に71.2%の相関関係がみられる。中学2年生の「計画的・自主的に取り組む姿」と「集中して効果的に取り組む姿」については、生徒と保護者の意識に72.6%以上の相関関係がみられる。

#### ケ. 習い事

小学3年生の「興味や関心を高める」と「技術を向上させる」、「体力をつける」については、児童と保護者の意識に71.1%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「体力を付ける」については、児童と保護者の意識に73.0%の相関関係がみられる。中学2年生の「興味や関心を高める」については、生徒と保護者の意識に74.3%の相関関係がみられる。

#### コ. 部活動

中学2年生の「人間関係の幅を広げる」については、生徒と保護者の意識に72.7%の相関関係がみられる。

#### サ. 会話内容

小学3年生と小学6年生の「友達や先生のこと」については、児童と保護者の意識にそれぞれ70.1%、71.3%の相関関係がみられる。

#### ② 児童生徒自身の学習に関する意識

##### ア. 苦手教科と得意になりたい教科

小学3年生で「国語」を苦手教科にしている児童は、72.4%が「国語」を得意教科にしたいと考えている。小学6年生で「国語」「社会」を苦手教科にしている児童は、71.6%以上で苦手教科を得意教科にしたいと考えている。中学2年生で「数学」「社会」「英語」を苦手教科にしている生徒は、70.9%以上で苦手教科を得意教科にしたいと考えている。高校2年生で「数学」を苦手教科にしている生徒は、71.0%が「数学」を得意教科にしたいと考えている。

##### イ. 平日の学習時間と平日に学習したい時間

高校2年生の平日の学習時間が「4時間以上」の生徒は、85.7%が「4時間以上」平日に学習したいと考えてる。全体的なクロス集計結果をみると、中

学2年生と高校2年生は、現在の学習時間より多くの学習時間を希望している傾向がみられる。

### ウ. 休日の学習時間と休日に学習したい時間

高校2年生の休日の学習時間が「5時間以上」の生徒は、72.2%が「5時間以上」を、「4時間くらい」の生徒は、82.5%が「5時間以上」をそれぞれ休日に学習したいと考えている。全体的なクロス集計結果をみると、小学6年生以上の児童生徒は、現在の学習時間より多くの時間を希望している傾向がみられる。

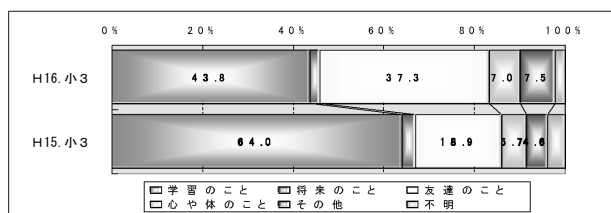
#### (3) 昨年度と今年度のデータ比較結果

同一調査項目（70項目）について、昨年度と今年度のデータを比較した。68項目については同じような傾向がみられたが、特に複数の校種に渡って、大きなデータの変化が見られた2つの調査項目のデータのみ掲載する。

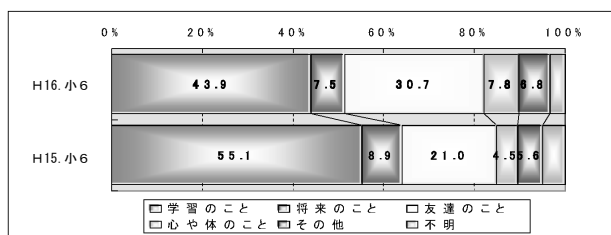
#### ① 相談内容

学年\項目	学習のこと	将来のこと	友達のこと	心や体のこと	その他	不明
H16.小3	43.8	2.2	37.3	7.0	7.5	2.3
H16.小6	43.9	7.5	30.7	7.8	6.8	3.4
H16.中2	31.0	18.1	23.0	5.9	17.1	4.9
H16.高2	13.9	47.1	14.3	5.3	14.3	5.1

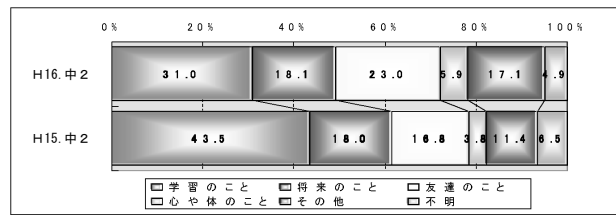
学年\項目	学習のこと	将来のこと	友達のこと	心や体のこと	その他	不明
H15.小3	64.0	2.9	18.9	5.7	4.6	3.8
H15.小6	55.1	8.9	21.0	4.5	5.6	5.0
H15.中2	43.5	18.0	16.8	3.8	11.4	6.5
H15.高2	15.7	43.4	12.4	5.8	14.9	7.8



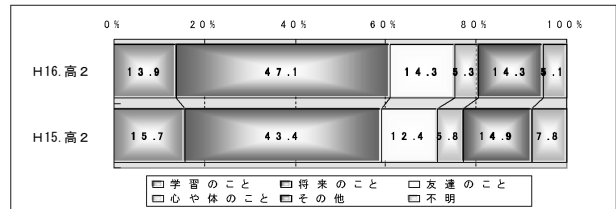
<小学3年生>



<小学6年生>



<中学2年生>



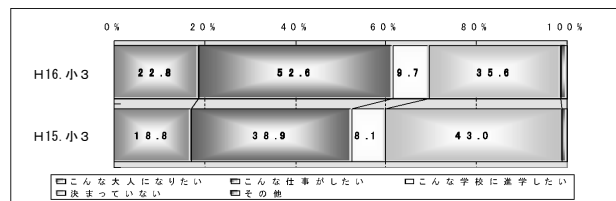
<高校2年生>

昨年度と今年度の調査結果を比較すると、今年度の小学3年生・小学6年生・中学2年生は、「学習のこと」がそれぞれ20.2%、11.2%、12.5%減少し、「友達のこと」がそれぞれ18.4%、9.7%、6.2%増加している。

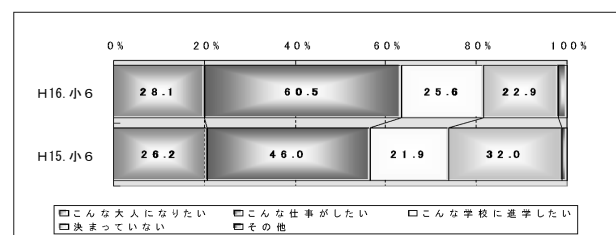
#### ② 将来の目標

学年\項目	こんな大人になりたい	こんな仕事をしたい	こんな学校に進学したい	決まっていない	その他
H16.小3	22.8	52.6	9.7	35.6	1.8
H16.小6	28.1	60.5	25.6	22.9	2.7
H16.中2	22.5	61.7	39.7	21.4	1.4
H16.高2	26.2	62.7	27.3	22.7	1.2

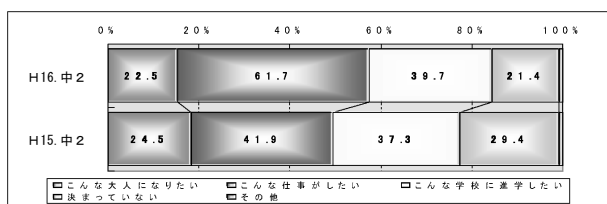
学年\項目	こんな大人になりたい	こんな仕事をしたい	こんな学校に進学したい	決まっていない	その他
H15.小3	18.8	38.9	8.1	43.0	1.2
H15.小6	26.2	46.0	21.9	32.0	1.3
H15.中2	24.5	41.9	37.3	29.4	0.9
H15.高2	25.9	34.4	30.7	33.2	1.8



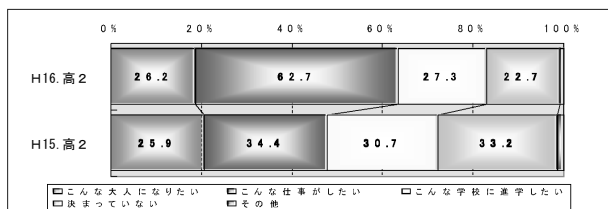
<小学3年生>



<小学6年生>



＜中学2年生＞



＜高校2年生＞

昨年度と今年度の調査結果を比較すると、どの校種とも「決まっていない」がそれぞれ7.4%、9.1%、8.0%、10.5%減少し、「こんな仕事をしたい」がそれぞれ13.7%、14.5%、19.8%、28.3%増加している。

### Ⅲ 調査のまとめと考察

#### 1 平成16年度の中学2年生の平日と休日の生活時間帯の平均的な姿（調査実施時期…7月）

調査データの平均値と最も多く回答した時間を基に、本県における中学2年生の平均的な生活状況を平日と休日に分けて図式化してみた。

＜平日の生活時間帯の平均的な姿＞

6:30起床	7:00	[学校]	テレビ(2時間)・手洗い(30分間)・読書(30分間)	23:00就寝
	歯磨きや洗顔・朝食・トイレ・学習用具の準備・登校	16:07～18:32 週3.9回部活動	・宿題(1時間)	
		帰宅後	18:58～20:40 週1.2回習い事	
		夕食・会話・相談・入浴		

＜休日の生活時間帯の平均的な姿＞

起床	9:48～13:30	・手洗い(30分間)・読書(30分間)・宿題(1時間)	就寝
	歯磨きや洗顔・朝食・トイレ	週0.8回部活動	
	昼食 夕食・会話・相談・入浴	16:03～18:14 週0.3回習い事	
	テレビ(2時間)		

#### 2 平成16年度のまとめと考察

本県における児童生徒の生活状況及び学習に関する意識を探り、その実態を把握することによって、課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料を得ることを目的として、「ふくしまの学習意識」

に関する調査の第2年次調査を行った。その結果、第1年次に続いて第2年次の結果として本県の子どもの平均像を描けた。今年度は、新たに本県における児童生徒の平均的な生活状況を明らかにすることができた。

本県における児童生徒の生活状況及び学習に関する意識、保護者の子ども観、保護者の教育行政等に対する要望として、以下に詳細な考察を行った。

#### (1) 児童生徒の生活状況について

家庭内での様子を見た時、基本的な生活習慣としての歯磨きや洗顔、朝食をきちんと摂ることは、家庭での習慣付けによってか、よく身に付いている。ただ、睡眠については、校種が進むにつれ就寝時刻がおおよそ1時間ずつ遅くなり、睡眠時間もおおよそ1時間ずつ少なくなって行くという睡眠不足の現実も見られた。

家庭での手伝いについては、それをしている児童生徒が56.5%～69.7%いたことから、家族の一員としての役割を果たして生活している児童生徒の姿が想像される。本県の中学2年生の手伝いをする平均時間は0.5時間であった。参考までに、国際教育到達度評価学会（IEA）の「国際数学・理科教育動向の2003年度調査」（以下「TIMSS2003」と示す。）によると、日本の中学2年生の手伝いをする平均時間は0.6時間（国際平均1.3時間）であった。

困った時に相談する人は、家族の中で母親の占める割合が全体的に多い。校種が進むにつれ、父親の関わりが少ない上に一層少なくなってきており、友達等の家族以外に相談相手を求める傾向が見られた。相談内容としては、校種が進むにつれて「学習のこと」や「友達のこと」から「将来のこと」へ変化しているのが特徴的である。昨年度の調査結果と比較すると、本年度は小・中学生で「友達のこと」の相談の割合が高くなっていることから、人間関係作りに配慮しなければならないかもしれない。

家庭の外での姿としては、目的意識をもって部活動や習い事をし、自己を高めようとしている児童生徒の姿が見える一方、何もしていない児童生徒が比較的多く、特に高校生の数値が高い。

読書については、どの校種とも「自分で選んだ好

きな本を読んでいる」割合が一番多いが、「全く読まない」の割合が18.0%~42.0%あった。読書時間については、本県の中学2年生の平均読書時間は0.45時間であった。参考までに、「TIMSS2003」によると日本の中学2年生の読書をする平均時間は0.9時間（国際平均0.9時間）であった。今年度、福島県教育センターが「教育課程（届）の内容を調査することにより、学校の自主性・自律性の現状と課題を把握し、工夫された事例を紹介するとともに、カリキュラムセンター開設に向けて条件整備を図る」ことを目的として行った教育課程（届）調査によると、小・中学校では、読書を日課表に位置付けて指導している様子が見えるが、家庭での読書習慣が身に付くよう今後も支援していく必要性を感じる。

## （2）児童生徒の学習に関する意識について

今年度は、児童生徒の学習に関する意識について、質問項目数を増やしたことによって、より詳細な姿が明らかになった。

学習する目的意識は、小学生は「テストで良い点数を取りたいから」、中学生は「希望する高校や大学に入りたいから」、高校生は「将来、就きたい職業に役立てたいから」が一番多い回答であった。校種が進むにつれ、将来を見据えて学習している様子が見える。児童生徒とその保護者の回答をクロス集計してみると、小学3年生では「学習する楽しさを知るため」「将来、就きたい職業に役立てるため」「自分自身の人生を豊かにするため」、小学6年生では「自分自身の人生を豊かにするため」、高校2年生では「将来、就きたい職業に役立てるため」について、児童生徒とその保護者の意識にそれぞれ72.6%以上の相関関係がみられた。中学2年生では、70.0%以上の相関関係はみられなかった。

家庭学習では、どの校種とも「読み・書き・計算等の知識・理解を重視した学習」を大切にしている。「読み・書き・計算等の知識・理解を重視した学習」について、児童生徒とその保護者の回答をクロス集計してみると、小学生では93.8%以上、中学生では75.4%の相関関係がみられた。高校生では、70%以上の相関関係はみられなかった。

家庭での学習時間は、平日・休日ともに小学3年

生は「30分間以下」、小学6年生と中学2年生は「1時間くらい」、高校2年生は「全くしない」が一番多い回答であった。高校2年生で「全くしない」と回答したのが、平日では30.3%、休日では32.5%いた。本県の中学2年生の平均学習時間は、平日1.1時間、休日1.5時間であった。参考までに、「TIMSS2003」によると日本の中学2年生の宿題をする平均時間は1.0時間（国際平均1.7時間）であった。

宿題については、「短い時間に集中して、正確にする」という回答が比較的多かった。限られた時間で正確性を求める意識があるようだ。予習や復習等の家庭学習への取り組みでは、小・中学生は「自主的に学習」している割合が高いが、高校生になると「時間を決めるが、だらだら学習してしまう」という割合が増えている。家庭学習に関する意識として、現在の自分自身の学習時間や学習の仕方に対する不満は、小学生よりも中学・高校生の割合が高い。

学校の授業に対する意識として、中学生までは「教室外の体験学習が楽しい」、高校2年生は「分からないことがあるのであまり楽しくない」という回答が一番多かった。授業が分からない時の対応として、小学3年生は「家族に教えてもらう」、小学6年生以上は「友達に聞く」という回答が一番多かったが、一方「そのままにしておく」の割合が、小学生では6.1~9.8%、中学生では11.8%、高校生では16.6%あった。学校の授業に対する意識「分からないので楽しくない」と「授業内容が分からない時の対応」をクロス集計してみると、70%以上の相関関係は見られなかった。高い相関関係はみられなかったが、授業内容が分からなくて楽しくないが、そのままにしている小学生が24.1~28.2%、中学生が29.8%、高校生が34.2%いた。

学習をできるようにするための意識について見てみると、どの校種とも学校における授業の大切さを感じている。また、学習して良かったと感じるのは、どの校種とも「一生懸命に学習して成績を向上させた時」と回答している。

将来の目標については、昨年度の調査結果との比較から「こんな仕事がしたい」という回答が、どの校種とも13.7%以上増加しており、特に高校生は28.3



%増加していた。学校や家庭で、子どもへの指導や支援があったのだろうか。

以上の様子から、児童生徒の学習意識に応えた授業や家庭学習への支援の大切さが感じられる。

### (3) 保護者の子ども観について

校種が進むにつれ保護者は、家庭生活における児童生徒の自主性や自立性を尊重していると回答している。子どもとの会話内容では、どの校種とも「子どもの一日の出来事」が一番多く、その日の動向に関心を寄せている。児童生徒とその保護者の回答をクロス集計してみると、小学生では「友達や先生のこと」の回答項目については、70.1%以上の相関関係がみられた。その他の回答項目と中学生以上のクロス集計では、70.0%以上の相関関係はみられなかった。

子どもの学習に対しては、どの校種とも関心が高く、「就きたい職業に役立てるため」「子ども自身の人生を豊かにするため」等、将来を見据えて学習して欲しいと期待している。子どもの学習をみている人では、子どもの家庭学習に母親が中心となって関わり、必要に応じて支援を行っている様子が見える。子どもの家庭学習への取り組みでは、概ね、宿題を含めて「自主的に学習している」という姿が保護者の目に映り、家庭学習については「集中して効果的な学習」「計画的、自主的な学習」という姿を期待している割合が多かった。宿題も「短時間に集中して、正確にする」への期待が多い。

学校に対しての期待では「基礎学力の定着や向上」が一番多く、願いの高さがうかがえた。教科指導に対する期待は、「分かりやすい授業」が他の回答項目に比べてとても多かった。

子どもの進学先の希望では、どの校種とも「四年制大学まで」が一番多い。どの進学先の希望でも、進学させたい理由としては、中学生までは「やりがいのある職業に就いて欲しいから」、高校生では「子どもの希望がそこにあるから」という回答がそれぞれ一番多かった。

習い事に関する意識では、小学生までは児童と保護者の意識は「興味や関心があるから」で、ほぼ同じ傾向であったが、中学生と高校生では「勉強がで

きるようになりたい」という生徒の意識と「興味や関心を高めて欲しい」という保護者の意識とにずれがあった。

### (4) 保護者の教育行政等に対する要望について

保護者の教育行政等に対する要望については、自由記述が多かった。

学習環境に対しては、「30人学級編制の導入」「教科指導の充実」「T Tによる学習指導」への期待が大きい。平成17年1月4日に県教育委員会の方針として、平成17年度から小・中学校全学年への30人程度の学級編制導入、T Tや習熟度別指導等の選択への支援が公表された。保護者の教育行政等に対する要望が実現され、少人数教育の充実によって、基礎学力の向上への期待にも応えられる可能性が高まった。

また、人間性・社会性の育成では、どの校種とも「道徳教育の充実」を期待している。さらに、学校・家庭・地域の連携については、「保護者や地域住民に学校を開いて、学校の取り組みを説明すること」の大切さを感じている保護者が多かった。

Q.26の保護者の声として、きめ細かな指導体制の整備（回答者48名）、学習指導の充実（回答者39名）、児童生徒の教育に直接関わる教員の人間性や指導力の向上（回答者30名）への願いが多かった。また、昨年度の調査結果との比較では、各市町村に対して22名、各学校に対して61名それぞれ要望が増加しており、各市町村や各学校に対する期待の大きさがうかがえた。

<参考・引用文献等>

- 1) 児童生徒理解の統計法 岩井勇児著  
(福村出版 1996年)
- 2) 教育研究のための調査票の設計と事例  
藤原藤祐著 (ぎょうせい 昭和53年)
- 3) 福島県教育センター研究紀要Vol.33  
(福島県教育センター 平成15年)

学校評価研究チーム

# 学校の自己評価と外部評価

# 学校の自己評価と外部評価

## 《目次》

I	研究の経緯	17
1	国の動向	17
2	平成14年度の研究	18
3	平成15年度の研究	18
II	平成16年度学校評価モデル事業	19
1	基本計画	19
2	合同会議	20
3	モデル校の自己評価	20
4	外部評価委員会の活動（モデル校7校）	20
5	学校評議員会の活動（モデル校7校）	21
6	モデル事業の評価	21
III	学校の自己評価と外部評価（『学校評価の試案』の修正）	21
1	『学校評価の試案』における外部評価	21
2	『学校評価の実践』における外部評価	22
3	学校の自己評価と外部評価	22
IV	自己評価	22
1	『ビジョン』の目標と評価の指標	22
2	学校評価委員会	24
3	調査・分析・考察	25
4	『学校経営・運営ビジョン』の意義	26
V	外部評価	26
1	学校評議員による外部評価	26
2	外部評委員会による外部評価	27
3	外部評価の今後の在り方	27
VI	学校評価から学校組織の開発へ	28

# 学校の自己評価と外部評価

学校評価研究チーム

学校評価モデル事業関係資料及び学校評価研究チームの研究成果は、福島県教育センターWebページに掲載しているのでご覧ください。

○平成16年度 学校評価モデル事業関係  
モデル事業概要、モデル校実践資料 等

○研究成果

『学校評価の実践－学校の自己評価と学校  
評議員による外部評価－』

(平成17年3月 県教育委員会)

『学校評価の試案－計画・実践・評価・改  
善の営みの確立を目指して－』

(平成16年3月 教育センター)

## I 研究の経緯

学校評価研究チームは、平成14年度・15年度の2年間にわたる研究成果を、『学校評価の試案－計画・実践・評価・改善の営みの確立を目指して－』にまとめ、平成16年3月に発行した。

福島県教育委員会は、平成15年12月に出された福島県学校教育審議会答申「開かれた学校づくりを推進する上での学校評価の在り方について」を受けて、平成16年度学校評価モデル事業を実施した。

学校評価研究チームは、モデル事業モデル校の実践を踏まえた実証的な研究を行い、県内各校の自己評価と外部評価の充実に貢献することをめざした。

### 1 国の動向

平成10年9月の第16期中央教育審議会答申「今後の地方教育行政の在り方について」の第3章「学校の自主性・自律性の確立について」において、学校が地域住民の信頼にこたえ、家庭や地域が連携協力して教育活動を展開するためには、学校を開かれたものとするとともに、学校の経営責任を明らかにするための取組が必要であるとして、次のような具体

的改善方策を答申した。

- ① 教育目標や教育計画等を年度当初に保護者や地域住民等に説明するとともに、その達成状況等に関する自己評価を実施し、保護者や地域住民に説明するように努めること。また、自己評価が適切に行われるように、その方法等について研究を進めること。
- ② 学校に、学校評議員を置くことができることとする。校長は、必要に応じて、学校評議員が一堂に会して意見を述べ、助言を行い、意見交換をする機会を設けるなど運営上の工夫を講じること。

上記答申の内容のうち、学校評議員制度については、平成12年1月の「学校教育法施行規則」の改正を受けて、「福島県立学校の管理運営に関する規則」第四十二条の二により、同年4月から、本県立学校に導入された。

平成12年12月の教育課程審議会答申「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について」では、教育課程の実施状況の自己点検・自己評価に関して、学校評議員制度等の活用を図り、その内容、方法、公表の在り方について関係機関において調査研究を行う必要があるとした。

平成12年12月の「教育改革国民会議報告－教育を変える17の提案－」の、「4 新しい時代に新しい学校づくりを」では、地域に信頼される学校づくりを進めるために、「(学校は)目標、活動状況、成果など、学校の情報を積極的に親や地域に公開し、親からの日常的な意見にすばやく応え、その結果を伝える」「学校の特色を出すという観点から、外部評価を含む学校の評価制度を導入し、評価結果は親や地域と共有し、学校改善に努める」「学校評議員制度などによる学校運営への親や地域の参加を進める」等が提案された。

さらに、平成14年2月の中央教育審議会答申「今後の教員免許制度の在り方について」では、「信頼される学校づくりのために」において

- ①学校からの情報提供の充実
- ②授業の公開の拡大
- ③学校評議員制度等の活用
- ④学校評価システムの確立
- ⑤新しい教員評価システムの確立

の4つの目標が掲げられた。そこでは、学校評議員は、学校の運営の工夫によって、学校の力強いサポーターとなり、意識の高まりも期待されるとしている。また、自己点検・自己評価の実施とその結果の公開の進展に併せ、外部評価を段階的に導入していくことを求めている。

平成14年4月に、小学校及び中学校設置基準の制定及び高等学校設置基準の改正が行われ、「学校の自己点検・自己評価とその結果の公表」「積極的な情報提供」が努力義務とされた。本県では、平成14年7月に「福島県立学校の管理運営規則に関する規則」に規定された。

このような中、文部科学省は、平成14年度「学校の評価システムに関する調査研究」の委嘱事業を実施し、併せてモデル校38校を指定して学校評価システムの確立と全校実施に向けた研究事業を始めた。全国の教育委員会や教育センターにおいても、調査研究が始まった。

福島県教育センターは、平成14年度に学校評価研究チームを立ち上げ、学校評価の研究を始めた。

## 2 平成14年度の研究

この年は、学校運営・教育活動の一層の充実改善のための開かれた学校づくりを推進する一方策として学校評価を位置づけ、そのシステムの構築に関する調査研究と具体的な提言を行った。

まず、平成14年6月・7月に、県内全小中高校889校の校長を対象にアンケート調査を実施した。そこでは、本県の学校評価の現状について、次のようにまとめられた。

平成14年における本県の学校評価の状況  
(全校アンケート調査より)

- ① 評価・反省のねらいは「課題解決や改善のため」との認識はあるが、結果の具体的な活用が少ない。
- ② 教職員の自己評価が大部分であるが、児童生徒や保護者、地域住民、学校評議員等の意見・評価の重要性は認識されている。
- ③ 評価票や自由記述、話し合いを組み合わせた評価・反省が行われており、検討は、職員会議で行われることが多い。しかしながら、開かれた学校づくりの視点から学校における反省・評価をより充実したものにするためには、評価の内容、方法、組織等について整える必要があるとの認識がある。
- ④ 評価に関する教職員の意識改革を図ることが今後の課題である。

(平成14年度 研究紀要)

この調査結果と全国の動向を踏まえ、学校評価研究チームは、PDCAマネジメントサイクルによる学校評価システムの構築をめざした。そして、日頃の教育活動とそれに関する情報の発信・受信を意図的・計画的に行うための作業シートである『PDCA票』と、アンケート用紙である『調査・評価票』が提案された。

これらについては、平成14年9月～11月にかけて、研究協力校・研究協力員所属校計15校において試行された。

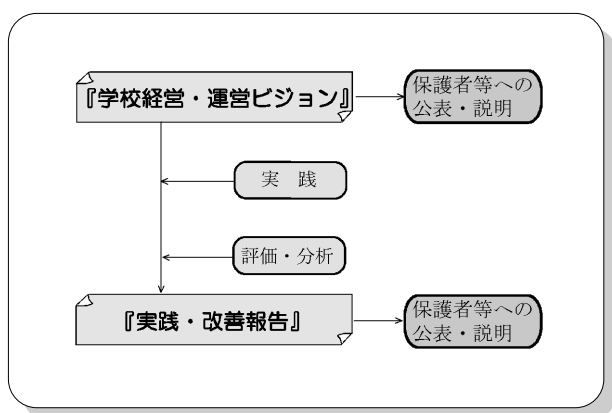
## 3 平成15年度の研究

この年は、研究協力者23名(小・中・高の管理職及び教務主任等)の協力を得て研究を行った。直接協力者による研究協議会が月1回持たれた。間接協力者とは、研究通信等を電子メールで送付するなどして情報を共有した。

前年度から、評価のための評価ではなく、学校改善のために評価を行うことは意図されていたが、『PDCA票』と『調査・評価票』だけでは、そのための道具としては不足であった。

研究チームは、学校の目標設定こそ重要であり、学校評価の起点を、評価票からそこに移動させて、

学校評価システムを構築した。この趣旨に添って提案されたのが、『学校経営・運営ビジョン』と『実践・改善報告』である。特に、『ビジョン』は、学校評価システムの根幹であると位置づけた。



『ビジョン』は、学校の教育目標、校長の理念、重点項目からなるビジュアル的な一枚の文書として提案された。ビジョンという言葉は、一般的には、長期的な学校の理念を表現するものであろうが、提案された『ビジョン』は具体的であり、様々な場面で活用されることを想定した。『ビジョン』の意義は、①統一的に教育実践を行うための指針、②情報公開の柱の2つである。

学校評価では、そのプロセスが重視される。『ビジョン』の作成の過程で、校内の共通理解が育まれる必要がある。この過程の中心となり、以後の自己評価活動においても中心的な役割を果たす組織として、「学校評価委員会」が提案された。

学校評価研究チームは、これらの研究成果を、『学校評価の試案－計画・実践・評価・改善の営みの確立を目指して－』としてまとめ、県内の小・中・高校全校にCDで配布し、教育センターWebページに掲載した。さらに、これは、文部科学省委託事業費によって製本され、県内小・中・高校及び関係教育機関、全国都道府県・政令指定都市教育委員会等に配布された。

## Ⅱ 平成16年度学校評価モデル事業

福島県学校教育審議会は、平成15年12月に「開かれた学校づくりを推進する上での学校評価の在り方について」を答申し、学校の自己評価の充実を求めた。さらに、有識者からなる外部評価委員会や学校評議員を活用した外部評価の研究を行うよう提言した。これを受けて、県教育委員会は、教育事務所長及び県立学校長に対して、改めて自己評価の実施を通知するとともに、県立高校14校が外部評価を含めた学校評価のモデル校に指定された。

学校評価研究チームは、このモデル事業に参加し、自己評価の実践的な研究と外部評価制度の研究に取り組んだ。

モデル事業の実施に当たって、「福島県立学校の外部評価委員会設置要綱」が定められ、有識者からなる外部評価委員会が設置された。指定されたモデル校は14校である。モデル校では、『学校評価の試案』を参考に自己評価の計画が立てられた。

モデル校のうち7校では、有識者からなる外部評価委員会による外部評価が、残る7校では、当該校の学校評議員による外部評価が行われた。外部評価員は5名である。県教育委員会からは、教育総務・指導・振興の3領域・5グループと教育センター学校評価研究チーム、教科外教育チームが参加した。県立学校グループが事務局であり、全体の企画・運営に当たった。

### 1 基本計画

平成16年3月12日（金）に、人事管理グループにより「モデル事業に係る担当者会議」が開催され、モデル事業の概要について協議した。これを受けて、研究チームは、外部評価の基本計画案を作成した。基本計画の作成に当たっては、公立学校における適切な先行事例がないため、大学評価・学位授与機構の評価システムが参考にされた。

## 一平成16年度学校評価モデル事業一

(福島県教育委員会)

### 【外部評価委員会による外部評価のモデル校】

福島高校、岩瀬農業高校、白河旭高校  
喜多方工業高校、平商業高校、双葉翔陽高校  
富岡養護学校

### 【学校評議員による外部評価のモデル校】

福島明成高校、須賀川高校、葵高校  
いわき海星高校、好間高校、小高工業高校  
聾学校

### 【外部評価委員会】

委員長 芳賀 裕  
副委員長 栗原 昭子  
委員 遠藤 君子  
委員 坂口 正治  
委員 佐々木 康文

### 【県教育委員会】

教育総務領域 人事管理グループ  
教育振興領域 市町村立学校グループ  
教育指導領域 学習生活指導グループ  
教育指導領域 企画学力向上グループ  
教育センター 学校評価研究チーム  
教育振興領域 県立学校グループ(事務局)

のは、

ア モデル校の自己評価に関する資料

イ 学校訪問で得られた情報

の2つである。

自己評価に関する資料は、学校評価の進行状況に沿って、3回に分けて提出された。各学校2回の学校訪問は、外部評価員2名によって行われた。学校訪問の目的は、自己評価資料の内容を確認し、外部評価員の学校理解を促進することである。学校訪問には、オブザーバーとして、県立学校グループ及び教育センターから各1名が参加した。学校訪問では、校長、教頭との協議、保護者、生徒、教職員との話し合い、校内見学等が実施された。

### 外部評価委員会への提出資料

第1回 (第1回学校訪問前)

- ・『学校経営・運営ビジョン』
- ・自己評価計画(自己評価の組織を含む)

第2回

- ・自己評価(中間)報告

第3回(第2回学校訪問前)

- ・自己評価実践報告

## 2 合同会議

平成16年5月10日(月)に、外部評価員、学校評議員代表者、モデル校教頭、教育庁関係者による合同会議が持たれ、モデル事業についての共通理解が図られた。この会議において、学校評価研究チームは、『学校経営・運営ビジョン』の意義、対話などによる調査の重視、校内のファシリテーターの養成の重要性について話をした。

## 3 モデル校の自己評価

モデル校は、『学校評価の試案』を参考に、学校評価実施要項を策定し、学校評価委員会を組織した。

学校評価委員会を中心に『学校経営・運営ビジョン』を作成して、年度の重点項目を明らかにした上で、自己評価を行った。

## 4 外部評価委員会の活動(モデル校7校)

### (1) 評価のための情報

外部評価委員会がモデル校の評価の資料としたも

### (2) 外部評価の実施

第1回学校訪問の後、「外部評価員による学校訪問に関する報告」が、中間評価報告に対しては、「中間報告に対する評価」が作成され送付された。

年度末には、1年間の各校の取り組みに関する『評価書』が作成された。評価書は、次の観点に沿って作成された。外部評価委員会によって作成された評価書は、当該校に送付され、各校により、「学校からのコメント及び次年度に向けての方向性」が付記されて戻され、公開された。

### 『評価書』の観点

- 観点Ⅰ 自己評価の取組状況
- I. 1 校内組織体制について
  - I. 2 自己評価計画について
  - I. 3 広報について
  - I. 4 取組状況全体について
- 観点Ⅱ 『学校経営・運営ビジョン』に示された重点事項の組織的な取組とその改善状況
- Ⅱ. 1 『学校経営・運営ビジョン』について
  - Ⅱ. 2 重点事項の組織的な取組とその改善状況について
- 観点Ⅲ その他
- Ⅲ. 1 地域社会との連携について
  - Ⅲ. 2 開かれた学校づくりについて
  - Ⅲ. 3 その他

## 5 学校評議員会の活動（モデル校7校）

学校評議員による外部評価のモデル校においては、外部評価委員会による評価活動の状況を参考に、各学校の工夫によって、様々な形態の評価活動が展開された。学校評議員会には、オブザーバーとして、県立学校グループ及び教育センターから各1名が参加した。

## 6 モデル事業の評価

外部評価委員会は、外部評価を通して気付いた点、改善に向けての提言等を『外部評価のまとめ』として県教育委員会に提出し、モデル校の『評価書』と併せて公表された。

また、「平成16年度学校評価モデル事業実施報告書」によって、モデル校各校に対して、モデル事業に関する評価を求めた。

### 平成16年度学校評価モデル事業実施報告書

- 1 学校評価全体の総括
- (1) 外部評価も含め、学校評価を通して改善された点、成果等
  - (2) 外部評価も含め、学校評価実施上の問題点、課題等
  - (3) 外部評価も含め、学校評価の今後の在り方について
- 2 学校評価モデル事業に対する意見
- (1) 学校訪問について
    - ア 時期は適切だったか
    - イ 時間帯は適切だったか
    - ウ 内容は適切だったか
      - ① 諸々の話し合いの設定について
      - ② 外部評価員の発言、指摘は適切だったか。
  - (2) 提出を求めた資料について  
（『学校経営・運営ビジョン』『自己評価計画』『中間評価報告』『自己評価実践報告書』）
    - ア 提出時期は適切だったか
    - イ 資料の内容は適切だったか
  - (3) 『評価書』について  
（モデル事業では、自己評価の取組状況、『学校経営・運営ビジョン』に示された重点項目の取組状況を評価対象に外部評価を実施した。）
    - ア 『評価書』は外部評価の趣旨に沿っていたか
    - イ 学校にとって有益な内容だったか
  - (4) 県教育委員会の対応について

## Ⅲ 学校の自己評価と外部評価

### （『学校評価の試案』の修正）

平成16年の学校評価モデル事業を通して得られた知見は『学校評価の実践—学校の自己評価と学校評議員による外部評価—』（平成17年3月 福島県教育委員会）にまとめられた。

### 1 『学校評価の試案』における外部評価

『試案』では、教職員の自己評価を学校評価の中心に据えた。そして、この自己評価を総合的・客観的なものとするために積極的に児童生徒や保護者、地域住民の意見を採り入れることとした。そこでは、教職員以外の児童生徒や保護者などによる評価を、



すべて外部評価と位置づけた。

『試案』における自己評価と外部評価

自己評価（内部評価）

◎教職員が行う自己評価

外部評価

◎児童生徒・保護者・地域住民・学校評  
議員等による評価

開かれた学校づくりをする上で、児童生徒や保護者の意見を学校運営に取り入れることは社会的な要請であり、『試案』の趣旨もそれに応えるものであった。

しかし、平成16年度の学校評価モデル事業における「外部評価」の実施によって、このような考え方を修正する必要が生じた。

## 2 『学校評価の実践』における外部評価

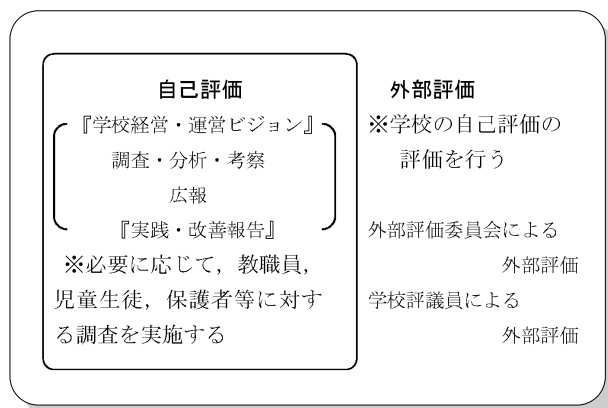
モデル事業においては、有識者からなる外部評価委員会と当該校の学校評議員による外部評価が試行された。その成果を踏まえて、平成17年度より、全県立学校において、同様の外部評価が実施されることになった。このように、「制度としての外部評価」が導入されると、児童生徒、保護者等の「個人に求める評価」を外部評価と位置づけることは難しくなる。また、幾重にもなる外部評価は、学校の自主性・自律性の点からも望ましくない。学校評価の基本は、教職員の自己点検・自己評価であるから、児童生徒、保護者の意見もこの自己評価の充実に生かされることが重要であると考えた。

このような理由から、『実践』においては、「外部評価」を、外部評価委員会及び学校評議員会においてなされるものに限定した。そして、児童生徒や保護者については、学校は、自己評価の一環として、必要に応じて、「調査」を実施することとした。

学校の自己評価とは、学校が主体的に調査を行い、得られたデータを分析し、考察を加えて、よりよい教育活動につなげていく一連の過程である。

## 3 学校の自己評価と外部評価

前項の考え方を、『実践』において次のようにまとめた。



児童生徒、保護者に対して評価を求めるのではなく、学校が自己評価の一環として主体的に調査を行うのであるから、その方法は多様であり、網羅的な「評価表」である必要はなくなる。また、適切な評価を行う上では、評価者の資質が問題となり、児童生徒、保護者に評価を求める場合の大きな障害であったが、この点も解消される。

このように学校の主体性を尊重する考え方において危惧される点は、学校の自己評価が恣意的になるのではないかということである。しかし、私たちは、そこにこそ外部評価者の存在意義があると考えます。外部評価委員会と学校評議員会の役割は、調査活動を含む学校の自己評価が適切に行われているかどうかを評価することである。

このように整理することによって、福島県の学校評価においては、教職員、児童生徒、保護者、外部評価者それぞれの役割が明確に区別された。

## IV 自己評価

### 1 『ビジョン』の目標と評価の指標

『試案』においては、「指標」という語句を用いずに、『ビジョン』の目標設定やそれを受けての自己評価を考察した。『実践』においては、目標と指標を分けて考える。これは、学校評価や数値目標の自己目的化を避けるためである。

## (1) 目標と手段

『試案』では、学校評価の目的を次のように述べている。

学校評価は、それ自体が目的ではなく、あくまでも学校の教育目標の実現に向け、教育活動がどこまで有効に行われたかを見直し、教育の水準の向上を図るための手段です。

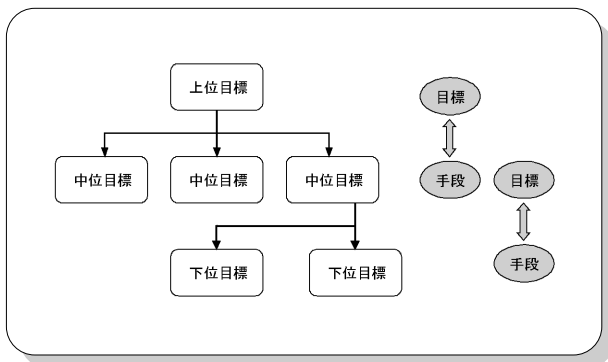
『学校評価の試案』 p. 3)

学校評価が出てきた背景には、教育水準の向上を目的として従来から年度末反省が行われていたのにもかかわらず、それが十分機能していない現状がある。すなわち、反省が自己目的化しているのではないかという疑念があった。この自己目的化は、年度末反省を学校評価の枠組に置き換えても起こりうる問題である。

『試案』においては、『ビジョン』の目標設定において、「目標の連鎖」の重要性が述べられている。これは、あらゆる教育活動において、その自己目的化を避けるための重要な考え方となる。

次の図は、目標の連鎖の模式図である。目標を連鎖させると、中位の目標は、上位の目標に対しては手段となり、下位の目標は、中位の目標に対して手段となる。このようにして、目標－手段の体系ができる。

学校評価の自己目的化を避けるということは、学校評価の様々な教育活動が、何のために行われているのかという上位目標を意識することである。



## (2) 評価のための指標

「数値目標」においても、その自己目的化が問題

となった。

『試案』では、数値目標について次のように述べられている。

重点化された項目については明確な目標を設定することが大切です。可能な限り数値目標を掲げ、その目標を学校関係者全員が共有しましょう。

数値目標の観点には、達成の程度だけでなく、「実践する回数や量、期日等」も考えられます。

『ビジョン』で重点化し、明確な目標を設定した教育活動を中心に評価する項目と評価基準の焦点化を図ることが重要です。

このような明確な「達成目標」があって、より客観的な評価を実施することができます。

『学校評価の試案』 p. 21)

このように『試案』では、数値目標によって目標が明確となること、数値目標には達成目標とスケジュール目標があること、数値目標によって評価の基準が明確になることなどが述べられている。

「数値目標」を掲げた『ビジョン』を作成したモデル校も見られたが、数値は、より上位の目標を組織的に達成するための手段であるとの認識が一般的であった。

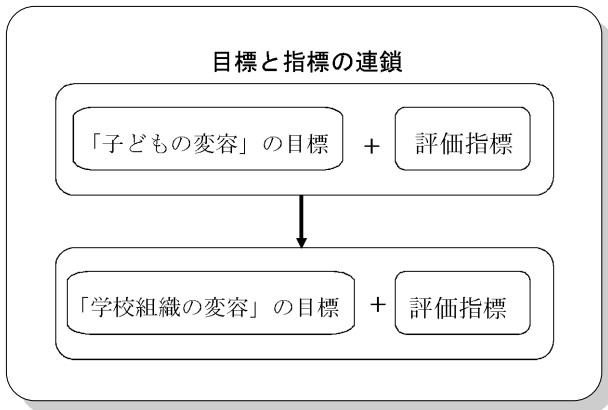
このような点から、『実践』では、「目標」と「評価のための指標」とを分けて考えることとした。従来使われていた「数値目標」は、「評価のための指標」であり、これにより、数値目標の自己目的化は避けられる。

## (3) 指標の連鎖

『実践』では、学校評価の絶対的な指標は、「子どもの変容」であるが、その実現のためには、「組織の変容」が重要であり、モデル校においても、そのための取組が多数見られた。この場合、「子どもの変容」をめざす目標は上位の目標である。「学校組織の変容」をめざす目標は、「子どもの変容」の目標を実現するための手段であり、それぞれについて、目標の達成度やスケジュールを管理するための

評価の指標が考えられる。

『ビジョン』の作成においては、目標の設定とあわせて、どの段階のどのような評価指標を掲載するかが問題となる。



目標と評価のための指標を分けることを提案したが、『ビジョン』の文言では、両者が一体となる場合もある。

教職員、保護者、児童生徒等の関係者が、数値を含めた指標は評価のための物差しであり、冷静な対処が必要であることを共通に理解していることが大切である。

#### (4) 目標と指標の公表

『ビジョン』における目標と評価指標の公表の在り方は、学校評価においては重要な問題であり、配慮すべきことは多い。

「子どもの変容」の目標は、最上位の目標であり、モデル校のどの『ビジョン』においても明記された。これに関する評価指標は、学校によっては、開発に困難さが見られた。

「学校組織の変容」の目標については、モデル校によって差があった。保護者にとっては、学校のめざす姿は明らかでも、そのために学校がどのような手段で教育活動を行い、その評価指標をどのレベルにおくかについて興味を持っている。教師の教育活動の評価指標の公表の在り方については、引き続き、検討を加える必要がある。

## 2 学校評価委員会

学校評価を実践する上で、ともすれば陥りがちな

問題は、その実務が管理職の手にゆだねられ、学校全体の広がりを見せない点があげられよう。

『試案』では、学校評価は、学校の教育活動全体に関わる機能を持つべきであるという観点から、学校評価委員会を組織することを提案した。校内組織を複雑にしないという趣旨から、既存の校務運営委員会や企画委員会にその役割を持たせることを想定した。

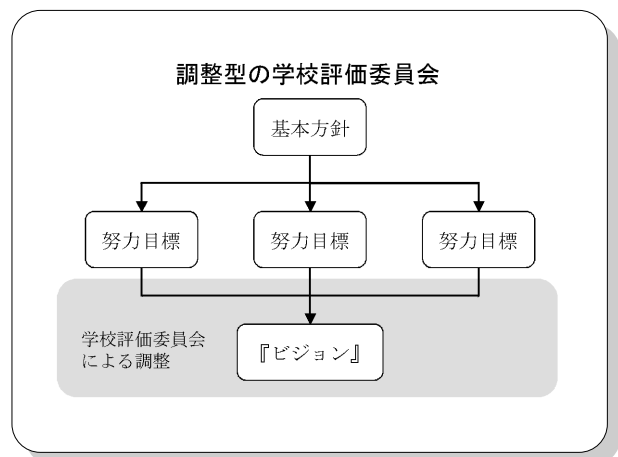
モデル校では、『試案』の趣旨に沿って、校務運営委員会を母体とする学校評価委員会を組織した学校が多かったが、小委員会型や、企画型の委員会も見られた。

そこでは、『試案』では触れなかった校内の校務分掌組織との関係において、注目すべき活動が展開された。

#### (1) 『ビジョン』の作成における学校評価委員会の役割

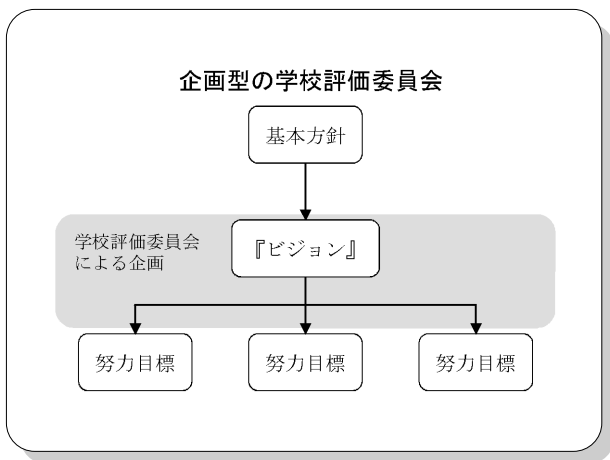
機能したモデル校の学校評価委員会は、「調整型」と「企画型」にモデル化することができる。

例えば、調整型の学校評価委員会は、校務分掌組織の努力目標を精選したり、関連づけを行ったり、相互に対立する努力目標を見直したりする過程を経て、『ビジョン』を作成した。この過程では、各校務分掌組織の目標設定を基礎とする点において、比較的円滑に『ビジョン』を作成することができる。



一方、企画型の学校評価委員会は、比較的強いリーダーシップを発揮して、学校全体の目標設定を行う。この過程では、『ビジョン』に掲げる重点目標が、

すべてに優先される重要課題であると校内で了解されているかどうか、または、組織の目標にどの程度関わるかによって、校内で共通理解を図る場が必要となる。

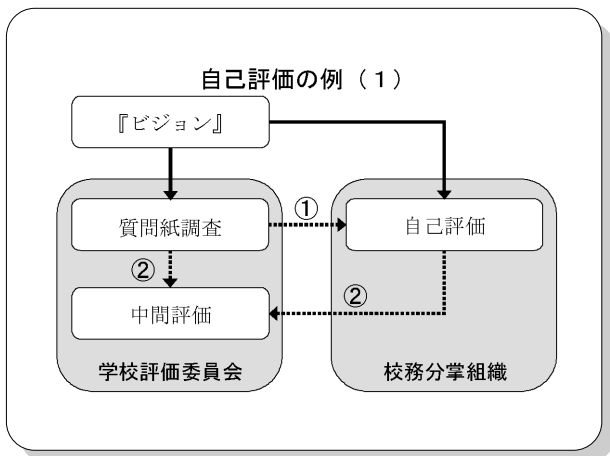


### (2) 自己評価における学校評価委員会の役割

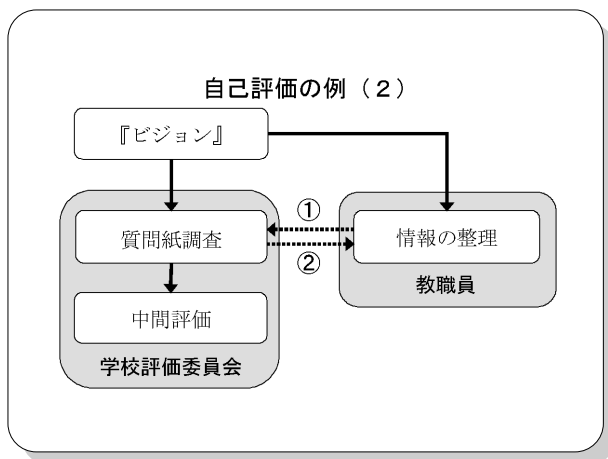
『ビジョン』の作成において、学校評価委員会の役割は、校内の目標設定を担う過程で、校内に価値ある情報の流れをつくり、まとめられた情報を保護者に伝えることである。

『ビジョン』を受けた自己評価の取組においても、その過程において、価値ある情報を収集し、広めることが基本となる。

次の例は、モデル校の中間評価における情報の流れを表している。図の①は、質問紙調査で得られた情報が校務分掌組織の自己評価に使われたことを表している。学校評価委員会は、②のように、質問紙調査の結果と、校務分掌組織の自己評価結果をあわせて分析し、考察を加えている。



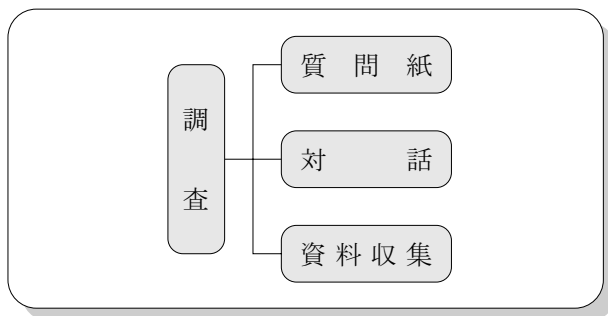
次の例は、別のモデル校における情報の流れを表している。ここでは、まず①によって、校内の各所に蓄積された、『ビジョン』の達成度を測定するために役立つ情報を収集し、これを掲載した質問紙を作成した。この質問紙の内容は、②において、教職員に戻され、この過程によって、調査をしながら、校内の情報が教職員に共有されるという効果が持たされた。



### 3 調査・分析・考察

「調査」を中心とする新しい自己評価の枠組を提案したことは先に述べた。

調査は、3つの方法に分類される。質問紙によるもの、対話によるものと資料収集である。



質問紙による調査は、学校評価においては最も一般的に行われるものであるが、その実施に当たっては、『ビジョン』との関連を重視し、必要最小限の項目について実施すべきである。質問紙による調査では、調査結果についての仮説が重要である。仮説を設定する作業は、質問紙の質を向上させ、得られたデータも次の教育活動の改善に生かしやすくなる。保護者等に対する調査では、調査の意図を明確に伝

える文書を添付すると同時に、正確なデータを得るために、回収率を上げる努力が不可欠である。

対話を自己評価に生かす試みについては、実践例は少ない。校務分掌組織の評価を職員会議や職員協議会で議論したり、三者面談の場を調査に活用したりという取組は行われているが、教職員同士、保護者、学校評議員等との対話を、自己評価に直接生かす取組は、今後の課題である。校内、校外で行われる各種会議を有効に活用することが大切である。

資料収集については、先に、学校評価委員会の項目で、質問紙作成における資料収集の例を取り上げたが、校内に既にある資料を自己評価に活用することは、多面的な評価活動において大きな意味を持つであろう。

#### 4 『学校経営・運営ビジョン』の意義

『ビジョン』における、目標と指標の在り方については、既に述べたところであるので、ここでは、『ビジョン』の意義について触れる。

『学校評価の試案』では、『ビジョン』の意義が次のようにまとめられた。

##### 『学校経営・運営ビジョン』の意義

###### ①学校改善の営みの側面

『学校経営・運営ビジョン』は、年間教育計画に基づいて全教職員が統一的に教育実践をするための指針となる。

###### ②説明責任を果たすための資料としての側面

学校評価実践における情報公開の柱となる。

(『学校評価の実践 p.16』)

『ビジョン』は、統一的な教育実践の指針となった。『ビジョン』が年間を通して活用された学校においては、そこに掲げられた校長の理念や目標が関係者の共通の言葉になり、議論のよりどころになった。校内の会議や学校評議員会においても、焦点が絞り込まれた議論が展開された。

『ビジョン』は情報公開の柱としても機能した。しかし、その意図が明確に伝わるためには、単に配

布するだけでは不十分であり、様々な場面を活用して繰り返し説明することが必要であった。

## V 外部評価

### 1 学校評議員による外部評価

従来の学校評議員制度の目的も学校の改善にあり、それは、評価者としての学校評議員に求められるものと同じである。しかし、従来の制度においては、学校評議員の評価者としての役割は十分意識されていなかった。

評価者としての役割は、

ア 学校を適切に理解し、

イ 改善に役立つという判断に基づいて意見を表明する、

ことで果たされる。これを実現するためには、学校と評議員双方が学校評議員の評価者としての役割と責任を意識しなければならない。校長による人選、学校からの適切な情報提供、学校評議員会の運営方法などについて、学校が主体的により良い方法を構築する必要がある。

#### (1) 学校評議員への情報提供

学校から保護者に出される様々な情報を、日常的に学校評議員に提供したり、会議資料を事前に送付することなどの配慮が大切である。

さらには、積極的に学校の教育活動や授業を公開し、学校の日常の姿を知ってもらうことは、学校評議員の学校理解を促進する上で重要なことである。

#### (2) 学校評議員会の運営

学校評議員会の資料は、学校の自己評価資料である。学校評議員に学校が理解されないといわれる原因の一つに、校内で共有されている資料を示さずに、公開用の資料を作り直すことがある。学校評議員会の資料は、校内で共有された自己評価資料により構成される必要がある。

モデル校においては、外部評価委員会の学校訪問の方法を取り入れ、児童生徒や教職員との話し合いの機会を持ったりしたところもある。

学校側の出席者については、学校の自己評価を評

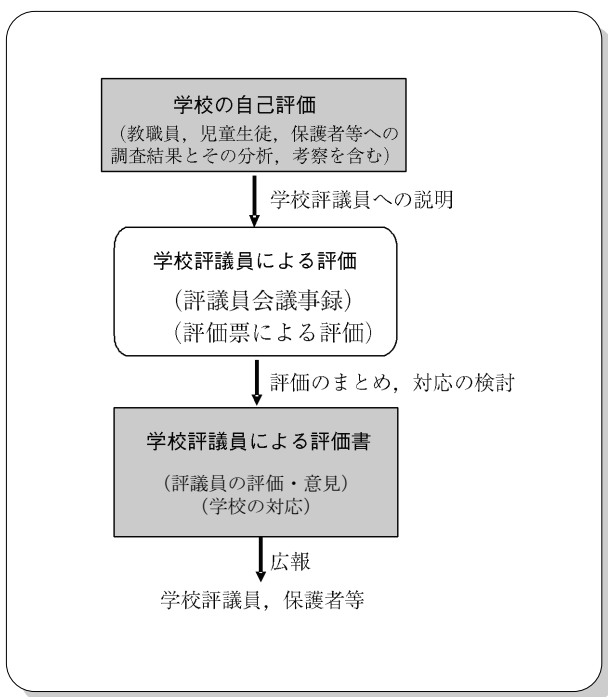
価するという趣旨に沿えば、学校の自己評価を担当する学校評価委員会の参加は不可欠であろう。

議事の進め方で最も重要なことは、評議員と学校側との対話に終始することなく、評議員同士が議論したり、意見交換できるような場を持つことである。学校評議員による評価は、評議員個々の意見もさることながら、合議によるものが望ましい。

### (3) 学校評議員による評価

調査表や評価表により評価を求めることが一般的であるが、評議員会の対話を生かすことは、最も重要である。この場合、正確な議事録を記録することは基本的な要件である。

学校評議員による評価の流れは、次のようにまとめることができる。



### (4) 学校評議員による評価の共有

学校評議員会においてもその会議の開催が自己目的化しないことは重要である。会議前の準備の重要性と同じく、会議後の情報の共有が不可欠である。

学校評議員会の後、評価のまとめをする上では、まず、評議員会に参加した教職員によるふりかえりが有効である。そこでは、

- ① 肯定的な評価を受けたことは何か。
- ② 改善を求められたことは何か。

の2点について、共通理解を図る必要がある。この手続きを踏むことで、誰が評価のまとめを行おうとも、説得力を持って評価の対応を考えることができる。

学校評議員による評価とそれに対する学校の対応を付した「評価書」は、学校評議員に送付されると共に、保護者に配布されることで、学校の自己評価と学校評議員による外部評価の関連が図られる。

## 2 外部評価委員会による外部評価

学校評議員会による外部評価の実施に当たっては、学校の主体的な取組が重要である。これに対して、外部評価委員会による外部評価においては、提出すべき自己評価資料や学校訪問の形態については、外部評価委員会により指定される。学校は、自己評価の取組に集中することが重要である。

## 3 外部評価の今後の在り方

平成17年度より、全県立学校において、学校評議員による外部評価と外部評価委員会による外部評価が導入される。

後者は、県内各地区の20校について実施されるので、外部評価委員会による外部評価は、5年で第1回目のサイクルが終了する。

平成17年度の「外部評価マニュアル」では、二つの外部評価制度は並列して扱われている。

外部評価委員会による評価を受ける学校においては、学校評議員による外部評価の扱いをどうするかが今後の課題である。外部評価委員会による評価は5年に1回であるが、学校評議員会はその間も存在するからである。

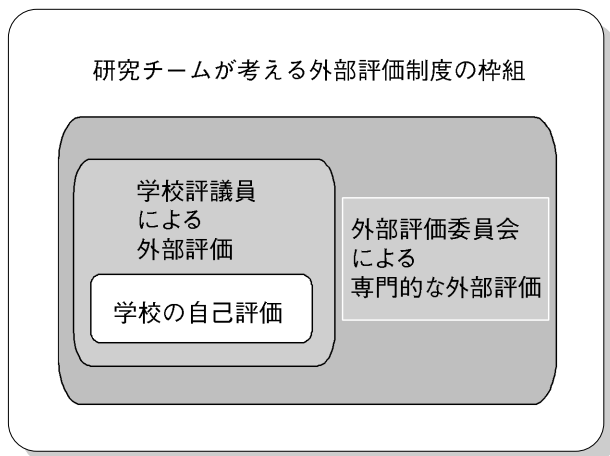
学校評価研究チームは、外部評価委員会による評価を、当該校の学校評議員による外部評価に関する評価を含めた専門的な評価制度と位置づけることを提案する。その理由は二つある。

一つは、先に述べたように、外部評価委員会による評価を受ける年だけ、学校評議員による評価を途切れさせることは現実的ではないということである。

二つ目は、学校評議員による外部評価は、学校と評議員との相互作用によって行われるものであり、学校評議員には、評価に関する高度な専門性や、監督性が、全ての学校において保証されるものではな

いということである。

外部評価委員会が、学校評議員の評価活動の妥当性を含めて評価を行うことで、学校にとっては、より身近な外部評価制度である学校評議員による評価の質の向上に寄与できる。この場合、学校が外部評価委員会に提出する自己評価資料には、学校評議員による評価結果とその対応を含めることとなる。



員会は、達成すべき目標が明確であり、目標達成時には発展的に解散することを前提としている。そこで得られた成果は、常設の校務分掌組織に振り分けられる。

一方、このような委員会を立ち上げたモデル校では、目標のない委員会の改廃に取り組み始めている。

組織には、年度をまたぐ安定性と今日的課題に対応して変化する柔軟性との両面が求められる。

学校評価は、前年度の教育実践を踏襲したり、付け加えることが多かった学校に、組織開発の発想を生み出しているのである。

## VI 学校評価から学校組織の開発へ

学校評価の真摯な取り組みは、学校の組織の開発につながる可能性がある。

『学校評価の試案』では、学校評価を通して、仕事の質を変えようと提案した。

### 仕事を増やすのではなく仕事の質を変える

- ① 学校評価は、日々の教育活動の外にあるのではなく、日々の教育活動の質を変えるプロセスである。
- ② 校内の組織化に当たっては、既存の組織の活用と整理統合を含む、簡素化を心がける。

（『学校評価の試案』 p. 5）

『ビジョン』の作成を通して、学校は、重点目標を設定する。その過程で、目標を達成するための組織が学校にあるかどうかを考慮される。既存の委員会や校務分掌組織で対応できない場合、あるモデル校では、「プロジェクト型の委員会」を設けて、目標達成に向けた全校的な取組を加速させた。この委

カリキュラム研究チーム

# 子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発

子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発



# 子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発

## 《目 次》

I 研究の趣旨	29
II 研究の概要	29
1 シラバス作成の意義	29
2 シラバスを通じた学校（教師），児童生徒，保護者（家庭）の関係	31
3 シラバスの役割	32
4 学習指導計画とシラバスの違い	32
5 シラバス作成の手順	34
6 シラバス活用の具体的場面（例）	35
7 シラバスの効果	37
8 シラバス作りを通じた学校支援	39
III 研究のまとめ	40

# 子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発

カリキュラム研究チーム

## I 研究の趣旨

昨年度（平成15年度）、カリキュラム研究チームで実施した本県の中学生を対象とした「学び」の調査、分析・研究の結果から、知識を構造化したり、知識を関連づけたりする「学習方略(方法)」や主体的に学習するための「学習計画力」などの「自ら学ぶ力」が教科の学力に大きな影響を及ぼしていることが分かった。また、これらの「自ら学ぶ力」(学びの自立力)は、学力層ごとに有意であることも分かった。

一方、教育内容の削減、完全学校週5日制の実施、「総合的な学習の時間」や教科「情報」を導入した新教育課程施行等の教育環境の変化の中で、「学び」の意義を見だし、「確かな学力」を身に付けたいと願う児童生徒や保護者の期待がこれまで以上に寄せられている。

また、小・中・高等学校の設置基準の改正にともない、児童生徒や保護者の教育活動への一層の理解を深め、地域に信頼される開かれた学校づくりを行う上で、学校としての説明責任を果たす観点から、各学校の有する情報を積極的に提供することが求められている。

本研究では、昨年度の研究成果や児童生徒・保護者の期待、近年の教育施策の動向を踏まえ、児童生徒の「学習者としての自立」(学びの自立)を一層促進するためのシラバスの研究と開発を行った。

「学習者としての自立」とは、独学ができるということではなく、次の「学びの自立」の例に示すことがらを意味する。

- 学習することの意義、目的、価値、楽しさを知っていること。
- 自分の能力の向上、理解状態を知っていること。
- 自分に適した学習方略または学習の定着のための学習方略を知っていること。

- 知識の構造化、知識の関連づけができること。
- 理解できない時にはどうすればよいかを知っていること。

## II 研究の概要

### 1 シラバス作成の意義

#### (1) シラバスの語源

シラバスは、「書物の羊皮紙のラベル」または「標題紙」という意味を表すギリシア語のsittubaを語源とした英語のsyllabus からきた外来語である。

「教えるべき目標、内容、学習者の学習方法、指導方法、評価等の概要を示したもの」（「現代学校教育大事典」ぎょうせい）をシラバスと呼び、学期や年間を通したシラバスや単元ごとのシラバスなど、シラバスで示される期間は多様である。

#### (2) シラバスの本質

シラバスを作成する際には、教師間のコンセンサスが必要になるため、話し合いが成立し、授業の進め方や児童生徒のために「何を」「どのように」教えるかなどについての議論が出てくる。

また、児童生徒に、シラバスを通して、学習の見通しを示し、学習内容相互の関連や自分にあった学習方法を工夫させ、自らの学習スタイルを構築させることは、意欲的、主体的な学習へと向かわせることになる。

これらのことを踏まえると、シラバスは、

児童生徒が、各教科・科目の学習を行うに当たって、主体的・計画的な学習を進める上で必要な情報をまとめた「学習の手引き」

であると言える。

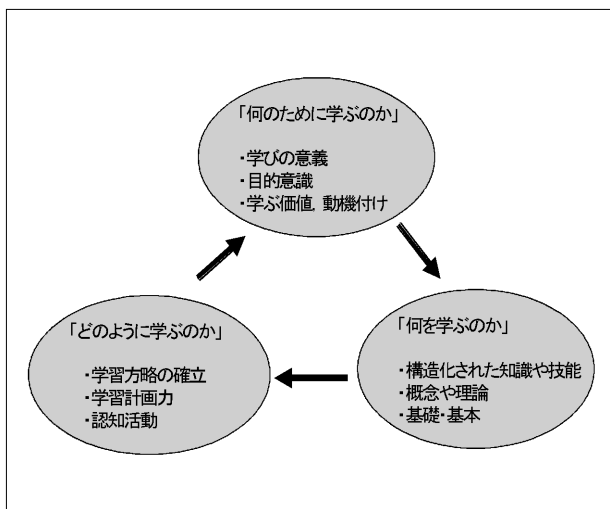
### (3) シラバス作成の意味

児童生徒の学力の現状として、知識や技能などの学習の結果として身に付いた、いわゆる「目に見える学力」（兵庫教育大学学長、中教審委員梶田叡一氏による）以上に、前述した学習意欲や学習定着のための学習方略、学習計画力などの「自ら学ぶ力」（学びの自立力）の低下が指摘されている。

このことは、教師が、児童生徒の「学び」の実態を把握し、個に応じた「学びの自立」への支援を一層行う必要があることを意味している。

児童生徒の「学びの自立」に向けての支援として、次の図1に示したように、大きく分けて「何のために学ぶのか」、「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」の3つの分野についての支援が考えられる。

図1 「学びの自立」に向けての支援



児童生徒の「知離れ」や「学びの自立」が問題視されている状況を踏まえ、これらの3分野の視点に立つシラバスを作成し、児童生徒が、意味のある「学び」を見出し、「学びの自立力」（自学自習力）を身に付けるための支援を行うことが大切であると考える。

次の①～③は、研究協力員として依頼した本県の小・中・高等学校の教師が、「学びの自立」に向けての支援の3分野である「何のために学ぶのか」、「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」をシラバスの一部に記載し、活用したものである。

#### ① 「何のために学ぶのか」（「中学校社会」の例）

社会科を学ぶ意義は、自分の頭の中に、「日記」を作ることだと考えています。なぜなら「日記」というものは、「私はこんなことをした」とか「私はこう思った」というように自分の世界を書くものだからです。

社会科を学ぶということが、「なぜ『日記』をつくることになるのでしょうか。」実は、勉強がうまくいくのは、客観的な知識が自分の世界をくぐる時なのです。そのことを「日記」を作ると表現しました。学習したことが、自分の「生き方や考え方」と結びつき、その「生き方や考え方」が更に発展し、再構築される時です。まさに、社会科で学ぶ「地理的分野」や「歴史的分野」では、その再構築すなわち客観的な知識がくぐる最高の時なのです。・・・中略

#### ② 「何を学ぶのか」（「小学校理科6年」の例）

6年の理科で身に付ける力は、多面的な視点から観察、実験などを行い、結論を導く資質・能力です。

上の図のように一つの事象をいろいろな面からとらえ、見出した問題を追究していくことが大切です。

例えば「二酸化炭素」は、地球の大気、人の呼吸、植物のはたらき、水溶液などさまざまな事象に関わっており、いろいろな面からその性質や働きをとらえることができます。

また、生活の中に様々な科学に関する言葉が出てきます。

日頃から身の回りの自然をいろいろな見方でながめることのできる力を身に付けていきます。

#### ③ 「どのように学ぶのか」（「高校国語・国語総合」の例）

以下に示す「予習、授業、復習」の積み重ねが効果的な学習方法となります。なお、学習内容を補助し発展させる方法として、「その他」にも随時必要に応じて取り組んでみてください。

	現代文	古文	漢文	表現
予習	・漢字や語句の意味を調べる。 ・教材を音読してテーマや概要をとらえる。 ・文章構成を確認する。	・音読、本文視写、口語訳をする。 ・大いに辞書を活用し古典に慣れ親しむようにする。	・音読、本文視写、書き下し文、口語訳をする。 ・大いに辞書を活用し古典に慣れ親しむようにする。	・事前に連絡するので、指示に従う。
授業	・客観的に正しく読み取る方法を身に付ける。 ・自分の読解と異なるところが集まって聞く。	・音読、暗唱等で古文の持つリズムやテンポを身に付ける。 ・歴史的仮名遣いや語彙、文法などの基礎的事項を習得する。	・漢文の持つリズムやテンポを体感し身に付ける。 ・漢文訓読法に従った正しい読み、書き下し文を確認する。	・報告文や意見文を書く。 ・グループでの調べ学習、話し合い、発表を行う。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・板書事項だけ写すのではなく、自分にとって必要な説明も漏らさず書く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品の分析的解釈を学習し、正確に読み取る方法を身に付ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正確な口語訳が出来るよう、語彙、語法などの基礎的事項を習得する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現方法を習得できるよう、意欲的に取り組む。</li> </ul>
復習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートを見返し、授業での説明を思い出ししながら、理解の不十分なところがないか確認する。</li> <li>・読解のために必要な基礎的事項を定着させる。</li> <li>・不明なところは積極的に質問する。</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業での説明や相互評価を思い出しながら、表現能力の改善と向上に努める。</li> <li>・宿題や課題に意欲的に取り組む。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ものの見方、感じ方、考え方が広げ深められるよう、幅広いジャンルの読書をする。</li> <li>・図書館を十分に活用し、読書習慣を身に付ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読書等を通して日本文化への精神的・歴史的な理解を深める。</li> <li>・幅広いジャンルにおいて現代と比較し、考えを深めてみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国と日本との関わりを調べ、古人の考え方や感じ方を学び考えを深めてみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展的な思考ができるよう、幅広いジャンルの読書をする。</li> <li>・書いた文章は必ず見せよう。</li> </ul>

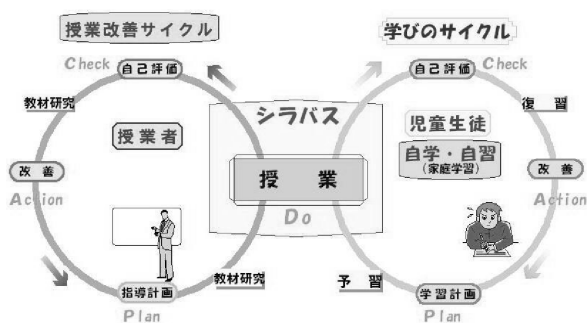
#### (4) 2つのPDCAサイクル

次に示した図2は、児童生徒の「確かな学力」の向上に向けての「授業改善サイクル」と「学びのサイクル」を示したものである。

教師の連続的・発展的な「P-D-C-A」により、「授業改善」が可能になり、また、児童生徒も連続的・発展的な「P-D-C-A」で、「学びの自立力」が身に付き、「確かな学力」の向上が可能になることを表したものである。

その際、重要なことは、「授業改善サイクル」と「学びのサイクル」は、それぞれ独立して動いているのではなく、シラバスと授業を介して、リンクし連動していることである。

図2 シラバスを活用した授業改善サイクルと学びのサイクル



「児童生徒にどのような資質・能力を育てていくのか」を明確にした学校教育目標の達成に向け、シラバスを作成して授業改善がなされることは、児童生徒がその目標達成のための行動プランを示したシラバスの活用によって、「学びの自立」を身に付けていくという相乗効果機能を持っている。

## 2 シラバスを通した学校（教師）、児童生徒、保護者（家庭）の関係

次に示した図3は、シラバスを通した学校（教師）、児童生徒、保護者（家庭）の関係を示したものである。

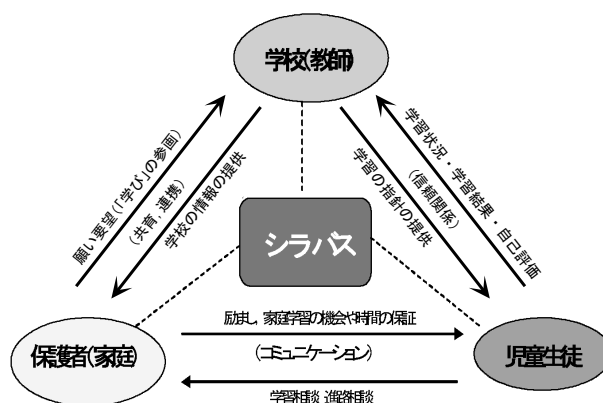
### (1) 学校（教師）と児童生徒、保護者（家庭）の関係

学校（教師）がシラバスを示すことは、教師のこれまでの指導内容や指導方法を見直すきっかけになるとともに、児童生徒のシラバス活用による学習状況・学習結果や自己評価、保護者（家庭）の願い・要望などにより、さらなる授業改善が期待できる。

### (2) 児童生徒と保護者（家庭）の関係

シラバスの活用により、児童生徒への学習相談や進路相談などのために、家庭内のコミュニケーションが図られるとともに、保護者が児童生徒の「学びの自立」への支援に教師と共に参画したり、家庭の教育力の向上を図ることができるのではないかと考える。

図3 学校(教師)、児童生徒、保護者(家庭)の関係

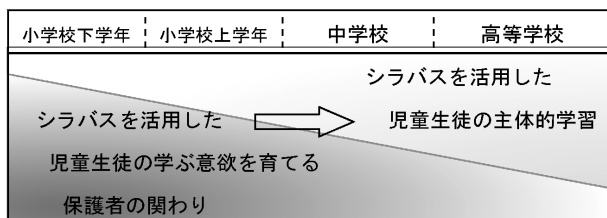


ただし、シラバスは固定的なものではなく、児童生徒や保護者の意見や利用状況を把握し、シラバスの改善に生かす必要がある。

### (3) 学年や校種に応じた児童生徒のシラバス活用

シラバスを小・中・高等学校の児童生徒や保護者に活用させる場合、次の図4の児童生徒の発達段階に応じたシラバス活用(例)に示したように、学年や校種などの発達段階に応じて、その活用の工夫を工夫する必要がある。

図4 児童生徒の発達段階に応じたシラバス活用(例)



#### ①小学校児童のためのシラバス活用の在り方

##### ○小学校下学年児童

小学校下学年児童は、学習内容を見通した自主的な学習に取り組むことは、まだ難しい段階にあると考えられる。学校(教師)だけではなく、シラバスを基にした保護者(家庭)の児童に対する学習支援を、家庭内で継続的に行い、児童の「学び」の好奇心を高めさせ、学ぶ意欲を育てることが必要であると考え。

##### ○小学校上学年児童

学習内容の難易度が増してくる小学校上学年頃より、徐々に「自ら学ぶ力」を身に付け、主体的な学習態度を形成させていく必要がある。

学習習慣の確立のためには、小学校上学年頃までに、シラバスを基に自学自習の習慣を身に付けさせる必要があると考える。

#### ②中・高等学校生徒のためのシラバス活用の在り方

中・高等学校の学習内容は、小学校の学習内容に比べ、概念や理論など抽象度が増えるために、ややもすると本質的な理解よりも安易に断片的な知識を習得する傾向がある。

生徒自らが、シラバスを活用して、各単元ごとに、知識を構造的に捉えたり、知識を関連づけたりするなどの学習方略を身に付けていく必要があると考える。

### 3 シラバスの役割

シラバスの役割として、次の4つの役割が考えられる。

#### ①教師と児童生徒との契約書としての役割

シラバスに基づく「授業内容」を保証するとともに、「学習の成果」の判断の仕方をシラバスによって確認できる役割がある。

#### ②児童生徒の「学び」の道標としての役割

シラバスは、旅行する場合の旅程表、時刻表、地図、ガイドブックなどを合わせたようなものであり、児童生徒がシラバスを頼りに自学自習を行うための道標としての役割がある。

#### ③授業計画書と学習の手引書としての役割

授業の配列と全体の構成を予め示す授業計画書としての役割と「どのようなペースで、どのようなことを学んでいくか」を前もって知っておくための学習の手引書としての役割がある。

#### ④事務連絡文書としての役割

定期考査や小テストの日程、ワークシートや課題レポートの提出、長期休業中の課題、授業形態、評価方法など連絡しておく文書としての役割がある。

### 4 学習指導計画とシラバスの違い

学習指導計画には、一般に、年間学習指導計画や単元または1単位時間の指導計画、学習指導案などがある。さらに、小・中学校では、週案も作成されている。

いずれも、教師が、学習指導目標の達成を目指して作成される教師用の学習指導計画であり、指導と評価の一体化を図るために、指導方法と評価規準や評価方法の関連を意識できるものである。

それに対して、シラバスは、児童生徒向けの学習計画であり、学習のねらいや学習到達目標、学習の進め方等、児童生徒が主体的・計画的に自学自習で

きる情報を、児童生徒の目線に立って明記したものである。

このようなことから、シラバスの作成に当たっては、各学習指導計画の改善を進めながら、シラバス

と学習指導計画との関連づけを持たせることが大切になってくる。そして、学校の目指す児童・生徒像（学校教育目標）を見据えて、児童生徒の学習に役立つシラバスを作成することが重要である。

図5 年間学習指導計画と年間シラバスの関連（高等学校の例）



## 5 シラバス作成の手順

各学校の教育目標を具現化するものとして、小・中・高等学校では、学校経営方針や教育課程、年間指導計画、学習指導案などを作成し、それに基づいて、児童生徒のために教育活動を展開する。

シラバスは、これらの方針・計画・指導内容等を踏まえ、生徒の目線に立った上で年間や単元（題材）ごとに作成されるものである。

すなわち、教師の指導計画や指導内容をそのままシラバスに記載して児童生徒に配付するのではなく、児童生徒の実態を踏まえ、指導計画・指導内容等を分かりやすく、具体的な表現にすることが大切である。

そして、児童生徒がシラバスを受け取る、見るだけの行為で終わることがないように、児童生徒や教師が、継続的・持続的に活用していけるものにしていく必要がある。

そのことが、児童生徒の「学びの自立」や教師の「授業改善」につながるのではないかと考える。

次に、シラバス作成するに当たっての手順（例）を示した。

### ○教科（科目）における年間シラバス（単元シラバス）作成の手順（例）

#### (1) 学校経営方針・教育課程の確認

まず最初に、当該年度の学校経営方針（グランドデザイン）を見据え、学習指導要領、県教委・地教委の基本方針、地域・学校の実態を踏まえた各学校の教育課程を確認する。

教育課程には、学校の教育目標（めざす児童生徒像の明記など）が明確化されていることから、シラバス作成のプランを立てるための根拠となるものである。

#### (2) 児童生徒の実態把握

児童生徒の実態を把握するための手立てとして、学習意識調査や学力調査、シラバス利用調査などを実施し、学習実態を調査する必要がある。

学力調査においては、児童生徒全体の平均値だけでなく、学力層ごとに傾向を読み取ることも必要である。

シラバス利用調査では、すでに作成したシラバスを改善・修正するために行われる。

### (3) シラバスの内容の具体化

#### ① 学ぶ意義・目的

各教科・科目の指導理念をもとにして、学びの意義や学ぶ目的など、「何のために教科・科目を学習する必要があるのか」について、児童生徒にわかりやすい表現で記載する。また、「学ぶ楽しさ、知る喜び」が伝えられる内容にしたい。

#### ② 学習内容と学習到達目標

指導内容を構造化して配列した指導計画をもとに、年間計画及び単元計画を示す。その際、児童生徒にとって分かりやすい学習到達目標を設定する。

#### ③ 学習方法

学習到達目標を実現するための効果的な「学習方法」を明記する。予習・復習の仕方だけではなく、知識の関連づけや知識を構造化するための方略も記載したい。

#### ④ 評価方法

目標に準拠した評価（絶対評価）を行うために、客観性・公平性のある「評価方法」を明記する。単元レベルでの観点別評価の重み付けや定期考査、小テスト、発表、レポート、ワークシートの実施・提出の日程などを書く。

#### ⑤ 児童生徒の自己評価

自己評価は、自己の学習を振り返り、自己の理解状態をモニターするために行う。また、\*メタ認知能力を養うことによって、より確かな理解を育むことができる。

※「メタ認知能力」（反省的能力ともいい、何か活動している自分を、もう一つのレベルで認知し、自覚的に統制する能力。）

#### ⑥ 補充的・発展的学習への指針

児童生徒自身が、学習の振り返りの結果、学習内容のつまづきを克服（補充的学習）したり、発展的・応用的な学習（発展的学習）をめざしたりするための学習の指針を記載する。その際、単元の学習到達目標を明確化することによって、児童生徒に主体的な学習へと向かわせることができる。

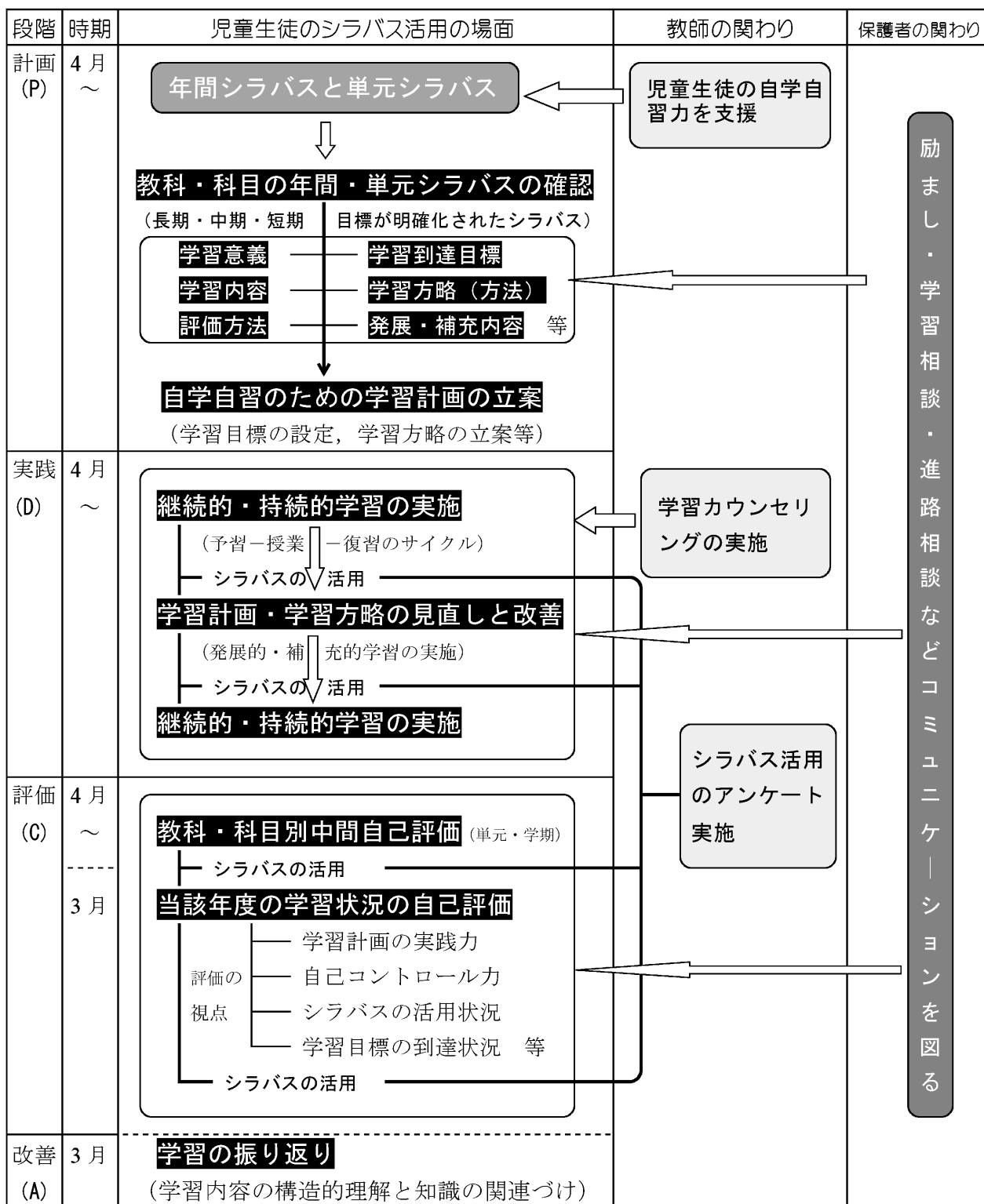
#### ⑦ 教師からのメッセージ

児童生徒の「確かな学力」を育成するために、教師からのアドバイスやメッセージを記入する。

## 6 シラバス活用の具体的場面（例）

児童生徒の活用場面例と教師の関わり、保護者の関わりを次の図に示した。図6は、児童生徒の自学自習のサイクルの「計画（P）－実践（D）－評価（C）－改善（A）」にシラバスを活用する場面である。その際、シラバス活用のアンケートを実施して、絶えず、シラバスを改善・修正していく必要がある。

図6 児童生徒によるシラバスの活用場面例（自学自習のP－D－C－A）





## ア 児童生徒のシラバス活用の場面

### □ 学習計画の立案段階におけるシラバスの活用(P)

○児童生徒は、長期（3年間あるいは6年間）・中期（1年間）・短期（学期あるいは単元）目標が明確化されたシラバスを前もって活用することによって、学習課題が意識化され、各授業に対応した自主的な学習の計画が立てやすくなる。

○長期・中期・短期目標は、「何を」、「いつ」「どのように」、「どこまで」学習するのか、また、学習の結果、「どのような資質・能力を身に付けるのか」を示すものであり、「何の目的のために授業を受けるのか」が明確になり、児童生徒のモチベーションアップが期待できる。

### □ 自学自習段階におけるシラバスの活用(D)

○前ページの実践（D）段階に示すように、長期・中期・短期目標の実現には、継続的・持続的な学習を実践する必要がある。

その際、児童生徒が、シラバスを確認しながら授業の今後の見通しや今までの学習状況を把握しながら行うことが大切になる。

○学習計画の見直しや改善を図りながら、習熟度に応じてシラバスに記載された「発展的学習」や「補充的学習」を実施する。

### □ 学習状況の自己評価のためのシラバスの活用(C)

○各教科・科目における単元や学期ごとに学習内容の理解状態をモニターするとともに、評価規準や評価方法と照らして、学習状況の自己評価を行う。

○自己評価の視点として学習計画の実践力や自己コントロール力、学習目標の到達状況などが考えられる。

### □ 学習の振り返りのためのシラバスの活用(A)

○質的な理解を深めるために、学習内容の構造化と知識の関連づけを図る。

## イ 教師の関わり

### □ 自学自習力の確立のための支援

○児童生徒の家庭学習習慣の確立（自学自習のPDCA）にシラバスを生かすために、シラバスそのものを魅力的なものにする。

### □ 個に応じた「学習カウンセリング」の実施

○児童生徒が理解できない学習内容について、ただ分かりやすく解説するだけでなく、その解説を通じて「理解する力があるし、理解すると楽しい」という学習意欲を育てることや「理解できない時にはどのように学習すればよいか」という学習方略を身に付けさせ、より主体的に学習が進められるようにする。

### □ シラバス活用のアンケートの実施

○シラバス活用の実態調査だけではなく、児童生徒の学習状況の評価（自己評価）や教師間の授業評価（相互評価）、教師自身の自己点検・自己評価をも兼ねた調査であり、教師の授業改善や児童生徒の学習改善をねらいとする。

## ウ 保護者の関わり

○子どもの「確かな学力」の育成のために、励ましたり、学習や進路について相談に乗るなどして、子どもに支援的なコミュニケーションの機会を増やす。

○家庭学習の機会や家庭学習時間の保証を子どもとともに考え、実行する。

※ シラバスの本質は、「児童生徒が、教科・科目の学習を行うに当たって、主体的・計画的な学習を進める上で必要な情報をまとめた学習の手引き」である。

主体的・計画的な学習に、児童生徒を導くためのシラバスでなければならない。

## 7 シラバスの効果

(児童生徒・教員のシラバス活用の意識調査から)

### (1) 児童生徒のシラバス活用の意識調査

本県の小・中・高等学校の児童生徒501名を対象にシラバス活用の効果を確認するため、研究協力員に依頼し、「シラバス活用の意識調査」を実施した。

グラフ I～グラフ IVは、調査結果の主なものである。

#### ①調査項目

- ・シラバス利用による学習目的やおもしろさの理解
- ・シラバス利用による各教科の「学習内容の理解」
- ・シラバス利用による「学習の見通し」
- ・シラバスと授業、評価の関係
- ・シラバス利用の場面など

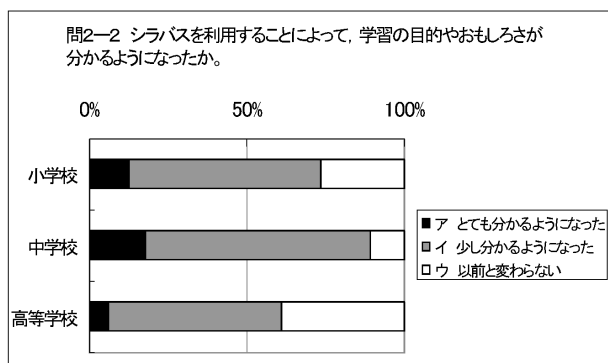
#### ②調査形式

各質問に対して、児童生徒が自己評価する（2段階または4段階による）アンケートの実施

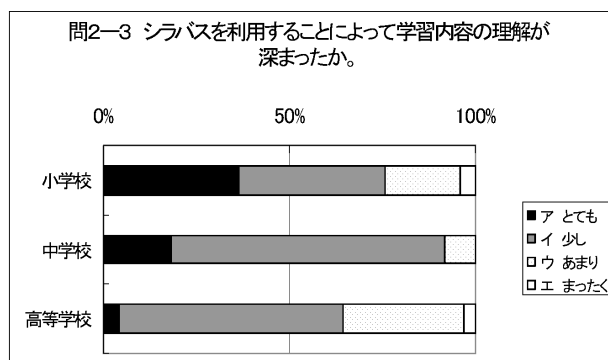
#### ③調査結果

小・中・高等学校の児童生徒が、自己評価した結果を、校種別に集計した。次のグラフ I～グラフ IVは、調査結果の一部である。

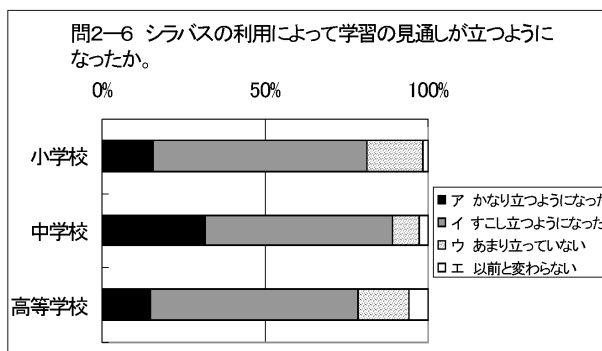
グラフ I 「学習目的やおもしろさ」の理解



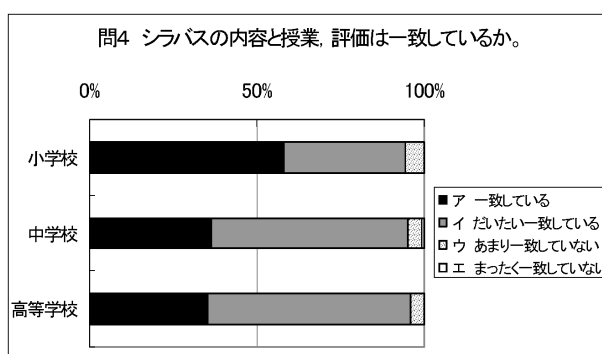
グラフ II 「学習内容の理解の深まり」



グラフ III 「学習の見通し」



グラフ IV 「シラバス」と授業、評価の関係



シラバスは、固定的なものではなく絶えず改善・修正され、継続的・連続的に活用されてはじめて効果が出るものであるが、シラバス活用の調査結果から、児童生徒の学習意識の変化が読み取れる。

○ グラフ I～グラフ IIでは、小・中・高等学校の多くの児童生徒は、シラバスを利用した結果、「学習の目的や学習のおもしろさが分かるようになった」と回答し、また、「学習内容の理解の深まり」を肯定的に捉えている。

○ グラフ IIIにおいて、シラバス活用により「見通し」を持って学習活動ができると回答している。

○ グラフ IVにおいて、目標と指導と評価の一体化が求められている中で、シラバス作成と活用により、授業改善が有効に機能した結果であると考えられる。

これらの調査結果から、児童生徒がシラバスを継続的に活用することによって、学習意欲の高揚、主体的学習・効率的学習の促進が期待できるのではないかと考える。

## (2) 教師のシラバス作成・活用に関する調査

教師のシラバス作成・活用による効果を確かめるために、本研究に協力していただいた研究協力員に依頼し、アンケートを実施した。

### ①調査項目

- ・教師のシラバス作成・活用による効果について
- ・シラバス作成・活用上の課題について

### ②調査形式

各質問項目について、フリーアンサー（自由回答）形式

### ③調査結果

教師のシラバス作成・活用に関する意識調査結果の主なものを下に示す。

#### 1 授業改善に役立った

○シラバス作成に当たり、教材研究、単元展開の構想を明確に持つことができた。（小学校教師）

○教師にとって、単元シラバスを活用することは、「どのような学習内容」を、「いつ、何時間くらい学習」させ、補充的・発展的学習を「どのように行うか」など、学習構想を再確認することになり、指導のポイントが明確になった。（中学校教師）

○シラバスは生徒の立場になって作成される。そのため、生徒の学習活動の場として授業を組み立てる姿勢が必要である。シラバスの作成は、授業者の授業スタイルを改善するきっかけを与えることにもつながり有益である。（高校教師）

#### 2 シラバス活用によって児童生徒の変容が見られた

○児童は各単元における学習の魅力を感じ取っていた。（小学校教師）

○単元導入時に、児童は単元の学習の見通しを持てるようになってきた。（小学校教師）

○シラバスに学習感想を書く欄があるので、学習意欲が高まり、学び方を振り返る良いきっかけになったようである。（小学校教師）

○シラバス活用により、生徒の家庭学習の時間は、どの単元においても増えている。（中学校教師）

○知識・理解面、技能面についての定着が良く

なった。（中学校教師）

○単元シラバスに記載した確認問題で、自分なりにチェックしてから授業に臨む生徒が増えた。（中学校教師）

○上位生徒の中には、単元シラバスの内容を最低基準と考え、単元テストに向け、より高度な問題の解決をめざし、発展学習に臨む生徒が見られるようになった。（中学校教師）

○生徒の中には「次の単元シラバスが早くほしい」と教師にせがむ生徒もおり、家庭での学習の中に、単元学習の位置づけが定まりつつあるのを感じる。（中学校教師）

○シラバスの活用によって、「学習内容の理解」や「学習の見通し」などを持てるようになった生徒がかなり多くなった。（高校教師）

○テスト前以外にほとんど家庭学習をしていない本校の中で、シラバスの活用によって「学習目的やおもしろさが少し分かるようになった」「家庭学習の時間が少し増えた」という生徒が増えてきた。（高校教師）

○生徒の学習に関する面談を行ったが、科目の学習に困難を感じていた生徒にとって、単元シラバスは好評であった。（高校教師）

#### 3 教師間におけるシラバスを通した指導内容の共有化が図れた

○単元シラバスは同僚との間で「何を学ばせるか」を計画化する点で有効であった。特に受験の指導をする時、「授業ではどこまでを基本として押さえるべきか」、「どれを今後指導する発展的内容とすべきか」など話し合ったことを基に作成した文書（シラバス）を、教師間で共有する意義は大きかった。（高校教師）

#### 4 保護者の理解と協力が得られた

○保護者から「子どもの学習の進度や学習内容が具体的でよく分かるようになった。」また、「何ができたか、何ができないかなどについて子どもと話をするようになった」という声が寄せられた。（小学校教師）

○保護者会で「子どもの学習に対する励ましや会話、支援が増えた」という声が寄せられた。（小学校教師）

今回研究協力していただく中で、初めてシラバス作成に臨んだ教師や今まで作成したシラバスを改善して活用した教師にとって、今回のシラバス作成・活用の実践は、日頃の授業が「子どもの学びを支援するものになっているか」どうかを再確認することとなり、授業改善につながったようである。

今回のシラバス作成・活用の結果から、児童生徒の「学びのサイクル」を生み出すためには、教師のシラバス作成・活用の工夫を通じた「授業改善のサイクル」を機能させることが大切であると考えます。

### 8 シラバス作りを通じた学校支援

カリキュラム研究チームは、昨年度までの研究成果やシラバスの研究をもとに、「飯館村立飯館中学校」と「県立只見高等学校」の2校について、学校の教育的ニーズに応えるための学校支援を行った。

両校とも、中山間地域に位置する学校ではあるが、町村の中心校として、特色ある学校づくり、生徒の「確かな学力」の向上に向けた取り組みを行っている。

また、飯館中学校は、「ふくしま夢実現プラン・基礎学力向上支援事業」、只見高等学校は、「文部科学省学力向上フロンティアハイスクール事業及び国語力向上モデル事業」の指定を受け、研究の推進に当たり、シラバスの作成・活用を通じた生徒の基礎学力の向上をめざしている。

#### (1) 教師のシラバス作成に関する意識

両校ともシラバス作成・活用を通じた、生徒の基礎学力の向上をめざしているが、シラバスの作成の意義・目的・手順やシラバス内容の組織、効果的な活用方法などについて、教師間の共通理解が図られていない状況であった。

#### (2) 生徒の学習実態

両校の生徒に共通した学習実態として、次に示すことがらがあげられる。

①知的好奇心はあるものの、学習が受動的で、主体的・計画的な学習が確立していない。

②暗記・反復学習が中心であり、学習内容を構造的に理解する力が充分には身に付いていない。

両校の生徒に「確かな学力」を保証し、進路目標

を実現させるためには、生徒にとって「学習の意義の理解・目的意識の醸成」、「家庭学習の充実」、「主体的・計画的学習の定着」、「効果的な学習方略の確立」がこれまで以上に重要になってきている。

そこで、カリキュラム研究チームとして、次のような研究課題を設定した。

- ①シラバス作成を通して、授業改善に役立つ学校支援を行う。
- ②生徒の主体的・計画的学習を促すことができるシラバス作成のための支援を行う。

### (3) 学校支援のプロセス

#### ①飯館中学校に対する学校支援

月	学校支援の内容	飯館中学校の研究内容
4	○研究協力の依頼	○研究方針・内容説明
5	○第1回訪問 (5/21) ・研究協力依頼内容の説明 ・シラバス作成の意義 ・先進県の情報提供 ・指導と評価の一体化 ・校内研修の進め方	●今年度の取り組み (校長・教頭・研修主任) ・研究内容の説明 ・学習指導上の問題点 ・シラバス作成に関わる教員の意識
6	○単元シラバス作成に関する資料提供	●研究内容の進捗状況の説明
7	○第2回訪問 (7/16) ・授業参観 (3年理科) ・授業研究会の参加 ・シラバス作成に関する学習会参加	●校内研修 (授業研究会の実施) ・3年理科「運動と力」 ・シラバス作成上の諸問題 (研究協議)
8	○単元シラバス作成のための資料提供 (シラバス研究協議会資料) ○先進機関の情報提供	●シラバス研究協議会 (8/21)の参加 ●シラバス研究協議会 (9/18)の参加 <b>単元シラバスの作成開始</b>

10	○シラバス活用に関するアンケート資料の提供	
11	○第3回訪問(11/5) ・授業公開参観 2年国語 1年数学 ・授業研究会及び研究協議 ・シラバス作成に関する説明	▼ <b>単元シラバスの作成完了</b> ●基礎学力向上推進支援事業研究発表会の開催 ・授業研究 2年国語(「古典を楽しむ」) 1年数学(「方程式」)
12	○シラバス研究の成果に関する資料提供	●シラバス活用のアンケートの実施 ●年間シラバス作成 ●研究のまとめ

10	○シラバス研究の成果に関する資料提供	●シラバス活用のアンケートの実施, 評価, 改善 ●研究のまとめ
----	--------------------	-------------------------------------

## ②只見高等学校に対する学校支援

月	学校支援の内容	只見高等学校の研究内容
4	○研究協力の依頼	○研究方針・内容説明
5	○第1回訪問(5/18) ・シラバス作成と学習指導の工夫改善 ・新しい評価の在り方 ・校内研修・研究の在り方 ・先進県の情報提供 ・単元シラバス作成の推進	○昨年度と今年度の研究内容説明 ・平成15年度の取り組み, 成果と課題 ・生徒の学力の現状 ・シラバス作成に当たっての諸問題
6	○単元シラバス作成に関する資料提供	<b>単元シラバスの作成開始</b>
7	○第2回訪問(7/1)(只見高校全職員との協議) ・シラバス作成の理念と課題 ・シラバス作成の留意点 ・教科ごとの質疑 ・全体協議	●シラバス作成・教科指導上の諸問題と解決への方策 ・評価の在り方 ・シラバスの活用方法 ・授業改善に向けて(質疑) ・シラバス作成上の諸問題
8 9	○学習意識調査内容の資料及び単元シラバス例の提供	●学習意識調査の実施と分析
10	○第3回訪問(10/22) ・研究授業参観(「国語総合」「数学Ⅱ」) ・研究協議 ・シラバス作成の留意点	▼ <b>単元シラバスの作成完了</b> ●研究授業の開催 ・授業構成に関する質疑 ・単元シラバス作成上の留意点

## (4) 学校との連携強化をめざす学校支援

飯館中学校及び只見高等学校への学校支援を通して、学校からは、校内研修会や授業研究会、新たな教育的課題への対応のために、より積極的に関わってほしいという指導主事への期待が感じられた。

2校に対する学校支援を通して、指導主事には、教科・科目や「総合的な学習の時間」などで、地域に密着したカリキュラムの開発やその編成と実施に関わるカリキュラムデザイナーの役割が期待されているのではないかと考える。

## Ⅲ 研究のまとめ

本研究は、カリキュラム研究チーム4名と、研究直接参加者17名によるシラバス研究協議会を実施し、さらには、5名の研究間接参加者との情報の発信・受信をくり返しながら研究を推進してきた。

また、カリキュラム研究の成果に基づいて、中・高等学校1校ずつの研究協力校に対する学校支援を行った。

「子どもの学びを支援するシラバスの研究と開発」というテーマに基づいた研究プロセスで、シラバス作成の原点は、子ども自身の主体的・計画的な学習(自学自習)を推進することにあるということがクローズアップされてきた。そして、教師は、児童生徒の目線に立ったシラバスを作成することにより授業改善(わかる授業)が可能になることも分かった。

子どもの「確かな学力」の向上のためには、学習指導計画との関連を図りながら、子どもの「学びの自立」を促すことができるシラバスを作成する必要があると考える。その際、各学校や児童生徒の実態に応じて、一つ一つの実践を積み重ねながら、シラバスを改善・修正していくことが大切である。

次年度以降は、今年度の研究の成果や課題を基にして、当教育センターの各講座に取り入れていきたい。

〈事例〉

高等学校 理科 年間シラバス

科	生物	単位数	3単位	学科・学年	〇〇科 2年	教科書	高等学校生物 I (数研出版)
目		副教材等	リードα生物 I, ゼミノート生物 I, フォトサイエンス生物図録				

1 学習到達目標

生物や生物現象についての観察，実験を行い，自然に対する関心や探究心を深め，生物学的に探究する能力と態度を身に付けるとともに，科学的な自然観を身に付けます。

具体的には・・・「生物を学ぶ = 生命について学ぶ ⇒ 生命とは何か？」

さて，あなたは「何者」ですか？「生物」ですよね。「生物」を学ぶことは「自分」を知ることです。そして，生物学の学習で大切なことは「視点」です。下図を見てみましょう。今，あなたが見ているものはどのレベルの存在ですか？

生物学を含め，科学は「探究・考察」の学問です。私達が学ぶ「知識」は先人達の「探究」の結果の賜です。「なぜ？」という気持ちを大切に学習に取り組みましょう。

ミクロ (微視的) ←-----→ マクロ (巨視的)  
 原子    分子    細胞    組織    器官    個体    個体群    生物群集    生態系

2 学習方法

- (1) 授業での取り組み
- ① 年間・単元シラバスで，学習の年間計画を把握し，自主的な学習を心がけましょう。
  - ② ノートには，板書を写すだけでなく，口頭での説明もきちんと記入しましょう。復習時にまとめれば，あなただけの参考書になります。
  - ③ 実験・観察は重要です。目的や方法をきちんと理解し，実験に臨みましょう。また，レポートには「目的」「方法」「結果」の他に「考察」を必ず書きましょう。頭の中だけで理解するのはとても大変です。文章として書き表すことで，理解が深まります。
- (2) 家庭での取り組み
- ① 復習にも，単元シラバスを活用しましょう。自己評価の欄を参考に，自分の到達度を把握します。不明な点はそのままにせず，すぐに解決しましょう。自分で調べても解らない場合は，先生に質問しましょう。授業の内容を完全に理解したら，発展的内容に取り組んでください。
  - ② 生物に関する内容を扱ったテレビ番組や新聞記事が身近にたくさんあります。積極的に触れてみましょう。今日，授業で習ったことが話題になっているかもしれませんよ。

3 評価の方法

- 次のような学習の姿を期待して評価を行います。
- (1) 科学的態度に基づいて，生物学的事象・現象に関心を持ち，意欲的に探究する。
  - (2) 様々な事象を論理的・分析的・総合的に考察するなど，科学的な思考力・判断力を身につけようとする。
  - (3) 観察・実験の方法を身につけ，探究活動の中で得られた自分の考えを適切に表現する。
  - (4) 生物学的事象・現象について基本的な知識を身に付けようとする。

4 学習の年間計画

月	学習項目	学習内容と学習活動
4	第1編 生命の連続性	・細胞の構造と働き，植物と動物の細胞の違いについて学びます。
	第1章 細胞と個体の成立	・細胞内の化学反応と生命活動の関連性について学びます。
	1 生命の単位—細胞	・細胞膜の働きと浸透圧について学びます。
	2 細胞膜と物質の出入り	・細胞がどのように増殖するかについて学びます。

高等学校理科（生物）単元シラバス

単元名

生命の単位－細胞

学習のはじめに			
<p>この単元では「細胞」について学びます。人間も、タンポポも、ゾウリムシも共通に持っている生命の単位が「細胞」です。細胞はどのように発見され、そのしくみが解明されてきたのでしょうか。今回は「ミクロの視点」です。細胞は何でできているのか、細胞の中では何が行われているのか、顕微鏡の助けを借りてミクロの世界に挑戦しましょう。</p>			
時	学 習 内 容	到達目標と自己評価 問題ができたなら□にチェック	発 展 ・ 補 充 左の問題ができた人はAへ 解けなかった人はBへ
1	<p>「細胞の発見と細胞説」</p> <p>①細胞発見の歴史と顕微鏡の関係について学びます。</p>	<p>◆細胞説の内容と提唱した人物の名前を言える。</p> <p>◆光学顕微鏡と電子顕微鏡の違いを説明できる</p> <p>□リードα P18 基1</p>	<p>A：□リードα P24C-1にトライ！</p> <p>B：□教科書P24, リードα P4をもう一度、読んでみよう。</p>
2	<p>「さまざまな細胞」</p> <p>①様々な細胞について学びます。</p>	<p>◆細胞には様々な大きさや形があることを理解している。</p> <p>□リードα P18 基3</p>	<p>A：□フォトサイエンスP15～16で更に詳しい内容を理解しよう。</p> <p>B：□教科書P21, リードα P5をもう一度、読んでみよう。</p>
	<p>②光学顕微鏡の構造と使用方法について学びます。</p>	<p>◆光学顕微鏡の構造を理解している。</p> <p>◆光学顕微鏡を正しく使用できる。</p> <p>□リードα P25 C-5</p>	<p>A：□実際に顕微鏡操作をしてみよう。</p> <p>B：□教科書P14～19をもう一度、読んでみよう。</p>
		<p>◆プレパラートの作成方法を理解している。</p> <p>□リードα P29 C-13</p>	<p>A：□フォトサイエンスP11で更に詳しい内容を理解しよう。</p> <p>B：□教科書P16をもう一度読んでみよう</p>

<参考・引用文献>

- 1) 文部科学白書 (文部科学省 平成14年度及び平成15年度版)
- 2) 現代学校教育大事典 (ぎょうせい)
- 3) 柔軟なカリキュラムの経営―学校の創意工夫― (ぎょうせい)
- 4) 現代カリキュラム事典 日本カリキュラム学会編 (ぎょうせい)
- 5) 意欲を高める指導―実践の工夫と技術― (教育開発研究所)
- 6) カリキュラムマネジメントが学校を変える 中留武昭・田村知子著 (学事出版)
- 7) 認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導 市川伸一著 (ブレーン出版)
- 8) 学ぶ意欲とスキルを育てる―いま求められる学力向上策― 市川伸一著 (小学館)
- 9) ゆとり教育から個性消費社会へ 岩木秀夫著 (ちくま新書)
- 10) アメリカの大学・ニッポンの大学 (TA・シラバス・授業評価) 荻谷剛彦著 (玉川大学出版部)
- 11) 成長するティップス先生 (授業デザインのための秘訣集)  
池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹著 (玉川大学出版部)
- 12) 大学力を創る：FDハンドブック (財) 大学セミナー・ハウス編 (東信堂)
- 13) 授業の道具箱 バーバラ・グロス・デイビス著 香取草之助監訳他 (東海大学出版会)
- 14) 大学教育の質の向上をめざしたシラバスの活用 田中浩朗著 (理科教育講座)
- 15) 紀要第16巻「シラバス・学習指導案」 (埼玉県総合教育センター 平成15年3月)
- 16) 高等学校シラバス例示集 (神奈川県立総合教育センター 平成16年2月)
- 17) 指導と評価の年間計画 (シラバス) (大阪府教育センター)
- 18) 高等学校シラバス参考事例集 (千葉県教育委員会 平成14年12月)
- 19) 進研ニュース VIEW21 (ベネッセ教育総研)
- 20) 豊かな学力の確かな育成に向けて (ベネッセ教育総研)
- 21) 福島県教育センターWeb (<http://www.center.fks.ed.jp>)





情報化推進研究チーム

# 学習における I T活用とその支援の在り方の研究開発

学習における I T活用とその支援の在り方の研究開発

# 学習における I T 活用とその支援の在り方の研究開発

## 《目 次》

<b>I 研究の趣旨</b> .....	45
1 情報化の現状 .....	45
2 研究テーマの設定 .....	45
<b>II 研究の概要</b> .....	46
1 I T を生かした効果的な授業形態の先行的研究 .....	46
(1) 実践形態 .....	47
(2) 実践研究 .....	47
【 I 期「箏による創作」】 .....	48
【 II 期「ふるさとの祭り・芸能を探ろう」】 .....	50
【 III 期「箏による創作」】 .....	52
(3) 研究成果と課題 .....	53
2 学習に役立つポータルサイトの整備運営 .....	54
(1) 「ポータルサイト」に掲載する情報 .....	54
(2) モニタリング .....	55
(3) ポータルサイトの整備運営の成果と課題 .....	55
(4) 今後の展開 .....	55
3 データベースの教材化と授業実践モデルの拡充 .....	56
(1) ふくしま教育情報データベースの整備 .....	56
(2) 授業実践モデルの拡充 .....	58
<b>III 今後の課題</b> .....	58

# 学習におけるIT活用とその支援の在り方の研究開発

情報化推進研究チーム

## I 研究の趣旨

### 1 情報化の現状

学校教育の情報化のねらいは、「情報活用能力の育成」と「確かな学力の育成」である。現行の学習指導要領においても、各教科等においてITを活用した学習活動の充実を図ることが強調され、ITを活用した学習活動を実施するための条件整備、具体的には全ての学校からインターネットにアクセスでき、全ての学級のあらゆる授業において教員及び生徒が必要に応じてコンピュータを活用できる学習環境が2005年を目標に進められているところである。

この目標について、文部科学省が例年実施している「学校における情報教育の実態等に関する調査結果」により、福島県の現状を全国との比較で評価する。(括弧内は全国平均)

○教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数<sup>\*1</sup>は、7.4人(8.8人)で全国13位。

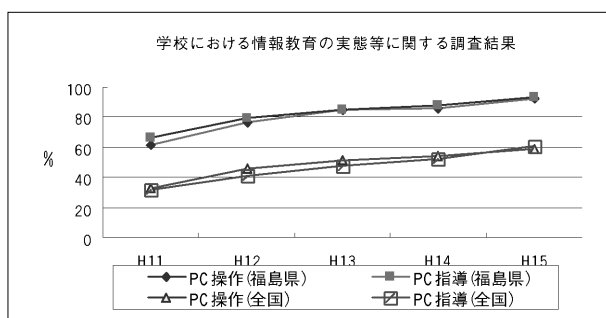
○動画等マルチメディア教材のスムーズな送受信が可能な環境となる学校の高速インターネット接続率<sup>\*2</sup>は、74.8%(71.5%)で全国18位。

○普通教室のLAN整備率<sup>\*3</sup>は、54.6%(37.2%)全国11位

この結果から、本県の情報化に係る環境は47都道府県の上位にあり、全国と比較しても整備の進んだ先進地域と位置づけられる。

また、教育用コンテンツについては平成10年度より行政による開発が進められている。代表的なコンテンツ整備事業だけ挙げてみても、「ふくしま教育情報データベース」、「ふくしまデジタル指導案」、「うつくしま電子辞典」など、現在のところ全国屈指の規模となっている。

翻って、情報化された学習環境を利用する教員の育成状況について、前述の平成11年から平成15年の調査結果をもとにグラフ1にまとめた。



グラフ1

「コンピュータを操作できる教員」、「コンピュータで指導できる教員」とともに、経年で着実に増加してきてはいるが、その変化は全国平均的な数値の域に留まっている。

平成16年度末の時点における本県の「コンピュータを操作できる教員」の割合は92.6%(93.0%)であり、おおむねすべての教員が基本的なコンピュータリテラシーを身につけているのに対し、「コンピュータで指導できる教員」の割合は58.6%(60.3%)。その差34.0%、約6,200人の教員が「コンピュータは操作できるが、授業での活用には自信がない。」と答えている。情報化インフラの整備状況に比較した場合、相対的に情報化に対応できる教員の育成が遅れていると評価される。このことは、授業でのIT活用を支援する手だてが求められている状況を示しているとも言えよう。

## 2 研究テーマの設定

このような本県における教育の情報化の現状を踏

\*1 「教育用コンピュータ1台当たりの児童生徒数」とは、平成15年5月1日現在の児童生徒数を「教育用コンピュータ総台数」で除したもの。

\*2 「高速インターネット接続率」とは、インターネット接続回線速度が400Kbps以上の学校の合計。

\*3 「普通教室のLAN整備率」は、全普通教室数のうち、LANに接続している教室の割合。

まえ、普及の律速要因の一つとなっている”授業でのIT活用に自信がない教員”が学習にITを利用し始めるには、取り組みを支える次のような具体的な手だてが必要であると考えた。

- ・ITの特徴を生かした具体的な学習のイメージを伝える。
- ・ITを生かした授業の事例やアイデアを提供する。
- ・既存の教育用コンテンツを利用者の視点でわかりやすく提供する。

そこで、課題を解決するために本年度のテーマを「学習におけるIT活用とその支援の在り方の研究開発」とし、以下を重点目標に研究へ取り組んだ。

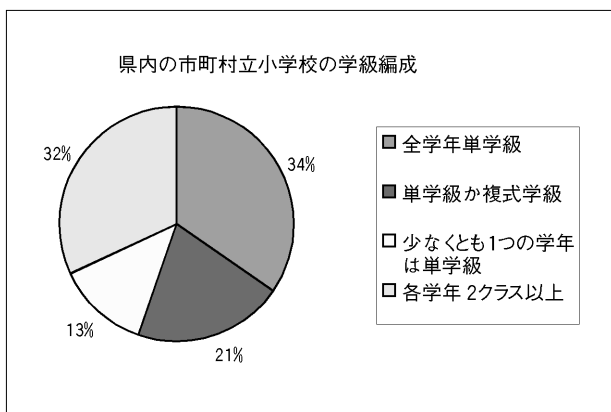
**【研究の重点目標】**

ITを生かした効果的な学習形態の先行的研究  
 学習に役立つポータルサイトの整備運営  
 データベースの教材化と授業実践モデルの拡充

**II 研究の概要**

**1 ITを生かした効果的な授業形態の先行的研究**

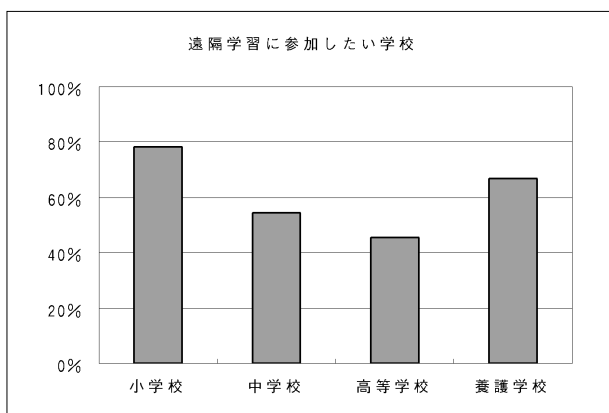
本県の市町村立小学校の50%以上が、単学級や複式学級のみで構成されている。(グラフ2)また、中学校では、30%が僻地校となっていて、このうち80%が免外教科の対象校である。



グラフ2

一般的に小規模校では、教員配置等の関係などから技能系の専門領域の指導者の確保が難しく、質の高い授業が実施しにくい状況にあることが指摘され

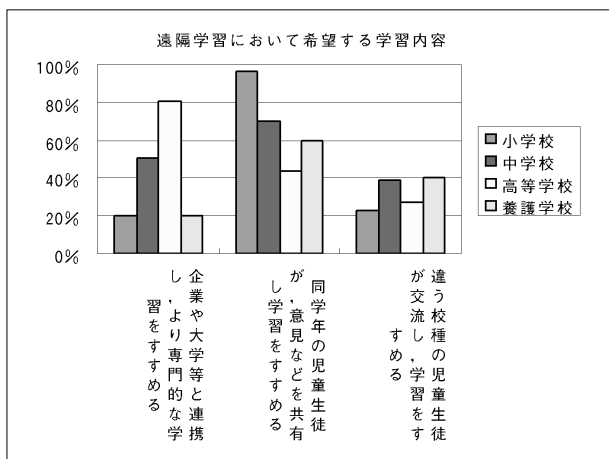
る。そこで、本センターが外部の専門家と連携し、ネットワークを利用して支援することで、このような環境の学校においても、効果的な授業を実施することが可能となるのではないかと考えた。



グラフ3

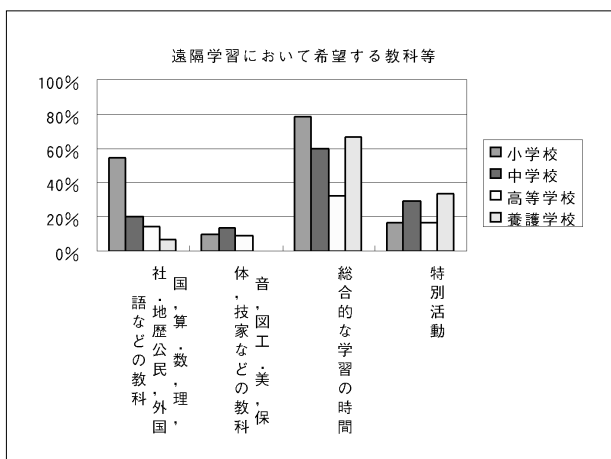
一方、本センターが県内の公立小・中学校、高等学校、養護学校を対象に実施した「福島県の情報教育の実態等に関する調査」における、「ネットワークを利用した遠隔学習」についての調査結果をグラフ3～5に示す。

小学校では、約80%、中学校では、50%強の学校が遠隔学習を希望している。



グラフ4

学習内容としては、小・中学校ともに、「同年年の児童が意見などを共有して学習をすすめる」という希望が多い。校種が上がるにつれて、「企業や大学等と連携し、より専門的な学習をすすめる」に対する希望が多くなっている。

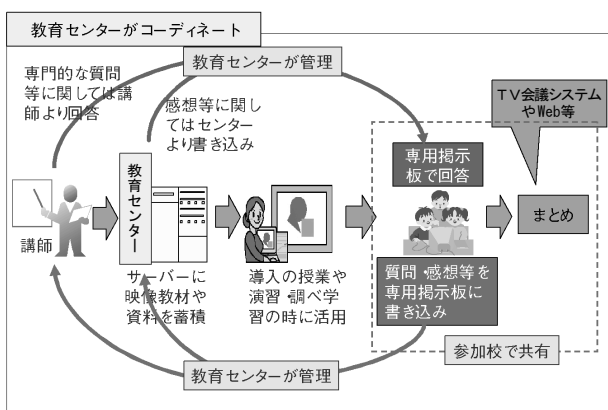


グラフ5

希望する教科等については、「総合的な学習の時間」がどの校種でも最も多い。小学校では、「国、算・数、社・地歴公民、外国語などの教科」も希望が多い。

これらのことを踏まえ、本研究では小規模校を対象に、外部の専門家と連携を図りながら、ネットワークを利用した新たな授業形態の実践研究を行い、モデル構築をするとともに、支援の在り方や、諸課題を明らかにしていくこととした。

### (1) 実践形態



実践形態としては、ネットワークを利用した教材提供を単独1校だけでなく複数の学校同時に行い、学習における学校間交流も支援することにした。

そのためにまず、専門的な知識・技能を有する外部講師の協力を得て作成した映像教材や補助教材などを、本センターサーバに蓄積し、研究校がアクセスすることでいつでも利用できる環境を整えた。

更に、学習に対しての質問や学校間の情報交換、意見交流のために専用掲示板を設け、本センターが管理運営を行った。この掲示板の利用者は研究校と関係者のみに限定し、同じテーマで学習している児童生徒が意見を共有する場を持つことで、相互の学習活動が活発化するよう配慮した。また、児童生徒や担当教員からの疑問などに関して専門家が直接指導や助言を行うことで、それぞれの学校の学習が深まることを期待した。

さらにTV会議システムを利用した発表や動画配信による発表、Web形式でまとめたものを公開するなどによって研究校が相互に情報を共有できるようにし、学習に対しての意欲の向上を図った。

### (2) 実践研究

以下に、Ⅰ～Ⅲ期の一覧及び年間計画を示す。

時期	期日	研究校	対象	学習テーマ	講師
Ⅰ期	6/14～6/25	○国見町立小坂小学校 ○天栄村立湯本小学校 ○三春町立沢石小学校	6年	箏による創作	遠藤千晶 (箏演奏家)
Ⅱ期	7/12～12/31	○二本松市立原瀬小学校 ○小野町立浮金小学校 ○喜多方市立上三宮小学校 ○葛尾村立葛尾小学校	5, 6年	ふるさとの祭り芸能を探ろう	懸田弘訓 (大学講師)
Ⅲ期	1/20～2/25	○若松市立第六中学校 ○猪苗代町立東中学校	2年	箏による創作	遠藤千晶 (箏演奏家)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
Ⅰ期	選出・依頼	教材作成	実践・支援							研究会		
Ⅱ期	研究計画作成	選出・依頼、教材作成	実践・支援	研究会								研究まとめ
Ⅲ期						参加校募集	連絡調整					実践・支援

実践研究は三期に分けて行うこととし、Ⅰ・Ⅱ期は研究協力校を県内各域内から実施要件に照らして選択した。特にⅠ期の実践研究は、動画の視聴など高速インターネット接続環境を前提とすることから、研究協力校はFKS(ふくしま総合教育ネットワーク)参加市町村の小規模校より選択した。Ⅲ期については、より実践的な支援方法を探るために、Ⅰ期と同じ学習テーマで実践研究を実施するとともに本センターWebサイトで研究協力者を募集した。学習テーマについては、「箏による創作」(音楽)と「ふるさ

との祭り・芸能を探ろう」(総合的な学習の時間)に設定し、それぞれ外部の専門家の協力を得た。

### 【I期 「箏による創作」】

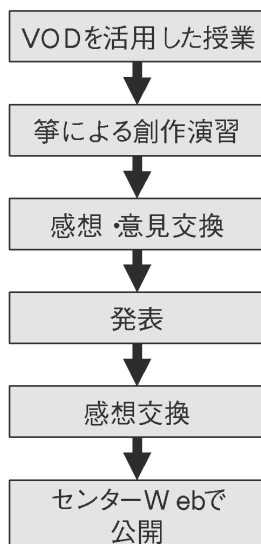
小学校音楽では、高学年で取り扱う旋律楽器の選択について、「既習の楽器を含めて、各種の電子楽器、箏、尺八、三味線、篠笛など我が国に伝わる楽器、各種の管楽器や弦楽器など諸外国に伝わる様々な楽器の中から、児童が興味・関心をもち、豊かな器楽表現を楽しむことができるものを選択する」ようになっている。また、「声やいろいろな楽器、身の回りの様々な音の素材を生かして自分で表現したいもののイメージや思いについて自由に表現したりする活動を取り込むこと」が目標として掲げられている。一方、中学校では、「我が国の郷土の伝統音楽を大切に育てるといふねらいから、器楽指導において3年間を通じて1種類以上の和楽器を用いること」とされている。そして、創作については、「表現したいイメージや曲想をもち、様々な音素材を生かして自由な発想による即興的な創作をする」よう盛り込まれている。

以上のことから、箏の創作学習を通して、日本の伝統的な和楽器である箏に触れ親しみ、豊かな器楽表現を身につけることを目的にテーマを設定した。

#### ① 学習の流れ

学習の流れについては、右上図のようになる。

まず、各研究校は任意の時間帯に、本センターの専用Webサイトにアクセスし、導入用のオンデマンド\*1教材を利用して、学習の動機付けや箏の弾き方などの学習を1時間程度行う。その後、創作学習のためのオンデマンド教材を利用した授業を2時間程度行う。この創作学習は、「さくら」の主旋律に、児童それぞれが創作した音を重ねて独自のさくらを作り上げるように設定した。また、この段階で、外部講師や他校の児童との意見や情報交換を、専用掲示板を利用して行う。最後に、それぞれの学校で創作



した「さくら」の演奏発表を、同一時間帯一斉にTV会議システムを利用して行った。このTV会議を利用した発表を通して、それぞれの学校の学習が深まるよう、演奏についての感想交換や外部講師の講評などの交流も取り入れた。なお、研究校に必要なTV会議システム、箏一式、プロジェクターなどの機器等については、本センターより貸し出した。

#### ② 専用Webサイト

No	項目	教材内容	ページの解説
1	授業の意図 授業モデル(例)	1. 研究計画・実施要領 2. 授業モデル	・本授業の趣旨・計画を掲載いたします。 ・授業モデルです。あくまでも例ですので、授業モデルを参照していただき、子どもたちの実態に応じて、授業をアレンジしてください。
2	事前実態調査	1. 箏1時間前調査 2. 箏1時間前調査の結果 3. 箏2時間前調査(生徒用)のPDF 4. 箏2時間前調査の結果	・子どもたちの事前実態調査のページです。第1期の結果を掲載いたしました。 ・第2期事前調査のページをアップしました。実施時期にご協力下さい。
3	On demand 教材 (1時間目用)	1. 箏の先生の演奏 この先生の紹介 2. 箏の説明 その音を出そう 3. 自分の音を作ろう 「さくら」の演奏・手元撮り 「さくら」の解説・手元撮り	・箏の先生が、箏の基本的な弾き方、様々な弾き方と児童のみなさんに提供いたします。 ・指導者の先生が内容をご覧になって、適切に指導をお願いします。
4	箏の説明	1. 音の合わせ方(生徒用) 2. 箏の弾き方(先生用)	・箏の音の合わせ方、弾き方のPDFを掲載いたしました。参考にしてください。

<http://www.center.ut.fks.ed.jp/koto/top.htm>

学習の流れに沿って授業が展開できるように専用Webサイトを作成し、FKSイントラネットで公開した。

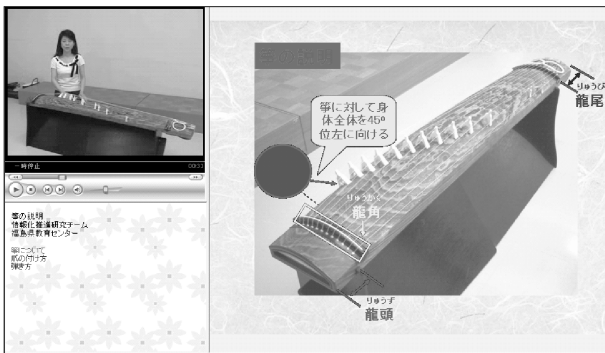
このサイトの項目及び内容は以下の通りである。

- ア 授業の意図 授業モデル(例)  
単元計画(例)等を掲載
- イ 事前実態調査  
事前調査のためのアンケートフォーム
- ウ オンデマンド教材(学習の導入用)

外部講師の説明映像とその説明に沿って、それを補足するスライドが表示される。

\*1 オンデマンド：ビデオオンデマンドのこと。ビデオオンデマンドとは個々のユーザーが選択した異なる映像を、ユーザーごとに配信すること。Video On Demandを略してVODと呼ばれることもある。

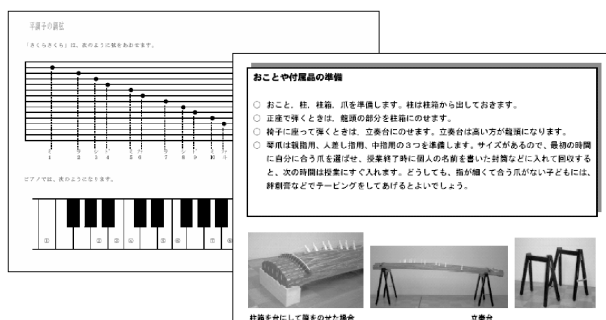
## 作成教材



説明映像の内容は「箏の各部の名称」「座り方」「箏爪の付け方」「弾き方」で構成されていて、箏の基本事項については一通り学習できるようになっている。映像下にある項目をクリックすることで、必要な部分が繰り返し確認できるよう作成した。

## エ 箏の説明

テキスト資料(PDF形式)



箏の調弦の仕方、各部の名称及び取り扱い方など授業担当者のための参考資料として用意した。

## オ 創作活動の指導法

StreamAuthor2.6<sup>\*1</sup>で作成したオンデマンド教材「音作り」「音重ね」「表現の工夫」で構成されており、箏による創作学習の流れに沿って解説している。

## カ 意見交換ページ

本センターが管理する専用掲示板

同じ学習をしている子どもたちが、意見交流や情報交換ができるように設けた。講師に対しての質疑応答もこの掲示板で行い、研究校全部で共有することにした。

## キ 各学校の指導の様子 児童の活動様子の動画配信



各研究校の活動の様子を動画配信し、学校相互の活動の活発化を図った。

## ク TV会議の進め方

TV会議を利用した創作発表当日の流れ

## ケ 模範演奏「さくら変奏曲」

外部講師の模範演奏を動画配信

## コ 事後アンケート

単元終了後の事後アンケートフォーム

## サ 第I期演奏発表会

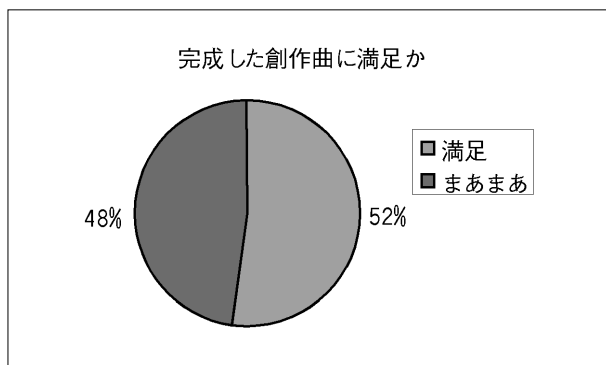
TV会議を利用した創作発表の様子を動画配信

## シ 打ち合わせページ

指導担当者専用掲示板

## ③ 実践結果

実践後、参加した児童に対して事後アンケートを実施した。その中から主なものを示す。

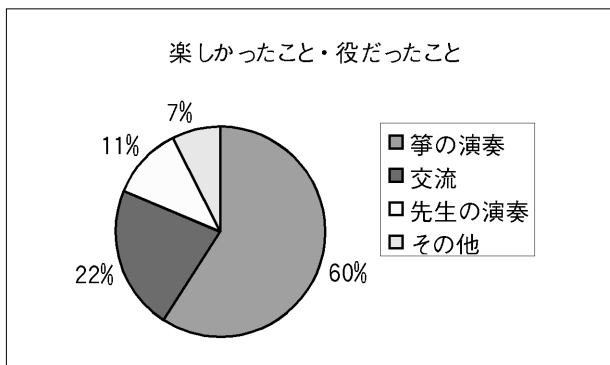


グラフ6

多くの児童が創作した曲に満足感を感じている。これは、箏の調弦が平調子なので、創作した音をさくらの主旋律に重ねても大きくずれることはないこと、音楽としてまとまりのある曲になることなどが、児童の意欲の向上に結びついたと考えられる。

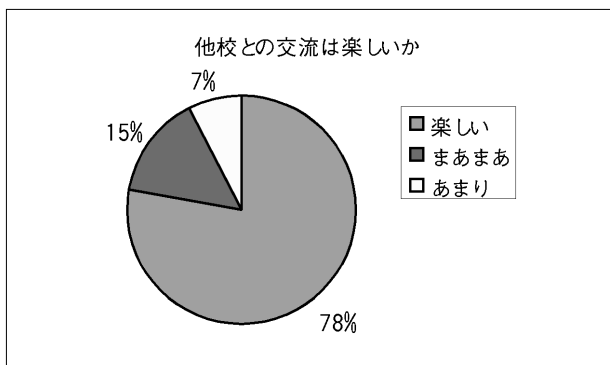
\*1 StreamAuthor2.6: Powerpoint, Word, Excelなどのデータファイルと映像が同期した教材を作成するソフト。





グラフ7

学習の中で箏の演奏が楽しかったと答える児童は60%をしめた。自らが演奏を体験することで興味や意欲を喚起し、日本の和楽器箏に慣れ親しませるといふ授業のねらいにある程度迫ることができたと考えられる。



グラフ8

80%近い児童が他校との交流が楽しかったと答えており、少人数で集団が固定しがちな小規模校の児童にとって他校との交流への期待が大きいことを示している。

I期については、2週間という学習期間を設定し実践に協力していただいた。終盤のまとめでTV会議を利用した演奏発表を行うことを位置づけたことから、各研究校とも発表に向けて工夫を凝らした授業が展開された。

#### ア 授業時数の確保

小学校音楽は週あたり1～1.5時間が標準であるが、今回は2週間で4時間程度の学習計画となることから、各研究校とも授業の組み替えで対応していただいた。

#### イ 実践場所

オンデマンド教材の利用は、インターネットが利用できる教室や図書室、多目的ルームなどにおいて、プロジェクターを用いた一斉提示の形態で実施された。掲示板の書き込みはPC室で行っていたが、創作学習においてはPC室と併用していた。

#### ウ 創作のまとめ

クラスを2、3人の小班に分け、それぞれの班で創作を行っていた学校と全体で1つのテーマで創作学習を行っていた学校があり、それぞれ工夫をしていた。創作テーマとしては、地域の観光名所である滝桜をイメージしたものや、平安時代、源氏と平氏をイメージした曲などがあつた。

#### エ 学習の発展

協力校からは、休み時間等を利用して下級生に箏の弾き方を教示するなどの意欲的な態度や全校集会で学習発表をおこなうなど、授業の枠を超えた活動に発展している事例が報告された。

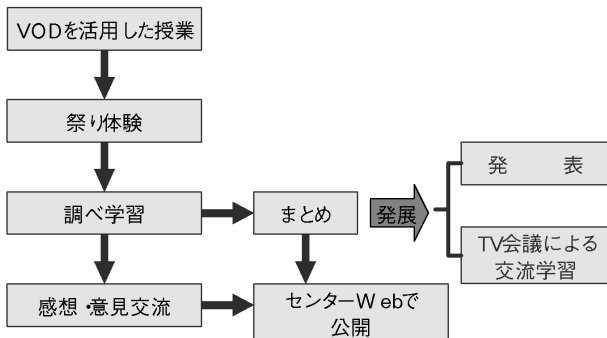
### 【Ⅱ期 「ふるさとの祭り・芸能を探ろう」】

平成10年の学習指導要領の改訂で、各学校が地域や学校、児童の実態等に応じ、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行う時間として、総合的な学習の時間が創設された。各学校においては、創意工夫をこらして、この総合的な学習の時間を編成しているところであるが、一方、地域の特色を生かしたテーマ設定などに苦慮していることも各種調査などから推測できる。そこで、県内のほとんどの市町村で実施されていて、その数1,500～2,000にもおよぶ祭礼に着目し、地域学習の参考事例として提示できるよう学習テーマを設定した。この学習の主な目的を以下のように掲げ、県内の複数の地域から祭り・芸能の調べ学習が可能な学校を選出し、実践研究に協力してもらった。

- 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育てる。
- 調査活動や体験的な活動を通して自分が住む地域のよさを知るとともに、同じ学習を行っている

他の地域の児童との交流を通して、より広く課題をとらえ、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。

① 学習の流れ



Ⅱ期の学習の流れを上図に示す。

全体的な流れはⅠ期と大きく変わらない。この学習は調査活動及び体験的な活動が主となるので、動機付けをオンデマンド教材を利用した学習と祭り体験学習で行うようにし、オンデマンド教材では、県内の祭りの特徴や調べるためのポイントなどを示した。その後、各学校で調査活動を行い、まとめを行っていくが、まとめの方法については各研究校の学習計画に任せた。

② 専用Webページ

Ⅰ期と同様に学習の流れに沿って授業が展開できるように、祭り専用Webサイトを作成し、県内の祭り調べに関する資料を掲載した。

No	項目	内容	説明
1	懸田先生の説明 (祭り・芸能とは?) (調べるポイント)	学習の導入 県内の祭り 「祭り」は何か? 地域の特色 調べるための5つのポイント	民俗芸能の専門家懸田先生が、祭り・芸能について説明があります。子どもたちが調べる上でのポイントも明らかになっています。
2	各地の祭り・芸能	東北の祭り 日本の祭り 世界の祭り	祭り・民俗芸能のポータルサイト(入り口)です。いろいろな祭りがあります。調べてみましょう。
3	福島の祭り・芸能	福島教育データベースから 祭りと民俗芸能のテキスト 祭りについての解説 春の祭り 夏の祭り 秋の祭り 冬の祭り 民俗芸能についての解説 神楽・田楽・流鏝馬、語り物 舞楽・狂言	福島教育データベースの紹介ページです。 福島の祭り・民俗芸能について、福島県内の例を挙げて説明しています。祭りの調べ学習必見です。
4	総合の時間(資料)	夏休みにしらべてみよう 福島県内マップ	調べ学習を進めるための資料を掲載しています。 県内の祭り・民俗芸能を地図上に示しています。

<http://www.center.fks.ed.jp/05ken3/maturi/top1.html>

このサイトの項目及び内容は、以下の通りとなる。

ア 懸田先生(外部講師)の説明(StreamAuthor2.6)

Ⅰ期と同様に、外部講師の説明映像とそれを補足

するスライドを表示するようになっている。主な内容は、「県内の祭礼数」「祭り・芸能の違い」「地域の芸能の特色」「調べるための5つのポイント(いつ、どこで、誰が、何のために、祭りや芸能の手順)」となっており、福島県の祭礼の特色や児童生徒が調べ学習を行う際のポイントを示した。



イ 各地の祭り・芸能

祭りサイトのリンク集。参考となるサイトを東北・日本・世界に分類した。

ウ 福島の祭り・芸能

福島県の祭り・芸能に関する教師用補助資料

授業を担当する教師の参考資料として、福島県の祭り・芸能に関する詳しいテキスト資料をPDFファイルで配信した。

エ 総合の時間(資料)

児童生徒のための補助資料。上記資料を児童生徒用に簡易にしたもの。福島県の地図で調べたい場所をクリックすると資料が引き出せるようにした。

オ 研究参加校のホームページ

研究協力校4校の学校のホームページ。

カ 研究参加校の学習計画と調べ学習の様子

研究校4校の活動の様子を動画で配信。

研究校相互の活動が活発になるように、体験・調べ活動の様子を動画で配信した。

キ 意見・質問交流のページ

意見交換のための専用掲示板。

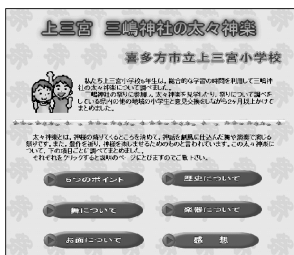
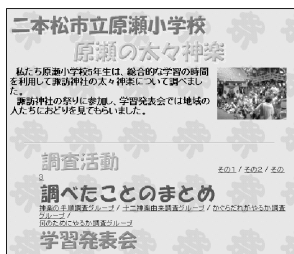
I期では、意見交流と講師への質問を同じ掲示板で行ったが、閲覧の便宜上、II期では別々の掲示板に分けた。

ク 研究についてのご意見募集

このWebサイトを見た人からの意見を収集するための掲示板。

ケ 祭りまとめ

各学校のまとめ。



学校間交流の促進及び今後この学習を実践する学校が参考資料として閲覧できるように、各研究校が調べ、まとめた内容をWeb形式で公開した。

コ 指導担当者の部屋

指導担当者間の意見交換掲示板。

③ 実践結果

8~10月の期間に、地区で祭礼がある学校を選出し実践研究の協力を依頼した。これらの学校がある地区の祭礼は、開催時期がそれぞれ違ったため、I期のように、まとめたことを一斉に発表するという形態は取らず、各学校任意とした。また、この実践は、体験・調べ活動、まとめ、発表という流れを各研究校ともに取ったため、活動が長期に渡った。

ア 授業時数の確保

小学校高学年の総合的な学習の時間の年間配当時間110単位時間の中で、連続した時間に集中して実施するなどして弾力的に対応をしていた。また、国語の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域に照らし合わせ、国語の授業も兼ねて横断的に実施していた学校もあった。

イ 諸活動

祭りの体験活動や調査活動は、休日に実施することが多いため、保護者や地域の協力を得て実施していた。体験活動の内容は、祭りの参観のみならず、児童自身が踊りを体験するなどの活動となった。調査は、書籍やインターネットを利用した調べ学習に加え、神主さんや祭りの保存会の人に対しての聞き取りなどを併用していた。

ウ 学習のまとめ

それぞれの学校でオンデマンド教材で示した5つのポイントについて調べまとめるとともに、学校独自のテーマを設定し、テーマごとにグループ分けして調べを行っていた。まとめについては、ペーパーベースでまとめた学校、Webでまとめた学校と様々であった（ペーパーベースでまとめた学校については、本センターがWeb化した）。

エ 学習の発展

- 発表において、TV会議を利用した学校間交流を希望した学校があったため、設定を行った。
- 地域のFMラジオでまとめたことを発表した学校があった。
- ほとんどの学校が、学習発表会で祭りの再現などの発表を行った。

【Ⅲ期 「箏による創作」】

より実践的な支援の在り方を探るために、研究参加校を募り、希望した中学校2校とI期と同じテーマで実践研究を行った。

I期と異なる点は以下の通りである。

- ア 和楽器が音楽の必須項目になっている中学校での実践であること。
- イ 音楽が専科である教員が担当する授業での実践であること。

ウ 各研究校任意の時間帯で実施した映像を配信することで、学校間交流としたこと。

#### ① 実践結果

##### ア 授業時数の確保

教科「音楽」（1単位）と選択教科「音楽」（1単位）の時間帯のみで展開した。

##### イ 実践場所

主に音楽室で実施した。1校は音楽室にインターネットがつながったPCがあった。もう1校はノート型PCに記録し、展開した。

##### ウ 創作のまとめ

○クラスを2,3人編成の班に分け、それぞれの班がイメージにそったさくらを創作した。

○テーマを「祭り」とし、箏、アルトリコーダー、太鼓を使い「さくら」を創作し、演奏した。

### (3) 研究の成果と課題

#### ① オンデマンド教材

外部の専門家の協力を得て、オンデマンド教材を作成した。この教材は項目で説明映像を選択できるようになっており、実際の演習などの時には児童生徒が確認のために利用していた。このことが、理解度や進度の異なる個々の児童生徒に対応することとなり、きめ細かい指導につながった。これらのことから、この形態の教材は、技能系の教科、中でも特に作業・演習がともなう単元においては、有効である。作成上の留意点としては、演習を伴う単元の場合には、手元などの細部を写した映像を用意する必要があるとともに、教科の観点にたって教材を作成する必要がある。

反面、動画を取り入れた教材のため、ファイル容量がかなり大きくなってしまった。容量を小さくするためには、音声とスライドで作成することも考えられるが、小・中学校へ提供する教材としては、外部講師の映像での説明の方が、学習への意欲を向上できると思われる。今年度の実践では、ISDNなど回線速度が遅い学校については、閲覧に時間がかかりすぎるためCD-Rなどの外部記憶媒体で対応したが、今後どの学校でも閲覧できるように考慮していく必要がある。

#### ② 外部の専門家との連携

専門的な知識・技能を有する外部の専門家を取り込んだ授業を実践した。児童生徒がこれらの専門家に直接指導や激励を受けることで、学習意欲が向上することが確認できた。また、授業を担当する教師においても、ポイントを絞り授業を実施することができたとの報告があった。小規模校においては、その立地条件等の理由から、これらの外部講師を取り入れた授業を実践することは困難である。本センターのような機関が、人的ネットワークを生かせば、これら外部の専門家と連携することは容易であるはずである。加えて、外部講師との時間調整や予算など組織として解決しなくてはならない課題についても認識しておかなくてはならない。

#### ③ ネットワークを生かした学校間交流

今年度の福島県の情報教育の実態調査結果によれば、小学校では学習過程を共有する学校間交流を取り入れた授業が期待されている。今回の実践においては、掲示板での交流やTV会議を利用した発表会などを企画した。実際にこれを実施してわかったことであるが、学校にTV会議システムが配備している比率が高い。しかし、これら多くの学校ではTV会議システムがあまり利用されている状況ではなかった。今回の実践でTV会議を初めて使用した学校がほとんどで、この意味では、TV会議を活用した授業の在り方の一例を提案できたのではないかと考える。学校においては、学校間交流を行いたくとも相手校の選択や調整に手間がかかり、多忙な業務の中、ついあきらめてしまうのが現状という声も聞かれた。これらの学校に対して、センターが仲立ちして、さらに効果的に活用する授業形態を提案すれば、学校は有効な授業を行うことができることを実例で示すことができた。

今回のTV会議システムを利用した授業は、FKS加入市町村で行った。そのため、複数の学校が同時に参加して行う交流授業が成立したが、これを、FKS加入外の市町村も交えて行うことは現状のシステムではできない。県内のどこの市町村の学校でもこの形態で交流授業が行えるように、システムの改善が望まれる。また、TV会議システムは高価である

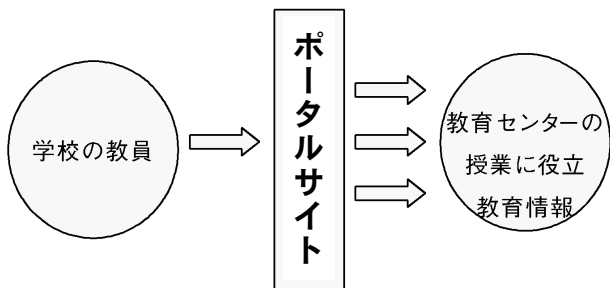
ために、どの市町村でも配備できるものではない。  
安価なものとして、Webカメラ等があるので、これらで代用した授業形態の提案も検討しなくてはならない。

④ 本センターからの支援体制について

ネットワークを活用した授業教材を提供するだけでは、PCの操作に不安がある先生はなかなか授業実践までは結びついていかない。この不安を解消する手だては、1つには学校の情報担当の先生がバックアップすることが考えられるが、TTで授業を行うことはほぼ全員が担任を持っている小規模小学校では難しい。そのため今年度の実践では、教材や機器の提供だけではなく、環境整備や授業モデルの提案等、学習への総合的な支援を実施してきた。このように本センターからネットワーク等に関するきめ細かい支援を行うことで授業担当者がその授業に専念でき、結果的には児童の学習効果も上がることが実証できた。総合的な支援により、授業担当者の不安を解消してやるが必要となってくる。

2 学習に役立つポータルサイトの整備運営

ITを活用した授業改善を目的に、授業で活用できるコンテンツ作りや授業に役立つWebサイト集の整備を行ってきた。また、ITを活用した授業を実践的に研究するために、先行的な授業研究も行い、その研究内容をWeb上で公開している。



しかし、これらの研究成果が県内の教員に十分活用されているとはいえない。そこで、授業に有効な情報を容易に利用できるようにするため、ネット情報への入り口を意味する「ポータルサイト」を構築することにした。

(1) 「ポータルサイト」に掲載する情報

ポータルサイトから次の教育情報にアクセスできるようにした。

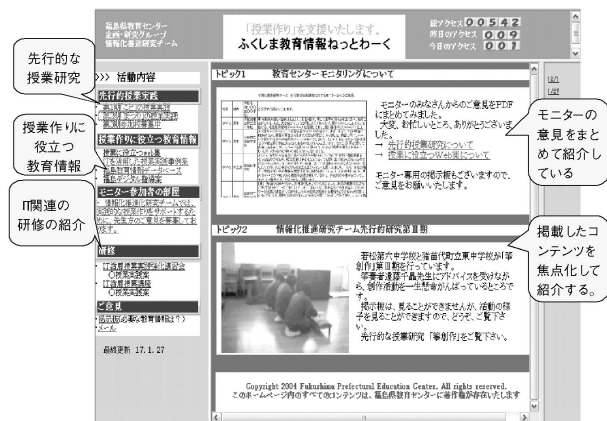
① 授業の中でITを活用した指導事例

ア ITを活用した授業実践事例集

ITを活用した授業づくりの実践事例を授業モデルと動画・Webサイトへのリンクなど。

イ 福島デジタル指導案

IT活用授業実践強化講習会において、参加者が作成した指導案や授業モデル、資料を提供。



② 授業の中に活用できる教育情報

ア 授業に役立つWebサイト集

小・中・高等学校・養護学校等において、授業づくりに活用できる教育情報サイトのリンク集。

イ ふくしま教育情報データベース

福島県内の教育関係機関の教育情報、県市町村や博物館等が所有する地域資料を提供。

③ ITを活用する実践的授業研究

ア 「箏創作」

先行的な授業研究の第I期・第III期のサイト。箏の扱い方・弾き方、創作の指導方法をPDFや動画で紹介し、ネットワークを活用して効果的な授業づくりを実践的に支援している。

イ 「ふるさとの祭りや芸能を探ろう」

先行的な授業研究の第II期のサイト。小学生が祭りと芸能を調べる際、有効なコンテンツとサイトを収集している。また、学習活動や成果を、動画・画像、文書で蓄積している。

④ 「ポータルサイト」に対する意見収集

ア モニター参加者の部屋

より有効な「ポータルサイト」の構築をめざし、授業を担当する教員の意見を収集するサイト。

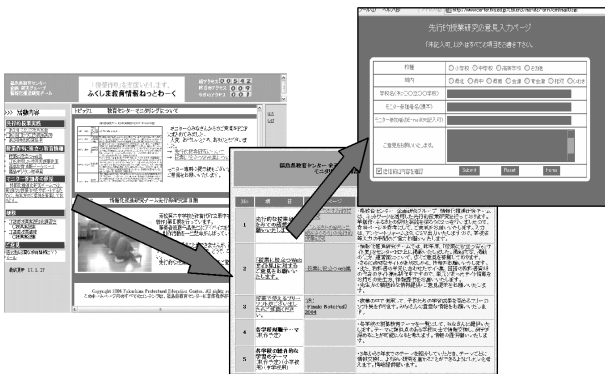
⑤ IT活用に関わる研修の情報提供

ア IT活用授業実践強化講習会

イ ITを活用した授業の進め方講座

(2) モニタリング

県内よりモニターを選出し、ポータルサイト構築や先行的研究にモニターの意見を取り入れ、より実践的な研究に結びつける試みを実施した。



○モニター

日頃からインターネットの教育利用に取り組んでいることを選考条件に各教育事務所から小学校 2名、中学校 2名を推薦していただき、計28名の協力を得た。

○期間

平成16年10月1日～平成17年3月31日

○意見収集の方法

モニタリング用のテーマ毎の参照サイトにアクセスし、意見を書き込む。意見の収集は、アンケートフォームよりCSVで収集できるようにシステムを構築した。

授業に役立つリンク集に関するモニターからのご意見

中学校(必須)	ご意見ご感想お書きください。有効な情報お知らせください。
津島川市立	授業に役立つホームページについては、ハイパーリンク集(研修用)閲覧履歴で本表でも表裏方に記録しています。なかなか資料研究の時間が取れない中、すでに検えるコンテンツが少なく、多く利用しています。本校のハイパーリンク集(研修用)を作成し、私に記録の資料の付録として、教科書にそった問題集がインターネット上で見つかりません。そこで、自作して子どもたちに授業させていただきます。この大変なハイパーリンク集が、編集員向きのホームページの方で、自分の編集履歴を反映していただき、いつでもどこでも好きなときに引き出して子どもたちに提供できるのではと考えています。
田島町立津島中学校	この中には、リンク集は、なんでもかき集めているだけで時間が過ぎていっているおかしなところ。先生方には大変なご負担があると思います。アクセスしにくいものも少なくないです。すべてのリンクがアクセスできる状態ではないですが、見出しは是非漢字で統一してほしいです。また、アクセスできないページがありましたので、お知らせします。○「サレて面白」ワードとアクセス○「トク」の欄「印刷」しました。このページは印刷もでき、見出しWebページの活用をすすめてほしいです。チェックもぜひお願いします。
甲府村立津島中学校	このページは、閲覧するたびに、毎度で終わらなかつたリンクがなくなる感じがして、大変な感じがしています。他教科の授業にも思わず見つけてしまいました。この機能を求めるには北方は結構多いと思います。現在から知らない人からアクセスが多くなるので、この機能を求めるには北方は結構多いと思います。
津島中学校	このページで検索すると、各種検索機能が表示されます。社会人が検索の仕方などで、中学生には若干難しい質問もありますが、子どもには新鮮な経験ができるかと思えます。「技術おもしろ」検索機能は、具体的に検索の方法が掲載されています。「日常生活おもしろ」検索機能は、社会人が検索の仕方などで、中学生には若干難しい質問もありますが、子どもには新鮮な経験ができるかと思えます。「技術おもしろ」検索機能は、具体的に検索の方法が掲載されています。「日常生活おもしろ」検索機能は、社会人が検索の仕方などで、中学生には若干難しい質問もありますが、子どもには新鮮な経験ができるかと思えます。
津島川市立	このページで検索すると、各種検索機能が表示されます。社会人が検索の仕方などで、中学生には若干難しい質問もありますが、子どもには新鮮な経験ができるかと思えます。「技術おもしろ」検索機能は、具体的に検索の方法が掲載されています。「日常生活おもしろ」検索機能は、社会人が検索の仕方などで、中学生には若干難しい質問もありますが、子どもには新鮮な経験ができるかと思えます。

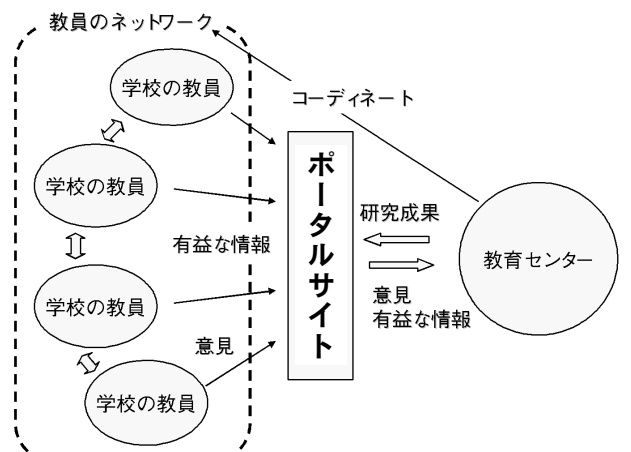
活用される学校環境における課題や問題点が明らかになった。

○ 提供する教育情報には動画コンテンツが多数掲載されている。各学校のネットワーク環境により視聴が困難な場合があることがわかった。

○ ポータルサイトに掲載した教育情報に対してモニターから高い評価が得られ、モニター自身の活用意欲が引き出される場面があった。反面、授業に役立つサイト集やふくしま教育情報データベースを初めて見たというモニターも多いことから、情報提供の在り方について改善が必要である。

○ モニターのみにポータルサイトを公開し、5ヶ月間で647件のアクセス(3/10現在)を数えた。この数からはポータルサイトの有効性が検証できていない。モニター以外の教員への公開など、さらにアクセスを多くするための方策について検討する必要がある。さらに、利用した方々から広く意見を収集し、どのような教育情報を掲載すべきか、さらに質の高い効果的なポータルサイトの構築を目指すことが求められる。

(4) 今後の展開



ポータルサイトは、有用な教育情報へのアクセスがしやすくなることをめざしている。しかし、ここにアクセスし意見を収集できることで、より教育現場にいる教員の声が反映された研究の実現を求めている。教育センターは、研究成果を一方向的に提供するのではなく、双方向の意見交換により、教員の持つ有効な情報を収集できるような教員と教育センターの教育情報のネットワークを構築していき

い。さらに、テーマに応じた教員同士のネットワークを構築し、教育センターがコーディネーターとして、有効なコンテンツを作成する契機として、このポータルサイトを活用できるように、研究を展開していきたい。

### 3 データベースの教材化と授業実践モデルの拡充

全国で利用できる汎用的な教育用コンテンツについては、国主導で整備が進められているところであるが、地方においても地域の特色ある情報をデジタル教材化した地域コンテンツを整備する必要がある。文部科学省が平成14年度に出した新「情報教育に関する手引」には次のように書かれている。

「全国共通の内容のみならず、地域の学習素材を活用したコンテンツや、教育委員会や教員が作成したコンテンツなども流通することが望まれる。こうしたことから、教育委員会も、地域の教育情報センター機能を充実し、地域の特色を生かした教育用コンテンツの開発、それらを活用した授業の実践事例や指導案、学習資料のリンク集などを充実することが必要である。」(第8章 第1節 学校の情報化を支える体制の整備 2. 教育センター機能の充実)

教育センターに求められているこれらの課題に対応するため、授業で利用できる地域コンテンツの開発とそれらを活用した授業の実践に関する研究に取り組んできた。

ふくしま教育情報データベース



#### (1) ふくしま教育情報データベースの整備

##### ① 地域コンテンツ開発の経緯

当初、平成11年(1998)文部省と郵政省共管の先進的教育用ネットワークモデル地域事業における教育用コンテンツとして開発された。比較的短期間で開発を行う必要があったことから、教育年報、教育福

島など教育委員会所管の既存印刷資料を対象にデジタル化が行われた。

その後平成12年から総務省所管の緊急地域雇用創出特別交付金(基金)事業の枠組みにより、収集対象を県内の市町村、県関係機関、博物館等へ拡大し、太平洋沿岸の浜通りから深い山々に会津地方まで、変化に富んだ本県の地域の特色・特色を網羅する地域コンテンツの開発が進められた。

地域コンテンツの整備年次		
1998	教育年報・教育福島など	21,000頁
2000	郷土資料など	25,000頁
2001	教育センター資料など	12,000頁
2002	動画4,892/画像35,000/テキスト7,550頁	
2003	動画1,000/画像10,000/テキスト7,000頁	
合計*	動画5,892/画像45,000/テキスト58,325頁	
* 数値は公開されるコンテンツの合計を示す。		

地域素材の収集・整理、仕様の策定など教育利用の観点で教育センターが担当し、デジタルデータへの加工作業については緊急雇用対策事業による企業への外部委託の手法で行った。

なお、地域コンテンツの教育利用においては、著作権への配慮と利用制限の軽減など、相反する要求に折り合いをつけなければならない。そこで、資料の提供先に対しては、「掲載情報の著作権は情報提供者に帰属し、情報提供者の許諾を受けて福島県教育委員会が加工・掲載する。」旨の条件を提示し、文書により承諾を得るとともに、ふくしま教育情報データベースの各Webページのフッタに上記の著作権の表示を付している。

##### ② デジタル化の概要

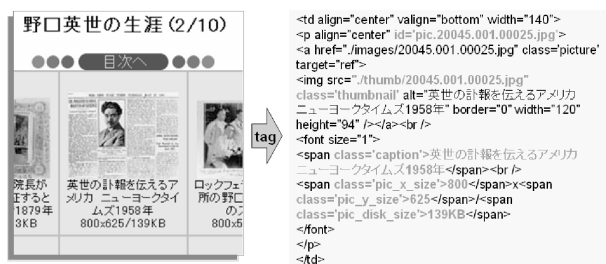
収集された地域情報はテキスト・画像・映像等、素材ごとに分類し、デジタルデータに加工した。

テキストの処理は、書籍等に掲載されたイメージのまま閲覧、印刷できるPDFファイルへ変換するとともに、光学読みとり処理(OCR)により、文字情報を抽出、写真・グラフなどを画像として切り出し、それぞれの形式のデータをHTMLファイルで統合した。

写真類の画像処理については、今後普及が予想される電子黒板・プロジェクターなどによる拡大表示にたえる高精細・高品質なデータとなるよう、高解

像度のJPEG画像に加工した。それぞれの画像には、「ED1」「ED2」ロゴマークを付加し、非営利の教育活動における利用に制限を受けない旨明示した。

映像については、場面ごとにクリップビデオとして編集し、画面サイズと記録方式の異なる3種類の動画形式（RealMovie, MPEG-1, MPEG-2）で記録した。さらに、映像に加えられたナレーションは文字情報として起こし、映像・文字情報をHTMLファイルで統合し、検索省などの全文検索エンジンなどで映像内容が検索できるように配慮した。



ファイル名	20045.001.00025.jpg
画像サイズ	800 × 625pixel
ファイルサイズ	139KB
サムネールpath	./thumb/20045.001.00025.jpg
キャプション	英世の訃報を伝えるアメリカ ニューヨークタイムズ1958年

また、HTMLの記述にXMLの書式を取り入れることで、蓄積される情報量の増加によりデータベースの必要性が高まった場合にも対応できるよう配慮している。

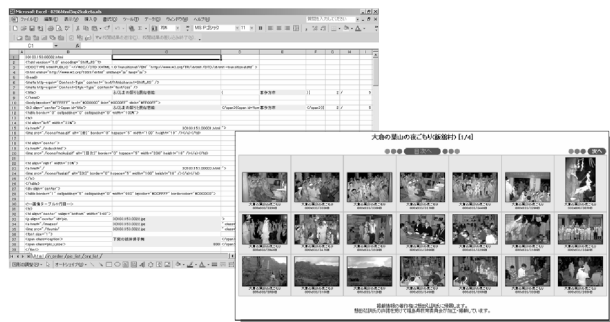
### ③データベースの整理と再構成

教育情報の蓄積が進み10万件を超える規模となることで、逆に目的とする情報へのアクセスに時間を要することが指摘される。項目によっては1ディレクトリに数千ファイルが格納される場合も生じ、システム上も負荷がかかる状況となった。そこで、昨年度実施したカテゴリーによる分類に加え、ディレクトリ・ファイル単位での整理と再構成が必要となってきた。「ふくしまの祭り」と民俗芸能」を例に今年度実施した整理と再構成について述べる。

「ふくしまの祭り」と民俗芸能」は、民俗学研究者の懸田弘訓氏が40年余りの歳月をかけた調査活動で収集した記録資料の中から、代表的な画像、映像を約8,000点選び、提供していただいたものである。県内の祭りや伝統芸能は1,500とも2,000とも数えられる。海から山間まで変化に富む県土を持つ福島県は、豊かな伝統芸能が今に伝わる地域でもある。古

代の祭祀がそのまま継承されたような素朴な祭りから、近代になって芸能化し、華美になった民俗芸能まで網羅される地域は全国的に見てもまれであるといわれている。

当初は、加工作業の都合から撮影された時系列でデジタル化が行われ、作業順に連番のファイル名が付されるものであった。これでは、目的のデータを見つけるには総当たりするしかなく、検索が容易ではない。新分類では、それぞれの画像に対して、祭りの名称とコンテンツIDに市町村ごとの識別子を付した後、全体を並び替えることにより、市町村ごとの分類を行った。



なお、ファイル名は組織ID(5桁)・コンテンツID(3桁)・素材ID(5桁)とし、一意のファイル名とすることで、作業上のミスによるデータの欠落を防止するよう配慮している。さらに、祭りの順序性なども考慮して一覧表(Excel)としてまとめ、これを21枚(7枚×3列)ごとにタイトルを付し、HTMLに出力するためのワークシートとスクリプトを開発し、作業の効率化を図った。

### ④普及への取り組みと課題

平成15年度で緊急雇用対策事業による教育資料のデジタル化作業は一旦終了している。知名度、利用率の向上を図るために、ふくしま教育情報データベースのサンプルCD-ROMを作成し、紹介文書とともに県内すべての学校及び関係機関へ送付した。また、2005年度に県内の学校で取り組まれる校内研修用テキスト「コンピュータを用いて指導できる教員になるために」の中で、ふくしま教育情報データベース



の具体的な利用方法を掲載している。

具体的な活用事例としては、増島哲也長期研究員が、ふくしま教育情報データベースの画像などを利用して、福島県の地域を学習する教材（小学校社会科副読本）を開発し、活用事例としてサイトに掲載して現場への啓発とした。今後、これらがより多くの学校、研修などで利用されることを期待する。



### Ⅲ 今後の課題

本県の教育の情報化における課題は、”授業でのIT活用に自信がない教員”に授業改善の一つの手段としてIT利用へ目を向け、一歩踏み出してもらうことにある。その支援として、インフラ、教育用コンテンツに併せて、授業改善の姿を提示する必要がある。

新年度に立ち上がるカリキュラムセンターは、学校の総合的な支援を目途としている。教育の情報化に係る支援の在り方を探求する本チームの成果や研究を生かし、情報化の視点からカリキュラムセンターの機能の一役を担うことで、より実効性のある支援を展開していきたい。

最後に、本研究は福島県学術教育振興財団及び(財)コンピュータ教育開発センターの平成16年度Eスクエア・アドバンスからの助成をいただき、研究を円滑に進めることができたことを併せて報告し、謝辞に代える。

#### (2) 授業実践モデルの拡充

ふくしま教育情報データベースの再整理と平行して、学校現場へ提示されるITを活用した授業の具体例を拡張する取り組みを紹介する。

○県内7地域で実施された県重点事業「ITを生かした授業づくり実践講座」において、参加した211名が作成した教材の中から100点程度を選び、IT活用のアイデア集として「ふくしまデジタル指導演」に掲載。

○教科教育チーム、教科外教育チーム、情報教育チームとの全所的な連携で専門研修「ITを活用した授業の進め方講座」を実施し、教科における効果的なIT活用を考える研修に取り組んだ。作成教材の中から「ITを活用した授業モデル」として20事例を授業実践モデルに取り込み、拡充を図った。

eラーニング試行プロジェクトチーム

## eラーニングによる教員研修の試み

# eラーニングによる教員研修の試み

## 《目次》

I 研究の趣旨	59
II 研究の概要	59
1 研究組織	59
2 研究の目的	59
3 研究内容	59
4 研究経過	59
III 研究結果	59
1 校務におけるExcel活用（関数・データベース）講座	60
2 中学校・高等学校国語講座	60
3 ネットワーク講座	61
4 高等学校理科講座化学分野	61
5 学校Web作成（2班）講座	62
6 LMSを備えたeラーニングシステム構築の試み	62
IV 研究のまとめ	63
1 研究成果	63
2 今後の課題	65
3 eラーニング導入モデルについて	65
4 次年度以降の取り組みについて	65

# eラーニングによる教員研修の試み

## eラーニング試行プロジェクトチーム

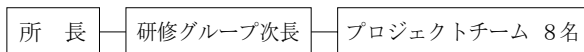
### I 研究の趣旨

最近、企業内教育などでは、社会の変化に早く対応し、教育のスピードを早めたり、従来の集合研修における移動に伴う時間などの問題を解消したりするために、移動の必要がなく個人のペースで学習できるという利点を生かした、eラーニングやWB T (Web Based Training) が導入され始めている。全国の教育センターでも約10県が何らかの形でネットワークを活用した研修を行っており、広がりを見せつつある。

昨年度、教育センター情報教育チームでは、「情報機器やネットワークを活用した新たな学習形態に関する基礎研究」として、学習指導におけるeラーニングの可能性を探るための先行研究を行った。本年度は、昨年度の研究を基礎としながら、教員研修におけるeラーニングの可能性や課題を検討するためのプロジェクトチームを立ち上げ、研修試行を行った。

### II 研究の概要

#### 1 研究組織



#### 2 研究の目的

- (1) インターネットを活用した研修の在り方及びeラーニング研修の具体的な方法を研究する。
- (2) eラーニング研修を実際の講座で試行することで、その効果や課題を明らかにする。
- (3) 次年度以降eラーニング研修を取り入れられるよう具体的な提案を行う。

#### 3 研究内容

- (1) eラーニング研修のねらい・在り方の研究
- (2) eラーニング研修の具体的な方法の研究
- (3) eラーニング研修の効果の評価方法の研究
- (4) eラーニング研修の試行
- (5) eラーニング研修の効果及び課題の把握
- (6) 次年度以降のeラーニング研修導入に関する提案・モデル提示

#### 4 研究経過

- |        |                                                      |
|--------|------------------------------------------------------|
| 4月19日  | 第1回プロジェクト会議<br>目的, 活動内容, 組織等について                     |
| 5月10日  | 第2回プロジェクト会議<br>eラーニング研修の具体像について                      |
| 5月25日  | 第3回プロジェクト会議<br>今後の進め方, 試行案の検討                        |
| 6月8日   | 第4回プロジェクト会議<br>試行細案の検討                               |
| 6月22日  | 第5回プロジェクト会議<br>共通評価項目の検討, 進捗状況確認                     |
| 7月13日  | 第6回プロジェクト会議<br>進捗状況の確認                               |
| 10月13日 | 第7回プロジェクト会議<br>経過報告, 現在までの課題,<br>中間発表会について           |
| 11月25日 | 第8回プロジェクト会議<br>研究のまとめについて                            |
| 12月21日 | 三重県総合教育センター視察                                        |
| 1月12日  | 第9回プロジェクト会議<br>三重県総合教育センター視察報告<br>eラーニング導入に関する今後の方向性 |
| 2月16日  | 第10回プロジェクト会議<br>研究紀要, 所員研究発表会について                    |
| 2月25日  | 第11回プロジェクト会議<br>所員研究発表会について                          |
| 3月8日   | 第12回プロジェクト会議<br>所長答申, 研究紀要について                       |

### III 研究結果

今回の研修試行は、教育センターの各種研修において、既存のネットワーク技術を用いた「事前研修」「意見交換」「情報交換」等を行い、教育センターと

研修者及び研修者同士の距離を縮めようとした取り組みである。

試行を実施した研修の内容と結果は以下の通りである。

## 1 校務におけるExcel活用(関数・データベース)講座

### (1) 講座の概要

日 程：7月8日～9日(2日間)

対 象：小・中・養護学校教員

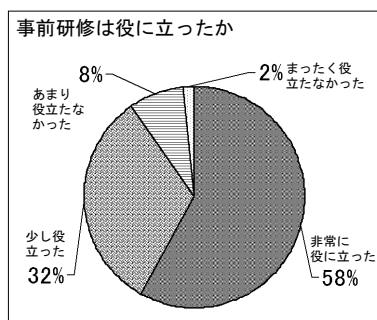
参加者数：62名

内 容：校務処理におけるExcel活用に関する実践的な研修を行い、その技術と指導力を高めることを目的とした。具体的な演習内容としては、「Excelの関数およびデータベース機能」、「成績処理とグラフの作成」、「時数管理表の作成」等であった。

### (2) 研修におけるネットワークの活用方法

Excelの基本操作に関するテキストを各自が教育センターのWebページよりダウンロードし、印刷して事前研修を行う。実際の研修では、事前研修に対するアンケートの結果からわかりにくい部分を重点的に補足説明し、新たな講座内容に入るよう工夫した。

### (3) 実施結果



eラーニングによる事前研修がセンター研修に与えた効果についてのアンケート結果は左の図のようになっている。「非常に

役に立った」、「少し役に立った」で90%となっている。「あまり役に立たなかった」、「まったく役に立たなかった」は、わずか10%となった。役に立った理由として、研修者のアンケートには「事前研修で初めて分かったこと、覚えたことがあったので、事前研修がなければ、今回の研修内容を理解するのが難しかったのではないか」、「センターに来てから基本的なところを研修するのは時間をもったいない。軽く復習する程度で本題に入れたので、2日間で多くのことを学

ぶことができた。」といった内容の記述が多く見られた。このことは、今回の講座のような基本操作に関する事前研修は、研修者のスキルを一定水準に高め、講座の密度を高めるのに効果があることを意味していると考えられる。

## 2 中学校・高等学校国語講座

### (1) 講座の概要

日 程：8月26日～27日(2日間)

対 象：中・高 国語科教員

参加者数：17名

内 容：国語科担当教員に対し、論理的文章の指導および評価問題の作成について研修を行い、その識見と指導力を高める。

### (2) 研修におけるネットワークの活用方法

講義「国語科における指導と評価の一体化」に関する部分の時間を短縮して、評価問題作成の時間をより多く確保するために、スライドと音声による事前研修用教材を作成した。その内容は、「評価の在り方」「評価の方法」「国語科の目標と観点」「評価事例」などの項目である。また、内容に沿ったテキストもダウンロード・印刷できるようにした。

これをネットワークで配信し、研修者は事前研修を行ってから研修に臨むようにした。講座では、事前アンケート(下図)をもとに補足説明を加える程度とした。

#### 論理的文章の評価問題作成講座 事前研修成果 アンケート調査用紙

研修者番号( ) 学校名( ) 氏名( )

1 「論理的文章の評価問題作成講座」の事前研修資料を視聴して自己研修を実施して頂きました。評価についての理解は深まったでしょうか。

下記の項目について、先生ご自身の理解度を4段階(4. 3. 2. 1.)で、□に☑をご記入下さい。

4. 十分理解できた 3. 理解できた 2. 少し理解できなかった 1. あまり理解できなかった  
なお、下記の項目は事前研修資料の順番に並べてあります。

	4	3	2	1
1 今、求められている学力とは	□	□	□	□
2 「生きる力」と「確かな学力」	□	□	□	□
3 これからの評価の在り方	□	□	□	□
4 どのように評価するのか	□	□	□	□
5 観点別学習状況の評価	□	□	□	□
6 国語科の目標と観点の関係	□	□	□	□
7 単元における指導と観点別評価の在り方	□	□	□	□
8 評価に当たっての四つの視点	□	□	□	□
9 自己紹介スピーチの評価事例1	□	□	□	□
10 自己紹介スピーチの評価事例2	□	□	□	□
11 単元末における評価	□	□	□	□

### (3) 実施結果

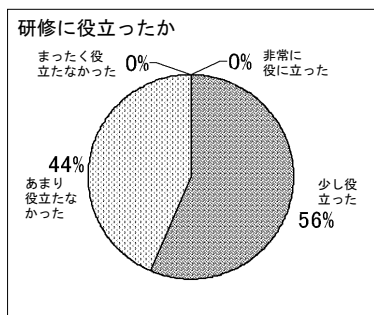
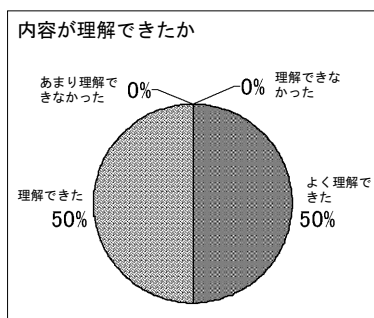
事前研修の内容が理解できたかどうかは、次の上の図のような結果だった。全員が「よく理解できた」

「理解できた」と回答しており、教材としての機能は十分果たした。

一方、この事前研修が教育センターでの研修に役立ったかどうかは右の下の図のような結果だった。

「少し役に立った」が半数を超えた。主な理由は、「予備知識が得られた・確認できた」「課題を明確にして研修に参加できた」「研修に対する意識が高まった」というものだった。

一方「あまり役に立たなかった」という回答が予想以上に多かった。その理由は「内容が一般的なものであり、講座の内容との関連が薄いという印象をもったため」という内容が大半であった。コンテンツの制作の際には、講座内容とコンテンツの内容の関連性にも十分留意する必要があることが分かった。



### 3 ネットワーク講座

#### (1) 講座の概要

対象：小・中・高・養護学校教員

参加者数：62名（3つの講座の合計）

内容：ネットワーク関連講座として、①校内LAN構築講座、②ASP・CGI入門講座、③FKS活用・校内LAN活用講座の3つを開催した。①は主にLANの構築について、②は主にWindows2000サーバの活用について、そして③は②に加えてFKSに設置されているUNIXの活用方法について研修を行った。

#### (2) 研修におけるネットワークの活用方法

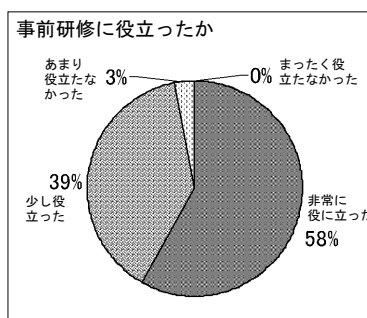
これらの講座では昨年度まで、最初に「ネットワークの基礎知識」という講義を1時間程度行っていたが、今年度は新たに開発したeラーニングの視聴用

教材を用いて、受講生は事前研修を行った。

開発したコンテンツは、音声とアニメーションが同時に展開して内容の理解を促すものであり、視聴時間は約20分であった。具体的な内容は「プロトコルの階層構造」、「IPアドレス」、「Webページ閲覧のしくみ」等である。

教育センターにおける実際の研修では、事前研修で分かりにくかった部分を補足説明し、十分な前提知識を全員が共有してから、新たな内容を取り扱うようにした。

#### (3) 実施結果



「事前研修は、教育センターでの研修に役立ちましたか」という質問について、「非常に役に立った」、「少し役に立った」、と

いう回答が合わせて97%であった。記述では、「専門用語の意味が事前に分かった」、「今まで漠然と把握していたことが、明確に理解できた」等の意見が寄せられた。

教育センターにおける専門研修は、校種も教科も異なる様々な教員がともに受講する。当然、基本研修以上に研修者のリテラシーの差は大きい。今回の試みでは、本講座受講にあたっての前提知識を全員が共有できたことにより、スムーズな講座展開および内容の理解につながったと考えられる。実際、講座終了時の評価も、例年に比べて極めて高いものだった。

### 4 高等学校理科講座化学分野

#### (1) 講座の概要

日程：10月18日～19日（2日間）

対象：高等学校理科教員

参加者数：化学分野5名（理科全体としては25名）

内容：「ザルツマン法による二酸化窒素濃度の測定」、「超音波を用いて行うマイクロスケール有機合成」、「ナイロン繊維の熔融紡糸」の3テーマについて実験を行い、理科教員としての指導力と専

門性を高めた。

## (2) 研修における電子メールの活用方法

研修者にとってより充実した研修になるよう事前研修として、電子メールを用いて研修内容に関する意見や情報の交換を行った。電子メールは、予め研修者と講座担当者が登録されたメーリングリストを通じてコミュニケーションを図るために使用した。メーリングリストの活用により、意見や情報を研修者全員で共有することができた。なお、電子メールの活用にあたっては、学校の業務に支障がないように使用することを事前に申し合わせた。講座担当者は、得られた意見や情報を参考に講座テキストを作成し、研修者にとってより充実した研修になるよう講座を構築した。

また、講座修了後もメーリングリストは継続して活用し、教科指導に対するモチベーションの維持を図っている。

## (3) 実施結果

研修のアンケートによるとこのような事前研修は、研修者全員が非常に役立ったと答えている。その理由は、「研修に自分達の意見が反映されているので参加意欲が高まる」、「研修内容が事前にわかっているので、研修意欲が高まる」というものであった。専門研修ということもあり、事前に研修内容が把握、理解できていれば、研修者にとっては専門性を高めるためにより充実した研修になることが分かる。メーリングリストを活用した電子メールの利用についても否定的な意見はなく、本方法による事前研修が、少人数の専門研修においては非常に効果的であったことがわかる。また、事前研修により、研修における説明の時間が短縮され、実験に対する考察と素材に対する検討が十分に行えた。研修全体として、研修目的の明確化と研修時間の効果的な運用が図れた。

## 5 学校Web作成(2班)講座

### (1) 講座の概要

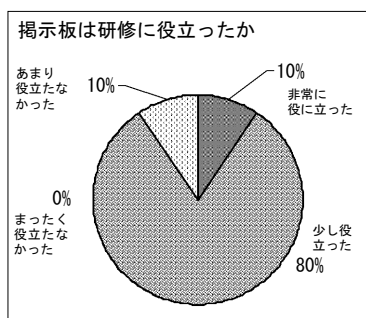
日 程：11月29日～12月1日(3日間)  
対 象：小・中・高・養護学校教員  
参加者数：21名  
内 容：学校のWebページ作成に関する基本的

な研修を行い、その技術と指導力を高めることを目的とした。具体的な演習内容としては、「FrontPageを用いたWebページ作成演習」、「学校Webを開設する意義」の講義、「学校教育とインターネット」の講義等であった。

## (2) 研修におけるネットワークの活用方法

研修前に、教育センターのWebページ内に研修者専用の掲示板を開設した。この掲示板へは「学校Webの開設に期待すること」「学校Webの開設・運営で課題となること」の2つについてそれぞれ各自の意見を書き込んだ。研修では、「学校Webを開設する意義」の講義の中で、課題として多くの研修者が取り上げた点について解説や提案等を行った。

## (3) 実施結果



このような掲示板の利用について、研修後のアンケート結果は左の図のようになっている。「非常に役立った」

「少し役立った」で、90%となっている。「あまり役立たなかった」は、わずか10%となった。このことは、今回の講座では掲示板による事前の意見交換によって、課題等が共通していることに気づき、受講前の不安感を払拭することができたからだと考えられる。

また、今回の掲示板へ書き込みを行った場所と時間であるが、全員が勤務している学校で実施することができた。勤務時間外という研修者が29%であり、事前研修としては勤務時間内での取り組みが望ましく、この点が今後の課題となろう。

## 6 LMSを備えたeラーニングシステム構築の試み

### (1) システムの概要

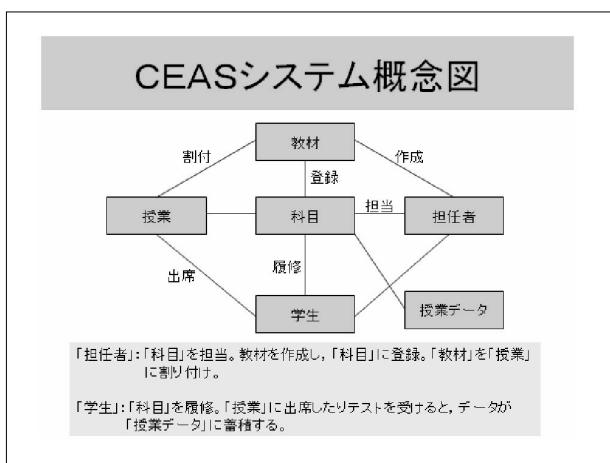
初期のeラーニングは、コンテンツをWebからダウンロードするだけという一方向型であったが、現在利用されているeラーニングは、コース配信、学習者管理、コース・ライセンス管理、管理者サポートの機能

を有するLMS(ラーニングマネジメントシステム)によって運用されている。今回システム構築を試みたのは、教育用に限定して使用を認めている関西大学冬木研究室とパナソニックラーニングシステムズ株式会社が共同開発したCEAS2.0(シーズ)である。

CEASは、大学での授業と家庭学習を管理することが目的であるため、教員研修には使用できない部分もあるが、LMS機能とコンテンツの配信方法などeラーニングの本質を捉えるには好適であると判断した。

CEASは、次のように使用することができる。

- ・授業資料、レポート課題、アンケートなどを登録すれば、学生は自宅・校内から資料を閲覧し、レポート・アンケートを提出できる。
- ・前項に加え、出席管理、小テストの実施、授業資料の提示など毎回の授業ごとに教材を登録しておくコースウェアができる。また、出席やレポート、小テストの評価なども整理された表として得られ、定期試験の成績と組み合わせ成績評価がしやすくなる。



## (2) システム稼働環境

- ・OS : Linux (RedHat9.0), Apache, PostgreSQL
- ・アプリケーション : CEAS2.0

## (3) CEASが主に扱うデータ

基本データ : ユーザデータ・科目データ・担任データ・履修データ・授業データ  
 教材データ : 授業資料, FQA, CEAS教材  
 授業データ : 出欠席, テスト結果, レポート

## (4) 試用状況と評価

現在評価運用中であるが、機材も普及品で十分であり、安定している。使用方法も分かり易く、機能

を限定すれば十分運用に耐えるシステムである。

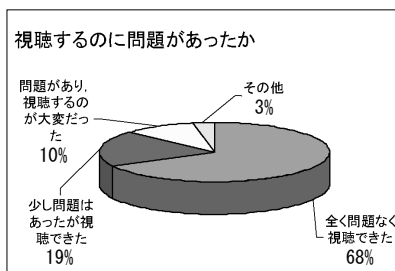
## IV 研究のまとめ

### 1 研究成果

本年度実施した試行に関するアンケートの全体集計結果等により、成果を下記(1)~(7)の観点にまとめることができる。

#### (1) ネットワークの環境

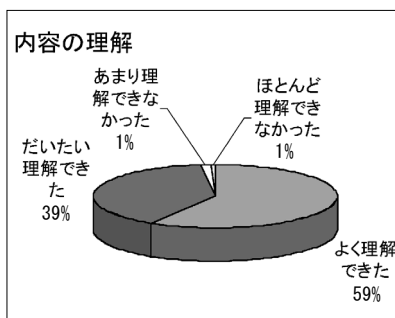
ネットワークを利用した資料の配信には、ほとんど支障がない。音声と文字・アニメーションを利用した教材の視聴にもほとんど支障はない。



研修者がテキストをダウンロード・印刷するよう指示したExcel中級講座では、印刷できなかった研修者は65人中1人のみだった。また、音声と文字、アニメーションを利用した教材の視聴も図のように90%近い研修者はこの教材を視聴することができた。視聴するのが大変だった研修者は、コンピュータリテラシーが低く、音声がか聞こえないなどのトラブルがあった。

#### (2) 教材の内容理解

今回提供した教材内容であれば、研修者自身で内容を理解することができる。



今回提供した教材がどの程度理解されているかという点については、ほとんどの研修者が理解できたと回答

しており、教材としての目的を十分果たしている。

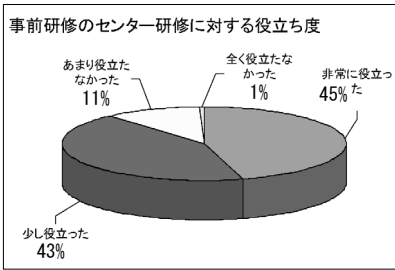
「理解できなかった」と回答した研修者は、コンピュータリテラシーが低く専門用語が理解できなかったためである。

#### (3) 講座への効果

資料などの事前提供・事前研修は、講義時間を大幅に短縮し密度を濃くできるなど、講座に良い影響



を与えた。



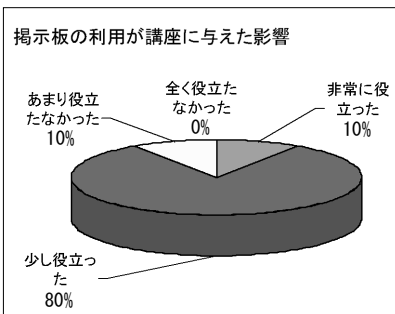
事前研修という位置づけで講義部分を配布・提供したため、基本操作の確認や講義時間を短縮でき、アンケートの結果を基に分りにくい部分を補充したため、単なる講義よりも密度が濃くなった。90%近い研修者が何らかの形で事前研修が役立ったと回答している。その主な理由は、「必要な知識を確認できた」「2日間でより多くの内容を研修できた」「疑問を持って研修に参加できた」などであった。

あまり役に立たなかったと回答した研修者の理由は、「講座との関連性が薄い」「内容が簡単だった」「事前研修の内容が難しく、講座との関連が理解できない」などだった。

今回のような研修形態は、研修者のコンピュータスキルによることなく使用可能である。

研修者のコンピュータリテラシーと、研修成果の間には、明確な相関は見られなかった。リテラシーが低くとも、「非常に役立った」「役に立った」との回答が大半を占めたことは、今回のような研修形態は、広く県内教職員の研修に使用可能であると思われる。

メーリングリストや掲示板を利用して、研修内容の意見交換や情報交換を行うと、それらを生かした研修内容を提供でき、研修意欲が大いに高まる。



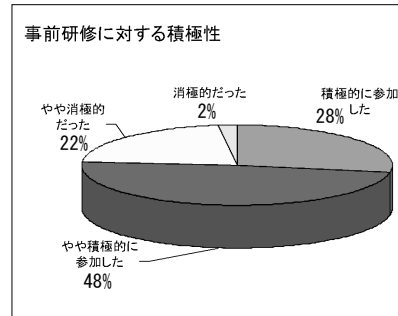
メーリングリストを利用して、事前に研修内容の意見交換や情報交換を行ったことは、研修者全員が研修に非常に役に立ったと回答している。その理由は、「研修に自分達の意見が反映されているので、参加意欲が高まった」「研修内容が事前に分かっているので、研修意欲が高まる」というものであった。

掲示板の利用についても「掲示板の書き込みを生

かした研修内容だった」「課題をもって研修に臨み、それが講座で解決できた」「事前に他の研修者の考えや意見が分かった」などの意見が多かった。

#### (4) 事前研修に対する積極性

研修者にとって意味がある内容ならば、研修者はこのような研修にも積極的に取り組む。

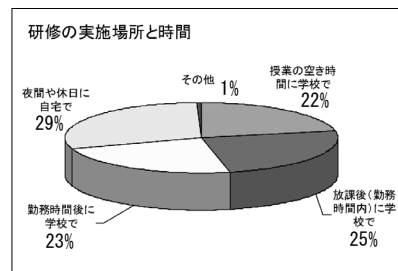


研修がどのような形態を取ろうとも、研修者にとってその研修が意味を持つものであれば、積極的に取り組むはずである。今回はeラーニングを事前研修として位置づけたが、3/4以上の研修者が積極的に取り組んだ。積極的にでなかった理由としては、「コンピュータの操作が苦手」「うまく視聴できなかった」「ついつい後回しにした」などがあり、積極的に取り組むかどうかにはコンピュータリテラシーおよびネットワーク環境がやや影響する。

今回はeラーニングを事前研修として位置づけたが、3/4以上の研修者が積極的に取り組んだ。積極的にでなかった理由としては、「コンピュータの操作が苦手」「うまく視聴できなかった」「ついつい後回しにした」などがあり、積極的に取り組むかどうかにはコンピュータリテラシーおよびネットワーク環境がやや影響する。

#### (5) 事前研修に取り組んだ場所と時間

約70%の研修者は学校で事前研修に取り組んだ。学校のネットワーク環境はかなり整っている。



事前研修に取り組んだ場所は、約70%の研修者が学校(勤務先)であった。これは、ほとんどの学校がインターネット等のネットワーク環境が、今回のような事前研修に十分対応できる状態にあることを意味している。

今回のような事前研修に十分対応できる状態にあることを意味している。

#### (6) LMSを備えたeラーニングシステムの構築

LMSの機能の概要が理解でき、次年度以降のシステムの導入形態等の検討の際に参考にするための基礎資料が得られた。

#### (7) その他

「講義」をeラーニングで配信できる可能性は高い。

研修者が、ネットワークを利用した研修形態で効

果が高いと感じているものは「講義」である。現在の研修で、講義のみというコマはネットワークで配信できる可能性が高い。

なぜなら今回提供した教材自体の評価は高く、多くの教員が視聴できるようにして欲しいという声が多かったからである。

今回提供した教材は校内研修や自主研修の支援教材としても、使用できることが分かった。

事前研修を行わせる場合は、講座全体との関連を重視する必要があるが、提供した教材のみを考えれば研修者の評価は高く、「多くの教員が視聴できるようにして欲しい」「改善を加えてeラーニングを実現させて欲しい」などの声が多かった。事前研修ばかりではなく、校内研修の支援などにも活用できるのではないかと思われる。

## 2 今後の課題

(1) 研修を行ったかどうかを確認する方法を確立する。

事前研修資料を提供した講座では、研修を行ったかどうかの確認を、アンケートをFAXで送信させるという方法をとった。音声を用いた教材を提供する場合などは、コンピュータ上でアンケートを送信するなどの方法が必要である。

(2) 視聴用のコンテンツに映像を利用するには不安が大きい。

本年度作成したコンテンツは、音声とスライドを利用するもので、音声品質をかなり低くしたため、90%近い研修者はこの教材を視聴することができた。現段階で音声の代わりに映像を利用すると、視聴できない学校・地域が多いものと思われる。

(3) 事前研修を行うには、教材作成や研修者への告知等事前準備が重要である。

eラーニングを事前研修で利用する場合には、教材をあらかじめ作成しておき、研修方法を要項に記載するなど、事前準備が重要である。

(4) コンテンツ作成に要する時間の確保および講座内容との関連の検討が必要である。

コンテンツの作成には「構想」「シナリオ作成」「コンテンツ作成」「点検」「配信」という段階が必

要であり、時間を要する。また、コンテンツを事前研修などに利用する場合には、講座全体との関連を明確にする必要がある。

(5) 勤務時間中に研修時間を確保する必要がある。  
事前研修に取り組んだ時間は、勤務時間内（授業の空き時間も含む）に研修を実施した研修者が約47%で、過半数に達しなかった。今後、本格的にeラーニングを導入するためには、勤務時間における研修時間の確保が必要となる。

## 3 eラーニング導入のモデルについて

今回の研修試行や三重県総合教育センターへの視察により、eラーニング導入のモデルの例を表にまとめた。(本文末参照)

## 4 次年度以降の取り組みについて

教育センター事業の改善充実に資するために、平成14年度に「福島県教育センター事業に係るアンケート調査」を行った。教育センターではこの調査結果を基に様々な改革に取り組み、着実に前進をしてきたところである。

しかし、この調査によれば、研修者が研修に参加できない理由として、授業等で学校を空けにくいという回答が、校長(校長又は教頭が回答)・教諭ともに70%を越えているにも関わらず、効果的な対策は取られていない。

高速ネットワーク環境も整った現在、このような課題を解決するための方法としては、時間と空間の制約を受けないネットワークの利用が最も適切であり、教員研修の改善を図るためのネットワーク利用の在り方を具体的に検討する必要がある。

そのために必要な今後の取り組みは、次の2つになる。

### < eラーニングの方向性を明確にする >

eラーニングは現在の研修に取って代わるものではなく、現在教育センターが解決すべき課題の中でeラーニングを活用することで解決できることがあれば、どのようにeラーニングを活用すべきかを検討する必要がある。それが明確にならなければ、今

後必要なシステム（現状のままか、コンテンツ配信型か、LMS型か）やコンテンツの検討ができないからである。

このことは教育センター全体に関わる課題なので、全所的に取り組めるような体制と、これを具現化するための準備委員会が必要である。

### < eラーニング実現へ向けての計画的な取り組み >

平成18年度から本格的に eラーニングを実現するには、平成17年度中に概ね次のことを行う必要がある。

#### eラーニング導入のモデル

- (1) eラーニング導入に関する所内の調整
- (2) 平成18年度に導入するシステムの選定・見積もり・予算化
- (3) 平成18年度に開発する教材の計画・見積もり・予算化
- (4) 平成17年度内の研修試行の継続と平成18年度に利用できる教材開発
- (5) その他

		eラーニングの利用方法例	期待できる効果
センター研修の改善	事前研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>○講座で使用するテキストを事前に配付したり、講義を視聴教材で代替したりする。</li> <li>○研修者の疑問や意見を収集して講座に反映させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研修者が事前に研修内容を知り課題をもって参加するなど、高い意欲をもって講座に参加できる。</li> <li>○講義の時間を短縮し、講座の密度を高めることができる。</li> <li>○ニーズに合わせた講座の展開ができる。</li> </ul>
	eラーニングのみの研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教材を提供し、研修者の学習状況を把握しながら、ネットワーク上で研修が完了できるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研修のために学校を空けにくいという声に対応できる。</li> <li>○研修受講にカウントすることができる。</li> </ul>
	事後研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>○センターでの研修後、メールリストや掲示板で実践結果を報告したり、意見や情報を交換したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○実践を通して研修成果の深まりや、教員同士での課題解決が期待できる。</li> <li>○実践報告や情報交換の結果を研修内容の改善に生かせる。</li> </ul>
校内研修支援		<ul style="list-style-type: none"> <li>○校内研修用のテキストや教材を提供し、そのテキストに沿って校内研修を行えば、校内で一通りの研修ができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研修のために学校を空けにくいという声に対応できる。</li> <li>○研修内容を直接学校に届け、学校の全教師がまとまって研修を行うことができるようになり、研修の効率化と徹底が図れる。</li> <li>○各学校が実施したいときに、いつでも実施できる。</li> </ul>
自主研修支援		<ul style="list-style-type: none"> <li>○教員が必要と感じたとき、いつでも自己研修できるよう、視聴教材などを配信する。</li> <li>○メールリストや掲示板を用いて、教材や教育実践に関する情報交換をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○研修のために学校を空けにくいという声に対応できる。</li> <li>○教員同士での課題解決も期待できる。</li> </ul>

教育相談チーム

# 生きる力を育てる授業実践プログラム開発に 関する研究〈第2年次〉

—学級（ホームルーム）活動を中心に—

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に  
関する研究〈第2年次〉

# 生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究＜第2年次＞

－学級（ホームルーム）活動を中心に－

## 《目 次》

I 研究の趣旨	67
1 研究の趣旨	67
2 前年度の研究成果	67
3 今年度の課題と方向性	67
II 研究の概要	67
1 「生きる力」の捉え方と研究手法	67
2 研究計画	67
3 研究の実際	68
III 研究のまとめ	78
1 本年度の取り組み	78
2 成果と課題	78

# 生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究〈第2年次〉

## —学級（ホームルーム）活動を中心に—

教育相談チーム

### I 研究の趣旨

#### 1 研究の趣旨

「生きる力」の育成は、学校教育の最重要課題の一つである。しかしながら、「生きる力」を育成するためのカリキュラムの編成は未だ十分とは言い難い。そこで、本研究では、各校種における「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発を学級（ホームルーム）活動を中心に進め、県内各学校に提示することを目的として行う。

#### 2 前年度の研究成果

1年次（平成15年度）の実践研究の成果は、以下の3点である。

- (1) 教育相談は、問題解決的機能、予防的機能、発達（開発）的機能の三つの機能を持つが、「生きる力を育てるための授業実践プログラム」を開発することによって、教育相談のもつ予防的・発達（開発）的機能を具体的に生かす道筋が見えてきた。
- (2) 研究協力員と教育センター所員による共同研究という研究体制で研究を進めてきた結果、ニーズに応じた活用しやすい授業実践プログラムの開発ができた。
- (3) 研究の進捗状況及び開発した授業実践プログラムをWebに掲載することにより、随時情報や資料を活用しやすい形で提供することが可能になった。

#### 3 今年度の課題と方向性

##### (1) 年度当初のプログラム開発

学級づくりの導入として、1学期前半に人間関係づくりに役立つ授業実践プログラムの開発を行う。

##### (2) 新たな理論・手法を取り入れたプログラム開発

新たな理論・手法として、アサーション・トレーニング（注釈1）、ストレスマネジメント（注釈2）、PA（プロジェクト・アドベンチャー）（注釈3）

等の導入を図る。

（注釈1）アサーション・トレーニング・・・自分も相手も大切にしたい自己表現

（注釈2）ストレスマネジメント・・・ストレスを阻止・軽減するための手段・対処法の習得を目的とした健康教育

（注釈3）PA（プロジェクト・アドベンチャー）・・・仲間と協力して様々な課題を解決しながら、他者を信頼し、思いやる心を育てる体験学習

##### (3) 間接参加協力員とのプログラム開発

より多くのプログラム開発を目指し、間接参加協力員の授業の吸収・活用を進める。また、養護教諭の協力を得て、「安全・健康」面でのプログラム開発を行う。

##### (4) プログラムの普及について

Webへの掲載を継続的に進めていくと同時に、教育センターの研修や研究協力員会議の機会を捉え、冊子の頒布等を通して、研究のPRを積極的に進め、授業実践プログラムの活用が広く図られるように努める。

### II 研究の概要

#### 1 「生きる力」の捉え方と研究手法

本研究では、「生きる力」を社会性（自己肯定感、他者とかかわるスキル）と捉える。また、「生きる力」を育てるために前述の教育相談的手法を用いる。

#### 2 研究計画

##### (1) 研究実施期間

1年間を一区切りの研究とし、平成15年度より3年間継続して行う。（本年度は2年次）

##### (2) 研究の方針

学校の授業に反映する実践的研究を行い、その成果はWebページに授業実践プログラムとして掲載し、広く普及していく。

### (3) 研究の内容（平成16年度）

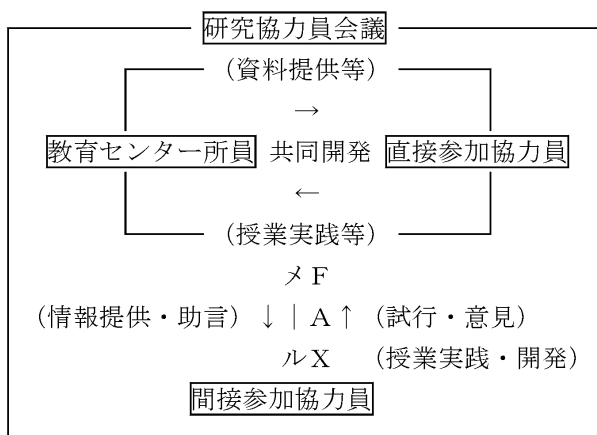
平成16年度は、小学校中学年、中学校第2学年、高等学校第2学年において、プログラムを開発する。

### (4) 研究体制

教育センター所員と直接・間接参加研究協力員との共同体制で研究を進める。

- ① 直接参加の研究協力員とは、プログラムの開発に当たり、事前の打合せ、事後の反省会の場を設定しながら研究を進める。
- ② 間接参加の研究協力員とは、メール又はFAXを通してプログラムの情報提供・助言、プログラムの試行と意見の聴取を行う。また、夏季及び冬季の長期休業中に研究協力員会議を設定して、直接話し合う機会をもち研究を進める。さらに、ニーズに応じて、授業実践プログラムの開発を行う。

### ③ 研究体制



## 3 研究の実際

### (1) 「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発

#### ① 学級（ホームルーム）活動の内容・項目との関連

授業実践プログラムは、直接参加研究協力校の「学級（ホームルーム）活動年間指導計画」を土台に、学習指導要領に示されている「学級（ホームルーム）活動の内容・項目」と関連付けを図りながら開発した。

#### ② プログラム開発のための授業実践

プログラム開発のための授業実践は、直接参加研究協力員の願いや期待、学級の児童生徒の実態から学級（ホームルーム）活動の内容・項目を洗い出し、

必要に応じて年間計画を組み替えながら、共同で授業開発を進めた。その際、教育センター所員から授業に取り入れる教育相談の手法を情報提供し、相互に連絡を取り合いながら実施した。

### ③ 授業実践プログラムの基本構成

授業実践プログラムの基本構成を以下に示す。

- 1 題材設定の理由
    - (1) 活動内容・項目
      - ☆ 主たる内容・項目
      - ★ 関連する内容・項目
    - (2) 題材設定の背景及び児童生徒の一般的な実態と現状
    - (3) 指導法・指導上の留意点
  - 2 指導目標
  - 3 指導計画
    - (1) 事前・事後指導
    - (2) 教科指導等との関連
  - 4 指導案
    - (1) 指導過程
    - (2) 評価計画（評価の観点）
  - 5 プログラムの展開例
  - 6 児童生徒の反応（「振り返り用紙」等から）
  - 7 授業者の感想
- ※ 資料

プログラム化に当たっては、実践した授業を基にし、授業実践校以外の学校・学級でも活用できるように、「題材設定の背景及び児童生徒の一般的な実態と現状」等を考慮し、併せて間接参加研究協力員からの意見も参考にし、範化を図った。

#### ④ 授業実践プログラムのWeb掲載

開発した授業実践プログラムは、その都度教育センターのWebページ(<http://www.center.fks.ed.jp/>)に掲載し、教師が随時活用できるようにした。

なお、Webには、前述した内容の授業実践プログラムと併せ、校種ごとの「学級（ホームルーム）活動の内容・項目と授業実践プログラムの関連表」を掲載し、検索の利便性が図られるように工夫した。

## (2) 小学校における授業実践プログラムの開発

No.	題 材 名 *実施時期	学級活動の 内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	3つの 話し方 *どの時期 でも可	☆(2)③ ★(1)①	① ロールプレイングを通して、相手の気持ちを考えながらも自分の言いたいことを伝える話し方について体験的に理解する。	① 教師の「3つの話し方」のモデリングを見て、3つの話し方の特徴をとらえ、ペアでロールプレイングを行い、それぞれどんな感じがするのかを体験する。 ② 3つのロールプレイングを通して、気持ちのよい話し方について全体で振り返る。	○ アサーション 「攻撃的な話し方」 「非主張的な話し方」 「アサーティブな話し方」
2	わたしの お願い *どの時期 でも可	☆(2)③ ★(1)①	① 相手の気持ちや立場を尊重しながら、お願いする方法を体験し深める。 ② お願いを聞き入れてもらえることのありがたさを感じることができる。	① 場面設定をとらえ、言われたときの気持ちを考える。 ② ペアでお願いする場面の練習をする。さらに、4人組で観察・評価する。 ③ 気持ちのよいお願いの仕方について話し合う。	○ ソーシャル・スキル・トレーニング 「行動リハーサル」
3	みんなで 協力 *どの時期 でも可	☆(2)③ ★(1)①	① 課題解決に向けた体験活動を通して、友達と協力したり、友達を信頼したりすることの大切さに気付くことができるようにする。	① 風船列車をして、「どこがうまくいかないのか」「どこがうまくいったのか」についてグループで話し合う。 ② アインシュタインの言葉を体験する。 ③ 活動を通して協力に関して感じたことを話し合ったり、振り返ったりする。	○ プロジェクト・アドベンチャー 「風船列車」 「アインシュタインの言葉」

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

### ① 学級活動の内容・項目との関連

<p>「小学校学級活動の内容・項目」</p> <p>(1) 学級や学校の生活の充実と向上に関すること</p> <p>① 学級や学校における生活上の諸問題の解決 [No1★] [No2★] [No3★]</p> <p>② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理</p> <p>(2) 日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること</p> <p>① 希望や目標をもって生きる態度の形成</p> <p>② 基本的な生活習慣の形成</p> <p>③ 望ましい人間関係の育成 [No1☆] [No2☆] [No3☆]</p> <p>④ 学校図書館の利用</p> <p>⑤ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成</p> <p>⑥ 学校給食と望ましい食習慣の形成</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### ② 直接参加研究協力校の実態把握

学級の子ども達は、互いの意見を聞くことは上手だが、男女とも内気で自分を出せない子が多く、全体的に自己主張が少ない傾向にある。そこで担任は、①子ども達が本来の自分を出せる②人前で話す抵抗感を少なくし、自己主張できる③グループ活動の中で誰とでも仲よくでき、互いに認め合い、交流し合えるの3点を課題として取り組みたいと考えた。

### ③ プログラム開発の視点

学級活動の年間指導計画の中から上記の課題に焦点を当て、アサーション・トレーニング、ソーシャル・スキル・トレーニング、プロジェクト・アドベ

ンチャー等の手法を用いた授業実践プログラム開発を試みることにした。

### ④ 授業の実際

#### ア プログラム案1「3つの話し方」

〔授業の内容〕

事前アンケートで友達とのやり取りでうまくいかなかった体験や普段の生活の実態を把握した。本授業では、その結果から、思うようにコミュニケーションできない例を提示し、自分も相手も大切にする話し方について勉強することを確認した。初め、教師は、攻撃的、非主張的、アサーティブの3つの話し方をモデリングし、子ども達にそれぞれの特徴をとらえさせた。その後、ペアでロールプレイングすることを通して、互いにどんな感じがするのかそれぞれの立場を体験させた。その際、アサーティブな話し方（自分にとっても相手にとっても気持ちのよい話し方）のよさについての気付きを図り、今後の日常生活での活用について意識付けを図った。

〔児童の感想〕

- ・ 話し方一つで相手の気持ちが変わるんだな。
- ・ 楽しかった。友達には言い過ぎず、やさしく言ったほうがいいことが分かりました。
- ・ しずかちゃんタイプでいきたい。



### 〔参観者感想〕

ロールプレイングで言った時、言われた時の気持ちのよさや嫌な気持ちを感じ取れた。楽しく活動しながらも、行動を振り返って自分と相手の視点に立ってもう一度振り返って考えさせることができていた。



### 〔授業者自評〕

授業の流れがスムーズで無理がなかった。アサーションを取り上げ、モデリングを見て、3つの話し方があるということに気付くことができた。また、互いにロールプレイングすることで、それぞれの立場を感じ合い、ジャイアンタイプの話し方がいいと言った児童に対しても、言われた時の感じを聞き返すことで、もう一度振り返って考えさせることができた。「自分も相手も大切に」という視点は、とても大事だと思う。

### 〔成果と改善の視点〕

アサーションを知ったことにより、攻撃的な話し方、非主張的な話し方、アサーティブな話し方の3つの話し方を理解できた。一人一人が自分の普段の話し方を振り返り、相手の立場を知ったことで、今後どんな話し方をしたいのかということを考えさせた授業になった。今後、日常化につなげていきたい。

## イ プログラム案2「私のお願い」

### 〔授業の内容〕

本授業では、事前調査で自分の普段の行動を振り返るアンケートを行った。係や委員会等の仕事



が重なった場合など、普段の中でも頼みたいのに頼めない状況は実態としてあることが分かった。まず、普段の言い方で頼んでみて、その後、うまく相手に頼むのに必要な条件というものを知り、修正を効かせてリハーサルすることで、互いにどんなことに気を付けてやればいいのか分かった。さらに「こういうやり方をすればいいんだ」という方法への理解が進み、機会があれば使いたいという意欲付けにもつ

ながっていった。

### 〔児童の感想〕

- ・ お願いの仕方が分かった。これからは、理由などを言ってから手伝ってもらおうようにします。
- ・ 人に何か頼むときには悪い言葉遣いをしないでちゃんと人に頼むような言葉遣いをしようと思いました。

### 〔授業者自評〕

子ども達は、自分も相手も大切にしながら上手な頼み方をするには、どのような要素を入れればいいのかを知り、その方法を身につけることができた。意図的に修正を効かせてリハーサルを行うことにより、普段は一回きりのやり取りで終わるところを再度やり直すことで、よりよいコミュニケーションの仕方を理解することができた。スキルとして必要なものはいろいろあるので、今回のスキルの定着を図ることや新たなスキルを身に付けることなど、今後も継続した指導を行っていきたい。

### 〔参観者感想〕

総合的な学習の時間のねらい（「学び方やものの考え方を身に付けること」「自己の生き方を考えること」等）と密接に関連した授業だと思った。本時のような授業を総合的な学習の時間で、年間10～15時間程度位置付けたり、計画したりする必要性を強く感じた授業だった。

### 〔成果と改善の視点〕

授業の中でトレーニングができるという点で即役立つと好評であった。練習場面では座ってやったり立ってやったり、表情や言葉遣いに気を付けたりして行った。さらにペアの組み方や実態に応じた練習方法を工夫するとより効果が上がると考えられる。

## ウ プログラム案3「みんなで協力」

### 〔授業の内容〕

導入では、ルールの徹底を図り、自分も含めた参加者全員を尊重することを約束させた。「風船列車（人と人の間に風船をはさみ、落とさないように進む）」と「アインシュタインの言葉（カードに書いた語を文章に並び替える）」の体験を通じて、課題解決へ向けて友達とどのように協力できたのかを話し合わせた。特に、風船列車では、どこが上手くい

かないのか、どこが上手くいったのかをグループ内で話し合わせるにより、自ずと協力することの大切さに気付くよう働きかけた。授業の終わりの振り返りでは、協力についての体験を通して、気付いたことや思ったことを中心に感想を書かせ、今後も日常において協力することを意欲付けした。

[児童の感想]

- ・ 風船列車は難しかったけど、「話し合い」をしたら、風船を落とさずにできた。話し合いはいいなと思った。



- ・ いろんなゲームをして、協力することの大切さが分かった。
- ・ いつもよりみんなと協力し合っただけでできたと思います。いつもは男女協力することができないけれど、風船列車などで協力することができました。

[授業者自評]

身体を動かしての活動だったので、子ども達は楽しく活動していた。具体的に協力する場面が意図的に作られていた。特に、「風船列車」の活動では、成功しても失敗しても、どこが上手くいったのか、どこが上手くいかなかったのか、それはなぜかを意識させたり、話し合わせたりすることが教師のかかわり方としてとても大切であると思った。

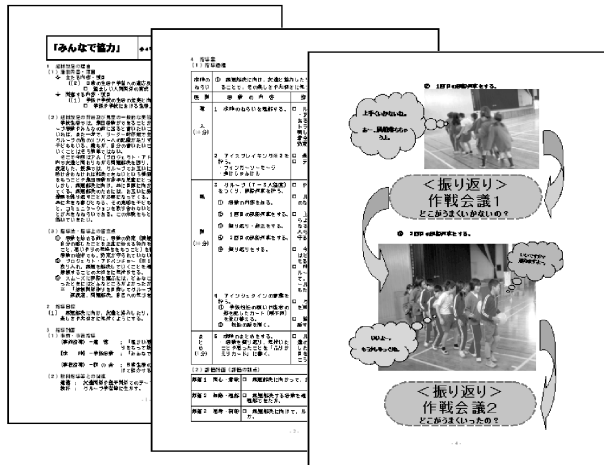
[参観者感想]

必然的に「協力しなければならない活動を」というのはなるほどと思った。こうした授業・活動が、子ども達の心を育て、集団を作っていくのだと思った。特に、中学年のプログラムとして、このような身体を動かしながら課題解決する活動は発達段階に適したものだと思う。

[成果と改善の視点]

ゲームを通して、協力することのすばらしさや大切さに気付く感想が出てきた。導入でルール確認はしていたが、その時間だけに限らず、日常場面でも同様の目標と約束事を設定し、活動後に振り返りを行うことで、協力することの意義や喜びをさらに深く実感できるのではないかと考えられる。

⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは福島県教育センターのホームページ (<http://www.center.fks.ed.jp/>) からダウンロードできるようにした。上記はその一部である。

⑥ 研究協力員との連携

ア 直接参加の研究協力員

- ・ 学級の実態を踏まえ、研究協力員の願いや思いを絡めながら、3つのプログラムを開発できた。
- ・ 子ども達は「誰に何を言っても大丈夫」「失敗してもOK」「みんな同じ」等、安心感をもって生活するようになった。教師自身も意図的にかかわることで勉強になった等の感想が出された。
- ・ 現職主任からの働きかけで、特に、プログラム案3は、校内の多くの先生方に参観いただいた。

イ 間接参加の研究協力員

- ・ 間接協力員とは、必要に応じて、その都度メールやファックスで意見交換を行った。
- ・ 間接協力員の指導案や資料をもとに、今後プログラム開発する予定である。

ウ 研究協力員会議

- ・ 会議は、直接参加の研究協力員のプログラム開発を中心に、様々な視点から意見が出された。第2回研究協力員会議では、実施プログラムの意見交換だけでなく、普及における問題点・カリキュラムへの位置付け・評価等について協議が深まった。

⑦ 今後の研究の方向性

- ・ 1学期当初のプログラムを開発する。
- ・ 間接参加の研究協力員との連携を図り、プログラム開発を進める。

### (3) 中学校における授業実践プログラムの開発

No.	題 材 名 *実施時期	学級活動の 内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	新たな学年を迎えて(学級開き) *新年度スタート時	☆(1)① ★(2)ア② ★(2)ア⑤	級友との出会いを大切に して、望ましい関係づ くりをスタートする。 学級担任の思い(願い) を知り、今後の学級生活 に見通しと意欲を持つ。	① ウォーミングアップと班編制を兼ねた活動 を行う。 ② ボールを使った自己紹介(グループ毎)、 ワークシートを用いた自己紹介(全体で)を 行う。 ③ 学級全員で文字カード(完成すると担任の 思いが文章となる)を並べ替える活動を行う。	○プロジェ クト・ア ドベンチャー ○グループ・ エンカウ ンター
2	ストレスとそ の対処法につ いて学ぼう (第1時)  *どの時期で も可	☆(2)イ① ★(2)ア① ★(2)ア②	ストレス源に対する受 け止め方や対応の仕方 の多様性に気付く。 ストレスが心や体に及 ぼす影響を知り、適切 な対応が必要であることを 理解する。	① ストレスによって心(気持ち)がどのよう に変化するかを体験する。 ② 生活場面で受けたストレスとその対応の仕 方を発表し合う。 ③ 教師の話をもとにストレスと心身の関係に ついて考える。	○ストレス マネジメ ント
3	ストレスとそ の対処法につ いて学ぼう (第2時)  *どの時期で も可	☆(2)イ① ★(2)ア① ★(2)ア②	日常生活で感じるスト レスについて、その対処 法を考える。 様々なストレスの対処 法を知り、日常生活への 活用を考える。	① 「考え方を変えること」に焦点を当てたス トレス対処法について話し合う。 ・ 話し合う項目を選択する ・ ストレスへの対応をプラス思考で考える 「まず個人で→それをグループ内で→最後 に全体で」という活動を展開する。 ② 様々なストレス対処法について考える。	○ストレス マネジメ ント ○論理療法

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

#### ① 学級活動の内容・項目との関連

「中学校学級活動の内容・項目」	
(1) 学級や学校の生活の充実と向上	
① 学級や学校における生活上の諸問題の解決	[No1☆]
② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理	
③ 学校における多様な集団の生活向上	
(2) ア 個人や社会の一員としての在り方	
① 青年期の不安や悩みとその解決	[No2, 3★]
② 自己及び他者の個性の理解と尊重	[No1★] [No2, 3★]
③ 社会の一員としての自覚と責任	
④ 男女相互の理解と協力	
⑤ 望ましい人間関係の確立	[No1★]
⑥ ボランティア活動の意義の理解	
(2) イ 健康や安全	
① 健康で安全な生活態度や習慣の形成	[No2, 3☆]
② 性的な発達への適応	
③ 学校給食と望ましい食習慣の形成	
(3) 学業生活の充実, 将来の生き方, 進路の適切な選 択	
① 学ぶことの意義の理解	
② 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用	
③ 選択教科等の適切な選択	
④ 進路適性の吟味と進路情報の活用	
⑤ 望ましい職業観・勤労観の形成	
⑥ 主体的な進路の選択と将来設計	

#### ② 直接参加研究協力校の実態把握

生徒の多くは授業や行事等に真面目に取り組み、  
部活動も盛んである。集団への所属意識もあるが、

日常の人間関係に悩みや不安、ストレス等を感じて  
いる生徒も少なくない。教職員はこうした生徒の実  
態を踏まえ、人間関係を結ぶ力の育成を重要な課題  
として支援の在り方を学ぼうと意欲的である。

#### ③ プログラム開発の視点

直接参加研究協力校の現職教育と教育相談チーム  
との共同研究を基盤にプログラム開発を行った。直  
接参加研究協力校のニーズをもとに、年度始めに活  
用できるプログラム開発やストレスマネジメント、  
プロジェクト・アドベンチャー等の手法を用いた授  
業実践に視点をあてた。

#### ④ 授業の実際

##### ア プログラム案1「新たな学年を迎えて」

〔授業の内容〕

導入では、学級担任が学級開きへの思いを伝えた。

展開では、4つの演習を行った。まず、非言語の  
演習「バースデイ・チェーン」でグループをつくり  
(1班6人程度)、グループごとに自己紹介の演習を  
行った。柔らかなボールを使って名前(ニックネー  
ム等)を伝え合う「ネーム・トス」では、恥ずかし  
そうにしていた生徒の表情も和らぎ、打ち解けた雰  
囲気が見られた。さらに「サインをもらおう」では、

できるだけ多くのクラスメートと名前や趣味等を紹介し合い、サインをする（もらう）演習を行った。生徒同士はもちろん、学級担任や学年教師とも気軽にサインをやりとりする姿が見られた。演習の最後には、担任の思いや願いを記したカードを学級全員で並び替える活動（「アインシュタインの言葉を並び替える」）を行った。パズル感覚で並べていく生徒の表情は生き生きとし、謎の言葉を完成させるといった目標に向かって意欲的に取り組んでいた。言葉が完成したところで、担任はその言葉を読み上げ、その言葉に託した思いやエピソードを紹介した。担任の話を聞き、「先生らしいなあ」と納得顔の生徒や、「えっ、先生って意外にロマンチスト！」と新たな一面に驚く生徒の姿が見られた。



〔生徒の感想〕

- ・ 多くの人と話す機会ができてよかった。クラスメートの名前を覚えるのに役立った。
- ・ どんな学級になっていくのかなと想像してみた。協力し合えるクラスにしたいと思った。

〔授業者及び参観者の感想〕

- ・ とても和やかな明るい雰囲気、生き生きと活動していた。生徒の笑顔がとてもよかった。
- ・ 振り返りカードには、「またやりたい、いいクラスになりそう、友達の呼び方がわかってよかった、仲良くしたい」等肯定的な意見が多数出て、学級としてよいスタートがきれた。

〔成果と改善の視点〕

- ・ クラス替えにより級友の名前さえ知らず、不安を持って生活している生徒もいるので、緊張感を和らげるのに効果があった。
- ・ 「アインシュタインの言葉を並び替える」は、生徒から好評で、委員会活動等で応用している。

## イ プログラム案2「ストレスとその対処法について学ぼう（第1時）」

〔授業の内容〕

導入では、事前調査1（ストレスについて思い浮かぶもの）をもとに本時のねらいを確認した。

展開では、まず、面倒な計算（1000から7ずつ引いていく計算）を1分間実施し、気持ちがどのように変化するかを体験した。実施後は、計算中の気分を振り返り、感想を発表した。続いて生活班になり、事前調査2（ストレスとその対応）をもとに日常場面における体験を発表し合った。その後、ストレスが心身に及ぼす影響を考えた。マイナス面の影響だけでなく、ストレスがよい影響を与えた例としてアテネオリンピックの金メダリスト（陸上競技）が、プラス思考で目標を達成したことを学んだ。ここで再び面倒な計算を実施した。1回目より計算量をアップさせた生徒が多く見られた。



〔生徒の感想〕

- ・ ストレスは病気の元になったり、心と体に影響を与えたりすることがわかった。ストレスをためるのは体によくないことがわかった。
- ・ みんなストレスを抱えているんだなあと思った。対処法を知りたいと思った。

〔授業者及び参観者の感想〕

- ・ 生徒は自己のストレスを考えることで、周囲の人たちのストレスについても理解を深めていた。
- ・ 授業を計画・実施していく過程で、自分の中にあったストレスは悪いものであるという考え方が修正された。ストレスといかに付き合うか、その対処法が必要であると実感した。

〔成果と改善の視点〕

- ・ 展開の初めにストレス体験として計算問題を取り入れてあるが、授業後半でもう一度計算問題に取り組むという設定に変更した。2回目の計算では1回目の結果を上回る生徒が多く見られた。
- ・ 次回は対人関係のストレスに視点を当てた対処法を実施したい。

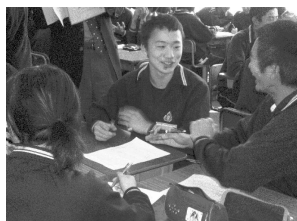
## ウ プログラム案3「ストレスとその対処法について学ぼう（第2時）」

〔授業の内容〕

導入では、事前調査（ストレスを感じた場面と状況）をもとに本時のねらいを確認した。

展開では、家庭や学校で感じるストレスの対処法

を話し合う活動を行った。教師の例示により、本時は「考え方を考えること」に焦点を当て、ストレスに対してプラス思考で対処してみることが確認された。生活班ごとに話し合う項目をワークシートから選び、ストレスの対処法について個人→班→全体と練り上げていった。続いて、様々な対処法について考える活動を行った。資料をもとに教師が補足・説明を行った。「考え方を考える」「気分を落ち着かせる」「体の興奮をしずめる」等の方法に関心を持ち、資料のプリントを読み込んでいる生徒の姿があった。



〔生徒の感想〕

- ・ 上手にストレスを解消できるようにしたい。プラス思考で前向きに考えることが大切だと思った。
- ・ かつとなるところがあるので、自分を落ち着かせる対処法を活用したいと思った。
- ・ 自分のストレス解消法は、スポーツをすることだとわかった。ストレスへの対処法を変えることで、人への接し方も変わっていくと考えた。

〔授業者及び参観者の感想〕

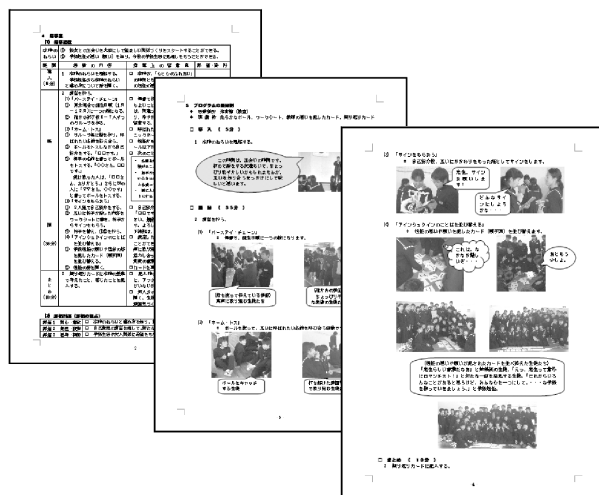
- ・ 「考え方を考える」という視点から「プラス思考」による対処法を選定したのは、誰にでも取り組めるという点で生徒の活動に適していたと思う。
- ・ 現在だけでなく未来においても有意義な取り組みだと思ふ。将来大きなストレスに出会ったときに、今日の授業を思い出す生徒もいると思う。

〔成果と改善の視点〕

- ・ 展開後半の様々な対処法については、時間配分に留意し、例示と説明に工夫が必要である。
- ・ 日常場面でリラクゼーション・トレーニングを取り入れたり、部活動の練習にストレス解消法を取り入れたりするなど、活用していきたい。
- ・ ものの見方・考え方を揺さぶる方法を工夫し、やり方を練習する場を意図的に設定していきたい。

## ⑤ プログラムの開発

開発したプログラムは、福島県教育センターのホームページ (<http://www.center.fks.ed.jp/>) からダウンロードできるようにした。



## ⑥ 研究協力校（員）との連携

### ア 直接参加の研究協力校

- ・ 本研究を現職教育の一環として位置付け、授業及び事後研究会に全教師が参加した。全校あげて研究実践のノウハウを共有化し、実際の学級経営や生徒指導の諸問題に活用している。
- ・ 第2学年全学級（6学級）の授業実践記録や反省等の資料、各学級各様の授業展開例はプログラム開発に大いに役立った。

### イ 間接参加の研究協力員

- ・ プログラム案に対する意見等の聞き取りを行い、プログラムの修正に役立てた。
- ・ 間接参加協力員の指導案や資料等をもとに、新たに2つのプログラムを開発することができた。

### ウ 研究協力員会議

- ・ プログラムの修正や開発、活用可能な実施時期等について活発な意見・感想が出された。
- ・ 各校の実態を踏まえた取組みについて情報交換を行い、教育相談の手法を用いた授業実践、年間指導計画への位置付けと問題点、校内協力・連携の在り方等について協議を深めた。

## ⑦ 今後の研究の方向性

- ・ 直接参加研究協力校とのプログラム開発にあたっては、養護教諭や主任層との連携を積極的に推進し、教科の授業や学校行事との関連性を図る。
- ・ 間接参加研究協力員との連携を図り、「男女相互の理解と協力」「性的な発達への適応」「主体的な進路選択」に関するプログラム開発を推進する。

#### (4) 高等学校における授業実践プログラムの開発

No.	題 材 名 *実施時期	ホームルーム活動の内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	自己尊重の表現方法ーコミュニケーション技能の習得ー *どの時期でも可	☆(2)ア② ☆(2)ア⑤ ★(1)①	① 自己理解・他者理解を深め、他者の考えを尊重する態度を身につける。 ② クラスの一員としての自分の在り方について考える。	① 「言いたくても言えない」経験を聞く。 ② 3つの表現方法（非主張的、攻撃的、自己尊重）について学習する。 ③ ロールプレイングを通して、3つの表現方法を体験的に理解する。	○アサーション・トレーニング ○ロールプレイング
2	自己尊重の表現方法ー問題解決のためのシナリオ作りー *どの時期でも可 但し、No1の実施後が望ましい	☆(2)ア② ☆(2)ア⑤ ★(1)①	① 自己理解・他者理解を深め、他者の考えを尊重する態度を身につける。 ② クラスの一員としての自分の在り方について考える。	① 3つの表現方法を思い出す。 ② 問題解決場面の映像を見る。 ③ DESC法について学ぶ。 ④ 問題解決のためのシナリオを作る。 ⑤ シナリオを発表する。	○アサーション・トレーニング ○DESC法

※「ホームルーム活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

#### ① ホームルーム活動の内容・項目との関連

<p>「高等学校ホームルーム活動の内容・項目」</p> <p>(1) ホームルームや学校の生活の充実と向上</p> <p>① ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決 [No1★] [No2★]</p> <p>② ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動</p> <p>③ 学校における多様な集団の生活の向上</p> <p>(2) ア 個人及び社会の一員としての在り方生き方</p> <p>① 青年期の悩みや課題とその解決</p> <p>② 自己及び他者の個性の理解と尊重 [No1☆] [No2☆]</p> <p>③ 社会生活における役割の自覚と自己責任</p> <p>④ 男女相互の理解と協力</p> <p>⑤ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立 [No1☆] [No2☆]</p> <p>⑥ ボランティア活動の意義の理解</p> <p>⑦ 国際理解と国際交流</p> <p>(2) イ 健康や安全</p> <p>① 心身の健康と健全な生活態度や習慣の確立</p> <p>② 生命尊重と安全な生活態度や習慣の確立</p> <p>(3) 学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定</p> <p>① 学ぶことの意義の理解</p> <p>② 主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用</p> <p>③ 教科・科目の適切な選択</p> <p>④ 進路適性の理解と進路情報の活用</p> <p>⑤ 望ましい職業観・勤労観の確立</p> <p>⑥ 主体的な進路の選択決定と将来設計</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

#### ② 直接参加研究協力校の実態把握

明るく元気な生徒が多く、学校行事等では盛り上がるクラスである。時折羽目を外しすぎる生徒、担任や同級生に対しぞんざいな態度を取る生徒がいる。

#### ③ プログラム開発の視点

高校生にとって、お互いを大切にしながら自分の

思いや考えを適切に伝え合うことは、社会的なスキルを高め、自己実現と社会的自立を図る上で重要である。今回は、コミュニケーションの重要な一側面である「話すこと」に焦点をあて、プログラム開発を実施した。具体的には、アサーション・トレーニングの視点を取り入れた。

#### ④ 授業の実際

##### ア プログラム案1「自己尊重の表現方法ーコミュニケーション技能の習得ー」

〔授業の内容〕

本プログラムでは、ラーメン屋で注文とは異なるものが来たという場面設定の下、自分の思いをどう伝えるか考えながら「話すこと」に関して



3つの表現方法があることを学習した。また、3つの表現方法をロールプレイングによって体験的に学んだ。そして、お互いに感想を述べ合い、「自己尊重」を目指したより良いコミュニケーション、自分自身のコミュニケーションについて振り返った。

〔生徒の感想〕

・ 今日の学習で、自分自身の「話し方」の特徴について考えることができた。

- ・ 「話すこと」について3つのパターンがあるとうことを知って驚いた。
- ・ 自分は、自分のことばかりを考えて話していたように思った。
- ・ この授業で学んだ3つの表現はとても勉強になった。自分は、相手によって態度が変わるかもしれないが、今日学んだことを意識していきたいと思った。
- ・ 自分の気持ちや思っていることをはっきりとい



- うことは難しいと思った。
- ・ 言いたくともいざとなると言えなくなる自分が嫌になることがある。3つの表現を知って何だか安心した。

- ・ 自分では知らない間に相手を傷つけたり、自分を苦しめていたのではないかと思った。
- ・ 今日の授業で分かったことは、自分は非主張的な言い方を多く使っていたということだ。自分も相手も納得できる話し方を心がけていきたいと思った。

[授業者自評]

- ・ 教師によるデモンストレーションは授業展開上効果的であった。
- ・ 3つの表現方法の提示にあたっては、やや教師主導による授業展開となってしまった。提示方法の工夫が必要であると感じた。
- ・ 「ラーメン屋での注文」という事例は、生徒にとって身近で分かりやすかったようだ。
- ・ ロールプレイングでは、役割を交代させて「店員」「客」それぞれの立場で感想を書かせてもよかった。
- ・ 「振り返りカード」からアサーションの考え方を取り入れた「自己尊重」の表現方法について学ぶことの必要性を感じた。
- ・ アサーションの必要性は生徒に理解させることができたと思う。

[成果と改善の視点]

本プログラムは、A校1クラス（直接参加の研究協力員）、B校3クラス（間接参加の研究協力員）で実施した。「振り返りカード」の自由記述によれば、両校とも、「自分自身の日頃の表現方法について振り返ることができた。」「自己尊重の表現を日常生活でも心がけたい。」といった感想を記している生徒が多く、本プログラムの目的は、達成されたといえる。A校については、担任以外にも教員の参加があり、TTでの授業実施となった。B校については、授業実施にあたり、年度当初から実施チームをつくり、授業を実施した。このように、複数の教員が授業にかかわったことは、プログラムの改善を図る上で有意義であった。

イ プログラム案2「自己尊重の表現方法一問題解決のためのシナリオ作り」

[授業の内容]

本プログラムでは、DESC法（アサーション・トレーニングを応用したもので、問題解決の道筋を自分で考えるという手法）を用いて、問題解決のためのシナリオ作りを行った。シナリオ作りにあたっては、まず、前時の<3つの表現方法>について復習し、次に、問題解決の手法をDESC法に基づいて学習した。その後、



D (DESCRIBE) : 描写する  
 E (EXPRESS) : 表現・説明・共感する  
 S (SPECIFY) : 特定の提案をする  
 C (CHOOSE) : 選択する

[生徒の感想]

- ・ 話すことは日常のことだが、とても奥が深く難しいことだと思った。

- 具体的な提案をした後に断られた場合にどう対処するか難しかった。
- DESC法を学習してみて、自分が相手に伝えたいことをどのように伝えていけばいいか整理できた。
- D, E, S, Cのそれぞれについて考えることは難しかったが、相手も自分も納得するにはいい方法だと思った。
- C（選択肢）を考えるのが難しかった。
- 相手のことを考えながらS（提案）を考えるのが重要だと思った。ただ、Sを考えるのはなかなか難しかった。
- DESC法という方法は、初めて知った。相手に分かってもらうのは大変なことだなと思った。
- 今までは相手に不快感を与えていたことがたくさんあったと思う。相手も自分も納得するためにはいい方法だと思った。

[授業者自評]

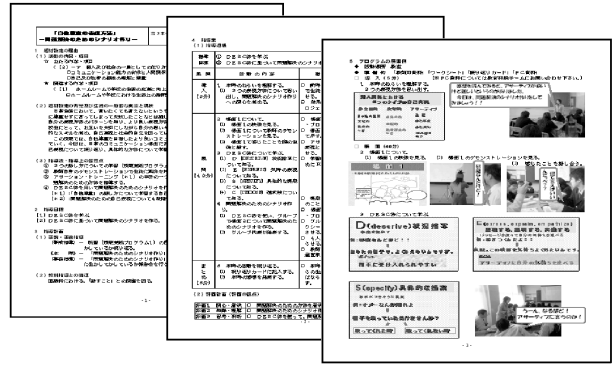
- 振り返りカードや授業の反応から高校2年生において、DESC法による問題解決のトレーニング法はコミュニケーション能力育成に際して意味があることだと感じた。
- プロジェクターを用いた授業は、生徒の理解を促す上で効果的であった。また、授業の展開の上でもメリハリが生じて良かった。
- 場面1（映画館）、場面2（電話）の状況設定は生徒に理解しやすいものであった。
- D, E, S, Cについてワークシートを有効に活用するのは難しかった。

[成果と改善の視点]

成果として、「自尊尊重の表現」を意識するようになった。「クラスの雰囲気が変化してきた。」等の意見が協力員から寄せられた。また、改善点として、シナリオ作りのためのワークシートの有効な使い方について改善する必要性が提起された。



## ⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは福島県教育センターのホームページ(<http://www.center.fks.ed.jp/>)からダウンロードできるようにした。上記はその一部である。

## ⑥ 研究協力員との連携

### ア 直接参加の研究協力員

- 担当所員が具体的な手法を提示し、双方でメール等で連絡を取り合いながらクラスの実態把握をし、指導案、資料について検討をした。授業実施にあたっては、副担任の協力を得ることができた。

### イ 間接参加の研究協力員

- 直接参加の研究協力員の授業実施後、間接参加の研究協力員に対しては、プログラム等を提示し、感想や改善点の聞き取りをした。

### ウ 研究協力員会議

- 8月においては、チーム研究の概要と進め方について相互の共通理解を図った。また、次回のプログラム案及び各校のLHR実施上の課題について意見交換を行った。
- 12月においては、プログラムの普及と充実の視点から話し合いを行った。生徒やクラスの実態に即したプログラムの自校化、教育相談的手法の活用の在り方、各地区でのネットワーク作り等について活発な意見交換がなされた。

## ⑦ 今後の研究の方向性

- 各学校のニーズを踏まえながら、汎用性をもつプログラムの開発が可能となるように研究協力員との共同体制をさらに模索する。
- 健康面から、特に性について考えるプログラムの開発を進める。
- 進路面から、社会の一員としての勤労観、職業観を養うプログラムの開発を進める。



### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 本年度の取り組み

##### (1) 授業実践プログラムの開発

直接参加の小・中学校で各3つ、高等学校で2つのプログラムを開発した。学級（ホームルーム）活動の内容・項目から見ると、小学校のプログラムでは2つの内容・項目との関連付けが図られた。中学校では5つ、高等学校では3つの関連付けが図られた。また、間接参加研究協力員との連携により、3つのプログラムを開発した。さらに、協力校以外に学校行事への支援を通して、プログラムを開発した。

##### ① 年度当初のプログラム開発

直接参加の中学校においては、4月に学年・学級開きの授業実践を行い、プログラム化を図った。また、協力依頼のあった高等学校の新入生オリエンテーションをモデルとしたプログラムを開発した。

##### ② 新たな理論・手法を取り入れたプログラム開発

本研究では、昨年度から教育相談の手法を導入することで、授業のねらいに応じて、児童生徒の活動を効果的に生かす学級（ホームルーム）活動の授業実践プログラムを開発してきた。本年度は、新たに3つの教育相談的理論・手法を導入し、プログラム開発を進めた。

##### ③ 間接参加協力員とのプログラム開発

今年度は、間接参加研究協力員が各学校で自校のニーズに応じて実施している授業を吸収・発展させる形で、相補的に情報提供しながら授業実践プログラム化に取り組んだ。

#### (2) 授業実践プログラムの普及

##### ① Webの活用

福島県教育センターのホームページからダウンロードできることを情報提供すると共に、授業実践プログラムの開発に沿って、Webへの掲載を継続的に進めてきた。

##### ② PR活動

Web掲載を補足する目的で、教育センターの研修者へ冊子の頒布等を通して、開発した授業実践プログラムを多くの教師に活用してもらうように研究のPRを積極的に進めてきた。

本教育センター学校教育相談実践講座において、本チーム研究を取り入れた演習「教育相談を生かした学級経営」を講座の中で実施し、体験を通しての研究への理解を促すとともに冊子での配付を行い、自校でのプログラムの実施と研究への参加を呼びかけてきた。

県内各地での校内研修会等において、本研究プログラムに基づく教育相談的な手法の実技演習を行い、情報提供してきた。

また、各種研究会において、本研究の成果を発表する機会を得、研究のPRに努めてきた。

#### 2 成果と課題

##### (1) 成果

##### ① 授業実践プログラムの開発において

ア 様々な教育相談的手法を取り入れたプログラムを通して、子ども達は、自己理解や他者理解及び自己肯定感を深め、活動の幅を広げていった。一方、教師（集団）は、多様性を含んだ方法を知るとともに新たな子ども理解の視点をもつなど、教師（集団）としてのものの見方・認識に変容が見られた。

イ 「生きる力」の育成に効果的である1学期前半に、中学校・高等学校におけるプログラム開発を実施できたことによって、新年度スタート時の子どもの不安や緊張を軽減し、人間関係作りのきっかけを作ることができた。同時に、希望を抱き充実した生活を送ろうとする心構えをもたせることを通して、次のプログラムへつなげる素地を作ることができた。

また、年度当初だけではなく人間関係が固定化したり、学級の状態が停滞したりする時などに、互いの信頼を深めることや集団の目的の再確認をすることが、必要かつ有効であることがわかった。

ウ アサーション・トレーニング、ストレスマネジメント、PA（プロジェクト・アドベンチャー）等の新たな手法を取り入れたことによって、「生きる力」を育てるプログラムの土台となる学級（ホームルーム）活動の展開例をより多方面から作り上げることができた。

エ ニーズに応じながら、間接参加の研究協力員と授業実践プログラムの開発を進めることができた。

直接参加の研究協力員及び間接参加の研究協力員の複線的開発ルートができたことで、プログラム開発の体制もより整備・強化されてきた。

## ② 授業実践プログラムの普及において

ア Web掲載により、県内に留まらず県外からの問い合わせもあり、授業実践プログラムが広範にわたって普及しつつある。

イ 研修講座でのプログラム紹介や演習体験の提供、各種研修会でのPRやプログラム集の頒布等、様々な機会をとらえた広報活動を展開したことにより、間接参加の研究協力員の拡大とともに幅広くプログラムに対する関心を高めることができた。

ウ 上記の普及活動を通して、本プログラムは「知る段階」から「実施する段階」へと活用の度合いが高まっている。

## (2) 課題

### ① 授業実践プログラムの開発において

ア 来年度は、1学期前半のプログラム開発を小学校でも進めていきたい。

イ さらに学級（ホームルーム）活動の内容・項目を網羅していく方向でプログラムを充実していきたい。

ウ 授業実践プログラムの開発には、教育相談チームが従来研究してきた教育相談の手法を用いたがさらに新たな手法の導入に努めていきたい。

エ 社会や時代のニーズにあわせた情報化時代の問題や性の教育の問題等、緊急の課題に対するプログラム化も進めていきたい。

オ 学校行事と関連したプログラム化を進めていきたい。

カ 教育課程編成の段階で年間計画（カリキュラム）にどう組み入れられるのかという視点から協力校との連携を検討していきたい。

### ② 授業実践プログラムの普及において

ア より多くの教師に本プログラムへの興味・関心をもち理解を深めてもらうために、センター内外において、本プログラムの実技講習の場の設定と提供に一層努めていきたい。

イ 各学校のニーズを踏まえながら、汎用性をもつプログラムの開発が可能となるように研究協力員

との共同体制をさらに推進する。研究協力員会議の持ち方・在り方の再検討を図るとともに、研究協力員を核とした校内外のネットワークづくりを支援したい。

ウ Web上にPC資料（PPT）等を載せて、普及のための工夫を進めたい。

## 3 次年度の見通し

### (1) 研究の内容

研究最終年度の平成17年度は、小学校高学年、中学校第3学年、高等学校第3学年においてプログラムを開発する。

### (2) 研究体制

次年度も直接参加及び間接参加の研究協力員を募り、共同研究の研究体制で授業実践プログラムの開発を進めていく。ただし、教育課程の中に位置付けられた実践とするため、また小学校においては1学期前半から授業実践を開始するため、平成16年度内に研究協力員の募集を開始する。

なお、間接参加研究協力員に関しては年間を通した募集とする。特に各学校で実施している授業について情報を収集・提供し、相補的にプログラムの充実を図る。また、養護教諭や主任層の積極的な参加を募り、健康・安全面や学校行事に関連した授業実践プログラムの開発の充実を目指していく。

### <参考・引用文献>

1) 子どものためのアサーショングループワーク  
～自分も相手も大切に作る学級づくり～

園田雅代 中釜洋子著

日精研心理臨床センター編（金子書房 2000年）

2) アサーショントレーニング 平木典子

日精研心理臨床センター編（金子書房 1997年）

3) ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校

國分康孝監修（図書文化 1999年）

4) アドベンチャーグループカウンセリングの実践

プロジェクトアドベンチャージャパン訳

（みくに出版 2002年）

5) 対立がちからに グループづくりに生かせる体験学習のすすめ プロジェクトアドベンチャージャパン訳

（みくに出版 2004年）

6) 動作とイメージによるストレスマネジメント教育

山中寛 富永良喜編著（北大路書房 2000年）

7) 子どものためのストレス・マネジメント教育

（竹中晃二編著 北大路書房 2000年）

学級活動・ホームルーム活動の内容・項目と授業実践プログラムの関連表（小・中・高）

<b>小 学 校</b> 学級活動の内容・項目 《授業実践プログラム》	<b>中 学 校</b> 学級活動の内容・項目 《授業実践プログラム》	<b>高 等 学 校</b> ホームルーム活動の内容・項目 《授業実践プログラム》
(1) 学級や学校の生活の充実と向上に関する こと	(1) 学級や学校の生活の充実と向上	(1) ホームルームや学校の生活の充実と向上
① 学級や学校における生活上の諸問題の解決 《関★》小2①「みんななかよく」 《主☆》小2③「話の聞き方・話し方」 《関★》小4①「3つの話し方」 《関★》小4②「わたしのお願い」 《関★》小4③「みんなで協力」	① 学級や学校における生活上の諸問題の解決 《主☆》中1②「学級生活のなかで（私たちにできること）」 《主☆》中2①「新たな学年を迎えて（学級開き）」 ② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理 《関★》中1②「学級生活のなかで（私たちにできること）」	① ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決 《主☆》高1②「クラスについて思うこと」 《関★》高2①「自尊尊重の表現方法（コミュニケーション技能の習得）」 《関★》高2②「自尊尊重の表現方法（問題解決のためのシナリオ作り）」 ② ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動
② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理	③ 学校における多様な集団の生活の向上	③ 学校における多様な集団の生活の向上
(2) 日常生活や学習への適応及び健康や安全に関する こと	(2) ア 個人や社会の一員としての在り方	(2) ア 個人及び社会の一員としての在り方 生 き 方
① 希望や目標をもって生きる態度の形成	① 青年期の不安や悩みとその解決 《関★》中2②「ストレスとその対処法について 学ぼう（第1時）」 《関★》中2③「ストレスとその対処法について 学ぼう（第2時）」	《主☆》高1②「クラスについて思うこと」 《主☆》高1⑤「出会い（学年・学級開き）」 《主☆》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」
② 基本的な生活習慣の形成 《主☆》小2②「きもちのよいあいさつ」	② 自己及び他者の個性の理解と尊重 《主☆》中1①「自分を知らう（人と個性）」 《関★》中1③「有意義な冬休みにしよう」 《関★》中2①「新たな学年を迎えて（学級開き）」 《関★》中2②「ストレスとその対処法について 学ぼう（第1時）」 《関★》中2③「ストレスとその対処法について 学ぼう（第2時）」	① 青年期の悩みや課題とその解決 《関★》高1④「ジェンダーってなに？」 ② 自己及び他者の個性の理解と尊重 《主☆》高1①「私の就きたい職業は・・・」 《主☆》高1⑤「出会い（学年・学級開き）」 《主☆》高2①「自尊尊重の表現方法（コミュニケーション技能の習得）」 《主☆》高2②「自尊尊重の表現方法（問題解決のためのシナリオ作り）」 《主☆》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」
③ 望ましい人間関係の育成 《主☆》小2①「みんななかよく」 《関★》小2②「きもちのよいあいさつ」 《関★》小2③「話の聞き方・話し方」 《主☆》小4①「3つの話し方」 《主☆》小4②「わたしのお願い」 《主☆》小4③「みんなで協力」	③ 社会の一員としての自覚と責任	③ 社会生活における役割の自覚と自己責任 《関★》高1②「クラスについて思うこと」
④ 学校図書館の利用	④ 男女相互の理解と協力	④ 男女相互の理解と協力 《関★》高1③「デートDVってなに？」 《主☆》高1④「ジェンダーってなに？」
⑤ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成	⑤ 望ましい人間関係の確立 《関★》中1①「自分を知らう（人と個性）」 《関★》中2①「新たな学年を迎えて（学級開き）」	⑤ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立 《関★》高1③「デートDVってなに？」 《関★》高1④「ジェンダーってなに？」 《関★》高1⑤「出会い（学年・学級開き）」 《主☆》高2①「自尊尊重の表現方法（コミュニケーション技能の習得）」 《主☆》高2②「自尊尊重の表現方法（問題解決のためのシナリオ作り）」 《関★》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」
⑥ 学校給食と望ましい食習慣の形成	⑥ ボランティア活動の意義の理解	⑥ ボランティア活動の意義の理解
(2) イ 健康や安全	(2) イ 健康や安全	(2) イ 健康や安全
① 健康で安全な生活態度や習慣の形成 《主☆》中1③「有意義な冬休みにしよう」 《主☆》中2②「ストレスとその対処法について 学ぼう（第1時）」 《主☆》中2③「ストレスとその対処法について 学ぼう（第2時）」	② 性的な発達への適応	⑦ 国際理解と国際交流
② 性的な発達への適応	③ 学校給食と望ましい食習慣の形成	(2) イ 健康や安全
③ 学校給食と望ましい食習慣の形成	(3) 学業生活の充実、将来の生き方、進路の適切な選択	① 心身の健康と健全な生活態度や習慣の確立
④ 学ぶことの意義の理解 《関★》中1③「有意義な冬休みにしよう」	① 学ぶことの意義の理解 《関★》中1③「有意義な冬休みにしよう」	② 生命尊重と安全な生活態度や習慣の確立 《主☆》高1③「デートDVってなに？」
⑤ 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用 《主☆》中1③「有意義な冬休みにしよう」	② 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用 《主☆》中1③「有意義な冬休みにしよう」	(3) 学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定
⑥ 主体的な進路の選択と将来設計	③ 選択教科等の適切な選択	① 学ぶことの意義の理解
⑦ 主体的な進路の選択と将来設計	④ 進路適性の吟味と進路情報の活用	② 主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用
⑧ 主体的な進路の選択と将来設計	⑤ 望ましい職業観・勤労観の形成 《関★》中1①「自分を知らう（人と個性）」	③ 教科・科目の適切な選択
⑨ 主体的な進路の選択と将来設計	⑥ 主体的な進路の選択と将来設計 《関★》高1①「私の就きたい職業は・・・」	④ 進路選択の理解と進路情報の活用 《主☆》高1①「私の就きたい職業は・・・」
⑩ 主体的な進路の選択と将来設計	⑦ 望ましい職業観・勤労観の確立	⑤ 望ましい職業観・勤労観の確立
⑪ 主体的な進路の選択と将来設計	⑧ 主体的な進路の選択決定と将来設計 《関★》高1①「私の就きたい職業は・・・」	⑥ 主体的な進路の選択決定と将来設計 《関★》高1①「私の就きたい職業は・・・」



## ◎指導主事の個人研究

### 1 小学校算数科

子どもたちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」を実施するための研究

＜1年次(H15)基礎研究・2年次(H16)実践研究＞ …………… 82

I 研究の趣旨	82
II 研究の概要	82
1 研究の基本的な考え方	82
2 1年次研究の成果と課題（詳細はH15研究紀要参照）	82
3 2年次(H16)研究の概要	82
III 2年間の研究のまとめ	85

### 2 中学校英語科

リスニング力の向上を目指した速聴学習の実践的研究

ー学習者の語彙サイズとの関連を通してー …………… 86

I 研究の趣旨	86
II 研究調査の概要	86
1 学習者の実態調査	86
2 速聴学習の実践	86
3 学習効果の分析	87
4 効果的指導法の考察	88
III 研究のまとめと今後の課題	89
1 成果	89
2 今後の課題	89

### 3 高等学校芸術科（美術）

映像メディア表現における3DCG作品の制作に関わる研究と先進校での実践例について

I 研究の趣旨と概要	90
II 映像メディア表現の学習指導要領における位置付け	90
III 3DCGの概念	90
1 画像処理、イラストレーション用ソフトウェア	90
2 3DCG用ソフトウェア	91
IV 3DCGの制作の流れ	91
1 事前準備/設定とスケッチ・ストーリーボード	91
2 PCを使用した制作/3DCG用のソフトウェアを使用した制作	91
3 モデリング（物体の制作）	91
4 表面材質の設定（質感の設定）	91
5 シーン設定（カメラの設定と照明）	92
6 レンダリング（画像の描出）	92
7 画像合成用のソフトウェアを使用した制作	92
V 先進校での指導事例について（福島県立福島西高等学校デザイン科学科CGコースの卒業制作）	92
1 西高校デザイン科学科CGコースの教育課程	92
2 作品例（卒業制作の一部）	93
3 指導上の特色	93
VI 考察	93
1 造形教育の視点から	93
2 総合的な学力という面から	93
3 まとめ	93

# 子どもたちの「確かな学力」の向上を目指し、「個に応じたきめ細かな学習指導」を実施するための研究(小学校算数) 1年次(H15)基礎研究・2年次(H16)実践研究

指導主事 桑名俊之

## I 研究の趣旨

算数・数学科における「確かな学力の向上」は本県の最重点課題であり、特に16年度にはその解決のために「算数・数学パワーアッププラン」が策定された。その解決に向け、県内全小中高各校では、実質的な成果を上げるための指導が強く望まれている。これまで本センターの研究においても、各校に資するために、学力到達度ごとにつまずきの実態を把握し、学習指導の改善の在り方について具体策を示してきた。この研究をさらに小学校算数段階に進めるために本主題を設定した。

## II 研究の概要

### 1 研究の基本的な考え方

研究を進めるにあたっては、各校の日常の教科指導の考え方をベースに、さらに一步踏み込んだ視点や工夫点を加えることを研究の基本とした。

#### (1) 「確かな学力」の捉えについて

「確かな学力」の捉えについては、文部科学省で捉えている8つの学力とする。さらに、「確かな学力」を単元レベル・授業レベルで捉える。

#### (2) 「確かな学力」を捉える観点について

「確かな学力」を捉える観点は、観点別評価の4観点とする。なお、1単位時間における評価は次時以降の指導改善のための評価として重きを置き、学習のひとまとまり(単元や小単元など)で評価する。

#### (3) 学力の実態把握・分析の方法について

「学習のつまずき」は、一人一人の学力到達度などによって異なるを考える。そこで、実態は学力到達度層(以下「学力層」と表記)に分けて詳細に把握・分析し、改善のポイントを明確にして指導を行う。

#### (4) 指導改善に資するための具体例の例示

### 2 1年次研究の成果と課題(詳細はH15研究紀要参照)

県内全小学校5年生で実施した教研式標準学力検査(以下「NRT」と表記)の研究協力校の結果を

5つの学力層に分けて分析を進めた。さらに特に正解率が低かった学習項目を選び出して算数学力診断テストを実施し、つまずきの傾向を検証した。

[本研究で行ったNRT分析のための5つの学力層の設定]

分析の5層	A層	B層	C層	D層	E層
NRT偏差値	～63	～55	～48	～40	39～

成果は、学力層別の分析により①学力層に応じた指導の重点を明確にできる、②すべての学力層に対する指導の要点を明確にできる、以上について「平行四辺形と三角形の面積」を例に示した。上述を授業で検証し、その成果を具体的に示すことが2年次の課題となった。

### 3 2年次(H16)研究の概要

#### (1) 研究内容・方法

##### ① 学力層のつまずきの傾向把握

NRT結果の経年比較

##### ② 単元や授業レベルの実践事例の例示

研究単元における実践

#### (2) 研究の実際

##### ① 学力層のつまずきの傾向把握

昨年度研究と同様の手法でNRT結果の経年比較を行った。なお本年度は、研究協力校2校5年生184名のNRT(H15)の結果を分析・考察するとともに、本県全体のNRT結果〔県全体のデータはサンプル抽出5段階評定で層別に分けた〕も参考にした。

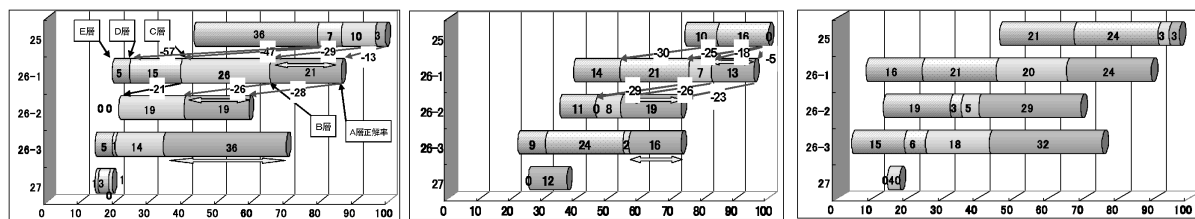
以下数量関係領域「割合・百分率」を例につまずきの傾向を述べる。

##### ア 分析(グラフ参照)

・26-1百分率の求め方、26-2もとにする量、26-3割合にあたる量の各問題において、A層とB層に正解率の差が20%程度ある。

・25百分率への換算と26-1との正解率の差は、階層が下がるごとに差が開く傾向がある。また、26-1と26-2との差は、A～C層の各層で30%に近い低下

【A:H14NRT・協力校3校 292名の結果】 【B:H15NRT・協力校2校 194名の結果】 【C:H15NRT・県内全校データのサンプル抽出\*】



25と26-1の正解率差

	正解率	A層	B層	C層	D層	E層
14年度	-33	-13	-29	-47	-57	-24
15年度	-25	-5	-18	-25	-30	-35

26-1と26-2の正解率差

	正解率	A層	B層	C層
14年度	-19	-28	-26	-21
15年度	-19	-23	-26	-29

率を示している。26-3では、年度により多少の数値的な違いはあるが、26-2と同傾向である。27文章題(百分率の立式)はA層でも正解率が低い。

・県のデータでは、各問題においてH15の2校のつまずきの傾向を押し広げたものとなっている。

〔県全体の分析で用いた5段階評定と偏差値〕

5段階評定	5	4	3	2	1
NRT偏差値	~65	~55	~45	~35	34~

## イ 分析によるつまずきの考察

小数で表した割合を百分率(%)に換算する形式的な処理は定着しやすい。しかし、割合・百分率の学習の基礎・基本となる立式の理解や技能は「比較量」、「基準量」を求める場面で全体的につまずきがでる。更にB層以降に大きくつまずく。以下考えられる指導上のポイントをキーワードで挙げる。「B層以下」、「基準量、比較量、割合の関係を具体例で把握」、「線分図」、「部分と部分・部分と全体の数量関係の解釈」、「円グラフの目盛りの読みとり」。

## ② 研究単位における実践

- ・研究単位 小5算数「百分率とグラフ」
- ・実施対象 第5学年1クラス31名
- ・実施時期 3学期(1・2月)

### ア 実施内容

#### (ア) 単元指導計画の作成

学習指導要領解説や国立教育政策研究所の評価規準(例)を参考に、領域や単元のねらいを踏まえた。また、各校で活用している教科書指導書にある単元指導計画をベースに、新たに6つの項目(「本単元で向上させたい『確かな学力』」、「小単元の学習内容の要点」、「単位時間における『確かな学力』」

「基になるもの」、「本時の学習課題」、「本時のまとめ」)を加えた。

#### (イ) 事前テスト

全体と個別のレディネスを把握するために自作の事前テストを実施した。テスト結果により児童を3つの学力層に分け、単元指導の配慮事項を明らかにした。層を分ける基準と特徴は以下の通りである。

A層(9名/31名, 29%)：正解率が80%以上、以下の大問4をすべて正解している層。自分の考えを活発に述べ、相手の考えを自分なりに解釈する。学習したことを基に、新たな課題の解決に意欲的に取り組む。

- 4 25mの重さが4kgの針金があります。
- (1) この針金1mの重さは何kgですか。
  - (2) この針金1kgの長さは何mですか。

B層(14名/31名, 45%)：正解率が40%以上80%未満。以下の大問3をすべて正解している層。与えられた課題に、こつこつと地道に取り組むことができる。基礎力はあるが自分の考えを言葉や図で表現することが苦手である。

- 3 (1) すずむさんの体重は32kgです。  
弟の体重は、すずむさんの体重の0.8倍です。  
弟の体重は何kgですか。
- (2) 大、小2本の油を入れるびんがあります。  
大きいびんには12ℓ、小さいびんには5ℓ入ります。  
大きいびんに入るかさ、小さいびんに入るかさの何倍ですか。

C層(8名/31名, 26%)：正解率が40%以下。基礎学力に不安がある。基本・基本の定着に重点をおいた指導がまず必要である。

事前テストから以下を指導上の配慮事項とした。

- (全層) 比較する2量を明確にする、関係把握がしやすいように学習の導入段階では扱う数値に配慮する、問題解決後の答えを解釈させる。学習の文脈が通るように「学習課題とまとめ」の整合性をとる。  
(B層) 「基準量」、「比較量」をその都度確認する。  
(C層) 数値の大小関係をその都度確認する。

#### (ウ) 検証授業1：単元の導入

本時の目標を「2量を比べる方法を差や商で考えることができる」、「割合の意味と割合を求める式を理解することができる」にした。全層への配慮事項として「導入問題」や「学習課題とまとめ」に工夫

した。また本時における「確かな学力」を、思考力（基準量を1とみて、比較量の大きさを考える）と知識（割合は基準量を1とみて、比較量の大きさを表したもの）とした。

### ⑦ 実際の授業

バスケットボールのフリースローの投げた回数と入った回数から同じうまさを複数考え、割合の意味を学び取る学習が行われた。誤答を生かし、この場合2量を差で比べるのは意味がなく、商で比べる必要があることを導いた。さらに、立式では「基準量」と「比較量」を逆にした場合も全体考察の舞台にのせた。基準量を自分で決めて2量を比べる見方が自然な流れの中で児童から見い出された。

### ⑧ 授業の考察

学習後の感想：A層：「どれが比べられる量かがわかった」、B層：「割合という言葉は知っていたけど、意味は始めて知った」、C層：「もとにする数がわかれば、答えはわり算で計算すればよいことがわかった」など学習の成果があげられた。

児童の発言やノート、授業後の感想などから本時の目標が十分に達成され、さらには広まり深まりのある考え方や知識が獲得されたと考える。しかし、B・C層から「割合はわかったが、関係がよくわからなかった」などの感想もあり、「割合の意味」について次時以降でも振り返ることを確認した。

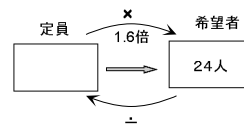
### (エ) 検証授業2：単元の中盤

本時の目標を「既習の『比較量=基準量×割合』をもとに比較量の求め方を考えることができる」、「比較量、割合から基準量を求めることができる」にした。また、NRT結果の経年比較で述べたB層以降のつまずきへの配慮として、図と式から関係式の意味を把握させるために導入問題を差し替え、扱う数値を容易にした。なお、本時における「確かな学力」を思考力（既習の問題場面と関連づけ、比較量を求める式から考える）、表現力（基準量を1として、比較量、割合を表す）、技能（図を用いて数量関係を捉える）とした。

### ⑦ 実際の授業

基準量を求める立式で「比較量×割合」と「比較量÷割合」が出され、それぞれを解釈する学習が進められた。基準量を全体で確認した後、図をもとに式の検

討が行われた。「□を使って式を2つつくった。」の発表から、大半の児童はこれまで議論してきたことの意味を理解し、腑に落ちた状態となった。



### ⑧ 授業の考察

学習後の感想：A層：「もとにする量」、「比べられる量」、「割合」を使う計算は上図が関係していると思った」  
B層：「図を見るとわかりやすい。新しい公式が分かった」などがあげられていた。

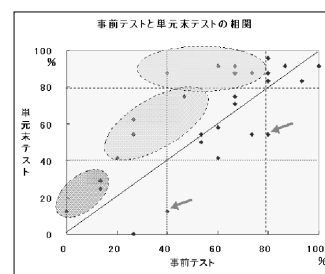
発言やノート・感想などから、数量関係を把握するためのその児童なりの図の活用は下位層でも図と式の関係づけに役立ったことが分かった。しかし授業後、A層から「もとにする量が、なぜ比べられる量÷割合で求まるのか分からなかった。」の感想もあり、「図と式」の関係を今後も補うようにした。

このように各層への配慮事項を明確にして単元の学習が進められた。

### (オ) 単元末テスト

自作の単元末テスト結果を事前テストと同じ基準(A層80%以上、B層40%以上)で分析した。

好ましい変容がみられたのが11名。その中で上位層へ移行した児童が9名であった。逆に、層が下降した児童が2名。この2名につ



いても詳細に下降の原因を分析した。

結果は事前テストとの比較から学習の成果が大いに表れていると考えられる（上グラフ参照）。

事前・事後の各層人数比較 層別数(%)

	A層	B層	C層
事前テスト	9(29%)	14(45%)	8(26%)
単元末テスト	13(42%)	12(39%)	6(19%)

層の上昇：B→A(5名)、C→A(1名)、C→B(3名)

下降：A→B(1名)、B→C(1名)

そこで、上述2名への配慮も含め、このテスト結果・考察から考えられる各層に必要な補充・発展の学習内容を以下のように捉えた。

A層：日常生活における2量の関係把握、解釈  
B層：「基準量」、「比較量」、「割合」の関係式の理解と統合、関係図の活用  
C層：割合の意味、表やグラフの作成、全体と部分、部分同士の関係解釈

(カ) 検証授業3：単元末テスト後の補充・発展

単元末テスト結果によりこの学級の児童に必要な補充・発展の学習を以下の視点で構想した。

①学習内容を絞り、児童選択のコース別学習を行う。その際、児童自身が必要な学習内容を把握できるようガイダンスを行う。②時間確保のため70分授業とする。③協力校の実情を考慮し、1コースに指導者1名の2コースとする。

各コースのねらいを次のように設定した。

Aコース：学び直し、補充のための学習に取り組む  
割合の意味がわかる。表やグラフを作成することができる。表やグラフから全体と部分、部分同士の関係をつかむことができる。数量関係を図で表現し、その図を用いて関係式をたてることができる。  
Bコース：深化、発展のための学習に取り組む  
日常生活における2量の関係を割合を用いて把握し、その結果を考察することができる。

⑦ 実際の授業

ガイダンス：Aコースのねらいに関連する問題を例に、どのような考え方や知識・技能が必要であったかを確認していった。その後、各コースのねらいを説明し児童自身にコースを選択させた。コース選択に迷った児童へはコースのねらいのみを説明し、選択の判断は児童に任せた。

Aコース：基準量や比較量、割合はどれかを明確にさせることに重点をおいた指導・支援が行われていた。C層の児童も相談しながら学習をすすめた。

Bコース：児童は、「30%」と「30%引き」の違いに戸惑っていたが、個別に考えの修正を支援した。さらに、割引額と割引率を比較して「30%引きの店と100円均一の店とではどちらが得か」の考え方がまとめられた。

④ 授業の考察 [3つの学力層とコースの選定状況]

ガイダンスに おいて、出題の 意図や解決に必	単元末テスト結果 コース学習	A層 (人)	B層 (人)	C層 (人)
	Aコース(学び直し・補充)	1	10	4
	Bコース(深化・発展)	10	1	0

必要な知識や技能、考え方を児童がよく理解したことにより、適切にコース選択がなされた。

授業後の感想に次のような記載が見られた。

Aコース：(A層)：間違ったところが理解していなかったから選んだ。理解できなかった問題がわかったのとでもよかった。(B層)少しはわかっていただけ、図をかくのがなかなかできないのでAにした。図をかくのにも慣れ、式も結構早くかけるようになった。(C層)：少し難しかったけど教えてもらって分かった。少しは楽になってBコースも少しできた。  
Bコース：(A層)プリントの問題は簡単だった。がんばれば僕もこんな問題が作れるかも…。「どちらがお得か？」の問題が難しかったが、割合の問題もだんだんできるようになってきた。

Aコースを選択した15名中14名は、Aコースの学習を終了させ、Bコースへ進んだ。その内の11名は「%引きの問題」を解決していた。授業後授業者からも満足感を手応えとして感じたとの感想があった。以上から、本時の学習がすべての児童に意味のある有意義な学習になったと考える。

(3) 本年度研究の成果と課題

① NRT結果の経年比較によりつまずきの傾向が捉えられた。教科書の類題や形式的な技能はD・E層で、一方、活用場面や基本的な問題でも提示位置や条件を少し変えるとB層でつまずく傾向が強い。

② 研究単元で示した一連の取り組みは、各層の「確かな学力」を図るための具体的方策の一例となる。

なおこの成果は、授業者や授業検討に関わった研究協力員の先生方の教材観の深さや指導観の確かさに因るところが大きいことも改めて強く感じた。

③ さらに補充が必要である児童が明らかになり、この児童への指導・支援が課題として残る。児童自身が自主的に学習できるような家庭学習を含めた学習指導が必要であると考える。

Ⅲ 2年間の研究のまとめ

「個に応じたきめ細かな学習指導」を実施するための出発点は、学力の詳細な実態把握にあり、児童が学ぶ学習内容に対する教師のより深い教材解釈と確かな指導観が基盤となる。今回の実践例をさらに自校化して具体的に組み込んでいけるような支援に向けた研究を進めたいと考える。

<参考文献>

- 1) 福島県教育センターカリキュラム研究チーム研究報告書 (福島県教育センターWeb 2003年)
- 2) 平成13年度教育課程実施状況調査報告書 (国立教育政策研究所 東洋館出版社 2003年)
- 3) 東京書籍教科書算数5年(上・下)・同指導編・研究編・資料編 (東京書籍平成14年度版)
- 4) 啓林館教科書算数5年(上・下) (啓林館平成14年度版)他



# リスニング力の向上を目指した速聴学習の実践的研究

## —学習者の語彙サイズとの関連を通して—

指導主事 黒 須 智 則

### I 研究の趣旨

「英語が使える日本人」の育成のための行動計画(H. 15. 3. 31文科省)には、国民全体に求められる英語力は中学校卒業者の平均が英検3級程度で「挨拶や応対、身近な暮らしに関わる話題などについて平易なコミュニケーションができる」という目標が具体的に示されている。

学習指導要領では「話し手や聞き手などの意向などを理解できる」、「自分の考えなどを話す、書くことができる」という実践的コミュニケーション能力の育成を謳っている。

また、平成18年度大学入試センター試験へのリスニングテスト導入に伴い、実践的な言語運用能力の育成が重視されてきている。

一方、本県の学力実態調査によれば、「聞くこと」の領域別通過率が全国のそれより下回っているという現状にある。リスニング力は実践的コミュニケーション能力の根幹となるものであり、ナチュラルスピードの音声英語に慣れさせ、その苦手意識を払拭することが課題であると考える。

そこで、リスニング力の向上を図るための手立てとして速聴学習を導入し、その有効性と語彙サイズとの関連を探るために上記研究テーマを設定した。

### II 研究調査の概要

#### 1 学習者の実態調査

##### (1) 語彙サイズテスト

学習者の語彙力を測定するひとつの指標として「日本人学習者のための語彙サイズテスト」(望月, 1999)を用い、中学校3年生144名を対象に語彙レベル4000語までを測定するテストを実施した。

##### (2) リスニングテスト

学習者に対し、英検3級のリスニングテストの過去問題を事前と事後に実施し、リスニング力の変容を測定する指標とした。

##### (3) 英語学習への意識調査

英語学習の実態をもとに、リスニング力育成のための視点、及び指導の改善点を探ることとした。

##### ① 英語のリスニングにおける困難点

ア「速すぎて、聴き取れない」(35%)

イ「語句などの連語になると音が変化して、聴き取れない」(32%)

ウ「文字の助けが無いと不安」(16%)

エ「ストレスやリズムが日本語と違う」(13%)

上記ア、イ、エの学習者(80%)がリスニングにおいて困難と感じている状況を改善するには、音声面の学習スキルが一層必要と考えられる。

##### ② 英語の家庭学習の内訳

ア「英文を読む(黙読・音読)」(49%)

イ「英文を書く(新出単語・本文)」(32%)

ウ「英語音声聞く、音声後追い音読」(19%)

上記ア、イの学習者(81%)は本文の写しと訳、テキストの音読といった「文字を重視した学習スキル」型の家庭学習を行っている。一方、上記①の調査結果からも「音声を重視した学習スキル」を高める場と時間が、課外学習において圧倒的に不足していることがうかがえる。

### 2 速聴学習の実践

#### (1) 学習プログラムの検討

学習者の音声面における学習スキル不足を考慮し、「速聴教材」と「シャドウイング(音声模写による後追い音読)」を併用することにより、英語の自然な速さや英語独特のリズム感に慣れ親しめるように、家庭学習の中に位置づけた。

また、音声英語による学習に馴染みのない上記①ウ、②ア、イ等の学習者への配慮から、音声だけでなくテキストを見ながらシャドウイングを実施することにした。

#### (2) 学習教材の作成

##### ① 教材テキスト

教科書 (NEW HORIZON English Course3)の本文

## ② 速聴教材

1倍速の聴き取りとシャドウイング, 速聴とシャドウイングをそれぞれ組み合わせた二つの統制群を設け, 学習効果の違いを検証することにした。

そこで, 1倍速のCDと速聴(1倍速→2倍速→3倍速→1倍速)のCD教材の2種類を作成し, A群, B群それぞれの統制群の学習者に配布した。

3倍速については聴き取りが困難であるが, 1倍速→2倍速→1倍速よりも, 1倍速→2倍速→3倍速→1倍速という学習の流れの方が, 高速道路から一般道に出たときの速度のゆったり感(インターチェンジ効果)がより効果的に体感できると考えた。

## (3) 視聴音読学習の実際

### ① 学習の大まかな流れ

教材文は, 学習者が授業で既に学習した教科書の本文を用い, 新出単語や語句, 内容や文法事項については理解していることを前提に進めた。

また, 学習の進め方については, 各統制群ごとにオリエンテーションを行った。学習時間は, 全統制群とも20分程度, 約2ヶ月間実施した。

### ② 家庭学習の進め方

速聴教材を用いた視聴音読の家庭学習が, 学習者のリスニング力にどう影響するかを見るために, 次の2つの統制群をさらに4つに分けた。

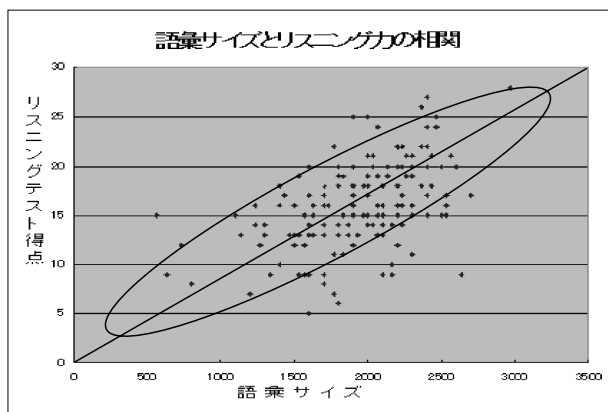
A1: 1倍速→1倍速→1倍速→シャドウイング→書き取り
A2: 1倍速→1倍速→1倍速→シャドウイング→練習
B1: 1倍速→2倍速→3倍速→シャドウイング→書き取り
B2: 1倍速→2倍速→3倍速→シャドウイング→練習

A群は1倍速のCDの聴き取り練習とテキストによるシャドウイングを, B群は1倍速→2倍速→3倍速の聴き取り(速聴)練習と1倍速のテキストによる・シャドウイングを実施した。

また, シャドウイングによる視聴音読のまとめとして, A1, B1群はテキストを書き写し, シャドウイング練習の定着を図ることとした。また, A2, B2群はシャドウイングの練習をさらに繰り返し, 音声面のスキルの強化を図ることとした。

## 3 学習効果の分析

### (1) 語彙サイズとリスニング力の相関

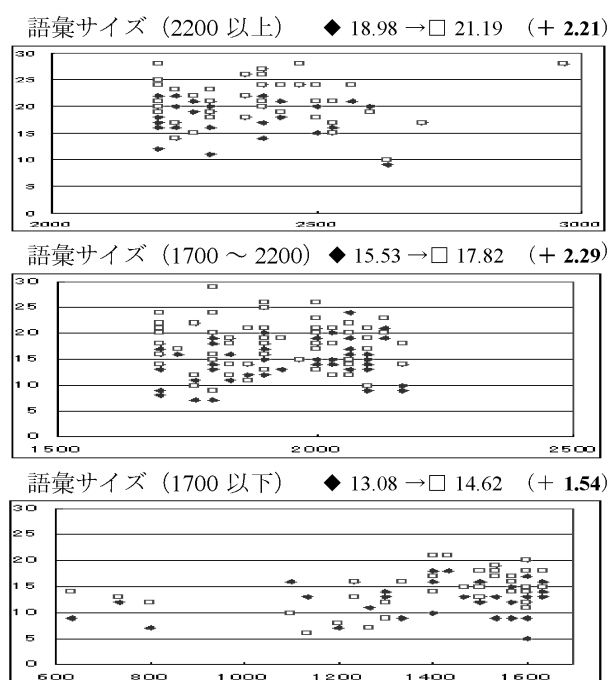


上記のグラフは, 語彙レベル4000の語彙サイズテストと英検3級のリスニングテスト(事前)の関係を一つの指標として, 語彙サイズとリスニング力におけ相関傾向を捉えてみたものである。その結果, 語彙サイズとリスニング力には, 「かなりの相関関係(相関係数0.49)」があると考えられる。

また, 約2ヶ月後の測定では, 相関係数が0.51とさらに高い数値を示した。このことから, 視聴音読学習に語彙サイズとリスニングテストの得点との相関関係を高める効果があったことが推測される。

### (2) 語彙サイズによる三層分析

事前◆と事後□のリスニングテストの得点の平均点を指標とし, 語彙サイズを下記の三層に分け, リスニング力に関わる効果について考察した。



語彙レベル1700以上の学習者は、リスニングテストの得点平均の伸びが大きく、語彙レベル1700以下の学習者より、視聴音読学習が効果的であったと考えられる。

### (3) 学習方法の違いによる差異

#### ① 1倍速学習と速聴学習

	相関傾向 (相関係数)	リスニングテストの得点(平均)
A群	0.45→0.43 (-0.02)	15.8→17.5 (+1.7)
B群	0.54→0.59 (+0.05)	16.3→18.7 (+2.4)

A群(1倍速学習)は、語彙レベルとリスニングテスト得点の相関傾向が弱く、逆にB群(速聴学習)では相関傾向の高まりを示している。

#### ② 書き取りによる定着学習と視聴音読中心学習

	相関傾向 (相関係数)	リスニングテストの得点(平均)
1群	0.51→0.53 (+0.02)	15.9→17.6 (+1.7)
2群	0.47→0.50 (+0.03)	16.1→18.6 (+2.5)

1群(書き取りによる定着・補充)と2群(視聴音読中心)の両群とも、語彙レベルとリスニングテスト得点の相関はプラスの傾向にあり、顕著な差異は見られない。2群のリスニングテストの得点の伸びが1群より、若干高い数値を示している。

#### ③ 4つの統制群の差異

	相関傾向 (相関係数)	リスニングテストの得点(平均)
A1	0.44→0.42 (-0.02)	15.6→16.8 (+1.2)
A2	0.46→0.40 (-0.06)	16.0→18.3 (+2.3)
B1	0.60→0.62 (+0.02)	16.2→18.5 (+2.3)
B2	0.51→0.62 (+0.11)	16.3→18.9 (+2.6)

本研究の学習の実施期間が2ヶ月弱であったためか、統制群間に顕著な有意差は認められない。しかし、B2群(1倍速→2倍速→3倍速→テキスト・シャドウイング(1倍速)→シャドウイング練習)が、他の3群と比較して語彙サイズとリスニングテストの得点との相関傾向が最も強く、リスニングテストの得点平均も高い結果が得られた。

すなわち、単語や語句、文法及び内容について既習のテキスト文を用い、速聴学習と視聴音読の組合せを事後の学習として位置づけることで、これまで不足がちであった音声面の学習スキルが補充され、リスニング力の改善に効果があったと推測できる。

### 4 効果的指導法の考察

### (1) リスニングにおける学習者の実態

#### ① リスニングにおける未知語への対応

ア 「わかる単語や語句から推測し、大意をつかむ」(75%)

イ 「わかる単語や語句だけを聴いている」(18%)

ウ 「わからない単語や語句が気になって以後の英文が聴き取れない」(6%)

アの学習者(75%)は、語順や品詞、文法・慣用表現、場面や文脈、背景知識等から未知語の意味を推測して内容の概要把握を行っている。このように自分の言語知識の足りないところを埋め合わせる能力が、リスニング力を支えているといえる。

一方、上記イ、ウの学習者(24%)は語彙の影響を多く受けている。特に、イの学習者(18%)は音声認知力の精度を向上させ、文字による語彙知識を、音声による語彙知識に一致させる必要がある。

#### ② 実践的コミュニケーション能力

ALTと直接、英語で話したことがないという学習者は全体の28%であった。その主な理由の内訳は、下記の通りである。

ア 「答え方が分からない」(50%)

イ 「英語が聴き取れない」(23%)

ウ 「緊張するから」(12%)

上記イ、ウの学習者(35%)は音声面での学習スキルを高め、ナチュラル・スピードの音声英語に対する苦手意識を無くすことが大切である。

一方、ア(50%)の学習者の存在は、単なる視聴音読学習だけでは、リスニング力の向上に結びつかないということを示唆している。つまり、上記①のアの学習者のように、英語を理解しようとする際の音声認知力以外の能力の育成が大切である。

### (2) リスニングテストの正答分析

#### ① ヒアリング力(音声認知力)の向上

正答率 87.5% → 92.4%

A: ※ 英文省略

B: ※ 英文省略

A: Great! How long does it take?

1 Wait for me.

2 Tickets are cheap.

3 About 30 minutes.

正答率が比較的高い問題は、左例のように対話文の中のキーワードを聴き取ることで正答が特定できるものである。事後テストでは

さらに正答率が上がっている。

このことから、キーワードとなる単語や語句を聴き取るヒアリング精度の向上が推測できる。

## ② 内容を推測する力

<b>正答率 53.5% → 74.3%</b> A: Thanks for going shopping for me. B: You're welcome. Here are the things you wanted. A: Where are the eggs? You bought them, didn't you? <b>1 I can't do that.</b> <b>2 Sorry I forgot.</b> <b>3 I don't like shopping.</b>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

左例の対話の場合は、語彙だけでなく、慣用表現や文法事項等の既習事項をもとに、未知語の類推や文脈を手がかりとして

内容理解が図られる。音声認知力が向上することで、既習事項の運用が効果的に機能して、内容の聴き取りの精度が高まったと考える。

## (3) 誤答分析とリスニング指導の課題

### ① 場面に即して文脈や論旨を聴き取る力

<b>誤答率 63.3% → 53.9%</b> A: The movies was much too long. B: Yeah, but it was a good story. A: Really? I thought it was boring. <b>1 No, I'm not.</b> <b>2 It's not long.</b> <b>3 I don't agree.</b>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

左例は、若干正答者が増えたものの、相変わらず誤答率が50%を越えている。対話文の論旨を聴き取り、文の流れに沿って

適切な解答を選ぶ問題である。論理的思考が要求されており、文脈が正確に聴き取れないと、混乱しやすい錯乱肢が意図的に設けられている。

そこで、論旨は何かを考え、適切な応答ができるように、場面や文脈を意識した言語活動を工夫したり、論旨の読み取りを問う評価問題を意図的に与えるなどの配慮が必要である。

### ② リスニング力を支える実践的な語彙力

<b>誤答率 60.4% → 65.7%</b> A: Are you throwing away these books? B: Yes. They're old and I don't need them anymore. A: May I have some of them? <b>1 Go ahead.</b> <b>2 I'll keep them.</b> <b>3 There aren't any.</b>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

誤答者が増えた左例のケースは、文脈をつかみ、内容理解をするだけでは正答に結び付かない錯乱肢が設けられている。つまり、ここでは多意義語である基本動詞に対する語彙知識や、「許可を求める」という「言語の働き」とそれに伴う適切な連語や慣用表現の知識・理解を問うている。

そこで、新出語や慣用表現等の理解に際しては、口頭訓練や型にはまった言語活動をするだけでなく、文脈に沿って生徒が適切な判断や意思を働かせ、実践的コミュニケーションが図れるようなタスク活動を工夫することが大切であると考える。

## III 研究のまとめと今後の課題

### 1 成果

#### (1) 学習者の語彙サイズとリスニング力の相関

速聴と視聴音読学習は、語彙サイズとリスニングテストの得点の相関を強める効果が確認でき、音声語認知スピードの調整と連語による音変化認識能力の育成のための指導の可能性が見い出せた。

#### (2) リスニング力を高める指導の在り方

これまでのリスニング指導は、ヒアリングを中心として、単に話し手の意向を理解することにとどまっていた。リスニング力を、受け手の適切な思考・判断によるアウトプットまでの一連の流れを支える総合力ととらえる必要がある。そこで、音声によるインプットから、アウトプットまでを視野に入れたリスニング指導の工夫改善の重要性が分った。

### 2 今後の課題

#### (1) 速聴学習の効果的な導入の在り方

##### ① 速聴学習の効果的な組合せの試行

- 1倍速→1.5倍速→2倍速→1倍速シャドウイング
- 2倍速→2倍速→1.5倍速シャドウイング
- 1.5倍速→1倍速→0.8倍速シャドウイング

##### ② 適切な実施期間(半年～1年)

#### (2) リスニング力を支える諸要素を育む指導

音楽を聴き取る識別能力と子音、母音の正確な発音、語の連結による音変化の認識能力、ナチュラル・スピードの音声認知力(強勢、イントネーション、ポーズ等を含む)を育成する具体的指導が必要である。

#### (3) 効果的な語彙指導の在り方

断片的な「知識としての語彙」を注入する指導にとどまらず、ひとまとまりのパスセージの中で、語や語句の意味をとらえたり、使用場面を考慮しながら、用いられている慣用表現、言語の働きや文法事項等が理解できるよう指導法の工夫が必要である。

<参考・引用文献>

- 1) 語学教育研究所紀要12号(望月正道著 1999/1/16)
- 2) 2004年版英研3級全問題集 (旺文社)
- 3) 英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ 英語リスニング論 (河源社)

# 映像メディア表現における3DCG作品の制作に関わる研究と 先進校での実践例について

指導主事 片 平 仁

## I 研究の趣旨と概要

CGによる作品制作は高い関心を持たれている分野である。特に3DCGは、児童・生徒が映画やゲーム等でリアルタイムに体験している。そのために児童・生徒の3DCGの制作に対する興味・関心のスケールは非常に高い。

平成10年12月告示の中学校学習指導要領、同11年3月告示の高等学校学習指導要領に、美術における表現に関わる新分野として「映像メディア表現」が導入された。これによって3DCGの制作を美術の時間に実施する道が拓かれた。

しかし、現状では、教育現場での実践例は少ない。

その理由は、二点に集約できる。第一点は、3DCGを制作するための施設・設備が十分でない点である。これは、3DCGを授業で実施するために必要なハード・ソフトを所有する学校が非常に少ないという問題である。第二点は指導者の問題である。これは、機器・機材を使いこなす授業を実際に実施できる人材があまりいないという問題である。

以上の問題は、美術教師が3DCGの概念や制作方法を十分に理解し、教材としての可能性を確信することにより解決の糸口が開かれると考えられる。

そこで、本研究においては主に教育現場で3DCGによる作品を制作するために必要な事項についての基礎的な研究を行う。次に先進校での指導事例を示し、この分野の持つ美術教育における可能性を探る。

## II 映像メディア表現の学習指導要領における位置付け

平成10年7月に提出された教育審議会答申には「スケッチや図、コンピューター等映像機器などを使った多様な表現方法（中学校〔美術〕）」「新たな分野である映像表現（高等学校 芸術〔美術〕）」という記述がある。学習指導要領ではそれらが「映像

メディア表現」と命名され、一歩踏み込んだ表現が与えられている。

中学校学習指導要領には「表したい内容を漫画やイラストレーション、写真・ビデオ・コンピューター等映像メディアなどで表現すること（第2学年及び第3学年／2内容／A表現）」等の記述がある。

高等学校学習指導要領解説には、「情報社会に対応して、写真、ビデオ、コンピューター等映像機器を使って手描きや手づくりではできないメディア機器独自の特徴を生かした表現をし交流する能力の育成」（第4節 美術I-72p）と設置の目的が明快に述べられている。さらに「コンピューター用ゲームソフトの創造としての表現など、美術が映像やデジタル・メディアなどの産業に寄与する能力として大切に生かしていかなければならない（第4節 美術I-83p）」という一歩踏み込んだ強い記述さえある。これらは、映像メディア表現を美術教育の中で実施するばかりでなく、それを自国の文化として守り育てていくという高らかな宣言にすら聞こえるのではないだろうか。

## III 3DCGの概念

3DCGとは、コンピューター（以下PCと記述）を使用して制作する立体的映像や画像を指す。近年3DCGはPCの急速な機能的向上と軌を一にした急速な進展を遂げている。

CG (computer graphics) という名称は、PCを使用して制作した画像作品すべてを指す。しかし実際に作品を制作する場合、異なる種類のソフトウェアを使い分けることが一般的である。

### 1 画像処理、イラストレーション用ソフトウェア

画像・映像を制作する場合、私たちは鉛筆や絵具等を使って作品を制作してきたが、PCを使ってそれと等価の作品を制作することができる。

イラストレーション用、画像処理用と言われるソ

ソフトウェアを使用した作品制作がその場合に当たる。

それらは、絵画や写真を制作するときのように、特定の固定された視点からの写像・眺めを制作する。それは特定の場面や空間を固定された一つの視点から切り取る行為、あるいは特定の視点から見た場面や空間を描き出す行為である。

## 2 3DCG用ソフトウェア

3DCG用のソフトウェアを使用した制作は、特定の場面や空間を丸ごとつくってしまおうという制作である。画像を描き出す観測者の位置と視野を定め光源の位置や質を設定し、画像を描き出させる。観測者の位置と視野はどのような設定も可能であり、かつ複数設定することができる。3DCGは、制作の行為という面からは立体物を制作する行為に近く、制作全体としては物体と物体を取り巻く空間のシミュレーションという性格を有する。

## IV 3DCGの制作の流れ

3DCGの制作は、通常次のような流れで進む。

### ①事前準備

### ②PCを使用した制作

A 3DCG用のソフトウェアを使用した制作

B 画像合成用のソフトウェアを使用した制作

(動画の場合は音声の編集が加わる)

### 1 事前準備／設定とスケッチ・ストーリーボード

制作の段階で最も重要なのはこの事前準備である。

3DCGは一つの場面を丸ごとつくってしまおうという制作である。そのために、場面、登場人物や物体、背景等の設定を詳細に決める必要がある。また、訴求力ある制作のためには詳細な資料の準備が必要である。効率のよい資料の収集のために、諸設定を十分に練り上げる必要がある。

同様に、スケッチを重ねアイデアを煮詰めることによって、イメージのレベルを漠然としたものから具体的なシーンにまで引き上げておく必要がある。特に動画の場合、ストーリーボード(絵コンテ)を事前に描き、一つ一つのシーンやショットを煮詰めておかなければ質の高い作品を制作することは不可能に近い。

### 2 PCを使用した制作／3DCG用のソフトウエ

### アを使用した制作

3DCG用のソフトウェアを使用した制作は通常下記の四つの段階に分かれる。

- i モデリング (物体の作成)
- ii テクスチャーマッピング(質感の設定)
- iii シーン設定 (カメラの設定と照明)

(動画の場合、アニメーションのための各種設定が含まれる)

- iv レンダリング (画像の描出)

この場合、

(1) 明快な設定やイメージを決め、仕上がりのよいスケッチやストーリーボードを準備すること

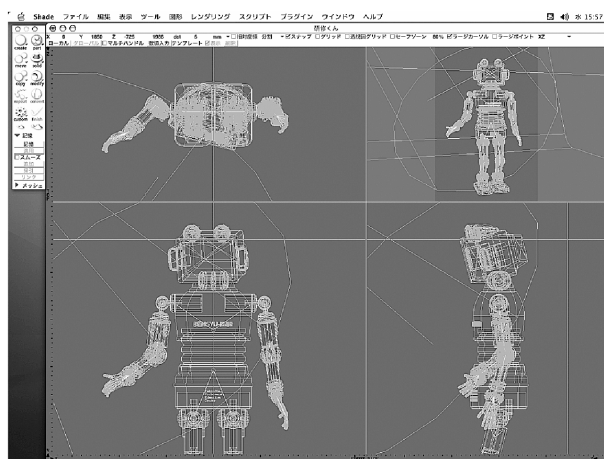
(2) モデリングの場合に重要となる物体の寸法や比例、構造などを十分に確認し、資料としてまとめておくこと

(3) 諸資料の収集

などは必須である。

### 3 モデリング (物体の制作)

モデリングはPCの画面内で物体を制作する、デジタル彫刻、デジタルモデリングである。モデリング用のツールは線描を主体とするスプラインモデラー、デジタル粘土という風合いのポリゴンモデラーとに大別される。現在のソフトウェアには両方のモデラーを搭載しているものもある。

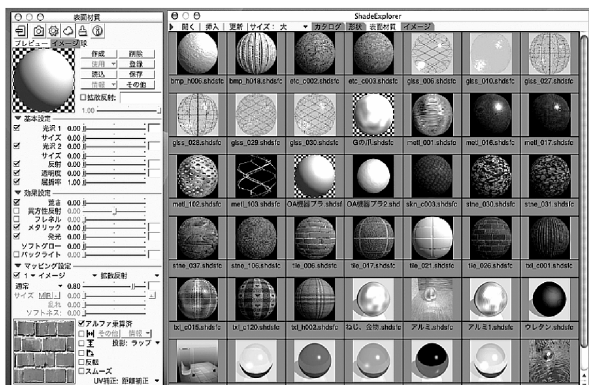


↑モデリング用の画面

### 4 表面材質の設定 (質感の設定)

モデリングの後 (または同時並行で) 作成した物体に表面材質を設定する。この工程は通常テクスチャ・マッピング(texture mapping)と呼ばれる。3D

画像は通常ポリゴンと呼ばれる多角形で構成されているが、その表面に質感を表現する二次元画像（大理石や木目、レンガ等）を貼り付ける。それによって物体が何でできているかを表現する。この工程はソフトウェア上で容易に実施できる。また、ソフトウェア上の材質設定画面で設定することも可能である。

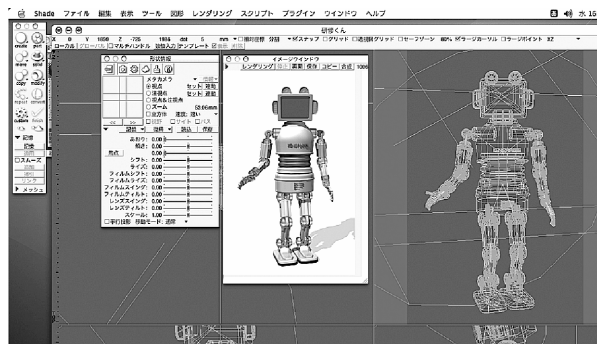


↑ 表面材質設定用の画面

### 5 シーン設定（カメラの設定と照明）

物体や背景のモデリングと材質設定が終了した後、その配置、視点、照明を決める。視点は「カメラ」で設定する。設定したカメラから得られる映像が仕上がりの画像となる。複数設定することが可能であり、物体の周りや空間を移動させることもできる。

シーン設定は、写真や映画のスタジオ撮影をイメージすると理解しやすい。ソフトウェア上のツールもそれらを想定し作られている。



↑ シーン設定用の画面

### 6 レンダリング（画像の描出）

レンダリングは、設定されたデータをもとにPCが画像を描き出す工程である。レンダリングの後、はじめて画像ファイル（作品）が得られる。

レンダリングは、設定によっては非常に長い時間

を要する。静止画の場合は画像解像度（画面の密度）と画像のサイズ、動画の場合はフレーム・レート（1秒間を何コマの画像で構成するか、通常15～30コマ）と画面サイズが鍵を握る。

### 7 画像合成用のソフトウェアを使用した制作

レンダリング終了後、画像合成用のソフトウェアを使用し作品を仕上げる。画像合成は無限のバリエーションを得られるため、ここでも準備段階の設定が作品の仕上げの鍵になる。設定や作品制作のコンセプトが明快であれば、合成の方向は自ずと決まる。

## V 先進校での指導事例について

（福島県立福島西高等学校デザイン科学科CGコースの卒業制作）

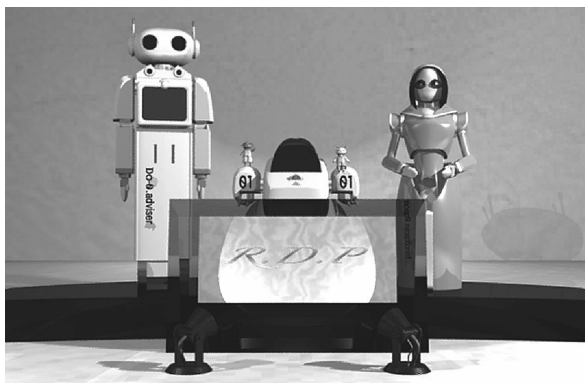
### 1 西高校デザイン科学科CGコースの教育課程

CGに関わる科目とその単位数、主な学習内容は以下の表のとおりである。

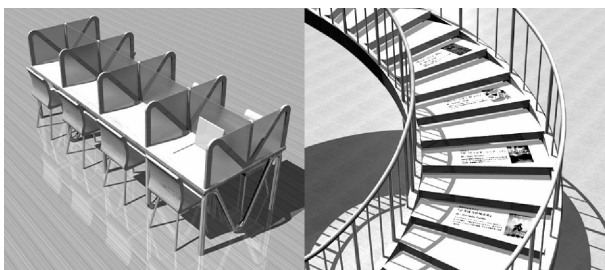
履修形態	科目名	学年	単位数
必修	情報 I	1	1
必修	CG A I	2	2
必修	映像メディア表現	2または3	2
選択	CG A II	2・3	5
選択	総合制作	3	8

科目名	主な内容
情報 I	基礎のPCリテラシー
CG A I	Photoshop, Illustrator, Shadeを使用した基本的なデザイン演習
映像メディア表現	写真、ビデオによる作品制作
CG A II	DTP, 3DCG
総合制作	3DCGを使用したアニメーション、マルチメディア系コンテンツの制作等

## 2 作品例（卒業制作の一部）



ロボットをテーマにした作品



建築・設計（図書館）をテーマにした作品

## 3 指導上の特色

CGは制作業界においては生産性を高めるために分業化が徹底されているが、西高では設定から制作まで個人制作という形態で進めさせる。指導教員は様々な過程でアドバイザーという形で関わり、作品の質を向上させるために個別指導を行う。また、生徒に定期的に制作の状況についてプレゼンテーションさせ、指導教員と生徒全体で講評会を実施している。

## VI 考察

### 1 造形教育の視点から

最初に造形教育という視点から、3DCG制作の教育的効果について述べる。

#### (1) 空間把握能力、三次元的な捉え方の深まり

モデリングの過程で平面作品の制作とは異なるものの見方や捉え方が育てられる。

#### (2) プロダクトデザインへの興味・関心

制作の過程において、日用品から建築物に至るその構造や材質、生産の歴史や様式に対する興味・関心が高まる。

#### (3) 日常観察の重要性の気づき（絵心の醸成）

作品の質を上げていく過程で物体の細部の表現が求められるが、その過程で日常観察やスケッチ、デッサンの重要性に生徒たちは気付いていく。

## 2 総合的な学力という面から

次に総合的な学力という面から3DCG制作の教育的効果について述べる。

#### (1) 総合的な教養の重要性

制作過程の中で最も重要であるのは、各種設定の場面であることは先に述べたが、その下地となるものは総合的教養である。特に文学的素養、自然科学や歴史に対する知見の深さが鍵になる。

#### (2) 行動力やプレゼンテーションの能力

制作のための生きた資料は、学校を離れた取材等で得られる。また、構想や設定を検討する場合、プレゼンテーションの能力は重要となる。また、自分の構想を的確に描くことができるスケッチの力や絵のうまさも重要である。

## 3 まとめ

3DCGの制作は専門色の強い特殊な分野という印象があるが、質の高い作品を制作するためには幅広い教養と確かな造形力が必要となる。それを学ぶ生徒は、美術を超えた多方面の学習への興味・関心をさらに強め、一方で表現に必要な造形的能力に磨きをかける必然に気付かされる。

3DCGの制作は、美術を超えた多方面への学習の広がりを生むのであり、造形的能力とは何であるかという美術教育の基本的問いに我々を立ち返らせる。そうした意味では、それは伝統的美術教育の意味を再確認させ現代に再生させる役割をも担うといえるだろう。





## ◎長期研究員の研究

<b>1 小学校国語科</b>	
論理的思考力と表現力を高める指導	
ーメタ認知能力を高め、意欲的に学ぶ児童を育てる国語科の指導ー	96
<b>2 小学校社会科</b>	
問題解決学習において自己評価能力を高める学習指導の工夫	
ー小学校社会科における単元シラバスの活用を通してー	98
<b>3 中学校社会科</b>	
中学校社会科歴史的分野において、思考力・表現力を育てる授業の工夫	
ー日常の授業に討論を取り入れた学習指導を通してー	100
<b>4 中学校数学科</b>	
学習に対して自立し、確かな学力を身に付けた生徒を育てる数学科指導の在り方	
ー学校、家庭の相互理解の深化と、少人数学習の改善を通してー	102
<b>5 小学校社会科</b>	
小学校社会科指導で活用できる「県内地域」の教材化に関する研究	
ー単元を通して活用できる副読本の作成ー	104
<b>6 小学校学級活動</b>	
集団の一員としての自覚を深めるための教育相談的手法の効果的な活用の在り方	
ー「心をつなぐ集団活動」を通してー	106
<b>7 中学校社会科</b>	
作業的・体験的な学習を通して、地理的な見方・考え方を育てる学習指導の在り方	
ー身近な地域の調査においてー	108

# 論理的思考力と表現力を高める指導

## —メタ認知能力を高め、意欲的に学ぶ児童を育てる国語科の指導—

長期研究員 佐藤志学

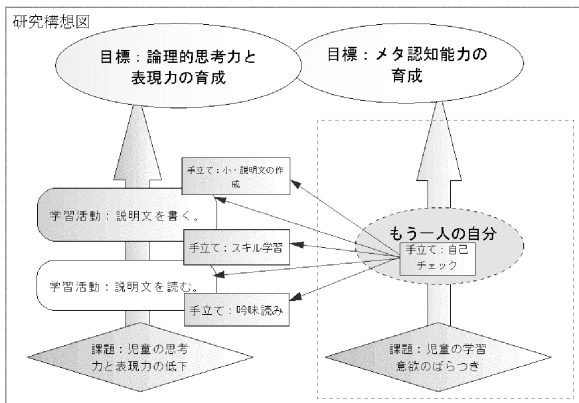
### I 研究の趣旨

思考力と表現力の育成は、国語科の主目標として学習指導要領に掲げられてきた。しかし、ここ近年の全国及び県内の学力調査の結果を見ると、それらの力を十分高めていないことが明らかになった。また、これまでの自分の指導をふり返ると、活動面の指導を重視し、思考力と表現力の育成に関わる取り組みが少なかった。また、児童は、学習に真摯に取り組んできたが、自己の国語力を高めようとする意識をもたせるまでにはいたらず、学習内容によっては、意欲にばらつきが見られた。これらの課題解決に向けて、下記の研究仮説を設定した。

### II 研究の概要

#### 1 研究仮説

- 説明文単元の学習において、以下のような手立てをとれば、児童の論理的な思考力と表現力を高めることができると共に、児童は意欲的に学べるだろう。
- (1) 学習課題把握時と学習のまとめの際に、メタ認知能力を育てるための「自己チェック」を行い、学習への意欲を高める。
  - (2) 教材文の読みでは、言語論理教育を意識した「吟味読み」を行う。
  - (3) 教材文から読み取った表現方法を定着させるための「スキル学習」を行う。
  - (4) スキル学習を生かして「小・説明文」を書く。



### 2 研究の実際

#### (1) 検証授業の実際

- ・ 対象学年 6年 単元名「人間とロボット」
- ・ 総時数 20時間（2クラス）
- ・ 実施時期 平成16年10月～11月

(2) メタ認知能力育成のための自己チェックの活用  
単元の導入時にメタ認知能力を「もう一人の自分」という言葉で児童に示し、その意味を説明した。また、毎時間の学習の目的と自己評価の基準を明示した「自己チェック」表を児童にもたせた。そして、授業の終わりに自分の学習の達成状況を4段階評定でふり返らせることで「モニタリング力」を高めた。また、「コントロール力」を高めるために、授業の終わりに次時の学習の目的を確認し学習への見通しをもたせると共に、次時の授業の始めには、改めて本時の学習の目的を確認させた。

#### (3) 吟味読みの導入

言葉や文章に対する感覚を高めることと、その後の説明文の作成に生かすことを目的として、吟味読みを行った。吟味読みにあたっては、始めに指導者が読み方の例を示した。その後児童は自力で教材文を読み進めた。その際に特に留意させたことは、教材文を読んで分かりにくい箇所はないかという点と文章の構成に気を付けて読むことの2つである。

#### (4) スキル学習の実施

説明文を作成するために必要な資料をWebから取材する方法と、説明文の具体的な書き方を学習した。その後例文を使ってスキル学習に取り組んだ。



【指導者が作成した資料集】

### (5) 小（しょう）・説明文の作成

小・説明文は、400字程度の小さなサイズの説明文である。計画した時間の中で、すべての児童が書き上げることを目標とし、市毛勝雄の提唱する「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」の論理的な構成でできた説明文の作成に取り組んだ。



【児童が書いた小・説明文】

らなる説明文を書くことができた。また、事後調査の結果から大多数の児童が、満足感のもてる作品を書くことができたことが分かった。さらに、「なか」で説明したことの共通事項を「まとめ」に書く際に、帰納的な思考力を働かせることができた児童が8割を超えた。以上のことから、今回の手立てが、児童の論理的思考力と表現力を高めることに有効に働いたことが考えられる。

### 2 今後の課題

#### (1) メタ認知能力を働かせた推敲力の育成について

児童の作品には叙述等の誤りが見られた。誤りをなくするためには、推敲指導が大切である。推敲の際の明確な観点を児童にもたせることで、適切に推敲できる力を高めていきたい。またその際に、他者の目で自分の文章を見つめ、読み手の立場から文章を吟味できるようなメタ認知能力を働かせた推敲力の育成を図っていきたい。

#### (2) 吟味読みに適した教材の選定

他人の書いた文章に対する吟味読みが身に付くことで、児童は自分の文章に対する見方を深めることができる。吟味読みは大切だが、どんな文章を読ませるかが重要である。吟味読みにあたっては、育てたい力を考慮して、目的に合った教材文を選定していく必要がある。

#### (3) 思考力と表現力の育成と計画的な取り組み

思考力を育成することは、国語科にとっての主目標の一つである。しかし、思考力だけを取り上げて、その向上をめざすことは難しい。思考力と表現力を関連させながら着実に高めていきたい。今回取り上げた「読むこと・書くこと」に加えて「話すこと・聞くこと」の単元における取り組みも工夫したい。その際に、どの単元でどんな力を付けるのかを年間指導計画に位置付けるなどして、計画的な指導を行っていきたい。

＜参考・引用文献＞

- 1) 思考力育成への方略 井上尚美著(明治図書 1998年)
- 2) 作文の授業改革論 市毛勝雄著(明治図書 1997年)
- 3) 論理的思考をどう育てるか 宇佐美寛著(明治図書 2003年)
- 4) 開かれた学びへの出発 市川伸一著(金子書房 1998年)

## III 研究のまとめ

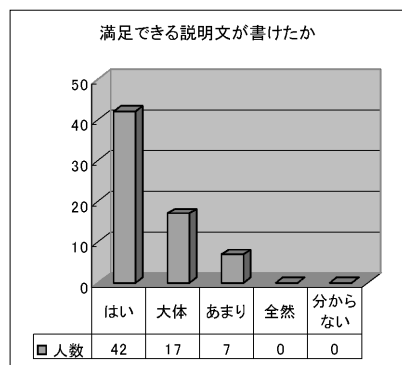
### 1 研究の成果

#### (1) メタ認知能力の育成

事後調査の結果を見ると、「もう一人の自分」をもてたと感じた児童は、7割を超えた。また、単元全体を通して、児童の学習意欲は高く、説明文の読み方や書き方が分かったと回答した児童は、約9割に達した。これらの結果から、メタ認知能力が児童の学習意欲を高めるだけでなく、学習内容の理解を深めることにも役立つことが分かった。

#### (2) 論理的思考力と表現力の育成

吟味読みの結果、学習の前後で説明文の読みにおける児童の読みの視点が着実に増えた。特に文章の構成や筆者の工夫、文章の真偽などにも気を付けて読むことができるようになった。小・説明文の作成では、ほぼすべての児童が必要な取材をスムーズに行うことができ、説明のためのロボットの写真を貼付して、論理的な構成か



# 問題解決学習において自己評価能力を高める学習指導の工夫 —小学校社会科における単元シラバスの活用を通して—

長期研究員 高橋 政喜

## I 研究の趣旨

これまでの自分の実践を振り返ると、社会科の問題解決学習は、児童が「調べる」活動を通して、事実を羅列することにとどまり、確かな学力の向上に必要な「学び方」を身につけさせ、「思考力」を高めることが十分ではなかった。それを改善するには、児童が学習状況を振り返り、自己の課題を再確認したり、適切な解決の方策を見出したりしながら、課題解決を深めていく自己評価の活動が重要であり、その活動によって培われる自己評価能力が学習の質を高めると考えられる。

本研究では、学びを支援する単元シラバスを活用し、学習のねらいや自己評価するための判断基準を児童に理解させることで、自己評価能力を高めていきたいと考えた。また、自己評価能力が高まることによって、児童が問題解決学習の「学び方」を身につけるとともに、社会的事象を関連づけたり、価値判断したりする「思考力」も高めることができるのではないかと考えた。

## II 研究の概要

### 1 「自己評価能力の発達段階」の提案

自己評価活動を意味あるものとするために、イギリスの研究から「自己評価の発達段階」という視点を取り入れた。これは、自己評価能力が、「知識」→「分析/理解」→「評価」→「総合」と高まるといった考え方である。問題解決学習の各学習過程において、それぞれの段階の具体的な自己評価の姿を想定し、以下のような評価表を作成した。

自己評価の段階	知識	分析/理解	評価	総合
知識	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。
分析/理解	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。
評価	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。
総合	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。	単元の学習内容(教科書)を正確に読み取り、内容を理解している。

この表をもとに、自己評価能力を高めるとともに、児童の評価能力の段階を判断する指標とした。

### 2 単元シラバスの作成と授業実践

#### (1) 単元シラバスの作成

単元シラバスは、主体的な学習を支援するために作成された「手引き」であり、学習目標や内容を確認したり、自己評価したりしながら、学習者が毎時間活用できるものである。

さらに、自己評価能力を高めるためには、次の4つの視点が重要であると考へ、単元シラバスに取り入れることにした。

- ① 児童が理解しやすい学習のねらいの提示
- ② 学習目標を達成したかどうかの判断基準の明確化
- ③ 自己評価の結果を次の学習に適用する情報の提供
- ④ 自己評価の4つの段階の活用

①学習のねらい  
単元をつらぬく「ねらい」を児童に理解しやすい言葉で提示。理解内容だけではなく、「どんな考えが持てるか」「どんな自分になるのか」という「ねらい」を示し、学習意欲を喚起した。

②判断基準の明確化  
＝「ふりかえり」  
単位時間、もしくは問題解決学習の各段階ごとに自己評価をするための基準を示す。主に、単元のねらいや学習内容に対応した基準であるが、学び方に関する内容も示した。この評価規準・達成基準と自己評価の適用情報を踏まえて、ノートに文章による自己評価を記述するようにさせた。

③自己評価の適用  
＝「ヒント」「ステップアップ」  
自己評価の結果に応じて、解決方法や考え方を見直す情報(ヒント)と、多面的に調べたり考えたりする情報(ステップアップ)、家庭で取り組んだ方が効果的な学習情報を提供した。

④自己評価の4つの段階の活用  
問題解決学習の「とらえる」から「深める」という過程に沿って、「知識」から「総合」へと、より高い段階の自己評価をさせるように評価項目を示した。

## (2) 自己評価能力を高める授業実践

【協力校】 船引町立美山小学校

【実施学年】 第3学年、第6学年

【実施時期】 9月～12月

社会科の問題解決学習において、単元の導入場面、単位時間の終末場面、単元の終末場面などにおいて、単元シラバスの評価規準・達成基準や補充・発展的内容を参考にして、自己評価活動を繰り返し行わせた。そのことにより、自己評価能力の質的な高まりを期待した。



【シラバスを活用しての自己評価】

### 3 思考力を評価するテストの開発

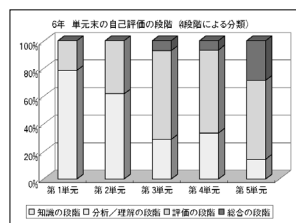
本研究で高めたい思考力である「学び方に関する思考」、「概念的な思考」、「価値的な思考」に限定してテストを開発した。

### 4 自己評価能力と学び方、思考力

単元シラバスを活用した学習において、児童の自己評価の記述、学習のまとめの記録、思考力テスト、意識調査などから、自己評価能力の向上と学び方の変容、並びに思考力の高まりを把握した。また、自己評価能力と、学び方、思考力との相関を分析した。

#### (1) 自己評価能力の変容

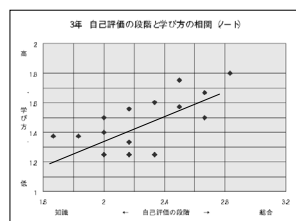
単元末に限定して、自己評価の段階を判定してみると、3年生、6年生ともに、次第に高い段階の自己評価ができるようになっていく。



3年生では、「知識」、「分析／理解」の段階から、「評価」の段階へ、6年生では、「分析／理解」の段階から、徐々に「評価」、「総合」の段階へと高まっていった。

#### (2) 自己評価能力と学び方の相関

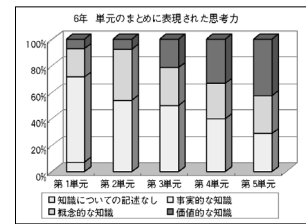
3年、6年ともに、自己評価能力の高い児童は、課題の妥当性を検討したり、解決方法を修正したりできるようにしており、学び方を身につけていると言える。



#### (3) 自己評価能力と思考力の相関

単元シラバスを活用し、自己評価能力を高めるこ

とによって、「事実的な知識」だけではなく、「概念的な知識」や「価値判断」にまで踏み込んだまとめができるようになっていく。また、思考力テストの結果と自己評価能力の相関を見ると、評価能力の高い児童は、思考力も高い傾向にあると言える。



## III 研究のまとめ

### 1 研究の成果

- (1) 単元シラバスを活用しながら、4つの視点を取り入れた適切な自己評価活動を繰り返すことにより、児童の評価能力を高めていくことができた。
- (2) 自己評価能力を高めることによって、問題解決学習における学び方を徐々に身につけさせることができた。
- (3) 自己評価能力が高まった児童は、社会的な事象を一般化・概念化したり、事実を根拠とした公正な価値判断をしたりできるようになり、思考力の向上を確認することができた。
- (4) 単元シラバスを活用することで、学習の意義を理解しながら主体的に学べるようになり、自己有能感も高めることができた。

### 2 今後の課題

- (1) 単元計画を魅力あるものとするために、単元のねらいを吟味して提示すること、自己評価能力をさらに高めるために、評価規準・達成基準を自分で決定できるような柔軟さを持たせること、家庭学習を促すために具体的な情報を示すこと等の点から、シラバスを改善していく必要がある。
- (2) 自己評価能力については、設定した自己評価の段階をさらに妥当性のあるものへ改善していくとともに、他者評価や相互評価との関連を図りながら、長期的な見通しのもと、学校生活全体の中で育てていくことが重要である。

### <参考・引用文献>

- 1) 自己評価―「自己教育論」を超えて― 安彦忠彦著 (図書文化 1988年)
- 2) 問題解決学習のストラテジー 藤井千春著 (明治図書 1996年)
- 3) 社会科の思考を鍛える新テスト 北 俊夫著 (明治図書 2004年)

# 中学校社会科歴史的分野において、思考力・表現力を育てる授業の工夫 — 日常の授業に討論を取り入れた学習活動を通して —

長期研究員 根本 顕 治

## I 研究の趣旨

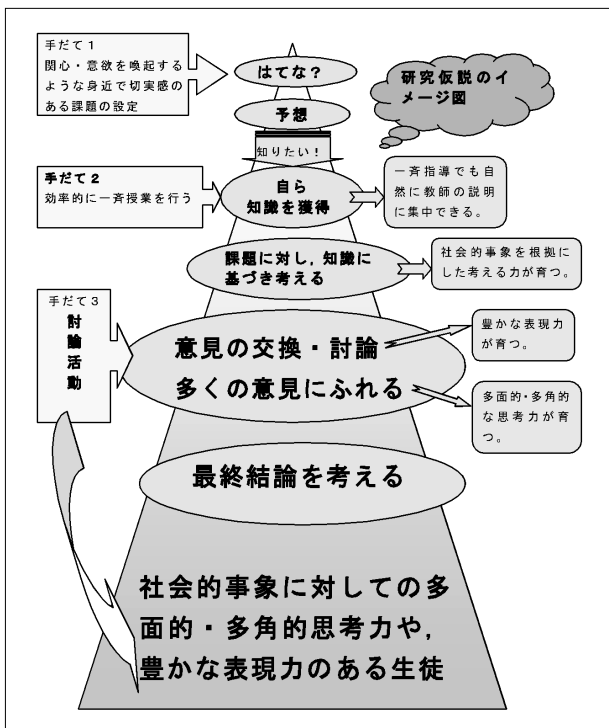
歴史教育で大切なことは、歴史的事象をそのまま獲得することではなく、自分なりの価値判断で考えることを通して知識として身に付けることである。そのような学習活動を通して、将来社会的事象に対する確に思考・判断できる力が育つと考える。さらに、学習指導要領歴史的分野では思考判断力のほかに、表現力の育成を重視することが付け加えられた。

そのような思考力・表現力を育てる手だてとして学習活動の中に討論活動を導入することが適切ではないかと考えた。討論活動とは、自分の意見を表現し、意見を交流させ練り上げることである。その活動を日常の授業で繰り返し実践することを通して、それらの力が育成できると考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

身近で切実感のある課題を設定し、その解決に向け自ら獲得した知識をもとに、様々な意見を参考にしながら自分の考えを表現する討論活動を実践すれば、社会的事象に対しての多面的・多角的な思考力や、豊かな表現力が育つであろう。



## 2 研究計画

### (1) 研究方法

歴史教育、討論活動、豊かな表現力についての研究を進め、事前調査を実施する。その実態をふまえ、討論活動を取り入れた検証授業を行う。そして、その授業結果や事後調査から仮説の検証を行い、成果と課題を総括する。

### (2) 検証授業研究

- 研究対象：中学校2年生 2クラス×4時間
- 単元名：第一次世界大戦と日本
- 授業期間：9月7日～16日(授業者：根本顕治)

## 3 研究の実際

### (1) 討論活動の有効性

- 確かな学力が身に付く
- 公正な判断力が身に付く
- 多面的・多角的な思考力が育つ
- 豊かな表現力が育つ

### (2) 討論活動で「教えて、考えさせる」学習を

日常的に討論活動を取り入れる際に、一斉指導で知識を定着させ、その後に生徒が主体となって考える学習スタイルで行うのが適切であると位置づけた。

### (3) 事前指導オリエンテーション(下表・ア)

事前アンケートをふまえて、討論活動の意義、方法を理解させる指導や練習討論を行い、スムーズに検証授業を実践できるよう事前指導を行った。

### (4) 検証授業での指導の工夫

#### ▼検証授業の流れと主な内容

時間	第0時	第1時	第2時	第3時
授業形態	一斉指導 グループ小討論	一斉指導 グループ小討論	一斉指導 学級小討論	学級討論
主 題	授業の趣旨説明 オリエンテーション	第一次世界大戦の原因・経過・結果	第一次世界大戦後の国際協力の努力	第一次世界大戦への日本への関わり
討論課題		4対24. ドイツの判断は正しいか? (同一課題で2時間)		日本はヨーロッパへ軍を派遣すべきか?
授業の流れ	研究の趣旨説明 オリエンテーション 小討論練習	単元シラバス履修 討論課題提示 一斉指導	グループ小討論 一斉指導	学級小討論 最終判断 自己評価
			知識定着確認 評価指標 学級討論 最終判断 自己評価	

検証授業では以下の3つの指導の工夫を行った。

- ① 関心・意欲を高める討論課題の設定(上表・イ)  
生徒が考えてみたいと感じることのできるような、身近で切実感のある課題設定を以下の4つの視点から設定した。
- 生徒にとって、物理的・心理的に身近に感じる

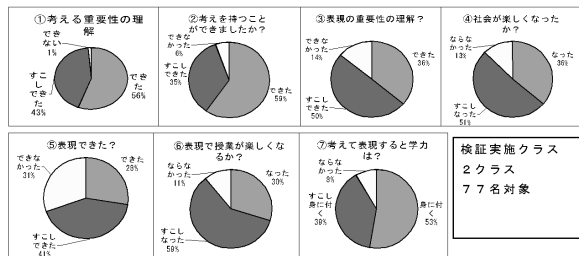
ことができる。

- 歴史的事象について、生徒自身がどう考えるかという価値判断が可能である。
  - その課題に対する結論を考える際に、歴史的事象が根拠として使われる。
  - 生徒が疑問に思ったり、追究してみたいと思った問題があれば取り上げる。
- ② 自ら知識を獲得させる工夫
- 知識定着を一斉指導で行う際、指導の工夫を4つの視点から考えた。
- 討論時間を生み出すために、詳細な史実や周辺事項に深入りしないよう教材を精選する。
  - 生徒が学習に対し受け身になるのを防ぐため、小規模な調べ学習を随所に取り入れる。
  - 討論活動で考える材料にできるよう、構造的で見やすい板書を心掛ける。
  - レディネステストやノート点検を行い、知識定着を確認し、全員が討論に参加できるようにする。

③ 討論活動の工夫（前ページ表・ウ）

- 活発な討論活動にするための、指導の工夫を5つの視点から考えた。
- 実態に応じ、参加規模や時間などのちがう様々な討論活動を使い分ける。
  - 活発な話し合いになるよう座席の移動を行う。
  - 討論の進め方の段階を5つに分けて生徒に示し、討論活動の見通しを持たせる。
  - 立場を決めたり、誰かの考えを参考にしたりするよう助言するなど、考えのまとまらない生徒への支援を行う。
  - 討論活動における教師のファシリテーターとしての役割を研究し、身に付けた上で授業に臨む。

(5) 事後アンケート調査結果から



討論課題を考えることについては、その重要性を理解し、実践することができた生徒は90%以上になった。また、自分の意見を表現できた生徒は69%で授業前の29%から大幅に増加した。これらの結果から、授業に討論活動を取り入れたことによって、生徒の思考力・表現力が高まったと考えられる。一方で、討論活動によって社会科が楽しくなったという生徒

も80%以上にのぼった。

III 研究のまとめ

1 研究の成果

▼討論活動風景



- (1) 授業の様子やノートを振り返ると、身近で切実感のある討論課題を設定したことで、生徒の関心・意欲を高めることができたと考えられる。
- (2) 討論活動を取り入れ、多くの意見にふれたことで、自分の考えを様々な面から客観的に見直すとともに、他の意見を参考に再構築するなど、多面的・多角的な思考力を身に付けた生徒が多かった。
- (3) 事前に表現の仕方などを、具体的に指導してから授業の中に討論を取り入れた。その後、単元を通して繰り返し実践したことで、生徒に自分の意見を文章や話し言葉で、どう表現すればよいかという基本的な表現の仕方が身に付いてきた。

2 研究の課題

- (1) 授業後の感想から、表現することに対し意義を十分に感じない生徒も少数いたことがわかった。その生徒への対応として、2つの手だてを考えた。
  - 普段の授業で意図的に発表場面を増やし、表現することへの抵抗を軽減していく。
  - 教育相談的な手法を用いて、表現することの楽しさを実感させる。
- (2) 討論活動中において生徒の発言が滞ったとき、適切に対応できず活発化させることができなかった。その対応として3つの手だてが考えられる。
  - 班討論などの、より小規模な集団での討論活動に変更し、意見の出やすい雰囲気を作る。
  - もっと机間指導を綿密に行い、生徒の意見をメモしたりするなど、誰がどのような意見を持っているかを事前に把握しておく。
  - 討論が錯綜し論点がかみ合わない場合は、意見を整理し生徒に何を考えればよいかを明確に示す。

<参考・引用文献>

- 1) 社会科教育12月号 (明治図書 2003年)
- 2) 歴史から何を学ぶべきか 戸田昭直著 (中経出版 2004年)
- 3) 学ぶ意欲とスキルを育てる 市川伸一著 (小学館 2004年)



# 学習に対して自立し、確かな学力を身に付けた生徒を育てる数学科指導の在り方 — 学校、家庭の相互理解の深化と、少人数学習の改善を通して —

長期研究員 山口 智

## I 研究の趣旨

今日の教育改革の特に重要なポイントである「確かな学力」の向上、「個に応じた指導」の一層の充実を受けて、少人数学習が導入されるようになってきた。しかし、少人数学習、とりわけ習熟度別学習に対しても、様々な不安要素が指摘されている。

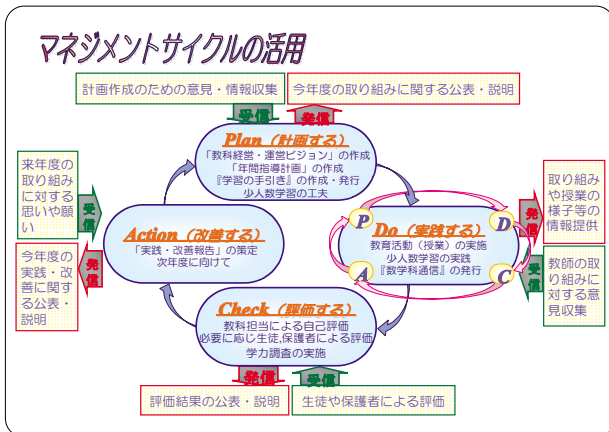
そこで、生徒、指導教員、保護者の共通理解を深めることによって疑問や不安の解決が図られるよう、情報の発信・受信のあり方について研究するとともに、数学科における少人数学習の効果的な指導法を工夫する必要があると考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の概要

### 1 学校評価システムの活用に関する研究

#### (1) 数学科における保護者との連携の構築

##### ① マネジメントサイクルの活用

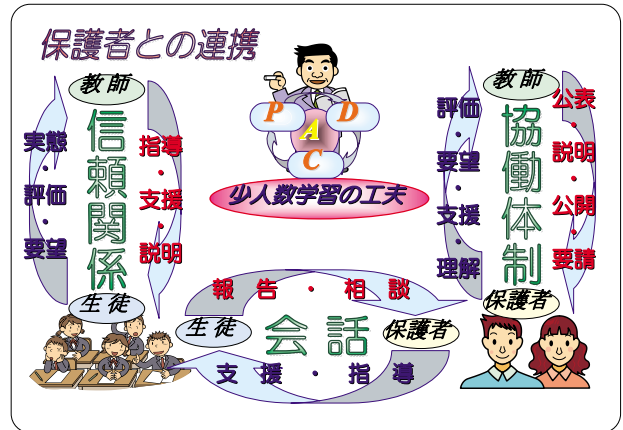


まず、計画段階において、学校経営・運営ビジョンを受けて、数学における今日の課題や生徒・保護者の要望や願い、前年度の反省等を生かし、教科の経営・運営ビジョンや年間指導計画を作成する。ここで、生徒や保護者に対して計画や取り組みについて説明することを大切にしたい。

次に、計画に基づいた授業を中心とした教育実践を行う。ここで、実践の様子を情報発信することが重要であり、その都度、自己評価や生徒や、保護者による評価を加え、改善を図る。これが実践する段階であり、日常的なマネジメントサイクルと考える。

実践に基づき評価・改善を行う。教科担当教師による自己評価や、場合によっては、生徒と保護者の評価を実施する。それによって計画に改善を加え、新しい計画を作成する。これが、数学科教育におけるマネジメントサイクルであると考えられる。

##### ② 学校と家庭の相互理解を深化させるための情報発信・受信の在り方



教師は、生徒の実態を把握した上で計画を作成し、授業を中心とした指導・支援を行っている。それに加えて、指導計画や取り組みについて情報を発信し、生徒の要望や評価等を受信することで、信頼関係が深まり教育効果が上がると考えた。

一方的な協力依頼のみではなく、計画や今年度の取り組みについて保護者へ情報を発信し、評価や要望等の受信に努めることで相互理解が深化し、協働体制が確立すると考えた。

保護者に対して、教師が情報発信に努め生徒の報告や相談を増やすことで、学校における生徒の活動の様子が理解される。それをもとに家庭における会話が増え、生徒と保護者の信頼関係を深めることによって、指導や支援の効果も高まると考えた。

##### (2) 学校評価システムの活用に関する実践研究

###### ① 学習の手引きの工夫

『学習の手引き』は、各教育センター等で作成された『シラバス作成の手引き』を参考に、教科の目標、内容、教材、学習指導計画、評価の概要などを記載した計画書である。基本的には主に生徒向けに作成したものだが、指導方針が生徒に伝えやすくなるなど、教師にとっても役立つ資料として作成した。また、学校の教育活動の内容を保護者に対して説明する際にも利用できるように考慮した。

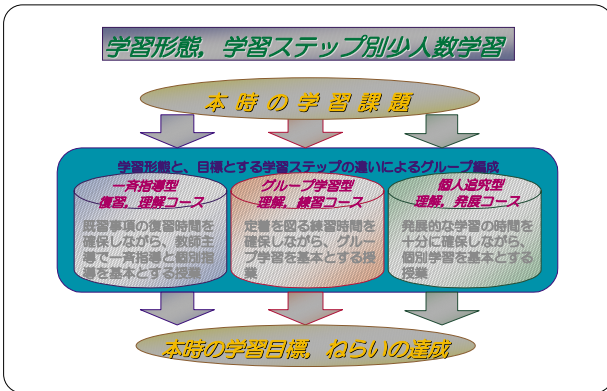
###### ② 数学科通信の工夫

保護者との共通理解を図り『協働体制』を確立する方策として『数学科通信』を発行した。第1号は、研究の趣旨説明を中心として発行した。第2号以降は、数学科教師の取り組みや考え、少人数学習についての説明、授業の様子、数学に関する雑学やクイ

ズなど、家庭における話題の提供を目的として発行した。更に、号外としてアンケート調査の結果を実施学年を対象に発行した。

## 2 少人数学習の研究

### (1) 少人数学習スタイルの工夫



今回の授業実践で用いた少人数学習スタイルは、『学習形態、学習ステップ別少人数学習』である。学習形態と目標とする学習ステップの違いによって3コースに分け、少人数学習を効果的に進めようと考えた。

#### 【一斉指導型 復習，理解コース】

担当教師の説明を中心に個別指導を交え、本時の学習に必要な内容を既習事項を復習しながら授業を進めるコースである。

#### 【グループ学習型 理解，練習コース】

数名のグループによる協力的学習を取り入れ、本時の学習内容の理解を深めるために、問題練習等を行う時間を確保して授業を進めるコースである。

#### 【個人追求型 理解，発展コース】

生徒自身が、担当教師の助言をヒントに個人で学習を進め、発展問題に挑戦する時間をできるだけ取り入れて授業を進めるコースである。

### (2) 少人数学習を取り入れた授業実践研究

#### ① 小単元名 5章2節「平行四辺形」

#### ② 小単元目標と指導計画（一部）

§2 平行四辺形（9時間）			
小単元目標	【学習のねらい・達成・発展】	<ul style="list-style-type: none"> <li>平行四辺形のいろいろな性質に興味をもち、それを積極的に導こうとする。</li> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件を利用して、図形のいろいろな性質を考察することができる。</li> <li>面積を変えずに図形を変形し、図形の性質を考察することができる。</li> <li>長方形、ひし形、正方形などを、平行四辺形の特別な場合である、と見ることが出来る。</li> <li>二等辺三角形の性質を利用して、図形のいろいろな性質を考察することができる。</li> </ul>	【学習のねらい・達成・発展】
	【学習のねらい・達成・発展】	<ul style="list-style-type: none"> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件、特別な平行四辺形の性質を証明することができる。</li> <li>面積を変えずに図形の形を変えることが出来る。</li> <li>【発展】 図形などによって発展・理解する。</li> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件を理解する。</li> <li>平行四辺形に属するいろいろな種類の図形を導き出す。</li> </ul>	【学習のねらい・達成・発展】
1 対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する	学習目標・内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>大まかに平行四辺形の対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> <li>平行四辺形の性質とその変形を利用して証明する（対角、対角）</li> </ul>	【学習・理解】 四角形の対角、対角の関係を理解する。
	【学習のねらい・達成・発展】	<ul style="list-style-type: none"> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件、特別な平行四辺形の性質を証明することができる。</li> <li>面積を変えずに図形の形を変えることが出来る。</li> <li>【発展】 図形などによって発展・理解する。</li> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件を理解する。</li> <li>平行四辺形に属するいろいろな種類の図形を導き出す。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。
2 平行四辺形の性質を証明する（対角線）	学習目標・内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>対角線が交わる点で対角が等しいことを証明する。</li> <li>対角線が交わる点で対角が等しいことを証明する。</li> <li>対角線が交わる点で対角が等しいことを証明する。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。
	【学習のねらい・達成・発展】	<ul style="list-style-type: none"> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件、特別な平行四辺形の性質を証明することができる。</li> <li>面積を変えずに図形の形を変えることが出来る。</li> <li>【発展】 図形などによって発展・理解する。</li> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件を理解する。</li> <li>平行四辺形に属するいろいろな種類の図形を導き出す。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。
3 対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する	学習目標・内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> <li>対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> <li>対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。
	【学習のねらい・達成・発展】	<ul style="list-style-type: none"> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件、特別な平行四辺形の性質を証明することができる。</li> <li>面積を変えずに図形の形を変えることが出来る。</li> <li>【発展】 図形などによって発展・理解する。</li> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件を理解する。</li> <li>平行四辺形に属するいろいろな種類の図形を導き出す。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。
4 対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する	学習目標・内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> <li>対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> <li>対辺が等しいことと対角が等しいことを証明する。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。
	【学習のねらい・達成・発展】	<ul style="list-style-type: none"> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件、特別な平行四辺形の性質を証明することができる。</li> <li>面積を変えずに図形の形を変えることが出来る。</li> <li>【発展】 図形などによって発展・理解する。</li> <li>平行四辺形の性質や平行四辺形になるための条件を理解する。</li> <li>平行四辺形に属するいろいろな種類の図形を導き出す。</li> </ul>	【学習・理解】 平行四辺形の性質を考察し、証明することができる。

#### ③ ワークシートの工夫

『生徒用ワークシート』は、全コース共通で作成し、差別感や不公平感を持たせないよう配慮した。

『教師用ワークシート』は、板書案の代わりに、記入例として作成した。『補充プリント』は、復習問題、練習問題、発展問題を1枚のプリントにまとめ、生徒全員に配布した。授業中に用いる問題はコースによって違うが、その他の問題については授業外や家庭学習で取り組ませようと考えた。

## III 研究のまとめ（成果と課題）

### 1 学校評価システムの活用について

○ 『学習の手引き』により、教科指導のビジョンを明らかにすることが、生徒や保護者の教科指導に対する理解を深めることに役立つことがわかった。

○ 情報発信の手段の一つとして『数学科通信』を発行したことで、保護者に、教師の取り組みや自校の教育に対する周知度を高めることにつながり、協働体制の確立に向けて一歩前進することができた。

● 『数学科通信』の定期的な発行や内容の充実によって、保護者の数学科の取り組みに対する興味・関心を高めたい。さらに、教師と保護者による情報発信と受信を積み重ねることで、理解が深まり協働体制が確立すると考える。

● 手引き書として発行した『学習の手引き』を、今後、「年間シラバス」や「単元シラバス」等への発展させることで、生徒や保護者の教科指導に対する理解がさらに深まると考える。

### 2 少人数学習の研究について

○ 各コース共通の学習内容で行うことを基本とすることによって、少人数学習に対する差別感や不安感を和らげることができた。

○ 学習形態と学習ステップに視点を置いてコースを選択させることで、授業における目標と家庭学習の課題が明確になり、学習に対する関心や意欲が増した。

○ 『学習の手引き』によって、学習に対する見通しを持たせることができた。

● 50分の授業では不十分だったステップに対する教師の関わりが必要である。学力の向上を目指して、家庭学習に対する教師の関わりや、放課後の活用法の工夫など、今後の課題である。

● 『学習の手引き』の、授業における有効な活用についての研究が必要である。また、学習内容の理解度を生徒自身がチェックするための問題集を作成することで、学習に対する自立と確かな学力の向上がさらに図られると考える。

### <参考文献>

- 1) 「学校の自己評価・外部評価」100の実践ポイント 高階玲治編集（教育開発研究所）
- 2) 習熟度別指導・少人数指導を成功させる40のポイント 浅沼茂編集（教育開発研究所）

# 小学校社会科指導で活用できる「県内地域」の教材化に関する研究 — 単元を通して活用できる副読本の作成 —

長期研究員 増島 哲也

## I 研究の趣旨

小学校学習指導要領で示されている第3学年及び第4学年の内容(2)を扱う際、身近に指導に適する地域資料がなかった。県内で採用されている教科書では他県が取り扱われている。指導者は、福島県内の各地域に関わる資料を収集したり、教材化したりする必要があった。そのため、現状では教材化、問題作成など指導を行う教師の意欲や力量によって、児童への指導に大きな幅が出る学習單元であると考えられる。また、児童にとっては、インターネットのサイト検索で資料を探す際も、時間的・内容的に有益な活動とならないことが多かった。

これらの現状と問題点を踏まえた時、「本県地域」を取り扱った単元構成の開発、指導に活用できる資料の作成が必要と考え、本主題を設定した。

## II 研究の概要

### 1 研究計画

- (1) 福島県内地域を活用した資料作成
- (2) 協力校において、作成資料を活用した授業実践

### 2 研究の実際

- (1) 第3学年及び第4学年で活用できる資料の作成

#### ① 単元計画の作成

単元の計画として「単元の構成表」と「小・中単元計画表」を作成した。「単元の構成表」は、単元全体の概要をとらえられるように、中単元名、小単元名、活動の内容を記述した。

単元の構成		単元の構成	
導入	単元の構成	単元の構成	単元の構成
導入	◆県外の友達に自分たちの県の様子を知らせ活動を立てる。(1時間)	◆自分たちが住んでいる地域の位置を地図上で調べる。	◆県内各地域の自然環境や気候・気象の土地の様子を調べ、特徴を調べる。
1	福島の様子 (2時間)	◆福島の地形や気候の特色を調べる。	◆県内のいろいろな土地に居住する人々の生活の様子を調べる。
2	福島の土地 (2時間)	◆福島の地形や気候の特色を調べる。	◆福島の土地の特色を活かした産業を調べる。
3	福島の気候 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
4	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
5	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
6	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
7	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
8	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
9	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
10	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
11	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
12	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
13	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
14	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
15	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
16	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
17	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
18	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
19	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
20	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
21	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
22	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
23	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
24	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
25	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
26	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
27	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
28	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
29	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
30	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
31	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
32	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
33	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
34	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
35	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
36	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
37	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
38	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
39	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
40	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
41	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
42	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
43	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
44	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
45	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
46	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
47	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
48	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
49	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
50	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
51	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
52	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
53	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
54	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
55	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
56	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
57	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
58	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
59	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
60	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
61	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
62	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
63	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
64	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
65	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
66	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
67	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
68	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
69	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
70	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
71	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
72	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
73	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
74	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
75	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
76	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
77	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
78	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
79	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
80	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
81	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
82	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
83	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
84	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
85	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
86	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
87	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
88	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
89	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
90	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
91	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
92	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
93	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
94	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
95	福島の文化 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
96	福島の自然 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
97	福島の歴史 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
98	福島の未来 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
99	福島の観光 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。
100	福島の産業 (2時間)	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。	◆福島の気候や気象の特色を活かした産業を調べる。

「小・中単元計画表」は、「中単元の到達目標」「評価規準」「学習計画」の3つの内容を記述した。「学習計画」中の「主な学習と内容」については、学習指導における指導者の工夫を尊重する方向で、簡素なものとした。

単元名	単元の到達目標	評価規準	学習計画
1 県の様子	【単元の到達目標】 ① 福島の自然環境や気候・気象の特色を調べる。 ② 福島の産業や文化の特色を調べる。 ③ 福島の歴史や未来の展望を調べる。 ④ 福島の観光資源を調べる。 ⑤ 福島の産業や文化の特色を活かした産業を調べる。 ⑥ 福島の自然環境や気候・気象の特色を活かした産業を調べる。 ⑦ 福島の歴史や未来の展望を活かした産業を調べる。 ⑧ 福島の観光資源を活かした産業を調べる。	【評価規準】 ① 福島の自然環境や気候・気象の特色を調べ、その特色を説明することができる。 ② 福島の産業や文化の特色を調べ、その特色を説明することができる。 ③ 福島の歴史や未来の展望を調べ、その特色を説明することができる。 ④ 福島の観光資源を調べ、その特色を説明することができる。 ⑤ 福島の産業や文化の特色を活かした産業を調べ、その特色を説明することができる。 ⑥ 福島の自然環境や気候・気象の特色を活かした産業を調べ、その特色を説明することができる。 ⑦ 福島の歴史や未来の展望を活かした産業を調べ、その特色を説明することができる。 ⑧ 福島の観光資源を活かした産業を調べ、その特色を説明することができる。	【学習計画】 ① 福島の自然環境や気候・気象の特色を調べる。 ② 福島の産業や文化の特色を調べる。 ③ 福島の歴史や未来の展望を調べる。 ④ 福島の観光資源を調べる。 ⑤ 福島の産業や文化の特色を活かした産業を調べる。 ⑥ 福島の自然環境や気候・気象の特色を活かした産業を調べる。 ⑦ 福島の歴史や未来の展望を活かした産業を調べる。 ⑧ 福島の観光資源を活かした産業を調べる。

#### ② 副読本資料及び指導用解説書の作成

小単元計画を具現化するための資料として、指導用資料を作成した。児童が取り組みやすい資料として教科書型の副読本資料とした。

### 6 わたしたちの県

福島の自然環境や気候・気象の特色を調べる。福島の産業や文化の特色を調べる。福島の歴史や未来の展望を調べる。福島の観光資源を調べる。福島の産業や文化の特色を活かした産業を調べる。福島の自然環境や気候・気象の特色を活かした産業を調べる。福島の歴史や未来の展望を活かした産業を調べる。福島の観光資源を活かした産業を調べる。

教科書型副読本資料について、指導者が取り扱いやすいようにするため、指導用副読本教師用解説書を作成した。主な記述は、副読本資料の活用上参考になる内容にした。(写真や記述に対する補足説明や付記説明、

### ③ 与那国島

台湾の蘇澳 [すーあお] まで約 111km という、日本最南端の国境の島。久留島のカシママラボラとアルゴール産の高品質な与那国産が有名。

### ④ 出布島

出布島は、周囲約 2 km、海拔 15 m の小さな島。4 万本近くのヤシ類を中心に亜熱帯の樹木や花々が生い茂る。島全体が砂によってできている。西暦へんがなる島は、漢字で、漢語でも 1 m ほどしかなく、一潮時は歩いて渡れるほどである。

### ⑤ 琉球ガラス

琉球ガラスは、約 100 年前の出土の例もある。1600 年前の出土の例もある。琉球ガラスは、琉球の沖繩県、九州や大阪のガラス職人の手によって技術が導入された。本格的に琉球ガラスとして作られるようになったのは戦後で、アメリカ人のクラフトブームとともに琉球ガラスが、琉球を代表する土産品として、原料調達により、質的に向上したガラスを商品として提供している。

写真やデータを取り扱った意図、指導上の注意点、関連内容が掲示されているWebページ紹介等)

### ③ 単元ワークテストの作成

単元を通した学習の成果を評価するためのワークテストを作成した。まず、学習指導要領で表記されている各学年の目標及び内容の達成を診断するための内容を検討した。そして、その中から、「知識・理解」「技能・表現」「思考・判断」の3つの観点についてそれぞれを評価すべき出題内容及び方法を検討した。

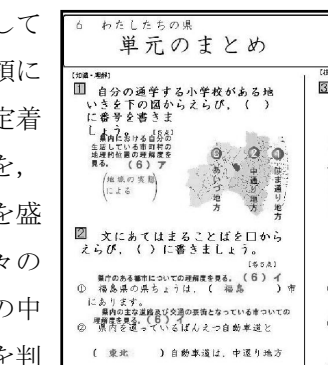


### ④ 単元ワークテストの解答及び出題解説の作成

指導者が、児童に対してどのくらい学習指導要領における目標及び内容を定着させることができたかを、自己分析するため内容を盛り込んだ。一つは、個々の設問が、学習指導要領の中のどの内容の定着具合を判断するために設定されたものなのかがわかるような表示を入れた。二つは、この学習単元で押さえるべき内容は、学習指導要領で示されているどの部分にあたるものなのかを表示した。

### ⑤ 写真資料の作成

指導者の事前の下調べで使えるように、写真資料を整理した。簡単な説明文を添え、掲示資料としても活用できるようにした。



### (2) 作成資料を活用した授業実践

実践協力校では、小単元の学習指導において、副読本資料や写真資料を活用していた。また、副読本資料は、写真や文からの読み取りや、意見を発表するための参考資料として活用されていた。写真資料は、掲示板に掲示して、調べ学習の際に児童が自由に参考にできるように使ったり、黒板に提示し、課題を追究していくための提示資料として使ったりしていた。

## III 研究のまとめ

### 1 成果

- 「浪江町」「福島盆地」「南郷村」「会津本郷町」の地域素材を活用した第4学年の資料、「南会津」の地域素材を活用した第5学年の資料を副読本として資料化でき、併せて単元にあった評価用ワークテストを作成することができた。
- 協力校における授業実践の反省から、資料の有効性が認められた。副読本資料を使用せずに学習を進めた場合よりも、使用して学習を進めた時の方が、児童の意欲が増し、調べ学習を容易に行うことができたという結果が得られた。

### 2 課題

- 市町村合併により、データがめまぐるしく変化している。そこで、市町村名の記述変更や資料の数値の更新を迅速に行い、できるだけ新鮮な情報を児童に提供していく必要がある。
- 地域資料がととのい、多くの指導者や児童に利用していただくことは可能であるが、印刷にかかるコストや時間の捻出が困難だと考える。研究協力校の実践報告から、「白黒写真とカラー写真とでは、児童の意欲に差が出るので、カラー写真の資料を使う方が望ましい。」というものがあつた。児童の学力向上のためにも、この点についての問題解決が重要である。

### <参考・引用文献>

- 1) 新しい社会 3・4下 (東京書籍 2001年)
- 2) ふくしま教育情報データベース

福島県教育委員会/福島県教育センター

# 集団の一員としての自覚を深めるための教育相談的手法の効果的な活用の在り方 —「心をつなぐ集団活動」を通して—

長期研究員 村上潤一

## I 研究の趣旨

教師や友達とのトラブルなど対人関係の問題を抱える児童には、「友だちとのかかわり方がわからず、人間関係が希薄である」「学級に居場所がなく、集団への所属意識が薄い」「自尊感情や自己肯定感が低い」などの実態が見てとれる。こういった児童を少しでも減らすためには、学級という集団の機能を生かした学級経営を行うことが必要である。

そこで、学級活動の時間に、児童の心に働きかけ、体験的に児童相互の心理的な結びつきを強める力のある「教育相談的手法」を用いた、心をつなぐ集団活動を取り入れ、授業実践を通して、児童一人一人の集団の一員としての自覚を深めさせるための教育相談的手法の効果的な活用の在り方について探っていくことを考えた。

## II 研究の概要

### 1 研究計画

#### (1) 研究方法

事前調査（3つの尺度）の結果から児童と学級の実態をとらえ、各学級の介入目標を決定し、教育相談的手法を取り入れた授業実践を行う。事後調査の結果や「ふりかえりカード」の記述から、集団の一員としての自覚の深まりについて検証する。

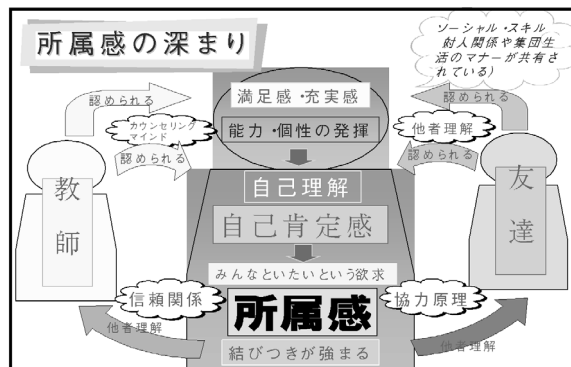
#### (2) 研究対象及び研究期間

- 研究対象：小学校5年生 3クラス
- 研究期間：2学期（8～12月） 計17回

### 2 研究の内容

#### (1) 集団の一員としての自覚の深まりについて

集団の一員としての自覚は、所属感ととらえることができ、下図のようなサイクルを繰り返すことにより、深められていくと考えた。その深まりは、他者に認められることによって高まる自己肯定感と、対人関係のルール・マナーであるソーシャルスキルの定着度との関連が大きいと考えられる。



#### (2) 本研究における教育相談的手法のとらえ

本研究では、人間関係づくりを核に、グループによる体験活動を通して、自己の心的・行動的な面での成長を促すと考えられる、以下の4つ手法を教育相談的手法ととらえた。

- ① 構成的グループエンカウンター（SGE）
- ② アサーショングループワーク
- ③ プロジェクトアドベンチャー（PA）
- ④ ソーシャルスキルトレーニング（SST）

#### (3) 心をつなぐ集団活動

「互いの心理的結びつきが強い」「成員相互の所属感、連帯感がある」「自由な相互交渉が助長される」これらの条件を満たす活動を「心をつなぐ集団活動」ととらえ、授業実践に取り入れた。

#### (4) 児童の実態と学級の状態の把握

ソーシャルスキル尺度、自己肯定感インベントリー、学級アセスメント「Q-U」（学級満足度尺度）の3つの尺度により実態把握を行った。

### 3 研究の実際（5年1組の例）

#### (1) 介入目標

- ① 介入目標①：事前調査の学年共通の傾向からとらえた学年共通の目標

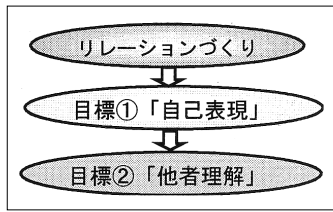
一人一人の児童が、友だちに配慮しながら自分の意見を主張し合える学級にする（自己表現）。

- ② 介入目標②：事前調査のそれぞれの学級の傾向からとらえた各学級独自の目標

- 5年1組 誰もが認められ、誰もが活躍できる学級にする（他者理解）。

## (2) 授業実践について

まず、2学期初めの出会いの活動と学校行事「移動教室」をきっかけに、リレーション

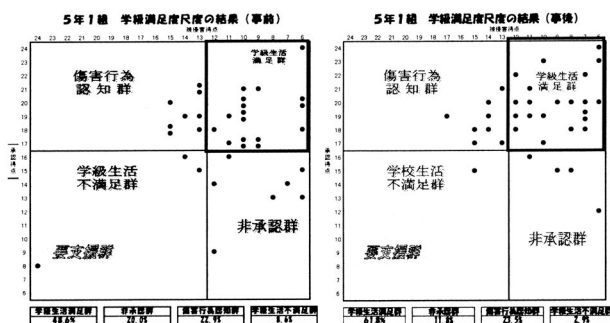


(心の絆) づくりとして、友達とのふれあい、集団活動の楽しさを十分に味わわせた。次に、目標①「自己表現」のスキルアップをめざし、アサーショングループワークを行った。さらに、目標②「他者理解」を高めるために、構成的グループエンカウンターエクササイズ(「ブレインストーミング」「いいとこ四面鏡」)を取り入れた授業を行った。

## (3) Q-Uの結果の変容

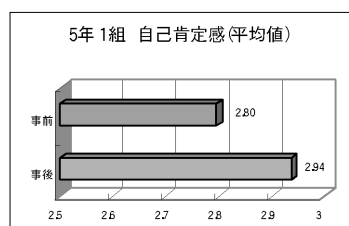
学級満足群(右上のエリア)にプロットされる児童数の割合の変容から、集団の一員としての自覚の深まりをとらえた。非承認群・学級不満足群が減り、学級生活満足群が約13%増えた。

5年1組(学級生活満足群: 48.6%→61.8%)



## (4) 自己肯定感インベントリーの結果の変容

友達に認めもらう(他者理解)活動を取り入れた結果、肯定感の高まりが見られた。



## (5) 「ふりかえりカード」の記述

授業の感想から、児童の意識レベルでの集団の一員としての自覚の深まりをとらえた。友達と関わるこのよさや集団活動の楽しさに関する記述が多く見られ、集団への所属感が感じられた。

- 「友達みんなのことが知れたのでチームワークが良くなり、協力することができました。」
- 「キャンプファイヤーでは、5年生みんなの心が一つになったなあと感じました。」
- 「みんなと一緒に活動するのがとても楽しいんだ、ということを実感しました。」

## III 研究のまとめ

### 1 研究の成果

- 学級の実態に応じた介入目標を決め、各目標にせまるための授業構想を立てて指導を行ってきた結果、各学級とも、集団の一員としての自覚の深まりが見られた。
- 児童や学級の実態に応じ、指導者が明確なねらいを持って授業を計画・実施すれば、教育相談的手法を効果的に活用できるということが明らかになった。その留意点として3点があげられる。

- ① 行事の目標と特性をとらえ、その目標達成に効果的にからめて実施する。
- ② 同じ手法でも、アレンジしながら繰り返し、継続的に行う。
- ③ 楽しさを味わえるものから、課題解決、心理的にせまるものへとレベルを上げていく。

- 実践の前後比較で自己肯定感の高まりが見られた学級では、所属感の深まりも見られた。これは、授業実践の「友達のよさを伝え合う活動」が大きく影響していると考えられる。このことから、集団の一員としての自覚の深まりには、他者からのプラスのフィードバックによる、自己肯定感の高まりが深く関係していることが明らかとなった。

### 2 今後の課題

- 実態に即した指導をより効果的に行うためには短期間(2ヶ月程度)に「Q-U」を用いた実態把握を行い、指導に生かしていく必要がある。
- 人間関係を育む活動の日常化を図るために、年間の教育活動との関連を考慮し、学級活動や日常生活の生活場面に、意図的・計画的に教育相談的手法を活用していく必要がある。
- ソーシャルスキルと集団への所属感の深まりについては、学級という集団レベルでは、明確な関連が見られなかった。そこで、個人のデータの分析・検証を通して関連を考察する必要がある。

<参考・引用文献>

- 1) グループ体験による学級育成プログラム  
河村 茂雄編著 (図書文化 2001年)
- 2) 「人間関係をつくる力」を育てる指導援助プログラム  
(福島県教育センター 教育相談部 2001年)

# 作業的・体験的な学習を通して、地理的な見方・考え方を育てる学習指導の在り方 —身近な地域の調査において—

長期研究員 山崎浩之

## I 研究の趣旨

学習指導要領では、学習の過程において、「学び方を学ぶ学習の充実」を図ることを求めている。特に地理的分野では、「適切な課題を設けて行う学習」や「作業的・体験的な学習」などを取り入れながら、地理的な見方や考え方の基礎を培うことを今まで以上に重視している。

今までの教科指導を振り返ると、知識・理解の指導にウエートがかかりすぎたため、地理的な見方や考え方を十分に育てることができなかった。それらを育てていくためには、旧来の網羅的な学習スタイルから脱却し、自ら地域を追究し考察する学習を取り入れ、地域的特色をとらえさせることが必要ではないかと考える。

そこで、本研究では、「身近な地域の調査」を通して、生徒の主体的な学習をうながし、地理的な見方・考え方を育成したいと考えた。

## II 研究の概要

### 1 研究仮説

身近な地域の調査において、基礎・基本となる地理的な知識や技能の定着を図りながら、作業的・体験的な学習を取り入れた学習指導法を工夫すれば、地理的な見方・考え方の基礎が育つであろう。

### 2 研究計画

#### (1) 研究方法

協力校における事前調査（アンケート、地形図のテスト）の結果から生徒の実態をとらえ、地理的な見方・考え方の基礎を育てるための検証授業計画を作成し、それをもとに授業実践を行った。その後、事後調査や生徒の資料、まとめテストの結果などから、地理的な見方・考え方の基礎の育成に関する作業的・体験的な学習の有効性について検証した。

#### (2) 研究対象及び単元名

- 研究対象 中学校1年生 28名
- 単元名 「身近な地域の調査」 13時間

### 3 研究の実際

#### (1) 検証授業計画の作成

地理的な見方・考え方の基礎を育成するために、作業的・体験的な学習を位置づけ、次のような検証授業計画を作成した。

○ 検証授業計画の作成	自宅周辺の調査(夏休み)
「身近な地域の調査」 総時数13時間 1学年1組 28名	① 自宅周辺の地図づくり 検証授業1
	② 地形図のきまり ③ 新旧地形図の比較 検証授業2
	④ 予備調査の計画づくり と課題設定 検証授業3
見方の基礎を 育てるために	⑤～⑦ 追究計画立案 と地域調査 検証授業4
	⑧～⑩ 地域調査のまとめと発表 ⑪ 地域的特色のまとめ
考え方の基礎を 育てるために	

#### (2) 事前の調査活動（夏休みに実施）

「自宅周辺の地域調査」では、地域調査を行う視点として、事前に配付した「地域調査のマニュアル」と地図をもとに、生徒一人一人が自宅周辺の調査を行った。「どこに何があるのか」や「今と昔の違い」を意識させるためにフィールドワークと聞き取り調査を行わせた。その結果を単元の導入に生かした。

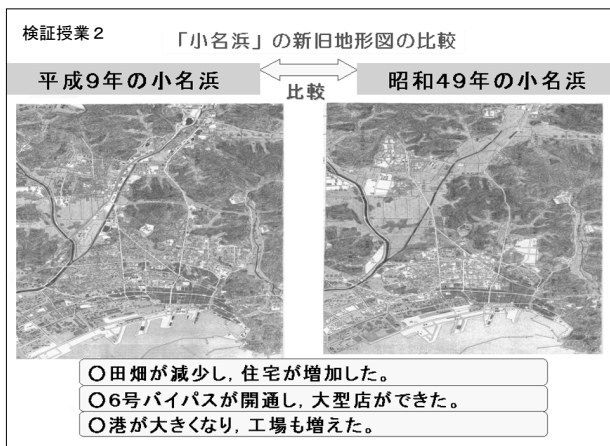
#### (3) 授業実践

##### ① 自宅周辺の地図づくり（検証授業1）

自宅周辺の地図づくりを通して、自分の地域の様子を知るとともに、他地域と比較し、その共通点や相違点を見出す授業を行った。「身近な地域の調査」の学習は、小学3年生以来の学習であるため、絵地図に表す学習をヒントに、「自宅周辺の地図づくり」を授業に導入し、地図の見方を広げようとした。

##### ② 新旧地形図を比較する学習（検証授業2）

「小名浜の新旧地形図の比較」を通して、検証授業1での学習をさらに広げ、小名浜の諸事象をより広い視野からみる授業を展開した。



その結果、生徒は、「田畑が減少し、住宅が増加した」などをあげることができた。

### ③ 予備調査の計画づくりと課題設定（検証授業3）

「予備調査の計画づくり」を進めるために、「地域調査の手引」を活用させ、計画立案のポイントを示した。また、「予備調査」では、検証授業1・2を生かしながら、再度調査を行うことで、地理的事象を見出し、課題を設定する授業を行った。

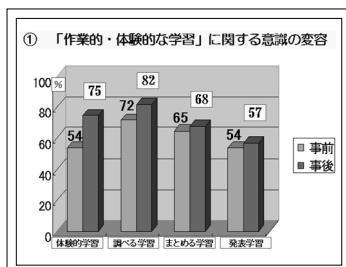
### ④ 追究計画立案と地域調査（検証授業4）

検証授業3で設定した課題を多面的・多角的に追究するために調べ学習や地域調査を行い、課題を解決する授業を行った。まず、計画書を作成し、それに基づいて情報収集をした。インターネットでの検索、文献調査や聞き取り調査を行った。なお、聞き取り調査は、授業時間以外の土・日に設定した。調査後には、地域調査のまとめを行うとともに、課題解決した発表を行わせ、地域的特色をとらえさせた。

#### （4）考察

### ① 実践前後のアンケートによる「作業的・体験的な学習」に関する意識の変容

「作業的・体験的な学習」に関するアンケートを事前と事後で比較し、学習に関する意識の変容をみると、どの項目とも事後の方が高く、意識の高まりがみられた。



### ② 検証授業から見る生徒の様子

多くの生徒は、検証授業1から3を通して、事象をより広い視野からとらえ、地域的特色の理解につ

ながる課題を設定することができた。また、検証授業4の学習を工夫し、地域調査によって課題を多面的・多角的に追究し、その要因をとらえることができた。このことから、作業的・体験的な学習は、見方・考え方の基礎の育成に、ある程度有効に働いたと考える。しかし、十分にねらいを達成できない生徒もおり、指導方法の工夫が次単元の課題である。

### ③ 「今後の発展」に関する作文の記述（一部抜粋）

- 今後の発展には、①道路の発達、②大型店の増加、③自然保護などが必要になっていくであろう。
- 観光客が楽しめる施設を作ろうとすると自然が減る。そのことを考えると小名浜はこのままでいいのかもしれない。
- 今後は、大きな港を生かし、漁を盛んにすればいい。

上記の作文から、生徒は自らの生活経験から地域の課題をとらえ、課題解決や地域の将来像について多面的・多角的に考えており、地理的な見方・考え方の基礎の芽が徐々に育ってきていると考える。

## III 研究のまとめ

### 1 成果

- 作業的・体験的な学習を取り入れた指導方法の工夫は、地理的な見方・考え方の基礎を育てる上で一定の効果をもたらしたといえよう。
- 今回の学習では、作業的・体験的な学習を取り入れたことにより、生徒が主体的に学習する姿が見られ、生活する地域への理解と関心を深めることができたと考えられる。

### 2 課題

- 生徒たちがよりよい課題を設定し、その解決を図る支援をどのように行っていくかという課題があげられる。その方策としては、「地域調査の手引」の改善が考えられる。
- 次單元との系統性をとらえ、見方・考え方の基礎の育成につながる作業的・体験的な学習をどのように工夫していくかが課題である。それは、地域の規模が異なることから、主題図や統計資料の活用を工夫することが大切であると考えられる。

<参考・引用文献>

- 1) 中学校新地理学習の方向と展開 澁澤文隆著 (明治図書 2001年)
- 2) 身近な地域を調べる 竹内裕一・加賀美雅弘編著 (古今書院 2003年)



## 平成16年度 研究協力校・研究協力員一覧

### 研究協力校

福島市立三河台小学校	福島市立瀬上小学校	福島市立湯野小学校
福島市立福島第三小学校	福島市立森合小学校	福島市立飯坂小学校
福島市立清水小学校	福島市立鎌田小学校	梁川町立梁川小学校
国見町立小坂小学校	二本松市立原瀬小学校	郡山市立橘小学校
郡山市立安積第一小学校	須賀川市立第一小学校	須賀川市立仁井田小学校
須賀川市立稲田小学校	田村市立美山小学校	三春町立沢石小学校
小野町立浮金小学校	天栄村立湯本小学校	白河市立白河第二小学校
白河市立白河第五小学校	白河市立五箇小学校	会津若松市立謹教小学校
会津若松市立永和小学校	会津若松市立湊小学校	喜多方市立上三宮小学校
田島町立田島小学校	田島町立檜沢小学校	田島町立荒海小学校
原町市立原町第一小学校	相馬市立中村第一小学校	相馬市立大野小学校
相馬市立磯部小学校	葛尾村立葛尾小学校	いわき市立中央台北小学校
いわき市立平第一小学校	いわき市立小名浜第一小学校	いわき市立上遠野小学校
いわき市立小名浜西小学校		
福島市立岳陽中学校	福島市立北信中学校	福島市立西根中学校
福島市立松陵中学校	須賀川市立第一中学校	須賀川市立仁井田中学校
須賀川市立稲田中学校	棚倉町立棚倉中学校	白河市立白河第二中学校
白河市立白河南部中学校	白河市立五箇中学校	会津若松市立第三中学校
会津若松市立第四中学校	会津若松市立第六中学校	会津若松市立湊中学校
田島町立田島中学校	田島町立檜沢中学校	田島町立荒海中学校
相馬市立中村第一中学校	相馬市立中村第二中学校	相馬市立磯部中学校
飯館村立飯館中学校	いわき市立平第一中学校	いわき市立小名浜第一中学校
いわき市立上遠野中学校	いわき市立泉中学校	
福島県立福島高等学校	福島県立本宮高等学校	福島県立福島商業高等学校
福島県立福島明成高等学校	福島県立福島西高等学校	福島県立安積高等学校
福島県立郡山商業高等学校	福島県立清陵情報高等学校	福島県立光南高等学校
福島県立会津高等学校	福島県立喜多方東高等学校	福島県立喜多方工業高等学校
福島県立会津農林高等学校	福島県立只見高等学校	福島県立原町高等学校
福島県立双葉翔陽高等学校	福島県立小高工業高等学校	福島県立小高商業高等学校
福島県立磐城高等学校	福島県立湯本高等学校	福島県立勿来工業高等学校
福島県立いわき海星高等学校		

## 研究協力員

福島市立福島第三小学校	教諭	佐藤 浩昭	福島市立森合小学校	教諭	宍戸 与一
福島市立飯坂小学校	教諭	荒川 修	福島市立鎌田小学校	教諭	高橋 州生
福島市立瀬上小学校	教諭	佐久間裕之	福島市立野田小学校	教諭	阿部 俊之
福島市立渡利小学校	教諭	浅野 孝平	福島市立清水小学校	教諭	小林 雄
福島市立清水小学校	教諭	三浦 博美	梁川町立梁川小学校	講師	長谷川裕樹
三春町立岩江小学校	教諭	鈴木由美子	田村市立美山小学校	教諭	横田 幸江
田村市立美山小学校	教諭	大竹 律子	原町市立原町第一小学校	教諭	高橋 澄子
原町市立原町第一小学校	教諭	渡部 京子	原町市立原町第一小学校	教諭	鈴木和一郎
いわき市立中央台北小学校	教諭	菅家 由美			

福島市立茂庭中学校	教諭	石綿 厚	郡山市立郡山第一中学校	教諭	半沢 一寛
田村市立常葉中学校	教諭	関根 宏房	三春町立沢石中学校	教諭	安田 柳一
いわき市立泉中学校	教諭	赤津 雅彦(代表)	三春町立岩江中学校	教諭	木幡 立
猪苗代町立東中学校	教諭	三浦 麻紀	会津若松市立第六中学校	教諭	細田 睦子
棚倉町立棚倉中学校	教諭	二瓶 良一	会津若松市立第四中学校	教諭	兼子 光了
会津若松市立第四中学校	教諭	小関 英紀	会津若松市立第四中学校	教諭	原 孝行
会津若松市立第四中学校	教諭	柳沼 勝	会津若松市立第四中学校	講師	塚原 直樹
いわき市立小名浜第一中学校	教諭	鶴沼 克浩	福島市立松陵中学校	教諭	熊谷 幸司

福島県立福島東高等学校	教諭	伊藤 正人	福島県立川俣高等学校	教諭	宗形 健一
福島県立梁川高等学校	教諭	宮本 英雄	福島県立橘高等学校	教諭	根本 浩幸
福島県立福島高等学校	教諭	原 尚志	福島県立橘高等学校	教諭	村上 英夫
福島県立福島西高等学校	教諭	安彦 芳則	福島県立福島南高等学校	教諭	津田 直子
福島県立湯本高等学校	教諭	加藤 香洋			

## 研究紀要執筆・編集者一覧

所長	青木 崇郎								
次長	大越 利明	石橋 光一	平澤 芳朗						
○企画振興チーム									
主任指導主事	岩淵 賢美	指導主事	荒 昌利	指導主事	安齋 美智男				
指導主事	菅原 克章	指導主事	渡辺 さやか						
○教育調査チーム									
主任指導主事	滝沢 玲子	指導主事	中目 雅彦						
○学校評価研究チーム									
主任指導主事	吉田 豊彦	指導主事	鈴木 久米男	長期研究員	吉永 雅也				
○カリキュラム研究チーム									
主任指導主事	遠藤 雄二郎	指導主事	安瀬 一正						
○情報化推進研究チーム									
主任指導主事	渡部 昌邦	指導主事	鈴木 稔	指導主事	島 和宏				
○教科教育チーム									
主任指導主事	刈屋 俊樹	指導主事	佐藤 誠一	指導主事	中根 猛				
指導主事	黒須 智則	指導主事	大和田 一成	指導主事	渡辺 郁哉				
指導主事	桑名 俊之	指導主事	渡部 光毅	指導主事	黒川 佳子				
指導主事	石川 千穂	指導主事	森下 陽一郎	指導主事	片平 仁				
指導主事	名嶋 明宏								
○教科外教育チーム									
主任指導主事	原田 宏明	主任指導主事	村上 正義	指導主事	高橋 卓夫				
○情報教育チーム									
主任指導主事	伊豆 幸男	指導主事	佐藤 浩正	指導主事	阿部 洋己				
指導主事	坂本 晴生	実習教諭	鹿俣 和子						
○教育相談チーム									
主任指導主事	白土 俊和	指導主事	内田 恒一	指導主事	安田 浩子				
指導主事	渡邊 兼綱	長期研究員	佐竹 建城						
○長期研究員									
長期研究員	佐藤 志学	長期研究員	高橋 政喜	長期研究員	根本 顕治				
長期研究員	山口 智	長期研究員	増島 哲也	長期研究員	村上 潤一				
長期研究員	山崎 浩之								

---

### 研究紀要 第34集

2005.6 印刷発行

編集発行 福島県教育センター  
〒960-0101 福島市瀬上町字五月田16  
☎(024)553-3141 FAX(024)554-1588  
印刷所 (株)アクト印刷  
〒960-8044 福島市早稲町8-26  
☎(024)523-4475 FAX(024)523-4556

---